
幻想郷と家出男

辻虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷と家出男

【Nコード】

N7667T

【作者名】

辻虎

【あらすじ】

家出したら幻想郷。オリ主の話です。

00 - 家出男の家出（前書き）

晴輝が幻想郷に入る一カ月前のお話です。
東方キャラが出ませんのでよろしくお願ひします。

00 - 家出男の家出

神田春輝は広い屋敷にいた。

和風で庭が広く池には鯉が居る。

「よし、これで大丈夫だな」

着替えやテント、食糧などをカバンに詰める。

「これでは……………」

丸めた紙を広げるとこの屋敷の見取り図が描かれている。

「計画は今日の12時……………」

だがしかしまだ計画の時間まで2時間はある。

とりあえず今は計画に抜かりは無いか見取り図を良く見る。

親父が死んでもう五日目、未だに現実を直視できなかった。

「家出するなら今日しかない……………」

そう今日が家出男の最初で最後の家出となる。

壁に貼ってある日本地図を地面に置き畳に腰を下ろす。

「何処に向かうかが問題だな」

仰向けになり天井を見る。

「この部屋ともお別れだな」

机や棚は綺麗にされているが本棚だけは散らかっている。

和菓子や洋菓子の料理本や雑誌である。

「結局どっちも選択出来なかった」

晴輝は和菓子の専門校に通っていたがそれも諦めて家出をするのだ。

母からは家を継げと言われ親父からは好きな道を行けと言われた。

だがどちらも選ばずどちらの選択肢から眼を逸らし、そして背を

向けたのだ。

「負け犬」

そう呟くが自分は戦ってすらいない、敵前逃亡とも言える。

ただの弱者だ。

「それでも良いんだ」

そう思つて体を起こし時計を眺める。

「もう頃合いだな」

荷物を背負い畳を捲る。

畳の下からは人一人が余裕で通れる通路があつた。

神田家の子供が代々この隠し通路から外へ出のだ。この通路は屋敷の外に繋がっている。

「行きますか！」

通路に入り畳を元に戻す。

通路は直線で一分もしないうちに外に出られる。

「よし、出た！」

カバンを背負いつつ、バイクのある場所へ走る。

そしてカバンを置き急いで通路に入り自分の部屋へと戻る。

「ま、間に合つた！」

畳の下から這い上がり急いで畳を元に戻す。

息を切らしてその場に倒れる。

「よし、次だ」

立ち上がり部屋を抜け出して忍び足である部屋に移動する。

「着いた」

部屋には仏壇がありある写真と刀が置かれている。

親父の写真と愛刀の『龍炎』だ。

「これさえ持ち出せば」

そう言つて仏壇に近づき刀を取ろうと手を伸ばす。

「行けません、九代目！」

そう言つと何人も雑刀を構えた女性が入ってくる。

メイドの代わり、黒子とも言えるこの神田家を裏で支えてきた人たちだ。

「神田家の九代目当主であるのなら……………お解り頂けますね」

そう神田家当主は前当主が死ぬと神田家の長男が自動的に当主となる。

だがしかし今の晴輝にはそんな名前関係など無い。

「残念だが解らねえ！」

刀を取りそのまま庭に出る。

「さあ、最後のお稽古だ！」

刀を鞘から抜き鞘を腰に差す。

「かかっってきたな、相手してやるよ」

「やああああ！」

薙刀を構え突っ込んでくる。

だが薙刀を受け流し相手の手を刀の柄で叩く。

「ツツ！」

相手は手を抑え薙刀を握る手が弱める。

「貰った！」

相手の薙刀を奪い取り刀をしまう。

そのまま後ろを向いて走りだす。

「お待ちください！」

その後ろを数名が追いかけてくる。

晴輝は薙刀を地面に差し、それを踏み台に塀に登る。

「じゃあな」

塀の上を走る姿はまるで忍者の様に見える。

塀から飛び降りてバイクのある場所まで走る。

「相棒、行くぜ」

バイクにキーを差してエンジンが眼を覚ます。

そのままバイクはエンジン音を響かせ闇夜に消えていった。

家出をして一週間がたった。

「まあ、とりあえず西に向かうか」

そして三週間がたった。

バイクはスピードを上げて疾走するがブレーキが利かない。

「止まってくれえええええ！」

バイクはガードレールに衝突して晴輝と共に宙を舞い、海へダイブした。

そして運命の五週間目。

「はあはあ」

息を切らし目を覚まさなくなったバイクと共に森の中を彷徨う。

「追手がここまで来たか」

もう駄目だと呟き木に凭れる。

「親父、ゴメン」

日が昇り鳥の囀りが聞こえる。

「ん……………あつ？」

晴輝が目を開けると景色が変わっていた。

「ここ、何処だよ？」

辺りを見渡すが森と言う以外は変わっていない。

それが彼の幻想入りであった。

00・家出男の家出（後書き）

感想よろしくです。

01 - 森に迷う程度の能力

「はあはあはあはあ」

右も左も木に囲まれている。たぶん森の中だろう。心臓はドクンドクンと今にも破裂しそうな勢いだ。

唐突だがここで一言。

「助けてくれ……………」

学ランの上は何処かに行方をくらまし、ボロボロのYシャツには血が少し滲んでいる。

息を整えようとしますが上手い事酸素が喉を通らない。

肺に着く前に吐き出してしまふ。

俺、神田晴輝^{かんだはるき}は家出をした。ほんの二週間前の話だ。家での生活が苦しくなり家を飛び出した。

我が家は戦国時代から続く將軍家の子孫らしい。

そのため日々、剣道や武術を習ってきた。

その所為かちよつとやそつとでは疲れない自信はあったのだがそんな自信も亀裂の入ったダム^{ダム}の如く崩壊した。

あれはいわゆるチートキャラだろう。

「アレー、いないぞー」

きた！奴だ。

金髪に赤いリボンをした幼女が周りを見渡している。

彼女が俺を追い回している張本人だ。

「うーん、いないぞー」

幼女はまるで鬼ごっこをしている様な無邪気な顔である。

「さあ、如何したものか」

晴輝は息を殺しそつと腰の刀に手を着ける。

「……………」

だが刀から手を離す。

いくら相手が強いからと言って刀はマズイ。

誤って彼女を傷つけかねない。

(こっちは……………)

晴輝は大きく息を吸い、吐く。これを何度も続ける。そうして最後に息を大きく吸い、幼女に向って走り出した。

「お、いた」

幼女はこつちを向き、邪悪な笑みを向けて行って、

「いただきます！」

そう言っただけで向かってきた。

彼女の両手には黒いオーラのモノが纏っていた。

(成功するかわからないがこの一撃にかける！)

そうして彼女にぶつかりそうになったその時！

パアアンと彼女の目の前で両手を勢いよく合わせた。猫だましである。

「おわっ！」

彼女は予想以上に驚き尻餅をついた。

彼女の上をジャンプし、そのまま森の中を走った。

01・森に迷う程度の能力（後書き）

感想よろしくお願いします。

02 - 暗闇に潜む妖怪

「何とか逃げ切った」

金髪の幼女から逃げ切る事に成功した神田は木に体重を預けていた。

神田は理解していた。ここは日本ではない、と。

さっきの金髪幼女は確かに日本語を使用していたが殺気を感じた。それも尋常じゃないぐらいのものだ。

五日ぐらい前だろうが、目が覚めると辺りは変化していた。

ジメジメとした空気が辺りを包み込みキノコが無駄に大量生産されていた。

「うえ……………気持ち悪い」

この森からはさっさと抜け出したいのだがさっきの金髪の幼女が邪魔をしてくる。

(とりあえずテントの張ってある場所まで戻る事にしよう。)

十分程度歩き青いテントを張ってある所まで戻ってきた。

「ふう、落ち着いた」

テントの中に入り腰を下ろそうとするが連続で走った所為か脚が鉛の様に重いため尻を打つような形の座り方になってしまった。

「食料はあと持って数日、早く人のいる場所に出ないと……………」

鞆の中には飴玉とカンパンと水だけだ。携帯は壊れてしまい何の役にも立たない。

「さてと、如何したものか……………」

「うまそーだなー」

「ツツ！」

聞き覚えのある声に驚き腰に差している刀を握る。

飴玉を凝視しているのはさっきまで追いかけてきた金髪幼女だ。

「飴玉がほしいのか？」

とりあえずそう言っていると彼女は無邪気な顔でコクリと頷き口を開け

た。

小さく開く口に飴玉を放り込むと満面な笑みを浮かべた。

(何だ……悪い奴じゃないのか)

安心した。体の力は一気に緊張感と恐怖が抜けていき、今は安心して
している。

「そう言えば何で逃げてたんだ？」

幼女は飴玉を口の中で転がしながら質問をしてきた。

「ちょっと君の事が怖かったから……」

彼女と会ったのは四日前である。いきなり腹を引つ搔かれそれで
今は大量出血状態である。

「そーなのかー」

別にどうでもよさそうな相槌を返してきた。

「そう言えばお前の名前は？」

飴玉を右の頬に入れてそう言ってきた。

「神田晴輝、君は？」

ゴクンと何かを飲みこんだ音がしそして彼女は答えた。

「ルーミア！」

無邪気な子供の笑みを浮かべ元気良く答えた。

「ルーミアって言うんだ、あと飴玉は飲みこまないほうがいいぞ」

そういつてまた飴玉の包みを解き飴玉をルーミアの口に放り込む。

飴玉をとても気に入ったらしく顔がとても幸せそうだ。

「ルーミア、この森には誰か住んでないの？」

そういうとルーミアは飴玉をまた飲みこむ。

「あっちの方に普通の魔法使いか人形の方の魔法使いがいるよ」

彼女はテントの入り口を指した。

それを聞くとテントからルーミアを出しテントを片づける。

テントを鞆にしまつて歩き出す。

軽く誰かに手を握られる。

「私も行っていいか？」

ルーミアが興味津々な顔をして訪ねてくる。

「ああ、いいぜ。旅はみちはずれってよく言っし」
ルーミアが両腕を横に伸ばし、テトテトと駆けていく。
それに付いていくのであった。

02・暗闇に潜む妖怪（後書き）

感想よろしくです。

03 - 普通の魔法使い

歩いて二十分ほど経過しある家と辿り着いた。
太陽は真上を向いているので昼時だ。

「霧雨……………魔法店？」

何かしらの売店だろうか。

「こんな山奥に……………何で」

ルーミアは途中で寝てしまい背負っている。

日本にもありそんな普通の家だが少しだけ壁からキノコが生えてる。

とりあえず家の玄関に立ちトントンとドアを叩く。

だが返事は無い。

「留守かな……………？」

(まあ少し経てば帰ってくるかもしれない)

そう言っただけで家の近くの木にルーミアを下ろす。

丁度その同時刻。

「ふむふむ、なるほど」

箒に跨り彼女は宙を飛ぶ。

「パチュリーの所の本はやっぱり面白いな、少し怒ってかもしれないがまあ良いか」

彼女も女なのに乙女心を理解できないのは何故だろうか。

「まあ、今回は少ない方だし怒ってないと思うぜ」

白い風呂敷は大量に本が入っている。

「それでも少し重いな、誰か助手にして手伝わせるか……………」

彼女は本を風呂敷の中に戻し箒を強く握る。

「アリスは……………先週怒らせたし、霊夢は……………金を取られるぜ」

自分の手足の様に動きなおかつ自分に忠実な奴。

「まあ、そんな奴は幻想郷にはいないか」

そう言つと彼女は高度を落としていく。

「おつ、アレは……………」

彼女の目には彼女自身の家の前に誰かいる事に気づく。

「お客か！」

そう言つて自分の家目掛けてスピードを上げる。

木に下ろしたルーミアはすうすうと可愛らしい寝息をして寝ている。

「バカだな、俺」

彼女は最初から友好的だったのかもしれない。彼女が最初に会った時に攻撃したのはカバンの飴が欲しかったのかもしれない。そうじゃないとしても彼女は二回目には攻撃してこなかった。

「人を見た目で判断するなんて……………」

親父がいたら叩かれていたかもしれない。

「おつと、ここには親父はいなかった」

でも元の世界に帰つてもいない。

「如何すれば良いんだ……………親父」

そう言つて刀を強く握る。

「……………い」

「ん？」

その瞬間、何か聞こえた。

「……………やーいーい」

また何か聞こえる。

「何だ人の声か？」

木から離れて辺りを見回すが誰もいない。

「いらつしやーいーい！」

視線を上動かす。

「えっ！？」

自分よりやや年下の少女が俺目掛けて飛んできた。

魔女の様な服を着てルーミアと同じ金髪で色々説明したいが目の前の非科学的な現象に驚いている。

「何で箒で空飛んでんの！」

箒の先端が鳩尾にクリティカルヒットする。

勢いのあまり空中でトリプルアクセルを繰り出しそのまま頭から地面へ落ちた。

「おおっ、凄い！」

ルーミアは眼を覚まし神田の見事なトリプルアクセルに拍手を送る。

「げほっげほっ！」

着地さえ失敗してなければ金メダルは取れるだろうトリプルアクセルを繰り出した神田選手は盛大に噓せていた。

「霧雨魔法店へいらっしやい、私はここの店の主」

箒から降りて彼女は地面に立つ。

「霧雨魔理沙だぜ」

それを聞き終わると神田の意識と視界は暗闇へと沈んでいった。

03 - 普通の魔法使い（後書き）

感想をよろしくおねがいます。

04 - 普通の人間の素性（前書き）

今回はちょっとだけシリアスなう。

04 - 普通の人間の素性

「ん、あ？」

眼が覚めると知らない天井が目の前に現れた。

「ここは……………痛っ」

上半身は服を着ていない。代わりに包帯が胸の辺りに巻き付いている。

「ええっと……………」

記憶が曖昧だった。立ち上がり窓から外を見るともう太陽が沈みかけている。

「おおっ神田！」

振り返るとルーミアが食器を運んできた。

「眼を覚ましたか」

その後ろから自分よりやや年下の少女が入ってくる。

「えっとルーミア、この人は？」

「普通の魔法使いだ」

そう言っつてルーミアは神田に駆けていく。

「おいおい、さっき自己紹介したのに忘れたのかよ」

さっきと言っつても数時間も前だし、それに気絶していて記憶も曖昧になっているのだから仕方がない。

「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだ」

そう言っつと彼女はルーミアの持ってきた食器を神田に渡す。

「あの……………これは？」

食器を覗くとキノコが入った液体がある。

「キノコのスープだ、口に合うと嬉しいぜ」

香りは良いがこのキノコ何処かで見覚えがある。たしかこの家に生えていたような……………気のせいかな。

スープを飲み終わると魔理沙は椅子に腰を掛ける。

「アンタは神田晴輝で良いんだよな、ルーミアから聞いたぞ」

ルーミアは俺の座っているベッドの上で正座をしている。

「アンタに質問したいんだが良いか」

「ああ、良いよ」

「質問その一、アンタは何処から来たのか。」

質問その二、何しにここに来たのか、

そして質問その三、アンタの詳しい素性が知りたい」

彼女は真剣だった。

「俺は神田晴輝、森で迷ってたら多分この世界に来たんだと思う」
「思う？」

「五日ぐらい前に気が付いたら周りの雰囲気が変わってたんだよ」

「五日もこの森にいたのか」

「ああ、そしてルーミアと出会ったんだ」

魔理沙は依然として表情は変わらない。

「そーなのかー」

ルーミアにはもう少し緊張感を持つてほしい。

「そうしてルーミアに教えてもらったんだ、この家があるって」

本人は依然と無邪気な笑みを変えない。本当に緊張感を持つてほしい。

「俺は十九歳、ただの普通の家出男だ」

魔理沙は強張った顔を緩める。

「まあ、ここまでは予想通りだな、じゃあ」

そうしてある物を取りだしてまた顔が強張る。

「これはどう説明するんだ」

そう俺が護身用として身に着けていた刀だ。

「……………」

「これは本物、それもかなりの名刀……………いや妖刀か」

「……………妖刀『龍炎』、刀身は蒼く美しいが何万と言う人間がこの刀に血を吸われたんだ」

我が家に伝わる名刀でもあり妖刀、そして……………

「俺の親父の形見だ」

「……………！」

親父は変わった人だった。一年中和服で外出も和服、変わり者と
言われ続けた。でも最高の親父だった。何時も笑顔で接してくれて
俺が悪い事をしてもし一発頭を殴ってこう言う。

『犯した罪の重みを感じる事が大事だ』と。

「親父は一月前にポツクリ旅だったよ」

「お袋はこの刀が目的で親父に近づいてきた、お袋はこの刀を売っ
て大金を得るつもりだったらしい。その前にこの刀を俺が持って家
出をしてそれで現在に至る」

「まあ、信じるか信じないかは霧雨さん次第だよ」

魔理沙は俺の顔を上げた。

「ま、まあ有りそうな話だな」

神田はポケットからまだ使っていない綺麗なハンカチを取りだし
た。

「な、何だよ」

「とりあえず、これで顔拭いてください」

魔理沙は少し涙を流していた。

「な、泣いて何かないぜ、これはその……………」

強情な人だなと内思いつつも神田はハンカチを手渡す。

「あ、ありがと」

少し照れながらも魔理沙はハンカチを受け取り涙を拭う。

「よし、アンタ」

「はい、何ですか」

俺は隣にいるルーミアを起こそうとする。多分難しい話だから寝
てしまったんだろう。

「私の助手にならないか？」

「えっ？」

この時、魔法使いと人間の助手のコンビが誕生した。

04 - 普通の人間の素性（後書き）

感想よろしくおねがいます。

05 - 魔法使いの助手

「ふわぁぁ……………」

眼を擦りテントから出る。

近くにある川から水を汲みあげテントまで運ぶ。

「よし」

カンパンの缶をコップ代わりに使い水を飲む。

テントは三人なら余裕で眠るスペースはある。

魔理沙から聞いた話ではここは幻想郷、人間はいるが妖怪や神様もいるらしい。

テントに何故いるかと言うと魔理沙も年頃の女性ですし、ルーミアは魔理沙家の中だ。

「とりあえずは着替えだな」

そう言ってYシャツのボタンを外す。

「……………」

包帯を外し終わると鳩尾の所を触る。

「昨日まで痛かったのに嘘みたいだ」

もう痛みは無い。

「これも魔法なのかな」

そうだとすれば魔理沙には感謝しなければ。

「ん」

テントの外から魔理沙の声がする。

「ああ、おはようございます」

魔理沙は大きく背伸びをし、箒を持つ。

「ああ、おはよ」

「ルーミアは？」

「まだベット、書き置きは残したから大丈夫だぜ」
そう言って箒に跨る。

「いくぞ晴輝」

そう言っ て神田を手招きする。

「えっと、何処へ？」

「この幻想郷は広いからな、お前の脚じゃあ多分60%が限界だろう、だから良い物を貰いに」

「わかりました」

「あ、その晴輝。敬語とかさん付けは止めてくれ、後堅苦しいから魔理沙でいいよ」

魔理沙はそう言っ て頬を掻く。

「わかった」

神田は近づき箒に乗る。

「と言っ か当てはあるのか？」

「ああ、ある」

自信に満ちた声で返事を返す。

「行くぜ！」

そう言っ て箒は宙を浮き上へ上昇する。

「おお、高い高い」

あっ という間に森の木の高さを超える。

「綺麗だな、幻想郷っ て」

目の前には緑が広がっ ている。

「晴輝は元の世界には帰りたいくないのか？」

「別に良い、ここに自分の骨埋めるのも悪くはない」

「そ、そうか……………安心したぜ」

「えっ何か言っ た？」

「えっ、いや、そろそろ行くぜ」

そう言っ て箒は前へと前進し始める。

風は心地良く森の中より空気が澄んでいる。

「あ、そう言えば」

「どうした晴輝？」

「魔理沙に感謝しなきゃなっ て」

「如何してだ？」

「俺を助手として雇ってくれた事や治療してくれた事だよ」

「べ、別に良いんだぜ」

魔理沙の顔が少し赤くなった。

「ありがとな魔理沙」

「……………!!」

魔理沙の顔がトマトの様に真っ赤になった。

「ぶ、ぶっ飛ばすから喋ると舌嚙むぞ」

「あ、ちょ、まっ」

その瞬間凄い勢いで箒が加速を始め神田は魔理沙の腰に腕をまわす。

「……………!!」

その時またスピードが上がる。

10分後、目的地の上空へと到着した。

「ここは？」

「妖怪の山だぜ」

妖怪の山から少女がカメラ越しで2人を覗いていた。

「あややや、アレは魔理沙さんと誰でしょうか」

彼女は背中の羽を広げ飛ぶ態勢へと移る。

「スクープが飛んできましたか」

05 - 魔法使いの助手 (後書き)

感想よろしくお願いします。

06 - 芥川龍之介の河童（前書き）

毎回午前7時に登校しますのであしからず。

06 - 芥川龍之介の河童

妖怪の山に着地して三十分が経った。

「お願いだ、にとり。それ貸してくれ！」

魔理沙がにとりと言う彼女は機械を弄っていた。

とても見覚えがあるが何故これがこんな所にあるのだろう。

「だめ、これは紫から預かったんだから」

そう言っつて機械を弄る。

「あの、これって」

「ああ、これはバイクって言っつて紫っつて奴がどっかから持っつてきた

.....」

そう魔理沙の言っつたとおりバイクだ。魔法がある世界なのだから今さら何が起きてても驚かない自信があつた。だが今は違う。

「これ、俺のバイクだけど.....」

「はい？」

にとりがこつちを睨みつけた。

「あの.....どちら様で？」

「ああ、紹介が遅れたぜ。コイツは神田春輝、私の助手だよ」

にとりが工具を持ちながら近づいてきてジロジロと見る。

「じゃあ証拠は？」

ポケットからバイクのキーを取りだしバイクの鍵穴に差し込み鍵を捻る。

ブウウウンとエンジン音を鳴らしバイクが震えだす。

「何とか大丈夫みたいだな」

このバイクは一緒に家出をした大切な仲間である。

「海にダイブした時はダメかと思っつたけど」

家出をしてる際にバイクのブレーキが壊れそのまま海へとダイブしたのだ。そのおかげでバイクがダメになっつてしまった。

「おお、動いた！君、これで少し走ってくれない？」

眼を覚ましたバイクに興味津々のにとりはバイクの後ろに乗り神田にヘルメットを投げる。

「良いですよ」

ヘルメットを被りバイクに乗る。

「魔理沙もちよつと行ってくる」

「……………ああ、私はちよつと用があるから」

魔理沙は少し不機嫌そうな顔をして手を振る。

「出て来いよ、文」

にとりの家の後ろから人が出てくる。

「あやや、気づかれましたか」

気配を消していたのに気付かれてしまうとは腐っても魔法使いと言いつ訳ですか。

「今、完全に失礼な事を思っただろう」

「わかりましたか？」

魔理沙は笑顔のまま右手を強く握りしめる。

「良いでしょう」

「この射命丸文、逃げも隠れもしません」

鴉天狗、この妖怪の山に住んでいる妖怪の一つであり、幻想郷最速である。

「幻想郷最速の名は私が貰うから安心しな」

「あやや、人間が天狗に敵うと思ってるなんて、1000年早いですよ」

文は翼を広げ、魔理沙は箒に跨る。

「いくぜ！」

「手加減してあげますから本気で来なさい！」

2人は宙に浮き加速を始める。

バイクの調子は好調で風を切る。

「おお、これは想像以上の速さ」
後ろのにとりも満足している。

「これにとりさんが改良したんですか？」

「まあ、エンジンを電気エンジンに取り換えてとりあえず馬力は15ぐらいは上げたし後とりあえず後ろからブースターも取り付けだし、後は光学迷彩しか付けてないけど」

「いやそこまで行ったら魔改造レベルですよ」

「後、出来たら飛ばしたいな」

これ以上するとバイクではなくなると言いたかったが本人は楽しんでるので口を塞ぐ。

「にとりさん」

「何？」

「バイク直してくれてありがとうございます」

「あ、いや、紫に頼まれただけだし、別に自分も好きで弄ってたし

「……………」

にとりの声はだんだん小さくなっていく、そう言えば魔理沙もこんな反応を見せていたような？

「と、とりあえず別に良いよ。それよりそのバイクの黒いボタンを押してみてください」

そう言われて見てみると速度計の隣に黒と赤のボタンがある。

「押しますよ」

キュイイインと言う謎の音がバイクの後方から聞こえる。

「？」

その2秒後、バイクの速度計はある数字を出す。

130?。

「ぎゃあああああああああ！」

あまりの速さに一瞬気を失いそうになる。

「に、にとりさあああん！これは何ですかあああ！」

「加速装置」

簡単な解答ありがとうございます。

バイクは山を駆け抜けていった。

「あやや、さっきの少年の声が聞こえましたが、あなたの彼氏さんは大丈夫なんですか？」

「彼氏じゃない、助手だけ」

魔理沙は懐から何かしらの六角形の何かを取り出す。

「遂に出しましたか八卦炉」

「恋符マスタースパアアアアアアアアアアアク！」

八卦炉という六角形の物体から太いレーザーが放たれる。

「どんなに火力があつても当たらなければ意味はないですよ」

放たれたレーザーをかわし手に持つてるカメラのシャッターを切る。

「あやや、別に大丈夫ですよ、写真は私が記事にして幻想郷全体に発信しますので」

「それを食い止めてんだよ、お前なら捏造するだろ！」

「失礼な、別に『驚き霧雨魔理沙に恋人か！？』とか『恋する乙女

霧雨魔理沙！相手は人間か！？』とか考えてませんから」

「考えてないのならメモするな！」

「普通の記事なら良いですか？」

「まあ、普通ならな」

魔理沙に背を向け自分の家に向かって一直線に進む。

文はカメラを取り出して撮った画像を見つめる。

(彼にはまた後日、取材を受けてもらう必要性がありますね)

「まったく、文の奴、変な記事書いたら許さないぜ」

春輝とにとりはまだ帰ってこない。

「.....」

あの時、にとりが晴輝に抱きついた時、一瞬だが心が痛んだ。

何か切ない様な悲しい様な感情が渦を巻いた。

「た、ただいま、魔理沙」

「魔理沙、ただいま」

疲れ切った晴輝と満足そうなにとりが返ってきた。

「お、お帰りだぜ」

そのままバイクのスタンドを上げ地面に突っ伏した。

「如何したんだ晴輝!？」

「ちよつと時速130?の世界を冒険してきただけさ」

にとりがけらけらと笑う。

「晴輝」

「な、何ですかにとりさん」

「何時でもここに来てね、歓迎するから」

そう言っ^てにとりは手を差し出す。

「あ、ありがとうございます」

晴輝がにとりの手を触った瞬間、ズキッと魔理沙の心が痛んだ事を2人は知らない。

06 - 芥川龍之介の河童（後書き）

感想よろしくお願いします。

「さあ、次回は紅魔館（外）のメンバーだぜ」
by 霧雨魔理沙

07 - 紅魔館（前書き）

ついに来たぜ弾幕ごっこ。

07 - 紅魔館

晴輝は大量の荷物を背負いルーミアと共に湖を目指しバイクを走らせる。

30分ほど前の事だ。

『五日間で幻想郷を覚えるんだぜ』

そう言われてテントを回収し、五日かけて幻想郷の場所を覚える旅に出た。

とりあえずは紅魔館、博麗神社、人間の里、永遠亭となっている。ついでに永遠亭からは薬を買うように頼まれたわけである。

とりあえず今は湖の近くにある紅魔館を目指している。
「だけど旅つてのは良いもんだな」

元の世界ではあの母親から逃げてただけだった。でも今は違う、自分の新しい居場所がある。友人がいる。そう思えるだけで嬉しかった。

「ルーミアも紅魔館つてのはどういう所なんだ？」

「んー………デツカイお城！」

簡単な解答をありがとございます。

「どんな人が住んでるんだ？」

「メイドと引き籠りと小悪魔と吸血鬼の姉妹と美鈴めりん！」

訳が解らない。メイドは理解できるが小悪魔と引き籠りと吸血鬼の姉妹？それに美鈴だけ名前だし。

ルーミアと話していると湖が見えてきた。

「おっ、そろそろか」

大きな湖は太陽の光を弾き光沢を得ている。

バイクを止めるとエンジン音を静まった。

「綺麗な湖だな」

「アイツいるかな？」

「アイツって誰だ？」

「?!」

意味が全く分からない。？とは名前だろうか？

「まあ、進んで見るか」

再びバイクはエンジン音を響かせ走りだす。

バイクを走らせ15分くらいだろうか。とても大きな屋敷の前に辿り着いた。

「近くで見るとまたデカイもんだな」

そう感心していると近くで何か音が聞こえてくる。

「おっ、この音は」

ルーミアはバイクを降りて音のした方に走りだす。

「あ、ルーミア走ると倒れるぞ………っってお前も飛べるんかい！」

「強いな、チルノ」

「ふふん、アタイは最強だもん！」

「でもアタイの技で凍らしたあげる」

チルノと言う蒼髪の少女は上昇し両手を前に出す。

「雪符ダイヤモンドブリザード！」

大量の氷柱が雨のように降り注いだ。

それをチャイナ服を着た赤髪の女性はギリギリの距離で避けたり、攻撃を手で受け流していく。

「チルノ、美鈴！」

その二人の間にルーミアが入って行く。

「お、ルーミア久しぶり！」

「ルーミア、またアタイと弾幕ごっこしない？」

その後ろから晴輝がバイクを押してやって来る。

「ルーミア飛ぶの速いつてば！」

「ルーミア、アレは何？」

「いきなりアレ呼ばわりか」

晴輝を見たチルノは指を指し美鈴と言う女性は何やら攻撃の態勢

に入ってる。

「誰ですか、アナタは？」

かなり警戒されているようで何かオーラを出している。

「あ、えつと霧雨魔理沙の助手の神田晴輝って言います、ちよつと幻想郷の建物とか場所とか覚えるために来ました」

「魔理沙さんの助手ですか……………」

とりあえず納得して貰えたがまだ攻撃の構えを止めない。

「ちよつと、アタイは仲間はずれなの！？
空気を読め？。^{チルノ}」

「えつと、チルノちゃん？」

「最強であるアタイを無視するとはいい度胸だね」

「あ、いや今は美鈴さんと話をしているから……………」

「アタイと弾幕ごっこしよ！」
話を噛みあわせてくれ？。^{チルノ}よ。

「まあ、『弾幕ごっこ』ってのは知らないけど良いぜ」

まあ、所詮は子供の遊びだろうし大丈夫だろうと安請け合いしてしまっただがこの後晴輝はこの世界のルールを知ったのだった。

07 - 紅魔館（後書き）

感想よろしくです。

「次回は弾幕ごっこ！」 byチルノ

「そーなのかー」 byルーミア

「まあ、昨夜さんもないし、ド派手にやりますか」 by中国（美鈴）

08 - 弾幕ごっこ【チルノ&美鈴】

「じゃあ始めるよ」

そう言ってチルノはポケットからカードを取り出す。

「降参したら負けでスペルカードは二枚まで、場所はこの紅魔館の周りで良い？」

スペルカードって何だ？と疑問に思ったが別に無くても大丈夫そうなので口には出さなかった。

「ああ、良いよ。どうせなら美鈴さんもやりますか？」

「え、私ですか？」

「多いほうが楽しいですし」

「わかりました」

美鈴はチルノに近づき攻撃の構えになる。

「ルーミア、ゲーム開始の合図よろしく」

「わかった」

美鈴がそう言うところルーミアは右手を上げる。

本当にこの三人は仲がいいのだと心からそう思う。

「それじゃあ、スタート！」

ルーミアは上げた手を振り下げる。

一瞬だった。

目の前に美鈴が現れる。

「なっ！？」

「貰った！」

力を込めた左手が晴輝の腹部に向かって飛んでくる。

だがその一撃を紙一重でかわし地面を後ろに強く蹴り距離を取る。力の入った拳はブンと言うまるで金棒を勢いよく振った様な轟音を鼓膜に響かせる。

(今が当たっていたら多分アバラの骨を何本か折れてた！)

そう思いつつ周りを美鈴を注視する。

「アレ………チルノが居ない？」

ふと気がついたがチルノは何処にも居ない。

「いただき！」

目の前に何かが落ちてくる。

前髪の数本が切れて地面に落ちる。

「ほらね、やっぱりアタイは最強だもん」

チルノだった、それも綺麗なガラスの様な剣を持っている。

「氷符ソードブリザード」

剣は冷気を纏い地面は凍りついている。

急いでその場を離れバイクに置いてきた刀を拾う。

「っ、次はこっちから行かせてもらっぜ」

脚は異常なほど震えていた。

もし一歩間違えれば確実に命を落としていただろう。

これはお遊びであって殺し合いではないとわかっていたとしても

今には正直腰が抜けた。

「これは遊び、これは遊び、これは遊び」

そう言っつて心は無理やり落ち着かせようとする。

「ていやあ！」

美鈴は追撃の手を休めるところか少しずつスピードが上がって行

く。

「くっ！」

刀は鞘から抜かずただ正拳突きを鞘で受け流している。

「アタイに任せて！」

飛ぶ事が出来るチルノは上から攻撃して美鈴は陸から攻撃して相

手の気を自分にそらす戦法。

「凍符パーフェクトフリーズ！」

「ツツ！」

今度の攻撃は攻撃範囲が広い所為か避ける事が出来ず光の球体に

直撃した。

「ふー、中々強かったですよ晴輝さん」

「アタイの最初の一発をかわした事は褒めてあげる」
春輝は見事にカツチコチに凍らされている。

「あ、晴輝さんって人間手でした!」

「そうだぞ、美鈴はドジだなあ」

ルーミアが氷漬けにされた春輝を叩いている。

「そうじゃなくて早く助けないと死んじゃうって!」

「アタイの氷は中々解けないからだいじょーぶ!」

えへんと胸を張って鼻が高そうな顔をしているチルノに美鈴は頭を抱え込む。

「あ、でも大丈夫っぽいぞー」

「え!?!」

春輝の持っている刀から蒼い炎が出て、そしてやがてその炎は春輝全体を覆いそして

「はあはあ、死ぬかと思った!」

チルノの氷を全て融かした。

「チルノ、マジで死ぬかと思ったぞ」

「凄く凄く、アタイの氷をこんなに早く解かしちゃうなんて!」

「えっと、春輝さんって人間ですよね?」

「まあ外見はね、色々とあるんだよ」

そう言つと第二ラウンドが始まるがまた晴輝が氷漬けにされたのは言つまでもなかった。

08 - 弾幕ごっこ【チルノ&美鈴】（後書き）

感想よろしくお願ひします。

「アレ、晴輝のスペック高くね？」 by っp主

09 - 恋する人形使い（前書き）

やりたかったな？話記念。

09 - 恋する人形使い

魔法の森の魔理沙魔法店からあまり離れていない洋館にもう一人の魔法使いが住んでいる。

アリス・マーガトロイド。

「紅茶が入ったわ」

紅茶を客人に振る舞う。

「おお、ありがとなアリス」

客人は霧雨魔理沙である。

「如何したの、あなたがここに来るなんて？」

アリスは椅子に座り右手で髪を弄る。

「実はな、アリスに相談があつて……………」

魔理沙の顔は下を向き声はどんどん小さくなっていく。

「あら、あの件だったら別に良いわよ、別に気にしてないから！」

アリスの顔は笑っていたがそのセリフには怒気の様なものも交じっていた。

以前アリスの大切にしていた魔理沙ちゃん人形（四分の一スケールを）を壊してしまったのだ。

「アレは確かに悪かったと思うけど……………ちょっと引いたと言うか何と言うか？」

「あら人が何作ろうと勝手じゃないかしら？」

またも笑顔を見せるがセリフにもさつき同等の怒気が混ぜられていた。

「まあ、私が壊したのは事実だが……………」

椅子に座ったままの魔理沙はどんどん小さくなっていく様に見える。

アリスは小さなため息を吐くと再度髪を弄り始めた。

「まあ、いいわ。それで相談とは何かしら？」

「実はアリス……………こ、恋つてした事あるか？」

時が止まった様に感じた。アリスは一時停止した様に硬直をして動かず、魔理沙は顔を真っ赤にして両手の人差し指同士をくっ付けたり話したりしている。

「え、ちよつと待って。今、何て言ったの？」

眼をパチクリとさせたアリスが机から身を乗り出し魔理沙の肩を掴む。

「いやだから……………恋って」

「相手は誰なの、アイツか紅魔館の引き籠りか！」

魔理沙の肩を前後に激しく揺らし問い詰めるアリスの顔は真剣だった。

「違う、私は恋なんかしてないぜ！」

そう聞くとアリスは我に返り椅子に座りコホンと咳をする。

「悪かったわ、少し取り乱したわ」

「ならいいんだぜ」

「それじゃあ、私は帰るぜ」

それから数分後、歩行が覚束ない魔理沙を見送りアリスはドアを閉めた。

「魔理沙ったら全く……………」

彼女が誰に恋をしているのかその真相がどうしても気になってしまふ。

「誰であろうと私は……………」

自分の部屋に行き魔理沙ちゃん人形（等身大）に抱き着き顔を擦り付ける。

09 - 恋する人形使い（後書き）

感想よろしくおねがいします。

「次回はついに来たぜ博麗神社！」 by っp主

10 - 博麗神社

太陽は沈みかけて夕暮れの赤が顔を染める。

チルノや美鈴と弾幕ごっこをしたおかげで服は氷の融けた水と大量に掻いた汗で服は濡れてしまっている。

ルーミアは紅魔館に残り弾幕ごっこをするそうで一人で博麗神社に足を運ぶのであった。

「それにしても濡れた服って気持ちが悪い」

今日は紅魔館の近くでテントを張ろうと思ったが美鈴が『よ、夜の紅魔館の近くは危ないんですよ。屋敷の中の方が危険ですよ!』と追い払われ次の目的地であった博麗神社に急いでいる。

「そうだ、にとりさんの着けてくれた加速装置が………」

バイクの速度計の隣には黒と赤のボタンが付いており黒のボタンが加速装置である。

ついでに赤のボタンは光学迷彩で五分間は効果が持続するらしい。

「ポチっとな」

ボタンを押すとバイクの後方からキュイイインと言う音が聞こえる。

そしてバイクは信じられないスピードで疾走する。

「ヒヤッホオオオオ!」

晴輝は声を甲高く上げてバイクの前輪を上げ夕暮れの草原を走行する。

「案外早く着いたな」

目的地の博麗神社に着いたが火は沈み辺りは真っ暗だ。

「この階段何段あるんだろう?」

神社の階段は自分の身長は何倍もあり気が遠くなりそうだった。

「まあ神社に来たんだしお賽銭ぐらいは入れとかなきゃな」

ヘルメットを脱いでバイクのキーを抜く。

「まあ早く着くだろう」

何て思っていた十分前の俺に安易な考えを持つなと言っておきたかった。

「はあはあ、何段あるんだよ、この階段！」

息を切らし階段に座り込み上を見上げる。

あと少しなのだが体が重くて登る気すら起きない。

「まあ、あと少しだ」

そう言っただけで疲れ切った体に鞭を打ち脚を動かす。

「着いたああああ！」

最終的には階段をよじ登り、服が汚れてしまった。

「と、とりあえず立とう」

脚に力を入れようとすると限界に近いのか脚が言う事を聞いてくれない。

「ここまでか」

眼が自然に閉じる。

「参拝客にしては来る時間帯が遅いわね」

突然聞こえる声に反応し眼を開ける。

「如何したのかしら行き倒れ？」

目の前にいたのは巫女だった。

少し露出度の高い巫女服を着て腕を組み俺の前に立っていた。

「あ、自分は霧雨魔理沙の助手の神田晴輝って言います」

「魔理沙の？いいわ。立てる？」

「何とか」

脚に力を入れて立ち上がる。

「おっと！」

だが脚は重く体が揺らぐ。

「アナタ大丈夫なの？」

流石に弾幕ごっこが効いたのか体の疲労はピークに達していた。

「ちょっと色々とありまして」

「そう、自己紹介が遅れたわ。私は博麗^{はくれい}霊夢^{れいむ}。霊夢でいいわ、あと敬語も無理して使わなくていいから」

「あー、生き返る」

俺は博麗神社を拠点に残りの人間の里と永遠亭を目指す事になった。

「湯加減は如何？晴輝さん」

「良い具合だよ、あと『さん』は要らないから」

湯船に浸かると今日溜まった疲労が消えていく。

「ふう、良い湯加減だったよ」

「それは良かったわ」

風呂からあがって何時もの学ラン姿に戻り夜空を見上げる。

「如何したの？」

夕食を運んできてくれた霊夢は一足早く食事に手を出している。

「いや、この人は皆優しいんだなって」

「そうでもないわよ、吸血鬼の2人とかは特にね」

「吸血鬼？」

紅魔館に行く際に聞いた単語の中に『吸血鬼』はあった。

「血とか吸うのか？」

「吸うわよ、下手だけど」

吸血鬼なのに吸血が苦手ってどうなんだろうか？

「まあ、そんな事より早く食べちゃって」

霊夢の笑顔はとても優しく微笑むが何か裏があるようにも思えたのだった。

10 - 博麗神社（後書き）

感想よろしくです。

「萃香は次回よ、まああの人も出るかもね」by 博麗霊夢

11 - 幻想郷探索2日目

「ん？」

博麗神社で一夜を過ごした晴輝は布団で寝ていた、ハズだったが：

……

「アレ？」

何故か布団を取られていた。

そして何故か部屋の隅に布団がある。

「如何いう状況？」

部屋の隅に移動した布団に近づき布団を拾う。

「なっ!？」

布団の移動現象は布団の中から出てきた。

全裸で2本の角の生えた少女が寒そうに体を縮ませ丸まっている。

「晴輝、朝ご飯がで…き……………た」

スライド式のドアを開き霊夢がこちらを見て硬直した。

それもその筈、この絵柄を見て誰もがこう思うだろう。

『晴輝が少女を襲っている』

「萃香に何してんのよおおお！」

腋巫女の飛び膝蹴りが顔面に命中し、そのままゴロゴロと転がって行く姿はまるでタイヤの様だった。

「……………と言う訳で俺は何もしていないので……………痛い痛い痛い痛い痛い痛い!」

蹴られたその直後、コブラネックツイストやヘッドロック、サソリ固めを喰らう。弁解の言葉を中々理解してもらえない。

「アンタ、神聖な神社で何て破廉恥な事をしてくれてんのよ!」

このセリフはもう3回目だが回数を重ねていく毎に怒気がどんどん増していく。

「ぶあああああっ」

さっきの子が伸びびをして大きな欠伸をする。

「霊夢、おはよう?」

「『おはよう?』じゃないわよ、なんで疑問形!?!」

サソリ固めを終えて次はバックドロップの態勢に移る。

「アンタ、何で俺の布団の中で寝てんだ!?!」

腰を掴まれたままの晴輝は手を外そうともがくが外れない。

そのままバックドロップが決まり頭を強打した晴輝は畳の上をのた打ち回る。

「あれ、霊夢の布団じゃなかったのか?」

「ちがうわ萃香、アレは彼の布団、と言うか何で服着てないのよ」

萃香と言う彼女は服を着て腕を組み考える。

「紹介が遅れたわ、彼女は伊吹萃香、まあ見ての通りの鬼よ」

鬼は初見何ですがと思いつつも萃香に近づき角を見る。

「俺は神田春輝、魔理沙の助手をやっているよ、まあ、よろしく」

晴輝は萃香と握手をするため手を差し出す。

「ハル、よろしく」

そう言っつて萃香は晴輝の手を握る。

その瞬間だ。

メキツと言う音が手から聞こえてくる。

「ぎゃあああああああ!」

「言い忘れてたけど萃香は怪力の持ち主だからね」

それを先に言っつて欲しかった。

朝の9時くらいだろうか、萃香と共にバイクで妖怪の山に登っていた。

前回は空から入ったので山道の案内役として萃香と同行している。

「萃香、こつちで良いのか?」

「こつちだぞ」

ひょうたんの中に入った無色透明の液体を飲んでいる萃香は少々顔が赤い。

「如何した、何か顔が赤い……酒臭い！」

鼻を刺すアルコールの臭いに鼻を手で塞ぐ。

「如何した？」

「アルコール苦手なんだよ」

そう言つて酒の入つたヒョウタンを奪い蓋をする。

ひょうたんには『酒』と大きく書かれている。

「ああ、何すんだよ」

萃香は顔を膨らませて少し機嫌を悪くする。

「酒は帰ってからにしてくれ」

「帰さないのなら………うりゃうりゃ」

萃香は両手で晴輝の腋を攪り始めた。

「あはははははっ！ちよ………待って！」

笑い声は山全体に響いた。

その笑い声が鴉を呼ぶとも知らずに。

にとりの住む家の近くまで来た。

萃香はひょうたんを抱えてぐっすりと眠っている。

「にとりさん、来ましたよ」

だが返事は帰ってこない、人の気配はするが肝心の人が出て来ない。

「にとりさん、晴輝です」

「あ、は、晴輝！？ちよ、ちよつと待つて今行くから」

そう言つと家の中から何か倒れる音や割れる音、『ひゅい』と言つ奇声まで聞こえる。

「あはは、ゴメンね、とりあえず入つて入つて」

そう言つて中に入ると先客がいた。

犬耳の綺麗な白い髪の同い年ぐらいの少女が将棋盤に向かつて真剣な表情を見せている。

「あ。お邪魔だったかな」

「大丈夫、直に終わるから」

そう言うにとりには将棋盤に向かい腕を組む。
どうやらにとりの方が劣勢の様だ。

将棋は親父が生前の頃に良くやらされたものだ。
下手なのに何度も立ち向かって来てそう言う所が親父の良い所だった。意地を張った子供の様にダルマの様に転んでは立ちあがり転んでは立ちあがり、まるで昔の自分達を見ている様な感覚だ。

「これでどうだ!」
にとりが駒を動かす。

「あ、それだと」

「え?」

相手はわずかに出来た死角を突きにとりの陣に潜入する。

「ひゅい!?!」

そしてわずか3分で王を取られた。

「負けちゃいましたか」

にとりはしょぼんと落ち込んでいる。

「そう言えばアナタは?」

白髪犬耳の少女はこっちに振り向く。

「俺は神田春輝、霧雨魔理沙の助手をやっている」

良く見ると彼女には尻尾まである。

「あ、文様が言っていた……………」

彼女は何かを考えている。

「あの私は犬走椀いぬはしりょうって言います」

(ああ、何か犬みたいで撫でたくなるな)

尻尾を左右に振って何と言うか愛らしい。

犬とか猫を見てしまうといついつい遊んでやりたくなるのは人間の性さがだろうか。

「あの、あまりじつと見ないください、照れますから……………」

「あ、ゴメン、つい」

何か2人の周りをピンク色の空気が漂う。

この謎のピンクめいた空気にとりは納得いかない様だった。

「そう言えば晴輝は如何してここに来たの？」

「ああ、いや特に理由は無いかだけにとりさんがまた来いって言ったし前はバイクだけ貰って帰ったからお礼をとここに来たんだよ」

「あ、いや、別に良いんだよ！うん、そうだバイク見てくるから2人で将棋でもしてて！」

そう言うにとりは工具箱を一式を持って外に出て行った。

「ああ、びっくりした」

工具を持ちバイクに近づきぐつすり眠っている萃香を退ける。

そうしてエンジンをばらし始める。

(格好良いな、晴輝)

乙女モードに入った女性は大抵は恋に一筋であると紅魔館のメイド長は『文々。新聞』で言っていた。

自分がそのモードに入ってしまったのかと思うとその時バカにしていた自分が恥ずかしくなった。

「好きな人とか居るのかな？」

好きな人に対して思うのが大体はこの言葉だ。

恋愛は嫉妬と独占欲が混じっているのよと紫が『文々。新聞』で紫が言っていた。

そうだ、さつき2人に対して思ったのが嫉妬である。

「はあ」

彼女のため息の理由は誰も知らない。勿論原因である晴輝も知らない。

ただ彼女は秘めた思いを明かさず機械を弄るのだった。

「王手！」

「ああ、やられました」

現在13勝7敗、まだまだ絶好調である晴輝は5連勝を成し遂げている。

「次は負けません！」

そう言って駒を並べる。

「じゃあ、次はお互いに賭けをしないか？」

「賭け……………ですか？」

「敗者が勝者の言う事を聞くって事で」

「面白そうですね」

「とりあえず、妖怪の山の案内してくれないかな？」

「良いですよ、私が勝ったら……………」

首を捻り考えている。

「まあ、時間は沢山あるから戦いながらも」

「はい」

そう言って神田は歩の駒を一つ前進させるのであった。

11 - 幻想郷探索2日目 (後書き)

「うp主と」

「ナレーターが送る」

「『東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー!」

」

「どうもうp主です」

「どうもナレーターです。そしてうp主さん死んでください」

「嫌だよ!」

「今回は晴輝・ルーミア・魔理沙の三人です」

「基本的には

晴輝 お人よし、高スペック、フラグ建築士

ルーミア マイペース

魔理沙 ツンデレ

となっています」

「わかりやすいですね、そしてうp主さんピチューンしてください」

「何故に!?!」

「『感想よろしくです』」

12・恋する図書館（前書き）

最近はずいぶん忙しくなってきたので毎日投稿が難しくなってしまうかもしれません。ごめんなさい。

時間は何時もと変わりないです。

12 - 恋する図書館

紅魔館の門番の仕事は侵入者を追ひ払う文字通り門前払いをする事なのだが……………

「すう……………すう……………」

紅美鈴は門番としては機能しておらず毎日の様に居眠りをする。

居眠りが既に日課であった。

紅魔館上空に箒に跨った魔女がいる。

霧雨魔理沙である。

晴輝が妖怪の山で将棋をしている時と同時刻であった。

「こつなつたら」

魔理沙はそのまま高度を下げて紅魔館へと侵入した。

紅魔館内はとても広い、だが何度も来ている魔理沙には行き場所が限られているのでそんな事は関係ない。

「パチユリー、遊びに来たぞ」

幻想郷一、本が多い場所それがこの図書館である。

何千何万もの本がここにありそしてこの主がパチユリー・ノーレツジ通称『ムキユー』である。

「はあ、また来たの？前回盗って行った本を帰して貰っていないのだけだ」

「また今度返すから、待ってくれ」

と言っても今回が初めてではない。

魔理沙の家にはこれまで借りパクった本が200冊を突破しているだろう。

「今回は本じゃないぜ」

「じゃあ何よ、まさか恋愛相談？」

パチユリーは紅茶の入ったティーカップを口へ運ぶ。

「ああ、その通りだぜ」

魔理沙は少し顔を赤くして言った。

「ああ、そうなの……………って、え!？」

パチユリーは一度は適当な相づちを打ったが魔理沙の意外な一言に驚いた。

「ま、まさか恋愛に全く持って無関心そうで鈍感なアナタが恋ですって!？」

「失礼な私だつて女なんだぜ」

「相手は誰!もしかしてあの森の人形遣い!?!それともあの紅白腋巫女!？」

紅白腋巫女とはたぶん霊夢の事を指しているのだろう。

「いや、それは教えられないぜ」

そう言つて魔理沙は椅子に座る。

(誰か調べる必要があるわね)

そう彼女もアリスと同じである。

目の前の魔理沙に恋をしている。

本人は何も知らず本を読んでいた。

なにも解らずに。

12・恋する図書館（後書き）

「うp主と」

「ナレーターが送る」

「『東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」

」

「どうもうp主です」

「どうもナレーターです。そしてうp主さん星になってください」

「何！俺を嫌いなのか？」

「はい」

「シヨボーン」

「今回はにとり・美鈴・チルノです」

にとり 少しだけ嫉妬深い 純情

美鈴 普通 以外に照れ屋

チルノ ？ ？ ？

となつてまーす（シヨボーン）」

「チルノだけが三つも有りますね？うp主さん」

「次回もよろしく願います……………」

13 - 鴉天狗

将棋盤の上では結果がついた。

30分の激戦は晴輝が勝利を収めたのであった。

「ここは？」

案内させられてきたのは『文々。新聞』と言う幻想郷の新聞屋である。

「文様、連れてきましたよ」

中に入ると本やら写真が落ちている。

魔理沙の家と互角ぐらいだろう。

「あやや、スクープが飛んできましたよ」

部屋の奥から翼の生えた少女が歩いてきた。

鴉の様な黒い羽はとても綺麗だった。

「まあ、散らかっていますがどうぞ上がってください」

そう言って部屋に上がる。

「私は射命丸文しゅめいまるあやと言います、『文々。新聞』の記者をやっています。

椀はアシスタントみたいなモノですかね」

「俺は神田春輝、霧雨魔理沙の助手をしてる」

文はカメラとメモ帳を持って来る。

「インタビューと写真良いですか？」

「えっとそれは記事に載せたり……………」

「勿論します」

即答だった。まあここまで来たのだし友好関係が最初から悪くなるのは避けたい。

「お手柔らかに」

返事はイエスだ。まあ、初対面の人に捏造とかはされなと思うから大丈夫だろう。

「ではアナタの年齢と好きなモノは？」

「歳は19、好きなモノは和菓子全般」

「魔理沙さんとの関係は？」

「自分は恩人と思ってる」

「魔理沙さんの事どう思っています？」

さっきまでの雰囲気ガラリと変わった。推測だが文の知りたかった情報はここからなのかもしれない。

「良い人だと思ってるよ」

「他には？」

ペンをマイクみたいに近づけてくる文の眼は何か輝いている。

何処の世界でも女性と言うのは人の色恋沙汰が好きなのだと確信した。

「まあ、ちょっと男勝りな面があるけど可愛いし、頼りにしてる」

「ではでは他の人は？」

「他の人？」

「ルーミアに河童、氷妖精、紅魔館の門番、腋巫女、2本角の鬼、そこにいる椀とかの事ですよ」

これまで会って来た人たちの特徴や職業にピッタリと当てはまっている。

「なるほど、全てお見通しと言う訳だ」

文はニコリとルーミア顔負けの邪悪な笑みを浮かべる。

「さあ、白状して貰いますよ」

観念した。ここまで調べられているのだからもうお手上げとしか言いようがない。

「ルーミアやチルノ、にとりさん、萃香は妹感覚かな、何か危なっかしそうで大人しいから」

「それでそれで次は？」

「美鈴さんは美人だし、霊夢は優しいし」

「霊夢の場合は裏がありますけどね」

「えっ、何か言いましたか？」

「いえいえ続けてください」

何か小声で呟いた様な気がする。

「椛は本人の前で言うとは恥ずかしいけど可愛いし……」
椛は少し顔を赤くして下を向いている。

「ほうほう、それは興味深いですね」

「文も皆と同じくらい可愛いけどな」

「あやつ!？」

文はペンを落として慌てふためく。

「あやや、別に私の感想は良いのですよ、私はアナタと他者の関係をですね……」

「事実だから問題は無い」

顔を赤くして手帳を落とす。

「そ、それでは私はネタを探してきます。ゆっくりして行ってね!」
文は何も持たず部屋を飛び出し翼を広げて飛んで行ってしまった。

「ふふつ、あんなに慌てた文様は始めてみました」

「と言うか何でここの皆は褒めたりお礼を言ったりすると照れるんだ?」

「ここの皆さんは女性が多いので可愛いなんてあまり言われてないですから耐性が無いのでしょう」

2人で並んで歩き、にとりの家へと戻る。

太陽は真上より少しずれている。午後2時くらいだろうか。

「そろそろ、次に行かないと」

次は人間の里へ向かい藤原妹紅ふじわらのせこうと言う女性と合流する事になっている。

「行つちやうんですか?」

そんな捨てられた子犬の様な眼で見ないでくれと顔を逸らす。

「大丈夫また来るから」

そう言つて椛の頭の上に手を置き頭を撫でる。

椛は晴輝の手を受け入れて撫でられる。

「その時はまた将棋しましょう」

そう言つて2人はにとりの家まで並んで帰るのであった。

13 - 鴉天狗（後書き）

「フハハハハ！我輩うp主と」

「ナレーターが送る」

「『東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！』

」

「ゼハハハハハ！ついにもこたんが降臨なさるだよ」

「そうですねそれで黒ひ……うp主さん」

「どうした、ゼハハハハハ」

「キャラ紹介の方を………（何コイツ、コワイ）」

「今回は霊夢と萃香だぜ」

霊夢 多少凶暴 ツンデ霊夢

萃香 ロリータ 妹っぽい

でありますよ軍曹！」

「そ、それではまた次回」

14 - 人間の里

にとりと椀と別れて下山している。

萃香は人間の里に入ると面倒になるらしいので自分で望んで残った。

「おーい、晴輝いいいい」

何処かで自分を呼ぶ声があるので晴輝はバイクを止めて周りを見渡す。

空を見上げると金髪少女が宙を飛んでいた。

「お、ルーミア」

紅魔館に残ったルーミアが帰ってきた。

「さっき凄い勢いで変なのが飛んで来たんだ」

「変なの？」

「確かあややとか言ってたよ」

たぶん文だろう、と言うかどれだけ飛んで行ったのだろうか。

ルーミアはそのまま降りて来てバイクの後ろに乗る。

「紅魔館は楽しかったか？」

「うん！」

無邪気に笑うルーミアはとても可愛い。

だが少し大食いの所があるために食費が凄い事になっている。

「じゃあ次は人間の里に向かうか」

バイクに付いている加速装置を使うため速度計のとなりボタンを見る。

「あれ？」

加速装置の黒とステルス迷彩の赤の他に白と青がある。

「何だろう、これ」

警戒しつつも白いボタンを押す。

「ああ、聞こえる？」

そうするとバイクの後方から声が聞こえて来る。

バイクの後方にはパトカーとかに付いていそうな無線機が付いている。

「えっと、にとりさん？」

『ああ、大丈夫っぽいね』

無線機をルーミアに取ってもらい会話を続ける。

「これって無線機ですか？」

『うん、何時でも使っていていいから』

何故取り付けたかは置いといてもう一つの疑問に移る。

「質問何ですけどこの青いボタンは何ですか？」

『それも押してみたらわかるよ』

そう言われてボタンを押す。

そうすると速度計のパネルが変わり何かが表示された。

画面には河城にとりと出ている欄が赤く点滅している。

「これは？」

『それは無線機の相手を選択するパネルだよ、こっちから使う時は使用者の欄が光るからね』

河童の技術力と言うのを舐めていたかもしれない。

まさか無線機を取り扱うだけではなく短時間でタッチパネルすら作れるとは……………

「じゃあ、ありがたく使わせてもらおうよ」

『後呼びの通信機が二つ入ってるから。それじゃあ、何時でも連絡待ってるからね』

そう言っつてパネルの河城にとりの欄の点滅が消えた。

「誰からだー？」

「にとりさんっていう河童の人」

バイクの黒のボタンを押して人間の里へと急ぐのであった。

「着いたか」

時刻は夕方の六時くらいだろう。

太陽が少しだけ沈みかけている。

「それじゃあ行きますか」

バイクから降りてバイクを押ししていく。

ルーミアは何時もの様にぐっすりと眠っている。偶に会う人達の視線はバイクに向けられていた。

(まあ、この世界ではバイクは珍しいからな)

「ちよつと、君!」

「は、はあい!」

いきなり呼びかけられて少し声が裏返る。

「ちよつと人を探しているんだが知らないか?」

話しかけてきたのは白い髪の二十歳前後の女性だった。

「えつと、どんな人ですか?」

「綺麗な白銀の髪に紅い眼、裸Yシャツが似合いそうな女の子なんだが……………」

最後の裸Yシャツは趣味なんだろうか。

「えつと名前は?」

「藤原妹紅と言う」

聞き覚えがある、今自分も探そうとしていた人物だ

「えつと……………アナタの名前は?」

「上白沢慧音だ、よろしく頼む」

晴輝は笑顔に笑顔で返すが心のどこかでこの人は危ないと感じていた。

14 - 人間の里（後書き）

ナレーター「残念ですがもこたんは次回です」

うp主「Nooooooooooooooooo!」

ナ「感想よろしくお願いします」

15 - 藤原妹紅

いなばて 慧音さんと共に人間の里で妹紅さんを探す。

「それじゃあ、慧音さんは先生なんですか？」

「まあ、そう言う事になるのかな」

世間話をしながらゆっくりと探す。

慧音さんはここで寺子屋を開いているらしい。

「君は魔理沙の所で助手をしていると言っただけで本当はどうなんだ？」

「どついう意味ですか？」

「他にしたい事とかは無いのか？」

「そう言われるといくつか思い浮かぶ。」

「和菓子屋を開きたかったんですよ」

「それは凄いな、でも何で開きたいんだ？」

「昔っから追い駆けてたと言いますか……まあ子供の夢みたいなものですよ」

和菓子作りは得意中の得意だ。

特に羊羹と饅頭には自信がある。

「今度作ってくれないか？」

「良いですよ、近いうちに」

「そう言って話していると慧音さんは立ち止まる。」

「居る」

周りを見渡して目を閉じる。

「妹紅、お客さんよ」

「そう言うつと物陰から人が出てくる。」

「慧音、もう怒ってないよな」

出てきた女性は白銀の髪に紅い眼をしている。

何故か額が赤くなっている。

「もう怒ってないわ、アナタのお客よ」

「どうも神田春輝です」

「私は藤原妹紅だ。敬語は使わなくて良いぞ」

幻想郷の人々は年上なのに敬語を使わなくて良いと言う人が多い。

「それじゃあ、妹紅、永遠亭まで連れてってほしいんだけど」

「ああ、お安い御用だ」

ルーミアを起こしてバイクに乗る。

「それじゃあ慧音さんまた今度にも」

「ああ、よろしく頼むよ」

「慧音と何話してたんだ？」

「今度美味しい物を奢る約束」

「なんだそりゃ？」

バイクは南にただひたすら突き進む。

バイクの三人乗りはとても難しい、サイドカーが欲しいぐらいだ。

「仕方ない、私に付いて来い」

そう言っただけ妹紅はバイクから飛び降りる。

「ちよっ！」

だが妹紅は地面には着かず宙を浮いている。

背中からは炎の翼の様なモノがある。

幻想郷の住人は大抵が空を飛ぶ事が可能である。

「私に付いて来い」

そう言っただけ妹紅はスピードを上げて飛んで行く。

「ルーミア、捕まっとけよ」

「はい」

速度計にある黒いボタンを押して加速装置を起動させる。

一日で何回も使った加速装置は音を上げて仕方なくバイクを押して行く事になった。

とりあえず永遠亭への難所である『迷いの竹林』に着いただけでもよしとしよう。

「あの魔法使いの助手になって何日になるんだ？」

「今日で五日になる」

と言っても最近はずっと会っていない、魔理沙も魔理沙なりに忙しいみたいだ。

「ん？」

何かが近づいてくる。

「気付いたのか？」

「まあ、そこそこ」

並みの人間ではわからない程度の気配だ、驚かれても仕方がない。

「すばしっこいな」

気配は尋常じゃない速さで移動している。

ルーミアも気付いたのか辺りを見渡している。

「幻想郷の詐欺師の登場だ」

三人ともバイクから降りて気配を探る。

「ふふ、面白いのが来た」

兎は望遠鏡を使って三人を覗く。

15 - 藤原妹紅（後書き）

ナ「第一章終りまであと少しですよ」

主「もこたああああああああん！」

ナ「大丈夫ですよまだ出てきていないキャラも出てきますから」

主「MO・KO・U！」

ナ（ダメだコイツ……………）

16 - 龍の威圧

こちらには戦闘の意は無い。

だがそう言って何とかなっていたら苦労はしない。

「相手は何が目的なんだ？」

「アイツは腹黒で有名だからわからない」

「そーなのかー」

ルーミアには緊張感を持って貰いたい。

あれ、デジャブ？

「妹紅、何とかなんないのか？」

「なつてたら構えてないさ」

それもそうだと思いい刀を構えるが……

「あれ？」

腰に差していた刀が無い。

「これは高く売れそうだね」

刀はウサ耳少女が握っていた。

「てゐ……………お前か」

「……………」

因幡てゐ、それが彼女の名前だ。

てゐは握った刀をジロジロと見たり刀を抜いたりする。

「それを返してくれないか」

晴輝は真剣な表情で言う。

「うーん、そうだね君の身ぐるみと交換でどうだい？」

「てゐ、冗談が過ぎるぞ！」

あまりにも不平等な取引である。相手の物は盗品で元は自分の物
だと言うのに。

だが顔色一つ変えずに晴輝はてゐを睨む。

「もう一度言うぞ、刀を返せ」

「だから身ぐるみと交換で……………」

晴輝はため息を吐き再度てゐを睨む。

「カタナヲカエセ！」

その瞬間、てゐの配下のウサギたちが何かを感じ取り一気に逃げ出していく。

まるで風が吹いた様に竹が揺れる。

「へえ？」

てゐは力なくその場で腰を着く。

「ッ！」

妹紅は感じ取った。

晴輝からあふれ出すほどの怒気と殺気、人間から出る殺気はこれほどではない。

「お、おい、どうしたんだよ」

普段の眼の色ではなかった。眼の色は『龍炎』と同じく蒼く美しい、だが本来は黒だ。

「おい！」

妹紅が叫ぶと眼の色は元の黒へと戻る。

「ん、如何した？」

晴輝はまるで今の自分の行動を解らず、
てゐの方は腰を抜かして立てない。

「刀、返してもらっぞ」

てゐから刀を取り返し腰に差す。

「今、コイツ何をした」

てゐは訳が解らずに立ちあがるうとするが脚に力が出ない。

「大丈夫か？」

晴輝はてゐに手を差し出すとてゐは警戒しながらもその手を握る。

「名前は？」

「因幡……………てゐ」

妹紅は今の晴輝の殺気に何か引つかかっていた。

そのまま竹林を歩き続けていると日は沈み辺りが暗くなる。

てゐには晴輝達と共に永遠亭の道案内に付き合っつて貰っている。

「ここが永遠亭か」

まるで時代劇に出てきそうな古風溢れる家だ。

家の形は歴史の教科書に出てきた写真に似ている。

「とりあえずは……………」

家を出る際に魔理沙から頼まれた薬品リストを取りだす。

「てゐ、この薬って頼めば貰えるかな？」

「その前に気をつけた方が良いぞ」

妹紅は晴輝に耳打ちする。

「ここにいるのは普通の人間じゃないからな」

16 - 龍の威圧（後書き）

うp主からの大事なお知らせ

「あ、やべえ話のストックが尽きたなう」

と言う事で次回は月曜日延期となります。

ごめんなさい。

17 - 犬猿の仲

八意永琳、それが幻想郷で有名な医者らしい。
とても優しいが薬の為には弟子さえも実験体にしてしまつと聞いた。

「どんな人だろう」

期待を胸に永遠亭に脚を踏み入れた。

ザクツと言う音が足元から聞こえてくる。

「ん？」

足元には竹が刺さっていた。

竹を抜くと先端が尖っている、竹槍であった。

体中から汗が溢れる。

竹が地面に刺さつて間もない間に次の竹槍が飛んでくる。

「ギヤアアアアアア！」

竹槍をギリギリで避けるが何本か掠っていた。

「いやあああああ！」

晴輝の断末魔と共に他の誰かの断末魔も聞こえてくる。

声の方は竹槍が飛んでくる方向から聞こえる。

「師しょー、勘弁してください！」

彼女が師匠と言う女性。

それが八意永琳である。

「大丈夫、うどんげ、別に死にはしないわよ、ちよつと人間辞めて貰うだけだから」

その弟子は今竹槍の雨を受けているのは鈴仙・優曇華・因幡。

「それが嫌なんです！」

永琳は弓矢を構え狙いを定める。

「てゐ」

矢はうどんげ目掛けて放たれる。

「おわつ、危ねえ」

目の前をブレザー姿の謎のウサ耳少女が過る。

「何だ……………今の？」

視線の先で何かが光った様に見えた。

「……………？」

腹部に何か違和感を感じる。

腹部を見るとYシャツが赤く染まっている。

視界には腹部に矢の様な物が刺さっていた。

「あ……………れ？」

視界がぐらりと揺らぎ体から力が無くなっていく。

次第には仰向けに倒れて四肢の感覚さえもが薄くなっていく。

(何だろう、何で俺は倒れてんだ?)

意味が解らずにそのまま目蓋が自然と閉じる。

「あ……………れ？」

見知らぬ顔が二つとてゐ、そしてルーミアがいる。

「ここは？」

状況が理解できずにいる。

何故、こんな事になっているのか。

そしてこの2人は誰か？

「本当にすみません！」

頭を下げたのはブレザーのウサ耳だ。

「わたしは鈴仙・優曇華・因幡でこの方が私の師である」

「八意永琳と言っわ、よろしく」

赤と青の服の女性は頭を下げて挨拶する。

「鈴仙さんに永琳さんですか、自分は神田晴輝って言います」

その後何故こうなったかと言うとうどんげに放った矢の一本が俺の腹部に命中してそれで倒れた俺を二日間も看病してくれたのだ。

「神田、大丈夫か？」

ルーミアは少し眼の下に隈を作っていた。

「俺は大丈夫だから少し寝な」

そう言くとルーミアは眠りに着いた。

「そう言えば妹紅は……………」

外では2人の女性が戦っていた。

「もこおおおおおおおおお！」

「かぐやあああああああああ！」

妹紅と黒髪の女性だ。

黒髪の方は着物に身を包んでいる。

名前は蓬莱山輝夜と言う。

「ああ見えて仲良いのよ、あの2人」

戦っている2人を見て永琳がそう呟く。

「あそこまで全力でぶつかるとはお互いを理解してないと出来な
いわよ」

うどんげも腕を組み観戦していた。

2人の弾幕は夜の永遠亭を明るくしていた。

17 - 犬猿の仲（後書き）

ナ「私、思ったんですが」

主（若本さんボイス）「どうしたんだあ、フグタ君」

ナ「全部のキャラ出してたら切りがないですよ」

主「大丈夫だお空ちゃんとかお隣ちゃんもちゃんんと出すからして、安心しろベズイータよ」

ナ「私は会社員でもないしサイヤ人の王子でもないです」

「感想よろしくお願いします」「」

18 - 巫女の企み

幻想郷を探索してもう五日が経った。

今は世話になった博麗神社の掃除をしている。

「朝から御苦労さまね」

霊夢が外へ出てきた。

「お世話になったお礼を兼ねてね」

「良い心掛けね」

霊夢に箒を渡して自分は台所へ行った。

今回の件のお礼に料理を振る舞うのだ。

とは言っても別に料理は得意と言うほどでもない。

以前にも言っただが和菓子には自信はあるがそれ以外には殆ど自信なんてない。

「まあ、とりあえず失敗しない物でも……………」

30分が経ち料理が出来上がった。

「「「頂きます」「」」

霊夢、ルーミア、萃香が手を合わせる。

「普通ね……………」

「上手いぞ」

「そーなのかー」

霊夢からは辛口のコメントを頂き、萃香からは褒められルーミアに至っては褒めてるのが貶しているかわからない。

焼き魚と味噌汁、白米と言う日本人の基本的な朝食はそう言う評価しか受けられなかった。

「ねえ、アナタ、この神社で働かない？」

「えっ？」

霊夢のいきなりの言葉に驚いた。

昨日、夜遅くに帰ってきた晴輝とルーミアに灸を据えた鬼は今日

になって神社の勧誘をしてきた。

「でも魔理沙に悪いし……………」

けがの治療や助手として拾ってくれた件もある、それに魔理沙に對して失礼だ。こっちが面白そうだからと言ってこっちに移ったら彼女は傷つくだろう。

「良いのよ、アナタは魔理沙に扱き使われるのと神社で働くのとどっちが良いの」

「悪いけど魔理沙の所の方が良い」

「そう……………」

霊夢そう言ってお茶をズズと啜る。

少し悲しげな表情を見せたのは気のせいだと晴輝は思った。

「晴輝、久しぶりだな」

約束の時間に魔理沙が迎えにきた。

会うのは五日ぶりだが色々大変な目に遭ったのでとても懐かしく感じてしまう。

「あ、そうだ。これ」

そう言って晴輝は魔理沙にトランシーバーの様な物を投げ渡す。

「にとりが作ってくれた無線機だよ、それがあれば連絡が出来るから」

にとり製のトランシーバーを受け取った魔理沙は少し不機嫌そうだった。

「にとりの所にも行ったのか？」

「ああ、行ったけど……………どうした？」

「……………別に」

鈍感家出男には複雑な乙女心は解らないのであった。

「なるほどね……………」

霊夢は2人の様子を腰に手を当てて見ていた。

「魔理沙、ちょっと話があるんだけど」

「何だぜ？」

そう言って2人は神社の方に行った。

「魔理沙、この請求書は如何するの？」

「うっ、何の事だぜ」

魔理沙は眼を逸らす。

「謎の宴会の代金が3つ、謎の修理代が2つ、私には身に覚えが無いのだけど」

請求書突き付けられて何も言えなくなってしまう。

「アンタの助手を私にくれるのなら考えても良いわよ」

「なっ！」

「良く働くし気が利くし、魔理沙には勿体無いわ」

「なら手っ取り早くこれで決めようぜ」

そう言ってポケットから八卦炉を取り出す。

「何してんだろう、あの2人」

これまで異変という大事件を解決してきたのがあの2人とは思わなかった。

まだ自分より年下だし手足も細い。

魔法が使えると言っても威力がどれだけなのか解らない。

「魔法……………」

両手の手のひらには包帯が巻かれている。

包帯は自分がしたものだ。

「さっさとケリを着けないとな」

両手を強く握り空を見上げる。

「何だあれ……………」

ピンクの球体や黄色の光柱が見えた。

次の瞬間。

神社の裏から爆発音が響いてくる。

「何だ！？」

光と轟音の元へ駆けだした。

18 - 巫女の企み（後書き）

ナ「皆さんお待ちかね久々の」

主「うp主と」

ナ「ナレーターが送る」

「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」

主「皆さん、すいません、色々取り乱してしまいました」

ナ「そうですね、あと少してM134ガトリング機関銃を放つところでしたよ」

主「確実に死んじゃうよ！」

ナ「今回は犬走椀、射命丸文、藤原妹紅、慧音とパチュリーとアリスです」

主「椀 恥ずかしがり屋

文 攻めに弱いタイプ

もこたん 以外に純情

慧音 もこたん一筋

パチュリー 魔理沙しか見えてない

アリス 魔理沙あああああ！

となっております」

ナ「と言うか何故引き籠りと人形使いをあとに回したんですか？」

主「まあ主人公の敵として扱われるからね」

ナ「ふーんそうですね」

主「まあ逆に咲夜さんやパチュリーがハーレムに入る話を考えてるんだけどね」

ナ「長続きしないと思いますよ」

「「感想待ってます！」」

19 - 弾幕ごっこ【霊夢対魔理沙】

何かが空中を舞って光球を放ったり避けたり避けたり攻防戦が行われていた。

空を飛んでいるのは魔理沙と霊夢だ。

「魔理沙、弾幕はパワーじゃないの？」

本来の魔理沙は高火力と派手な技で決めているが今回は違う。無数の細いレーザーが霊夢に向かって襲いかかっている。

（掛かったな霊夢、これはお前を誘導する攻撃。実際は動けなくなつた所をマスターパークでトドメを刺す作戦だぜ）

「とか思っているでしょう」

（なっ！）

霊夢は細いレーザーをギリギリでかわして魔理沙に接近する。

「なら、恋符マスターパーク！」

八卦炉の前に構えて極太のレーザーを放つ。

だが霊夢は正面からのレーザーを避けようとせずにお札を投げてくる。

お札はマスターパークを避けて魔理沙を左右から攻撃する。

「くっっ！」

当たると覚悟した魔理沙だったがお札は魔理沙を掠めた程度だった。

「霊夢、残念だったが当たってないぜ」

だが霊夢は目の前には居なかった。

周囲を見渡すが人影などない。

「何処だ！」

「ここよ」

上を見上げると霊夢がお札を手にとって構えていた。

「霊符っ！」

「夢想封印！」

お札は魔理沙目掛けて飛んで行く。

(やられる！)

そう思い魔理沙は眼を閉じて防御の構えを取る。

だが攻撃は当たらずにお札がひらひらと落ちていく。

お札はまるで鋭い刃物で斬られた様な切り口をしている。

「魔理沙、アンタの助手も中々やるじゃない」

魔理沙は辺りを見るが晴輝の姿など無かった。

「下よ、下」

そう言われて魔理沙は下を見ると晴輝が刀を鞘に納めているのが見える。

「ありえねえ……………」

地上からは高さは何mもある、飛べない晴輝ではまず攻撃をする事すら儘ならない。

そんな晴輝が攻撃できるとしたらたつた一つだ。

斬撃波である。

だがそんな攻撃は普通の人間では出来ない。

それに不確定な動きの小さな札に当てるなど人間の業ではないのだ。

「アイツは何者なんだぜ」

魔理沙がそう言うのも無理は無い。

晴輝は人間と言う分類から外れているのだから。

「なんじゃ、あ奴は妾と主の違いにも気付かんのか」

蒼い髪の女性は刀を鞘に戻す。

「全く、あの程度の攻撃も避け切れんとはお主の主はダメダメじゃのう」

学ラン姿の彼女は蒼い髪に蒼い眼をしていた。

胸がともあるその女性は眼を瞑る。

そうすると体が光り髪の色と眼の色が黒になった。

胸も萎み体も少し大きくなった。

はあはあと息を荒らげているのは晴輝だった。

彼女は晴輝へと姿を変えたのだ。

「マジでヤバいな」

そう言っつてその場で仰向けに倒れ空を見上げた。

手からは多数の切り傷の様な物があり血は包帯に滲んでいた。

19 - 弾幕ごっこ【靈夢対魔理沙】（後書き）

すいません小説のデータが飛んでしまったので
次回は未定となってしまうました。

本当にすいませんでした。

一週間以内には書き直しますので……………

マジですいませんでした。

20 - 魔女の集会

博霊神社での戦いから一日たったある晩。

「……………」

魔理沙はパチュリーから借りた（返す予定はない）魔道書を読み漁っていた。

中身は意味不明の言葉が並べられていて普通の人間では解らなかった。

「人間が能力を使う方法」

それが調べている項目だ。

魔理沙には晴輝がなぜあの時斬劇波を打ち出せたのか。その事について調べていた。

「謎だぜ」

能力も霊力も持たない人間が何らかの方法で力を得るにはたった一つしか見当たらない。

能力の授与である。

「だけど全然解らないぜ」

晴輝はまだ幻想郷に来て間もないのにそんな都合よく能力など得られないはず。

「だとすると……………」

魔理沙にはたった一つだけ怪しく思う物があった。

晴輝の父の形見の妖刀だ。

あれは何らかの能力があったとすれば話は早い。

「だとすると誰に協力して貰うか……………」

「私達が手伝うわ」

魔理沙が振り返るとそこにはアリスとパチュリーがいた。

「如何したんだ2人とも？」

「話は大抵読みとったわ、私もアリスも協力させて欲しいのよ」
そう言っパチュリーとアリスは手を差し出す。

「私達に任せて」

2人は心の奥底の怒りと嫉妬の魔獣を抑えつけて魔理沙に言ったのだった。

20 - 魔女の集会 (後書き)

主「うp主と」

ナ「ナレーターが送る」

「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」

主「皆さん、すみません、データがポンしてしまってますいませんでした」

ナ「うp主さんの頭のネジもポンしてるから大丈夫ですよ」

主「さりげに酷いな」

ナ「今回は永遠亭のメンバーです」

主「えーりん かぐや&うどんげLOVE

うどんげ 師匠に慕ってる

てる 悪戯ウサギ

かぐや ゲーマー 引き籠り

となってます」

ナ「引き籠りってうp主の事なんじゃ……………」

主「ちがうよ！」

「「感想よろしくお願いします」」

21 - 紅魔館潜入編

「それって不法侵入なんじゃ……………」

「大丈夫、毎回これだぜ」

助手としての初仕事の日が来た。助手になって10日目の記念日に紅魔館に本を借りに行くらしい。

まずは晴輝が美鈴を突破して、紅魔館に侵入、そして図書館で本を借りると言う作戦である。

「普通に借りに行けば早い様な気がする」

「何だか最近では気前良く貸してくれないんだぜ」

借りパクしてたらさりや貸してくれないと思う。

「とりあえず決行は今日の夕方で」

そう無理に押し切られて晴輝は何も言えなかった。

日が沈み始め、改良したバイクをメンテする。

馬力は1・7倍、最高時速は135?を叩きだした。

にとりとの協同での改良は上手く行ったのだ。

「紅魔館に着いたけど如何すればいいの？」

「あの門番と戦ってくればいい」

簡単に言うなよ、オイ。

「武器は使ってもいい良いぞ、体力だけは残しといた方が良いからな」
刀を腰に差して門に向って歩き出す。

「楽しそうじゃのう、奴との弾幕ごっこは……………」

晴輝は小声で呟き、眼の色を蒼くさせた。

「すう……………すう……………」

門番という仕事は門を見張り侵入者の撃退が仕事である。

だがこの門番は門番としては機能していないみたいだ。

「良い顔で寝ておるのう」

(疲れてるんじゃない?)

「主、ここまで妾と繋がるとはな」

(まあ、こっちも侵略されっぱなしは気に入らないんでね)

「主も奴と同じじやのう、流石は親子と言っべきか」

(とりあえず起こすか)

「ああ、そうじゃな」

そう言っつて晴輝の眼は元の黒へと戻る。

「美鈴さん、起きてください」

口調も元に戻った晴輝は美鈴を左右に揺らす。

「むにやむにや……………中国じゃ……………ない」

安らかに眠っつて貰おうと思いい美鈴をスルーしようと考えた。

「だめじゃ、妾が楽しめてない」

そう言っつて晴輝は口調を変え眼を蒼く染める。

「こっとなつたら必殺技じゃ」

蒼眼の晴輝は美鈴の鼻を指で摘み自分の顔を美鈴の顔へと近づける。

(待て待て！今何しようとした！)

「何っつて息を止めて起こす作戦じゃが……………」

(何故に口で口を塞ぐ必要性がある！)

「いやあ、寝込みを襲うのは男の本能と言っし……………」

(違っわ！そんな全国の男は欲求不満みたいな言い方すんな！)

そんな一人コントを繰り返している晴輝を冷たああい眼で見ている女性が1名いた。

魔理沙である。

笑みを浮かべて見守っていたが眼には光が無く、木々で休んでいた妖精やら鴉が飛んで行く。

「何やっつてるんだぜ」

次第に赤と紫のオーラを放出しだす。

赤は怒りを紫は嫉妬を意味していると思う。

「ふえ……………」

美鈴は騒ぎ（主に魔理沙の殺気）に気付き目を覚ます。

「えっと……………顔が近いんですが」

「ちっ、あと少して面白い事になるはずじゃったのに」

（面白半分で人で遊ぶな！）

美鈴から離れて眼の色を黒に戻す。

「す、すみません！これには色々事情が……………」

「どんな事情ですか？」

顔をほんのり赤く染めた美鈴は背伸びをする。

「あの、美鈴さんの寝顔が可愛かったからつい近くに言って覗きたいなって……………」

とつさに思った事を口から出しその場を誤魔化そうとする。

内心では失敗したあと落ち込む晴輝だったが……………

「か、可愛い!？」

（おお、口説いたのお）

成功した。

「私は可愛くないですよ、居眠りはするし咲夜さんには叱られてばっかだし……………」

「いやいや、十分に美人ですって!」

そんな会話を遠くから聞いていた魔理沙の瞳からは光が消えて赤と紫のオーラが途轍もなく湧き出ていた。

握っていた八卦炉からはバキツと言う音がした。

「何やら悪寒が」

（本妻が怒っておるぞ）

美鈴と晴輝はお互いに軽く深呼吸をして心を落ち着かせる。

「実は今日は晴輝としてではなく魔理沙の助手として来ました」

美鈴は真っ赤にしていた顔を元の健康的な肌色に戻し真剣な顔になる。

「そうですか」

美鈴の方も理解していた。

今回は晴輝は客人でも訪問者でもない。

美鈴の敵である。

「来なさい」

刀を抜き左目を閉じる。

「行きます！」

美鈴めがけて走りだした。

21 - 紅魔館潜入編（後書き）

流石は紅魔館の門番、仕事はするんですね。
感想よろしくお願いします。

22 - 紅魔館突撃編

戦いが始まって10分位だろうか。

戦況は晴輝の劣勢。

相手は格闘技に長けているので中々攻撃が出来ない。

『龍炎』は弾き飛ばされて今は素手で戦っている。

美鈴相手に手刀では流石に無理がある。

相手は中国拳法の使い手、遊ばれているも同然である。

これではあまりにも情けない。

「手加減なんてしなくて良いですよ」

「それでは……………」

軽い挑発は美鈴の何かに火を着けた。

晴輝の腹部に拳がめり込む。

「ぐふっ！」

そのまま後方に飛ばされて木に背中をぶつける。

さっきまでの攻撃はギリギリ見える程度だったが今度の一撃は違う。

見えなかったのだ。

肉眼では捉えきれない素早さの一撃は腹部と共にアバラの数本を折った。

「げほ…………げほっ」

血反吐を吐き地面に伏せてしまいそうになる。

今の一撃、美鈴は少し手を抜いた。

本気の一撃だったら体の骨は全て碎けるだろう。

「帰ってくれないでしょうか？」

美鈴は少し悲しげな表情を見せて晴輝にそう言う。

「まだ…………まだ」

立っていられるのは殆ど気力のおかげである。

「美鈴さんの中国拳法ってこの程度ですか……………」

美鈴の眉がピクツと動く。

「がっかりです、この程度だとは」

美鈴はポケットから何かしらのカードを取り出した。

スペルカード。この幻想郷で弾幕ごっこ等に使われる切り札。

「なら、見せて挙げます」

スペルカードが光り、そして消滅した。

「気符、地龍天龍脚！」

加速を着けた美鈴がそのまま片足を突きだして飛んできた。

勢い良く飛んできた美鈴に対して晴輝は右手を前に出す。

（これなら当たらない！）

美鈴は本気で晴輝に蹴りなど入れない。

入れてしまつたら彼は昇天してしまう。

ギリギリ当たらない様に計算されている。

「フフフツ」

晴輝の眼つきが変わった。

眼の色も変わり髪の色も変わる。

だがその色は蒼じゃない、まるで燃え盛る様な炎の色。

深紅である。

赤髪の晴輝はポケットから何かを取り出す。

「さあ。祭りの始まりよ」

カードらしき物体の角から火が出る。

火はカードを覆い灰と化した。

「火竜『クリムゾン・ブラッド』」

地面が怪しく赤く光りだし、魔方阵が出現する。

魔方阵が消えると地面から紅く鋭く尖った巨大な棘が現れる。

「なっ！」

そのまま美鈴は出てきた棘に頭をぶつけて倒れる。

赤髪の晴輝は眼を閉じた。

髪と眼の色が元の黒に戻りそのまま木に体重を任せる。

「晴輝！」

魔理沙が木陰から出てきた。

「マジで強いわ、無理だわ、ボス級だわ」

そこまで感想を述べられるのなら大丈夫だろうと思いき魔理沙は永遠亭の薬を飲ませる。

「如何だ？」

「少しだけ……………楽になった」

(つたく、パチュリーの作戦も今回は頂けないぜ)

この死闘はパチュリーが仕込んだ物なのだ。

昨夜の話である。

『まずは彼を瀕死まで追い詰めないとね』

『ちよつと待てパチュリー！それは流石にやり過ぎだ』

『賛成。魔理沙は知りたくないの？彼の正体を』

『アリス、これはヤバいつて』

『大丈夫よ、殺しはしないわ』

今回の作戦は晴輝の本性を暴く為の物である。

「如何した魔理沙、思いつめた顔なんかして」

「い、いや何でもないぜ」

魔理沙の肩を借りて紅魔館の門を開き中に入る。

紅い右目と蒼い左目をした晴輝が笑みを見せたのは魔理沙は知らない。

22 - 紅魔館突撃編 (後書き)

主人公の秘密もあと少しで明かされます。

感想よろしく願います。

次回は二日後です。

23 - 紅魔館のパツ……………メイド長

門番を突破した晴輝達は紅魔館内部に潜入したんだが。

「つたく、何時になつたら俺は休めるんだろうか」

紅魔館のメイドさんとはったり遭遇してしまい魔理沙とは離れ離れになった。

現在は紅魔館にあった大きな部屋に身を潜めている。

何やら奥の方には玉座らしきものがある。

「この部屋は何だろうか」

出入り口の扉がギィイと音を立てて開く。

「っ！」

息を殺してドアの方を向く。

だが少し開いたドアには人影などなかった。

「アナタね、魔理沙の助手と言うのは」

「なっ！」

後ろからの声に驚き振りかえつた晴輝はそのまま突き飛ばされた。

「はあ、中国は何をやっていたのかしら」

銀髪の女性は腰に手を当ててため息をつく。

「中国？」

「紅魔館の門番よ」

晴輝はとっさに美鈴の事だろうと気が付く。

「中々手ごわかったですよ、美鈴さんは」

（ここは妾に代われ）

心の奥から声が聞こえた。

「いや、大丈夫だもうお前等2人とは変わらない」

（無理しないで、ここは蒼あおに代わって）

「うるせえ、紅あかは黙もくってる」

「何を一人で言い合っているの？」

眼と髪の色が蒼あおに変わる。

「いやあああああああ！」

辛うじて部屋から飛び立て来たのは普段の晴輝だ。

「蒼、テメエそれが言いたかっただけじゃないだろうな！」

(バレたか)

後ろから無数のナイフと怒りと狂気に身を任せた咲夜が襲いかかってくる。

(これを使えば良い)

晴輝の眼の前に光る細長い棒が現れた。

棒を握ると先端からは紅い三角形の刃が現れる。

「槍？」

槍を握ると手が勝手に後ろを向き棒を回転させる。

回転した槍はナイフの大半を弾き飛ばす。

「おお、すげえ」

(ついでにこれもおまけじゃ)

ポケットから白い球が落ちる。

(煙幕じゃっ！)

目くらましの道具だが正気と冷静さが欠けている相手には抜群の武器だ。

白い煙が辺りを包み込む。

「ドコダああああああアアアアアアア！」

白い煙の中で紅い眼が動くのが見える。

「怒りと狂気とパッドから何かしらのパワーを借りてここまで暴走しておるのじゃろうな」

「我はパッドは関係ないと思う」

「俺もそう思う」

晴輝は窓から飛び出て今は2人に手を貸してもらっている。

彼が蒼と紅と呼んでいた謎の声の持ち主。

蒼髪と蒼眼の晴輝と赤髪と赤眼の晴輝だ。

「まさかお前等2人とも女だったとはな」

「そんな事よりお主も覚悟を決めんといかんぞ」

「私たちが目覚めたと言う事は近々奴も出るのだから」

23 - 紅魔館のパツ……………メイド長（後書き）

題名の途中で何処からかナイフが……………
感想よろしくお願ひします。

24 - 紅魔館の図書館

「ここが図書館……………」

魔理沙とは図書館内で合流する事になっている為一足早く図書館に入っていた。

(妾に燃えるゴミの山にしか見えんのだが)

(我にもそう思う)

紅と蒼は好戦的であるため勉強には全く興味が無い。

今では2人ともこうして話しかけてくる。

「まあ、それまで隠れますか」

そう言っつて本棚に登り天井を見る。

「なあ、お前等で倒せるのかアイツは？」

(むりだな)

「そんなきつぱり言うなって」

まあ無理もない。

奴はそれほど強いのだ。

「なあマジでヤバかったらその時は……………」

「お兄ちゃん、何やってるの？」

いきなり誰かに話しかけられたので辺りを見渡す。

「ここだよここ」

後ろにいた。

全く何も感じ取れなかった。

金髪に紅い眼の幼女だ、背中には翼の様な物があった。

金髪が多いなあと晴輝は思った。

「えっと、自分の将来に悩んでた」

「ふーん」

金髪の幼女は晴輝の隣に座って刀を見る。

「ねえねえお兄ちゃんは誰？」

「俺は魔理沙の助手してるんだ。名前は晴輝」

「私はフランドール・スカーレット」

スカーレットと言う名前には聞き覚えがあった。

この紅魔館の主であるレミリア・スカーレット。

と言う事は彼女は主の妹と言うところだろう。

「ねえ、フランちゃんは俺に何か用？」

「えっとね、実は……………」

フランは変な形状の武器を持った。

「ネエ、遊ンデ」

全身に鳥肌が立つ。

無邪気に笑っていたフランから殺気が溢れだす。

（逃げるぞ！）

本棚から隣の本棚へと飛ぶ。

「神槍」

下には槍投げの構えをした少女が見えた。

「『スピア・ザ・グングニル』！」

眼と髪を真っ赤に染めた晴輝が槍を出現させて構える。

「龍槍」

（頼むぞ、紅）

「……………『怒りを表す槍』」

今考え付いたのか頭を悩ませたせいか技名が遅れた。

紅い炎を纏った槍を投げると次は眼を蒼く染めて刀を握る。

「龍刀『蒼炎』！」

刀を抜き斬撃波を飛ばす。

飛んできた槍は二つの攻撃により軌道を逸らしそのまま天井を貫いた。

そのまま本棚に背中から着地する。

「う、動かない方がいいですよ」

立ちあがり元の姿へと戻った晴輝に分厚い本を持った女性が背後から近づく。

「がっ！」

首に強い衝撃が走り気を失ってしまう。

24 - 紅魔館の図書館（後書き）

技名が中二病センス?.....わざとですよ。

感想よろしくお願いします。

それと活動報告に大切な事が書いてますので読んでください。

25 - 紅魔館尋問編

「晴輝、かかってこい！」

（アレ、親父？）

目の前に黒髪に剣道着を着た親父がいた。

竹刀の他に木製の棒を持っていた。

「親父、行くぜえ！」

向かいには歳は15歳になってまだ日の浅い晴輝だ。

親父と同じ格好をした晴輝は竹刀を考えもなく振る。

「はっ！」

晴輝の竹刀は宙に浮き、親父の竹刀が視界に入る。

「見切った！」

棒を手に取り竹刀の攻撃を防ぐ。

（バカ、それは！）

「甘いな」

だが親父は空から落ちてきた竹刀を手に取りそのまま晴輝の脇腹に叩き付けた。

「また負けたああ！」

そのまま床に仰向けに倒れて体で大の字を表す。

「これで511勝目だな」

3年ほど前からこの戦いは続けられてきた。

「なあ、親父何でこんな事をするんだ？」

「時がきたら……俺が1000勝する前にお前が俺に勝てたら言うてやるよ」

「ぜってえ勝って聞き出してやんよ」

だが998戦998敗で晴輝と親父の戦いは幕を閉じた。

親父は決着を着ける前に旅だったのだ。

布団に入り顔に白い布を被せた人がいる。

「まだ……まだ決着が着いてねえぞ」

頬から透明な雫が落ちた。

雫は勢いを強くしていく。

眼から何かが大量にこぼれ落ちる。

「泣いてはいけません、アナタは今日から九代目なのです。それが人前で泣くなど」

「泣いてんじゃねえ……………怒ってんだ」

「何故？」

「約束も守れない親父に怒ってんだよ」

立ち上がり眼を擦る。

「俺は何をすればいい」

「はっ！」

そしてこの二日後に『龍炎』が売られる事が解った。

(そして現在に至る……………か)

晴輝は眼を閉じると闇の中に吸い込まれた様な感覚に襲われた。

「……………あ？」

次に眼を開けると見知らぬ女性達に囲まれていた。

椅子と共に縛られているため身動きが取れない。

「起きたわね」

薄い紫の髪をした女性は本を閉じて話しかける。

「アナタは何者かしら？」

「魔理沙の助手と言ったら理解してくれるか？」

「それは知ってる、名前よ。な・ま・え」

「人に名前を聞く時は自分からと言う事を知らないのか？」

頬を誰かに叩かれる。

勢いが強すぎる為に椅子ごと地面に伏せた。

「アナタはまだ自分の立場を解っていないのかしら」

槍を投げてきた幼女だ。

コウモリの翼を持ったし幼女が手の平で叩いたのだ。

「レミイ、彼にも一理あるわ。私はパチュリー・ノーレッジ」

「私はレミリア・スカーレット」

椅子を立てると赤髪の女性と金髪の少女が近付いてくる。

「お怪我は無いですか？」

赤髪の女性は叩かれた頬にハンカチを当てる。

「お兄ちゃん凄いな、お姉さまのグングニル避けたんだよ」

金髪の少女は晴輝の周りをグルグルと回る。

「こっちは小悪魔、私の手伝いをしてくれるわ。そっちはフラン、レミイの妹よ」

パチュリーはそう言うのと立ち上がる。

「本題に戻るわ、アナタの名前は？」

「神田晴輝、人間だ」

「アナタの事は大抵は『文々。新聞』で知ってるわ」

なら聞くなよと内心思いながらもパチュリーの話聞く。

「アナタ、人間？」

「今は人間、でも徐々に変わってきた」

「それではアナタは人間を止めて何になるのかしら？」

レミリアがパチュリーの座っていた椅子に腰を下ろした。

「そうだな」

天井を見上げて再度彼女達の方に視線を向ける。

「少し前の話をしようではないか」

眼を青く光らせて晴輝は言った。

25 - 紅魔館尋問編 (後書き)

感想よろしくお願いします。

26・神田家裏二代目当主達

「妾の名前は神田蒼かんだそう」

「私は神田紅かんだこう」

眼を黒から蒼、紅へと色を変えて話す。

「妾達は五百年ほどに一度は死んでいる身なのじゃ」

「ですが竜神と言うお方に助けられて今は竜神として生きているのです」

眼の色を紅、蒼と交互に入れ替えながら話しを続ける。

「だった？」

不意にレミリアが口を開く。

「当主とは基本は男子、つまり女であった妾達は権利が無かったのじゃ」

「ですから私達は3人は山奥で暮らしていました」

「3人と言う事は他に誰が居るのかしら」

「またも2人の話にレミリアが首を突っ込む。」

「三女の蒼、次女の紅、そして長女の黒こく」
晴輝に戻り話は再開した。

「この長女が厄介でな、人間にとっても恨みを持つてる」

「それは何故かしら？」

次はパチュリーが聞いてきた。

「目の前で父親を殺されたそうだ」

辺りに静けさが広がる。

「そして、次の3週間後の夜にそいつが復活する」
全員に衝撃が走る。

「如何して黙ってたんだぜ」

本棚の後ろから魔理沙が飛び出してくる。

「やっぱり今回の件は魔理沙が犯人か」

「な、何の事だぜ？」

「おかしいと思ったよ、魔理沙は俺が強いのかを知らないのにいきなり戦闘に参加させたり相手が超本気で殺そうと襲いかかってきたり」

咲夜の場合は怒りに身を任せていたような気がするが忘れよう。

「そんな事よりその黒が目覚めると如何なるの？」

「……………」

晴輝は黙り込んだ。

「黙秘、そう受け取っていいのね」

レミリアはグングニルと呼ぶ槍を晴輝に向ける。

「おい、レミリア何してるんだぜ！」

「毒を撒く蟲が目の前に居るのよ、私は害虫に餌をやるほどお人好しじゃないのよ」

「待ってくれませんか」

眼を紅くした晴輝が抗議した。

今は紅である。

「絶対に私達が止めるので待ってくれませんか？」

「私も協力するぜ」

魔理沙は手を胸に当ててそう言った。

レミリアはグングニルを落とす。

「そうね、咲いた花をそこで潰すのも悪くは無いわね」

残酷だな、オイ。

「私も異論は無いわ」

パチュリィも理解してくれたいらしい。

「とりあえず、縄を解いてくれないか？」

だが晴輝の要望は叶えて貰えなかった。

26・神田家裏二代目当主達（後書き）

「シリアス抜けたぜ！」

「良かったですね、で何で久々に私たちは出たんですか？うp主さん」

「実は感想欄にハーレムは何人になるんですかと言う質問に答えようと思ったんだ」

「で、実質何人ですか？」

「ぶつちやけると17人」

「ちよつとぶつちやけ過ぎですね」

「詳しくはまた今度つて言う事で」

「感想よろしくお願いします」

27 - 魔法使いの助手として

すでに月が真上にあつた。

晴輝達は大量の本を持ちながらテントへと戻ってきた。

「晴輝ー」

ルーミアがテントから出てきた。

「遅くなつたな」

晴輝はルーミアを抱きとめる。

その様子を魔理沙は納得のいかない様な顔をしている。

「本当に仲良いんだな」

「まあ、ここへ来ての初めての友達だしな」

本を魔理沙の家へと運び入れる。

「それじゃあ、俺は」

晴輝はテントへと戻ろうとする。

「いや、でも今日は冷えるぜ」

確かに最近肌寒く感じる事がある。

「またルーミアと一緒に寝てやってくれ、アイツは俺と一緒にテントで寝る必要は無いんだから」

さすがに年頃の男女が同じ屋根の下で寝るのは抵抗がある。

ルーミアも偶にだがテントで寝る事がある。

「それじゃあ、階は別々にして……………」

「魔理沙、別に気遣う必要は無いぞ。毛布1枚あればぐっすりだ」

晴輝は嘘を吐いた。

実際はフカフカのベットで寝たいと言う欲もある。

「むさい男と同じ家で寝るのは嫌だろ、俺は慣れてるから気にすんなって」

「……………」

そう言ってテントに戻る晴輝を魔理沙はただ見つめているだけだった。

(良かったのか?)

テントで毛布に包まり寒さに耐えながら寝ようとする晴輝に蒼が声を掛けた。

「何がだよ」

(無理しよって、今回の件で体も心もボロボロなのにこんなところで寝ていても体力なんぞ回復せんぞ)

(蒼の言うとおりです)

「紅まで」

(それに本当は正妻と寝たかったのじゃろ?色々と楽しみたかったんじゃろ?)

「俺は魔理沙の助手だ、魔理沙だって俺を男としてじゃなくて助手として見てる、それにアイツを傷つけたくなんかない」

(殊勝な心がけじゃのう)

(だからあの時に日を間違えて言ったんですか?)

「……………意味が解らねえ」

(黒が目覚めるのは3週間後ではなく20日後です)

「同じだろ、別に」

(何がしたいのか妾には理解できん)

「……………この綺麗な幻想郷や人々を苦しめたくないんだ」

晴輝は握り拳を作り腕を上へあげる。

「刺し違えても俺はここを守りたい」

覚悟は出来ている。

だがそれで良いのかと内心では不安であった。

「魔女の弟子って言う滅多にない経験だけで俺は十分だ」

眼を閉じると一気に睡魔に襲われた。

27 - 魔法使いの助手として（後書き）

前回の続き

「ハーレムは巨乳枠から

門番

勇儀

お空

うごんげ

早苗

にしようと思っている」

「アレ、でも早苗さんって美乳枠じゃありませんでしたっけ？」

「そこは作者の妄想と言う事で」

「感想よろしくお願いします」「」

28 - 魔女との日常

(あ……………れ?)

晴輝は不思議に思った。

普段なら寒くて布団に包まりたくなるのに何故か温かい。

「……………」

眼を開けると金髪の少女が腰にガッチリとしがみ付いていた。

「またかルーミア」

「つく、何が好きで俺なんかと……………」

晴輝は金髪の少女の頭を優しく撫でる。

「ありがとな、おかげで今日は気持ちよく目覚められた」

髪を撫でていると何故か頭から煙が出ている事に気が付く。

「アレ……………どうしたルー……………ミア?」

晴輝の隣を見るともう一人金髪の少女が寝ている。

赤いリボンがポイントの可愛らしい少女。

ルーミアである。

「って事はこっちは……………」

良く見ればルーミアより髪が長く体格も少し大きい。

キノコ柄のパジャマを着ているので思い当たる節は一つしかない。

「魔理沙……………さん?」

さん付けで呼んでしまった。

「あは、あはははは」

魔理沙は赤くした顔を上げると眼にうるうるさせ涙を溜めて、

「とっつ!」

魔理沙は一目散に逃げていった。

「えっと、その何で口を聞いてくれねえの?」

「……………」

朝食を取りながら魔理沙に話しかける。

今朝のアレで魔理沙は口を固く閉ざしたままだ。

「俺、なんか悪いことしたかな？」

「……………」

え、俺が悪いの？と思いつつも味噌汁を飲む。

「とりあえず、にとりさんの所に行ってくる」

「待て、私も行くぜ」

久々に会話が成立した。

「いや、でも時間かかるぞ、将棋とかバイクのメンテとかするから行くぜ」

そう押し切られてしまった。

バイクに乗りルーミアがその後ろに乗る。

「……………ルーミア、偶には変わってくれないか？」

「ダメ、ここは特等席」

「って言うか魔理沙は飛んで……………何でもないです」

魔理沙に睨まれて口ごもってしまう。

ルーミアを膝に乗せて魔理沙か晴輝の後ろに乗る事になった。

「三人乗りは危険なんだけどな……………」

バイクは妖怪の山へ向かって走りだした。

「にとりさん」

バイクを押しながらにとりの家の前まで来た。

にとりは相変わらず機械を弄っている。

「晴輝、それと魔理沙、ルーミア」

晴輝の顔を見たときのにとりは笑顔だったが他の2人を見た時にその笑顔が薄くなって行った。

「ごめん、今日もバイクとか弄りたいんだけど」

「良いよ、工具はここに有るから」

工具箱を受け取りバイクを弄る。

「魔理沙達は何で来たのかな？暇でしょ帰っても良いよ」

「にとりこそ言う様になつたな、子供が色気づいても晴輝には分らないぜ」

2人の中で火花がぶつかり合っている。

「そーなのか」

ルーミアは影に入つて晴輝を観察していた。

「2人とも派手に戦つてんなあ」

火花をチラつかせていた2人は弾幕ごっこ（めっさ本気）をしている。

「と言うか何で戦つてんだ？」

気づけ主人公。

「あや？晴輝さんではありませんか」

後ろを振り向くと文と椛が立っていた。

「オッス」

「晴輝さん久しぶりです」

「椛、久しぶり」

「ッ！」

ここにも敵がと魔理沙とにとりは振り向く。

「魔砲『ファイナルマスタースパーク』！

恋心『ダブルスパーク』！」

「水符『ウォーターカーペット』！」

2人が息を合わせスペルカードを使う。

「えっ!？」

「あやや、残念ですが」

文は手持ちのカメラのシャッターを切る。

「にとり製のカメラの事を忘れたんですか？」

攻撃はまるで無かつたかのように消えてしまう。

「ちっ、我ながら自分の機械、正常に機能してますね」

「いきなり攻撃を仕掛けるな」

魔理沙とにとりは降りてきた。

「あやや、魔法使いとその助手が揃いましたか。取材させて貰っても良いでしょうか」

「ダメだぜ」

「あの晴輝さん良ければ将棋の相手になってくれませんか？」

「ちよつと待つてくれれば出来るぞ」

「今回も賭け付きでお願いします」

「如何いう賭けか興味がありますね」

「私もだぜ」

「恐縮ながら私も」

魔理沙、にとり、文の3人が問い詰めてきた。

「ふ、普通の事だから心配すんな」

「椀は何お願いするんですか？」

「ちよつと恥ずかしい……………です」

(頭を撫でて貰う何て言えない)

その言葉に何やら顔を赤くした魔理沙が晴輝の肩をガツチリと掴んだ。

「な、何をお願いするんだ！」

俺に聞くな。

「どうせ椀の事ですから頭を撫でてとかでしょう」

「……………！」

椀は顔を真っ赤にした。

「凶星か」

にとりはやれやれと首を振る。

「どっかの白黒は卑猥な妄想をしていたようですが」

「おい、天狗。表出る」

「もう表ですが」

魔理沙と文は互いの武器を持って上昇する。

そしてまた弾幕戦が始まった。

ルーミアはそんな騒ぎの中ぐっすりと眠っていた。

28 - 魔女との日常（後書き）

前々回と前回の続き

「貧乳梓は 文

椀

妖夢

霊夢

魔理沙

もこたん

です」

「あれ、でも文ってあったような……………」

「我輩はD以上を巨乳と認知しているのだよ」

「ファイヤー」

「ぎゃあああ！体が燃えて、お札とか陰陽玉が飛んできて最後にマ
スタースパークがああああ！」

「感想よろしくお願いします」

29 - 九代目の少女

晴輝達は妖怪の山を下っていた。

何故かにとり、文、椀まで着いて来た。

「何で皆着いて来たんだぜ？」

「あやや、私は新聞のネタを探しに来ただけですよ」

「私は文様と同行しているだけです」

「私はバイクがちゃんと使えているかを見ているだけ」

皆、筋は通っているが……………

「バイクで五人は無理だろう」

バイクにはサイドカーを取りつけたがそれでも最大三人だ。

サイドカーにはにとりと椀が晴輝の後ろにルーミアがそして魔理

沙は膝の上に乗っている。

文は翼を広げて隣を飛んでいる。

「これが両手に花束ですね」

「文も乗りたいのか？」

晴輝がそう尋ねると文は二回頷く。

「じゃあ誰が降りるか……………」

「文様、代わります」

そう言うと椀はサイドカーで立ち上がり宙へ浮く。

「そうですか、それでは」

文は後ろのルーミアをサイドカーへと移動させて後ろに乗る。

ルーミアは両頬を膨らまして機嫌を悪くした。

「中々の乗り心地ですね」

「後ろで立つな、バランスが取れない」

文は座ると晴輝の腰に手を回して体を固定する。

「中々の居心地ですね」

しっかりと抱きついてくるので背中に胸が当たる。

「文、当たっているんだが」

他の四人に聞こえない様に小声でそう言つと

「気にしないでください、当てているだけですから
耳元でそう呟かれて晴輝は顔を少し赤くする。」

「晴輝、顔が赤いぞー?」

ルーミアがこつちを見て頬を膨らませている。

まだ機嫌を直していなかった。

「そ、そんな事より皆は捕まってるよ!」

バイクの加速装置を使いバイクを走らせる。

人間の里まで来た。

「なあ、こんな物何に使うんだぜ?」

「あやや、小豆に小麦、砂糖もに様々な調理器具」

「ちよつと、慧音さんと約束したんだよ、今度和菓子を作っ
てほしいって」

「そーなのかー」

その材料集めである。

手軽で誰でも好きな饅頭でも作ろうと思っている。

「その時は皆にも奢るよ」

「それは楽しみですね」

「楽しみに待ってます」

六人で町を歩いていると魔理沙が何処かへと歩いて行く。

「魔理沙?」

後を着いて行くと永遠亭の様な和風の家に辿り着いた。

「阿求いるか?」

勝手に家に入り込む魔理沙を追いかけて家に入ると紫色の短髪の少女がいた。

「魔理沙、どうしたんですか?」

魔理沙が阿求と呼ぶ少女は机の前で巻物の様な物を書いている。

「病気なんだから寝てたい方がよいぜ」

「気にせずに、どうせ短い命ですから。そう言えば後ろの方達は?」

そう言つて少女は俺達の方を向く。

「鴉天狗に白狼天狗、人喰い妖怪に河童と……………彼は？」

晴輝の方を見て彼女が首を傾げる。

「私の助手の晴輝だぜ」

ひわたのあきゆう

「碑田阿求、よろしくお願いします」

「よろしく」

彼女は少し顔が悪い。

「それより寝てた方が良いぜ」

「大丈夫です、それより転生の準備を……………」

ゴホツゴホツと咳きこみ彼女の顔が青くなつて行くのがわかった。

「今日は忙しいので帰つてくれませんか？」

「ああ、また今度、見舞いに来るぜ」

魔理沙は阿求に手を振り晴輝達は阿求の家を後にしたのだ。

「なあ、阿求の言つてた短い命つて何だ？」

「ああ、彼女はもう長く持たないのですよ」

文が言つた言葉に疑問を持った。

「長く持たないって事は……………死ぬつてことか？」

「まあ、そうですが大丈夫です」

「椀、大丈夫つてどういう事だ？」

「碑田家は三十年ほどの寿命しかありませんが転生を行っています。

それで今の彼女は九代目です」

晴輝は少し納得のいかない顔をしていた。

（あの顔は……………）

29 - 九代目の少女（後書き）

ロリ

阿求

萃香

レミリア

フランドール

ルミア

にとり

の総勢十七人がハーレム入りします。
皆さんの要望があれば受け付けます。
感想お願いします。

30 - スキマ妖怪

バイクの六人乗りをしながらも博霊神社へ来た。

魔理沙が霊夢に用があるらしい。

「階段は相変わらず高いな」

文、魔理沙、にとりは自慢の飛行能力で石段に関係なく神社へ辿り着いた。

「ルーミアはダウンか」

最近気づいた事だがルーミアは日の光が苦手らしく日向では元気が無い。

「椀、先に行つてて良いぞ。俺は慣れてるから」

「いえ、でも」

晴輝はルーミアを背負い少量の荷物と共に石段を上り始める。

子ども一人を背負っていてもこの石段を上るのはキツイ。

「せ、せめて荷物だけでも」

「わ、悪い。頼む」

椀は荷物を持って晴輝を後ろから押す。

「先に行つてれば良いぞ」

「大丈夫です、慣れてますから」

多分、俺のまねだろう。

「そーなのかー」

元気のないルーミアは弱弱しいが手でしっかりと晴輝に掴まっていた。

その三人の姿はまるで子連れの夫婦の様に見える。

「納得いかないぜ」

「魔理沙に同意」

「椀を弄る時の為に写真を一枚」

三人は石段の上で晴輝達を見つめていた。

「マスタースパークを撃ちたいぜ」

八卦炉を構えた魔理沙をにとりと文が止めに入る。

「ああ、やっと着いた」

石段の上まで着くと汗でシャツが肌に付く。

「ルーミア、大丈夫か？」

「……………だいじょーぶ」

元気の無い声がある。

「皆、待っててくれたの……………か？」

何故か皆ジト目でこつちを睨む。

「どつたの？」

「気にしないでください」

文はカメラを弄りながらそう言った。

「別に何も無いよ」

「気にしたら負けだぜ」

そう言いつつも博霊神社に入って行った。

「やっぱりアンタが彼を連れて来たんでしょ」

「そうね、そうかもしれないわ」

神社の裏の霊夢の家で誰か二人が言い合っていた。

一人はこの神社の主の博霊霊夢だがもう一人が分からない。

良く見ると変な切れ目から上半身だけが出ている。

「よお、紫」

紫と言う女性は何かの切れ目から出てきた。

「魔理沙、にとり、文と椀、それと誰？」

優しく微笑む彼女は霊夢の口を押さえた。

「俺は神田晴輝、魔理沙の助手してる」

「私は八雲紫^{やくもゆかり}、妖怪よ」

紫と言う名前に何かが引つかかる。

何処かで聞いた様なと首を傾げる。

「晴輝、あんたもしかしたら帰れるかもしれないわよ」

霊夢は紫の手を無理やり外し、言った。

「帰れるって？」

「元の世界よ」

その言葉で皆動かなくなった。

勿論晴輝も例外ではなかった。

30 - スキマ妖怪 (後書き)

感想をお願いします。

31 - 幻想入りの原因

静寂が晴輝達を包み込んだ。

「それどういう事だぜ！」

魔理沙が不意に紫に尋ねた。

「さて何処から話しましょうか」

「いいから教えてくれ、如何いう事なんだ！」

「アレは一月前かしら、貴方があの乗り物で走ってるのを偶々見かけたわ、それで興味があつて後を追いかけたら貴方は追い詰められていた。その時に永琳の薬を使って貴方を眠らせここに連れてきたの」

「俺のバイクはアンタが持って来てくれたのか？」

「ええ」

今の話なら辻褄が合う。

「それでどうしたいの？」

「何がだ？」

「元の世界へ戻りたいの？」

「またも辺りが静かになる。」

誰か喋ってくれと思うとルーミアが元氣のない声でそーなのかと言っただけだった。

「あつちに戻つても逃亡生活だ、それにこつちの世界で守んなきゃいけないものも出来た」

「そう言つて魔理沙やルーミア、文、椛、靈夢を見る。」

「俺はここに残りたい」

「そう」

「そう言つと紫は謎の切れ目を出現させる。」

「困ったことがあつたら何時でも来なさい。私はマヨヒガと言つ所へ行けば会えるわよ」

「そう言つと紫は謎の切れ目の中へ入つて行つた。」

「スキマ妖怪ねえ」

その後、神社で昼食を取った。

スキマ妖怪、スキマと言われる切れ目を出し、切れ目での出入りが可能となる。

「……………」

朝の事を思い出していた。

「なあ、結界てのがこの幻想郷にあるんだろ」

「ええ、そうよ」

「霊夢も使えるのか？」

そうねと面倒な顔をして答える。

「俺にも使えるか？」

31 - 幻想入りの原因（後書き）

主「めっちゃ久々の」

「『東方二次創作』『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」

「

魔「今回はナレーターを交代して私、霧雨魔理沙がお送りするぜ」

主「これが始まって丁度一ヶ月ですか。長かった」

魔「まあ、まだちゃんとお話のレールどころかタグのほのぼのをし
てないけどな」

主「……………」

魔「今回は阿求、小町、四季だけ」

主「阿求 静か 奥手

小町 さぼり好き

四季 案外晴輝に気がある？」

魔「これ以上ヒロインを増やしたらマスパ撃つぜ」

主「我が野望の為なら構わんさ…………… ってマジで撃つなああああ
！」

32 - 最後の代(前書き)

またもシリアス
そして阿求

32 - 最後の代

「おや？貴方は」

「おっす」

碑田家へと訪れた。

「病気とやらは大丈夫なのか？」

阿求は机に向かい何かを書いていた。

「全然大丈夫じゃありませんよ、如何したんですか？」

「ちよつと慧音さんに用があつて会つたら頼まれたんだ」

「少し阿求を見て来て来てくれないかってな」

俺に頼みごとをした本人が来た。

「慧音さん」

阿求は何か申し訳ない様な顔をしていた。

「帰ってくれませんかまだ転生の準備で忙しいですから」

「五日間」

不意に晴輝の発した単語に阿求は振り向いた。

「それがアンタに残されている時間だろ」

「……………」

「如何いう事だ？」

慧音は晴輝の言葉の意味を理解しなかった。

少し考えれば分かるはずだ。彼女の今の病状を知っている彼女なら。

「転生を行うためにはかなりの時間と猶予を必要にする……………でし
たよね慧音さん」

「ああ、それが如何した」

「たぶん、阿求、アンタはまだ転生の準備が出来てないんだろ」

「……………」

阿求はただ下を向き口を固く閉ざしていた。

そんな彼女に晴輝は追い打ちをかける。

「多分、間に合わないからその巻物に色々と書いてんだろ」
「違う」

「五日じゃあ何処まで書けるかわからない。だから夜通しで」
「違う」

「アンタは五日間と言う残された時間を使って……………」
「違う！」

大声を上げた彼女と別にもう一つの声が重なる。

慧音が前に立つ。

彼女がもう一つの声の持ち主である。

「残念だが晴輝、君の推理は間違っている」

「永琳さんの薬でも寿命は伸ばせない。出来るとしたら妹紅と輝夜さんの不老不死」

「違う、彼女の転生の準備はもう終わる！」

「だが何かしらの理由があつてその選択肢を捨て死を選んだ」

「ちがあああああああう！」

大声を轟かせ慧音は突進してくる。

そのまま晴輝は押し倒される。

「何故そう思う！証拠はあるのか！」

彼女の髪は変色し頭から角を生やし尻尾まで生やしていた。

これが慧音のもう一つの姿である。

「証拠はある、慧音さんの慌てぶりで確信へと変わったけどな」

慧音は力を無くしてそのまま倒れ込む。

「もう話しましょう、私達より彼の方が上です」

阿求が両手を上げる。多分、降参の合図だろう。

「一月前、私は病気になりました、ですが体には異常は無く平然と暮らしていました。ですが東華ほどたったある日、四季映姫・ユマザナドウ様が私に言いました」

阿求は悲しげな顔で空を見上げる。

「貴方には猶予がありません、早く転生の準備を、と」

「その人は誰なんだ？」

「そうですね、貴方の世界で言う閻魔大王ですかね」

閻魔、まあ細かな詮索は後にしよう。

「んで転生の準備は間に合わなかったわけだ」

阿求は無理に笑顔を作り頷く。

「ただどこここでは死んでも会えるんだろ、なら別に……………」

「ダメ何です」

阿求は笑顔で答えた。

その笑顔からは彼女の必死さと苦しみと悲しみが混じっているのではないかと思った。

「死んだら閻魔様の所で手伝いに行く事になっていきます、これまで転生に何度も協力させていただきましたから。それに」

「それに？」

「阿求は……………人間として生きたいです」

彼女のこの言葉を晴輝はこう捉えた。

「生きたいんだな」

阿求は頷く。

そんな彼女にハンカチを渡す。

「まったくこれじゃあ俺が泣かしたみたいじゃねえか」

彼女の瞳から零れ出しているモノを見ると罪悪感に包まれる。

「なあ、生きたいんなら手を貸すぜ」

「人間の貴方に何が出来るんですか？」

「外の人間をなめんな、不可能を可能とする、それが俺らの世界の言葉だ！」

32 - 最後の代（後書き）

主「主と」

霊夢「キャラクターがお送りする」

「『東方二次創作』『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」

「

霊夢「と言ってももう大抵言ったし、これだと次回のネタバレよ」

主「いるじゃないですか、蒼と紅が」

霊夢「読者はたぶん誰それって顔してるわよ、近々消しましょう」

主「……………はい」

主「蒼 人柄よし

紅 挑発家」

霊夢「感想、待ってるわね」

33 - カウントダウン

石段を全力で上り博霊神社へ行く。

「霊夢、これでどうだ」

神社の前で掃除をしている霊夢に小包を手渡す。

「まあ、美味しければね」

小包を開けると白くて丸い物が三つ入っている。

「形は………合格、さて味は」

小包の中身を手に取り口に運ぶ。

「んんー、このお饅頭美味しいい！」

手で頬を触り饅頭を吟味する。

「本当にこれアナタが作ったの？」

「朝一番の作りたて」

饅頭を包みなおすと懐からお札を二、三枚出す。

「いい、これを張るだけで結界が出来るけど脆いから気をつけてね」

「ああ、使わせてもらうぜ」

振り返り石段を素早く降りて行く。

「結界用の札なんて何に使うのかしら？」

霊夢は首を傾げながらも箒を鳥居に置く。

「お茶と一緒に食べよ」

そう言っただけで彼女は今日一日の巫女の仕事を放り投げた。

「とりあえずは一つ、そんじゃあ次！」

迷いの竹林へとバイクを走らせる。

「晴輝」

空から誰かが降りてくる。

「妹紅」

炎の翼を消してサイドカーに乗る。

「話は慧音から聞いた、私も一つ噛ませてもらうぞ」
「ああ、時間が無いから急ぐぞ！」
加速装置を起動させてバイクを走らせる。

「永琳さん！」

「てゐから聞いたわ、正しい容量を守って使ってね」
永琳は薬を投げ渡す。

「頑張つてね」

「はい！」

バイクを回転させて再び走りだす。

「ししょー、晴輝さんに何渡したんですか？」

「回復錠Sよ」

「はい？」

「それよりうどんげ、この薬飲んでみて」

「いやいやいや、何で料理の味見みたいな感覚で得体のしれない薬品を飲まなきゃいけないんですか！と言うかその紫色の液体にはト
ラウマしかありません！」

うどんげは180 体を回転させて走りだす。

「逃げてても無駄よ」

その後、うどんげの悲鳴が1日中聞こえたそうだ。

「これで準備は出来た」

お札や薬、そして蒼と紅の武器を一カ所に集める。

（如何したのじゃ、晴輝）

（晴輝さん）

久々に紅と蒼が出てくる。

「力を貸してくれないか」

（何のじゃ？）

「神田家の能力ってのを」

33・カウントダウン（後書き）

霊夢「回復錠Sについてかたりたいのだけど」
主「で、出来心です」

霊夢「歯を食いしばりなさい！」

霊夢「感想よろしくお願いします」

34 - 嵐の前日

カウントダウンの数字が0になった。

阿求のいえへ来た。

「阿求、大丈夫だ安心しろ」

阿求は酷く痩せていた。

欠けた月が真上へ出ようとしている。

ついに今日、彼女が死ぬ日だ。

「死なさない、あのバカの二の舞には」

「そう言えば何で私の寿命が五日だとわかったんですか？」

阿求は問いかけてきた。

もつすでに虫の息で眼を開けているのが精いっぱいなのに。

「ちよつとな、前に見本を見たんだ、人が死ぬ五日前の顔を」

敷布団だけを敷いて部屋の真ん中にに札を貼る。

「そつだ、これ」

小包を阿求に渡す。

「これ、俺が作った団子、これが終わったら一緒に食べようぜ」

小包には団子と袋に入った氷があった。

「まったく、貴方はこんな時でも」

阿求は微笑む。

「それじゃあ、始めますか！」

何時になく真剣な顔で晴輝は両手を勢いよく合わせる。

「まったく、死に抗うとは……………」

「如何します？」

赤い服の女性と緑髪の女性が鏡を見ていた。

「こちらも閻魔としての本職を果たさなければいけません」

「それではあたいが先に行つてきます」

「ええ」

先に赤髪の少女が大きい鎌を持って先立つ。

「彼は……………」

緑髪の少女は鏡に映る晴輝を見て呟く。

「黒ですね」

34・嵐の前日（後書き）

にとり「かっぱ巻きはある？」

主「始まってますよ、にとりさん」

にとり「どうも河城にとりです」

主「どうも主です」

にとり「何かフラグ建ってるね」

主「そうですね」

にとり「かっぱ巻きはある？」

主「またそこへ戻るんですか！」

「感想よろしくお願いします」

「ゴハッ！」

晴輝は口から血を吐きだす。

「もう止めてください！」

阿求は敷布団の上に寝ていた。

阿求の体の動きを封じているので彼女は声だけで晴輝を止めてよ
うとしている。

「大……………丈夫」

手を勢い良く合わせる。

「ゴホッ！」

口からまたも血が出る。それだけではなく勢い良く叩いた手から
も幾つもの切り傷みたいな物がある。

「まだまだああああ！」

晴輝の能力は『魂を身に宿す程度の能力』と『肉体を創り直す程
度の能力』。

だがこれは本来、人が行う業じゃない。

蒼、紅のそしてもう一人が使える竜の力。

肉体が耐えきれずにあちこちが壊れても仕方が無い。

「はあ、はあ」

限界なんてもうすでに超えていた。

ハッキリ言ってもう止めたいぐらいだ。

「まだまたあああ！」

手を叩くのを止めない。

何故、見知ったばかりの人を助けるのか。理由は無い。ただ助け
たい。

「それだけだあああ！」

ただひたすら両手を合わせる。

「おや、頑張つてんね」

そこに赤い髪の女性がやってきた。

「小町……………さん」

「どちら……………様で？」

「おのつかこまち小野塚小町、死神やってんだけどアンタは？」

持っている大鎌で晴輝を指す。

「神田晴輝、死神って事はヤマザナドゥさんとやらの使いかな？」

「察しが良いねえ、とりあえず……………動かないでおくれよ」

鎌を構える小町だがこっちは手が空いてない。

「残念だけど小町さんの相手は俺じゃない」

その時、戸を突き破り誰かが入ってきた。

「普通の魔法使いだぜ」

魔理沙だ。

魔理沙は八卦炉を構えて息を大きく吸う。

「恋符『マスタースパーク』！」

晴輝は伏せると同時に八卦炉からレーザーが放たれた。

「魔理沙、悪いけどよろしく」

「助手の願いを叶えるのも私の仕事だからな」

小町は外へと吹き飛ばされたが間一髪、大鎌で攻撃を防いだ。

「それじゃあ、あたしも本気で行こうか」

二人は宙に上がりスペルカードを取り出す。

「大丈夫か」

「あ、はい、はい」

阿求と晴輝の顔の距離はそう離れてはなく、お互いの息が互いの頬に当たっていた。

「顔が赤いけどもしかして（体力が）ヤバいのか！」

「は、はい（顔が近くて）！」

晴輝は辛うじて噛み合った会話から彼女のいろんな意味のSOS信号を違う意味で危険だと思った。

「あと、一回！」

十回目の合掌の時にそれは起こった。
彼女の体から白い球体が出てくる。

「やった！」

血反吐を吐き、口を腕で拭う晴輝は目の前の状況に喜ぶ。
球体に優しく触れて自分の胸にそつと当てる。

「……………」

心を落ち着かせて球体を自分の体に押し込んだ。
球体は晴輝の体へ入ると晴輝の右目が紫色に変化する。

(あの、これは?)

心から声が響く。

「阿求、聞こえるか」

声の持ち主は阿求だが阿求の口は微動だしない。

「阿求、お前は今、俺の体内に居る」

(はい)

傍からは独り言を言ってる様に見えるが阿求と交信をしている。

「それじゃあ、次だ」

35・TIME IS MONEY (後書き)

文「あやや、阿求さんはどうなるのですかねえ？」

主「まだわかりません」

文「それでは主さんの若き日の黒歴史の話でも……………」

主「やめてええええ！」

「感想お願いします」

36 - 生か死か

晴輝は眼を瞑り座禅をしていた。
阿求の体は光りを纏っている。

「……………」
晴輝は眼を閉じて集中していた。

「おや、もう終盤回かい？」

「……………」
魔理沙と戦っているはずの小町がこっちへ帰ってきた。

「魔理沙は？」

「ちよっと、寝て貰ってるよ」

小町は魔理沙を片手で持ちあげている。

「お前さん、血塗れじゃないか」

「気にしないでくれ、もうすぐ終わる」

魔理沙を置いて小町もその場に座る。

「何でその娘に固執するんだ？ 苦しいなら止めればいい
やっぱり死神には敵わない。

「やっぱり、分かる？」

これまで一回で血塗れになる合掌を十回したのだ。

「休まないとその娘よりアンタが死ぬよ」

「……………」
「別に死んだって会えないわけじゃない、ただ幽霊になるだけだよ」

「阿求は生きたいって言ったんだ、だから生かす。生きてる死んで
るは問題じゃない、コイツが生きたいって言ったから生かすだけだ」

「……………」
「そうかい」

小町は鎌を取り立ち上がる。

「今すぐ止めな、そうしたら助けてやる」

晴輝も立ち上がり設置していた槍と刀を取る。

「残念だけど、諦めなさい、貴方には降伏しかない」

小町の後ろから緑髪の少女が出てくる。

(四季映姫様)

心から阿求の声が耳に響く。

「アンタが閻魔様か？」

「四季映姫・ヤマザナドゥです」

「アンタが閻魔さんねえ、イメージと違う」

「おや？貴方のイメージでは私は如何なっていたんでしょう？」

四季映姫は一步、また一步と近づいて来る。

「男でちよつと怖そうかと思っただけどこんな可愛いのが閻魔様とは思わなかった、勿論死神もね」

四季映姫は足を止める。

「か、可愛いですか、貴方も中々面白い冗談を言いますね」

「いや本音だけど……………」

「あはは、四季様、顔真つ赤ですよ」

「う、五月蠅い…………… って貴方も顔が赤ですよ」

「あ、あはは、いやこれは夕日の所為です」

「夕日はとつく前に沈んでるが」

「……………」

二人は少し黙り込む。

「……………マスター」

「魔理沙、起きてるんだったら会話に参加して来いよ、そして八卦炉をこっちに向けるな」

魔理沙は片手に持った八卦炉を晴輝に向けていた。

「だって起きたら二人が口説かれていたんだぜ、流星に起き辛いと言っか」

魔理沙は立ち上がり阿求本体の頬を突いている。

「口説いてない、率直な感想たぞ」

「そ、そんな事より私達の目的は貴方達の妨害です！人は時が来ると死ぬのが道理です、道理に逆らうなどもつての他！」

「そっだ、四季様の言っとおりで」

「悪いけど、俺には道理なんて知ったこっちゃない」

小町と四季映姫の間を通って外へ出る。

「俺は神様の決めた世界の掟なんて関係ない」

月が消え視線の先からオレンジの光が出る。

「ただ、困ってる奴の為に手を差し出す。それだけだ」

上る太陽を背景に晴輝は三人の方を向く。

「……………はっ！」

顔を赤く染めた三人の中で四季映姫だけが我に戻る。

「そ、そうですか、交渉決裂と言う訳ですね、小町！」

「……………は、ハイ！」

小町も我に戻る。

「貴方の幻想に私達はつき合っていていただけません。さあ、さっさと碑

田阿求の魂を……………」

「悪いけど俺の勝ちだ」

晴輝が阿求の体の方へ指を指す。

「……………？」

三人が振り返るとそこには少女が立っている。

「碑田……………阿求？」

「悪いな、今までの会話は時間稼ぎだ」

「……………っ！貴方は！」

小町と四季映姫はこちらを向き身構える。

「大丈夫だ、二人とも可愛いつて言ったのは本当だ」

二人は顔をまたも赤くする。

「ま、また貴方は」

「あと、それと魔理沙」

「な、何だぜ」

「悪いけど、永琳さん呼んでくれないか」

晴輝の来ているYシャツはすでに血で滲んで気付かないが晴輝に

は多数の切り傷がある。

「永琳さんから貰った薬は一時的に傷を塞ぐもの何だ、だから……
……傷口が開いて………今は………すげえ出血してんだ」

晴輝の指先から赤色の雫が落ちる。

雫が落ちる間隔は次第に早くなり、晴輝の顔が青ざめてくる。

「あー何か眠たいな」

晴輝は足をふらつかせ、今にも倒れそうだった。

「ちょっと寝たいから………少し休ませ………」

そのまま倒れようとする体を誰かが支えてくれる。

「慧………音さん？ごめん、眼が霞んでわからねえ」

「晴輝、君は良くやった、良く………」

何かが頬に当たる。温かい雫が頬を伝う。

「まったく、君もバカだな、妹紅みたいだ」

「あはは、慧音さんだなこの声は」

「今回の礼がしたい、寝ても良いがちゃんと起きてくれよ」

そのまま晴輝は満足そうな顔で眼を閉じた。

「さあ、阿求、魔理沙、晴輝を運ぶぞ」

「はい！」

「まかせろ！」

阿求と魔理沙は慧音に着いて行った。

「如何します？四季様」

「とりあえず、私達も着いて行きましょう」

彼女達の戦いの結末を見た太陽は顔を出した。

朝日が晴輝の顔を照らしす。

「まったく、死にそうなのに満足な顔をして」

36 - 生か死か（後書き）

魔理沙「……………」

主「……………」

魔理沙「何で正座させてるかわかってんだろうな」

主「いえ、全く……………出来れば八卦炉をしまってください……………」

魔理沙「何でヒロインを増やしたんだぜ？ぜ？」

主「あの……………すいません」

魔理沙「マスターパーク！」

（主終了のお知らせ）

魔理沙「感想よろしく頼むぜ」

37 - 治療ミス

見知らぬ天井でまたも眼が覚めた。

「ここは、永遠亭か？」

体を起こすと阿求、ルーミア、魔理沙が俺の周りに集まっていた。
「起きたんですか？」

ドアを開けて入ってきたのはうどんげだった。

「うどんげさん、俺って何日寝てたんだ？」

「丸三日、その間もこの三人の他に慧音さんや妹紅、小町さんに四季映姫様も来てたわ」

ドアを閉めて入ってきたうどんげは包帯と塗り薬を持ってきた。

「腕を出してください」

そう言われ腕を出すと両腕とも包帯に巻かれていた。

包帯を取ると傷だらけの腕が姿を現す。

「この傷は副作用です、薬は数時間は空けて飲むって書いてましたけど」

「あは、あははは」

三十分到一个のペースで飲んでました何て言えない。

「まあ、それより。これを」

そう言っって手紙を手渡す。

「これは？」

「四季映姫様が貴方に」

そう言っって手紙を開く。

「読めねえ」

手紙には字が書いていたがあまりにも達筆過ぎて読めない。

「えつとですね」拝啓、神田晴輝様へ

今回の件に関しては二週間後の宴会の際にしっかりと説教させていただきます
「いただきます」って書いてます」

「宴会？」

「博霊神社で行われる宴会です、丁度満月の日にやります」
満月の夜、その言葉に何かが刺さる。

「そう、ですか」

「元気ないですね、どうしました？」

「あ、その四季映姫さんの説教って長いのかなあって思って
今の事を気取られない様に話をずらす。」

「あと、今さらだけど敬語とか別に良いですよ、気にしないで」

「それじゃあ、私もうどんげって読んでください」

「そう言って会話を弾ませていると阿求が眼を覚ます。」

「は、晴輝さん！」

阿求が晴輝に跳びつく。

「大丈夫ですか！？動けますか！？」

「大丈夫だから落ち着いて」

阿求の頭を撫でると阿求は我に返る。

「ありがとうございます、助けてくれて」

阿求は頭を下げる。

「後十年の人生、ゆっくりと暮らしていきます」

阿求は笑いながらそう言った。

そんな悲しい事を言わせる為に寿命を延ばしたわけではない。

「阿求、実は言いたい事があるんだ」

「何ですか？」

「実はあの治療の時にミスしたんだ」

「えっ？」

「お前の家の人間の寿命が短いつて知って聞いてな」

頭を掻きながら阿求に話し続ける。

「お前の寿命を延ばしたんだ」

「……………っ！」

「普通の人間みたいに暮らせるように寿命を六十年ほど」

「それって」

「でも、余計なお節介だったか？」

阿求は下を向き体を震わせる。

うどんげは魔理沙とルーミアを引きずって外へ出て行った。

「い、今からでも元に戻せる……………」

阿求は晴輝に抱き付いた。

「私、転生を行うと何時も記憶とか忘れちゃうんです、友達の名前も顔も好きな人との思い出も、でも、これで、やっと……………」

……………救われました。好きな人と長くずっと一緒に居られるので、体を震わせて阿求は晴輝を強く抱きしめる。

「好きな人と上手く行くと良いな」

「……………はい」

阿求は必死に泣くのを堪えている。たぶん情けない所を見せたくないのだろう。

「俺、今耳悪いんだ、眼もハッキリとは見えない、だから」

阿求を強く抱きしめる。

「泣いて良いんだ」

それを聞いた阿求は声を上げて泣きだした。

阿求をしつかりと強く抱きしめる。

晴輝と阿求の部屋の前で数人がドアに凭れていた。

「まったく無理させやがって」

「魔理沙、眼が赤いぞ」

「そう言うもこたんだって赤いぞ」

「慧音さんも赤いですよ」

「うどんげも赤いぞー」

「わ、私のは何故か狂気の赤眼がうつかり発動しちゃって」

その泣き声は迷いの竹林に響いたそうだ。

37 - 治療ミス（後書き）

文「とりあえずは阿求編は終了しましたが次は何ですか？」
主「次は幻想郷のキャラクターや晴輝の中の黒のお話ですよ」
文「と言う事はお山のガンキャノンとが出るんですか？」
主「ガンキャノンどころか人形使い、鬼もでるぜ」
文「あや？何故かいきなり暗く、ああ、御柱が太陽の光を遮って…
……………」

（主と文終了のお知らせ）

感想よろしくお願いします。

38 - 春の終わりに凍る蛙

以前と比べすっかりと暑くなった。

あの阿求の一件で魔理沙に丸一日叱られた。

あの時に使用した永琳印の薬の副作用として出来た傷は永琳さんに治してもらった。

今日はとりあえず非番と言う事でバイク弄りの為に妖怪の山へ登っていたのだが……

「やっぱりアタイったら最強ね」

チルノに捕まったのだ。

「その所為で俺はいい歳して迷子だ」

山道でいきなり弾幕ごっこを開始したチルノの攻撃を避けつつもバイクを走らせたならこの様だ。

「ったく、奇襲は無しにしてくれ。こっちもこっちの用事があるから」

バイクを押しながらも何とか目印になる所を探していた。

「おっ」

何かに反応したチルノは宙に浮き瞬く間に飛んで行ってしまった。

「おい、待てよ」

晴輝もバイクに乗りチルノの後を追う。

チルノを追い越さない様にゆっくりと走らせていると嗅覚が懐かしい香りに反応する。

「水の匂い、川か？」

「やっぱり」

チルノはスピードを上げて飛んで行ってしまった。

「あ、ちよつと待て！」

負けじとバイクの加速装置を起動させてチルノの飛んだ方角を指しバイクを走らせる

「まったく、何処に行つたんだ？」

方角もチルノも見失う。

太陽に方角を教えて貰おうと思つたが残念な事に今は昼。太陽は真上を向いていた。

「遭難」

等と言つ言葉が脳裏を過る。

飲み水も食料も持ち合わせていない今の状況では最悪の二文字である。

「仕方ない」

刀と槍を地面に差す。

「出て来い、蒼、紅」

そう言つて蒼と紅の姿が目の前に現れる。

「まあ、話は分かつてるぞ」

「私達に何か探してほしいんですよ」

「話が早くて助かる」

二人はガラスの様な翼を広げ一気に空高く飛んで行つた。

二人は時間の経たない内に帰つてきた。

「ここを直進した所に大きな湖と建物がありました」

「それじゃあ行くか」

バイクを再び走らせ、教えられた方角へ進む。

バイクは大きな湖の前に辿り着いたのだが。

「何だこれ」

すぐ近くに巨大な氷があつた。

「チルノの仕業だと思つが………つて何か凍つてる！」

氷の中に誰かいる事に気付いた。

「待つてるよ、すぐに助けてやるから」

槍と刀を前に突き出しす。

二つの武器からは蒼い炎と紅い炎が噴き出る。

氷は融けていきどんどん小さくなっていく。

「おい、大丈夫か！」

中から人を救出するが体温は下がっていて弱り切っている。

「今すぐに助けてやるから」

近くの建物は湖の上を通った方が早いが残念ながら人間である俺には無理な話だ。

「紅！」

紅を出現させて少女を渡す。

「その子をあの建物まで！」

紅は湖を突っ切りそのまま飛んで行った。

「俺も早く……………ん？」

目の前にヘンテコな帽子が落ちていた。

帽子の両端には目玉の様な物が着いている。

目玉と言っても模造品で帽子自体も可愛らしい物だ。

「あの子のか」

帽子を拾い建物に向かって進む。

「大丈夫かな」

帽子を頭に被りバイクを走らせた。

38・春の終わりに凍る蛙（後書き）

主「感想よろしくお願いします、活動報告に大切な知らせがあるので読んでください」

39 - 怒りに任せた御柱

湖の周りを走り着いたのは神社であった。

「博霊神社、つてわけじゃあ無いな」

神社と言う点は同じだが規模が違う。

博霊神社よりも大きく立派で周りに大きな柱がある。

「ん……………」

神社の方から人が出てくる。

赤い服、背中にはしめ縄の様な物を装備している。

「すみません、こっちの方に俺の知り合いが……………」

気軽に話しかけただけだ。挑発なんかしていない。

だが彼女から感じられる感情は禍々しくも分かり易い。

『殺意』と『怒り』である。

「アンタが諏訪子を……………」

だが彼女からあふれ出す殺気は異常だ。

紅魔館のフランに後れを取らない。

「お、俺はただ彼女の……………」

弁解の言葉は彼女の耳には入っていない。

次の瞬間、晴輝は目を疑った。

何かが晴輝の真横を通り過ぎた。

振り返ると六角形の何かが地面を抉っている。

「売られた喧嘩は買うわ、いくらかしら」

一步、一步と彼女がこっちに向かって来る。

「そうね、腕一本なんて生温いわ」

彼女の周りに柱が浮く。

「アンタの命、それで……………許す！」

柱は物凄い勢いでこっちに向かって飛んでくる。

「クソッ！」

刀を抜き飛んでくる物体に刃を向ける。

柱を避けて刀を振る。柱はそのまま後方へと飛んで行った。

「まずは一本」

確実に斬ったと思いつきの攻撃に意識を集中させる。

「残念ね」

彼女はにやりと笑い、何かを見つめている。

「……………っ!？」

背中に強い衝撃が走る。

少し首を曲げて後ろを向くと彼女の武器である柱が背中を押ししている。

そのまま柱と共に彼女の方へ飛んで行く。

「マジかよ」

斬ったと思った柱には傷跡しかなく一刀両断などしていなかった。

「さあ、苦痛を味わいなさい」

目の前の彼女は己の身長のはある柱を持ちあげて待ち構えていた。

「喰らいな!」

彼女は躊躇なく柱を構えた。まるで野球のバットを持ったように。

「おいおい、こんな速さだったら確実に」

そのまま彼女は柱を振り晴輝を柱諸共打った。

晴輝の意識は強い衝撃に耐えきれず黒く深い闇へと落ちて行った。

そのまま重力に逆らわず地面へ頭から落ちていく。

「……………」

だが頭部が地面に触れる事は無かった。

まるで時が止まったかの様に晴輝は空中に浮いていた。

彼女は晴輝に指を指し言った。

「……………アンタ、誰だ」

彼女の目の前に居るのは晴輝である。

だが違和感があった。

瞳孔が開き髪も数?ほど伸びている。

眼をカッと開きただ笑いなながら彼女を見つめていた。

「……………さあ？僕は誰でしょう？」

「あの鴉が言つてた魔法使いの助手、神田……………だつたかしらね」

「正解、神田晴輝、それが彼の名前、でも僕は違う。僕は黒、誕生してから544年、戦国の世からの戦好き。ただの暴れ者。貴方は？その柱は？」

「私は山の神の八坂神奈子これは私の武器の御柱」

「そう」

さあ、始めよう本当の戦を。

「……………っ！」

耳元で聞こえた雑音に八坂は慌てて耳を塞ぐ。

「何だ、今の声は！」

殺気と闇が混ざり合った声。

ザーザーとジャミングのある声に神奈子は喉元にナイフを突き付けられた様な緊張感が迸る。

「大丈夫かな？」

晴輝は体を縦に半回転させて地面に立つ。

「そんなんじゃ、私と戦、出来ないよ？」

耳からゆっくり手を離し身構える。

「ルールは簡単、先に死んだら負け、生き残つたら勝ち」

そう言つてポケットからカードを取り出す。

「スペルカード。戦符『戦国日ノ丸1467』」

晴輝の背後から無数の黒い球体が出る。

「それでは、始めよう」

無数の弾幕が神奈子に向かって飛んで行った。

40 - 戦いは合掌とともに

「神祭『エクспанデッド・オンバシラ』!」

神奈子はスペルカードをかざしてそう言い放つ。

無数の光を無駄な動きを見せずかわしていく。

「何だ、神様つて言ってもこの程度なのか」

ポケットからスペルカードを取り出す。

「黒竜」

両手を神奈子に向けてスペルカードを握りつぶす。

「『竜の尾』」

両手から黒い光線が一直線に飛ぶ。

神奈子は素早くかわして背後から御柱を投げる。

「.....」

晴輝は三枚目のスペルカードを握る。

「龍斧『憎しみと恨みの暴君』」

晴輝の周りに無数の斧の形をした物体が現れる。

物体は回転を始め神奈子に向かって飛ぶ。

神奈子は御柱で応戦するも数が多いためかそれとも斧が早いのか

攻撃を見切れていない。

数発は神奈子に被弾する。

「たつく、お前は妖怪か？人間か？」

「さあ、どっちでしょう？」

巨大な斧を出現させた晴輝は左で軽々と斧を持ちあげる。

「残念だが僕の勝ちだ」

「.....」

神奈子は悔しそうな表情で眼を瞑る。

斧はそのまま振り下げられると思ったが違った。

晴輝の右手が左手を強く握っている。その為に攻撃は中途半端な

所で消えてしまう。

「まったく、別に良いじゃないかと六日なのだから」

（悪いが期日は守ってくれよ、こっちにもそれ相応の準備が必要なんだ）

心の奥底で眠っていた晴輝が黒へと話しかける。

だが何も知らず分からずの神奈子には何をしているかなど知る余地もない。

「だけど君の意識も消えかかっている、蒼も今はぐっすりだ。さっさと彼女を倒して私は戦の後の余韻に浸りたい」

（悪いけど、これで終わりみたいだ）

パンと言う音がした。

後ろを見ると誰かが手を合わしている。

もう一人は緑の髪をした女性ともう一人はさっき助けた金髪の少女だ。

「大丈夫ですか神奈子！」

「同じ神様としてそのザマは何？神奈子」

「勝負つてのは一対一が基本だよ、知らないの？」

晴輝は大斧を消す。

「いくら諏訪子様の恩人でも」

「いくら私を助けてくれた恩人でも」

「これ以上私の家族に手を出すな」

二人は同時に手を合わせる。

神社の後ろから大量の水がこっちに向かって迫る。

「残念だけどこの程度の攻撃は」

（残念だが喰らって貰うぜ）

ガシツと足を誰かに掴まれる。

「やられたらやり返す。それが私の喧嘩だあああああ！」

そのまま凄い勢いで投げられ襲い掛かる水の中に入る。

「息が……………」

そのまま水は晴輝を包み込み、彼が酸欠になるまで閉じ込めた。そして現在晴輝の体を使っている黒の意識が消えていった。

40・戦いは合掌とともに（後書き）

阿求「慧音さん、私たちの出番はまだですかね」

慧音「ちよつと前にお前のファンのための回があったばかりだろ。宴会まで待て」

主「宴会はいろんなハーレムの皆様が顔を合わせるからさぞや大変な事に……………」

慧音「おい、主。ちよつと頭貸せ」

（主、頭突き地獄の刑）

感想よろしくお願いします。

41・山の神は人間に頭を下げる

「本当にすまなかった！」

完全に元の晴輝に戻ってすぐの事だ。

今、山の神に頭を下げられている。

「いやいや、別に気にしてないですって」

アバラ五本が折れ、全身打撲に擦り傷多数のこの状態の人間を大
丈夫とは言わない。

「まあ、神奈子も反省してるし、許してあげたげて」

さつき助けた金髪の少女が頭を下げている神奈子の肩をポンと叩く。

彼女は洩矢諏訪子さん。彼女は土着神と言ってこの神社で一緒に
住んでいるらしい。

まるで叱られた子供とその母親の様な光景だ。

「でもまあ、魔理沙が見たら怒るかな？」

「魔理沙さんなら神社に乗り込んでくるかもしれませぬ」

後ろから救急箱を持った緑の髪の女性が入ってきた。

この人は東風早苗さん現人神と言う神様であり人間でもあるらしい。

「ああ、どうもどうも」

早苗から救急箱を受け取り晴輝は消毒液を取り出す。

「くう、沁みる！」

消毒液が擦り傷に沁みる。

「何だか古傷やら色々な傷跡がありますね」

早苗さんが俺の腕を見てそう答える。

「色々とありまして、森で何日も遭難したり、箒で突撃されたり、
凍らされたり、槍とかナイフとか投げられたりと、一月で死にそう
な経験ばかりで」

「それじゃあ、体全体が傷だらけって事？」

諏訪子さんが俺の腕をマジマジと見て答える。

「ええ、まあ」

片方の腕や足の傷を見せる。

「手の届かない背中とかは如何してるんですか？」

「ああ、誰かにやってもらいたいけど、俺、ここじゃあ女性の知り合いしかいなくて」

死に腐れニア充が！（主の心からの叫び）

「それなら私が代わりにやりましょう」

早苗さんが手を上げて

「え、いや、だから恥ずかしいから、女性の前で脱ぐとか恥ずかしいから！」

「大丈夫です、私頑張りますから」

「早苗さんが大丈夫でも俺が無理なんだって」

「それじゃあ、後は若い者たちに任せて、行くよ神奈子」

諏訪子さんが神奈子さんを連れて行って部屋を出ていく。

「ちょ、信用し過ぎですって！って言うか何その仲人さんは！」

「早苗ええええ！何かされたら大声で叫ぶんだよおおおお！」

「俺、信用されてねええええええええええ！」

「早苗になんかしてたらアイツマジで埋めてやる」

神奈子ブツブツと愚痴りながら歩いてしていると襖に『蛙』し書かれた湯飲みを当てている諏訪子と出くわした。

「諏訪子、何やってんの？」

「まあまあ、いいから聞いてみてよ」

諏訪子はそう言って『蛇』と書かれた湯飲みを神奈子に渡す。神奈子も何事かと思いい襖に湯飲みを当てる。

「いや、駄目だってそこは」

「大丈夫、私に任せてください」

「……………っ！」

「私には神奈子は何を考えたなんて分かるけどね」

「諏訪子様、神奈子様は何を考えたんですか？」

『知らぬが事が仏』と言う言葉が脳裏を過る。

「そうだ、新しいスペルカードの実験台として二人を殺し………
いや使うからゆっくりしておいてくれ」

「神奈子、顔がマジだよ、ジョークだって」

「あのく神奈子様、何をお考えになったんですか？」

そのまま二人をズルズルと引きずって持って行った。

「いいな、あんなの」

別に処刑される二人の事ではない。

家族、そんな言葉が心に刺さる。

「魔理沙は俺の事を如何思ってたんだろ？」

とりあえず帰ってくる二人の事を信じてお茶を淹れに行った。

41・山の神は人間に頭を下げる（後書き）

次回は宴会編と黒編の始まり。

第一章もそろそろ大詰めです。

感想よろしくお願いします。

42 - 彼が積み上げてきたものは石段の様に

「で、如何するんだぜ？」

魔理沙に言い寄られていた。

今夜ある宴会だが俺は未だに行くかどうか悩んでいた。

「まだ二十歳じゃないから酒の席はちよっと勘弁してほしい」

まだ十九である晴輝には酒などまだ早い。

「大丈夫だぜ、皆飲んでるんだから」

「でも」

「お前は私の助手だぜ、酒ぐらい注いでくれよ」

そう言われると弱い。

俺は助手なので立場的には魔理沙の方が上である。

それに宴会の方に行った方がいいと思われる事が一つあった。

「分かった、参加する。だけど俺は酒は飲まない」

「了解」

魔理沙は首を縦に振り喜んだ。

「と言うか今さら何だが何でバイクに乗るわけ」

魔理沙は箒をサイドカーに置いて晴輝の後ろに乗る。

「力は温存しときたいんだ、何があっても」

そう言って晴輝の腰に腕を回す。

「まあ、いいか」

そう言ってバイクのキーを刺す。

「とりあえずは博霊神社に着いたけど」

「ちよっと早かったぜ」

宴会は夜からだがまだ夕日が沈む時間には早い。

「あややや？」

何処かで聞いた声がする。

「よく見れば晴輝さんとおまけに白黒ではありませんか」

「文、喜べ。今日は焼き鳥だ」

文と後ろから椀とにとりがある。

「晴輝も宴会か？」

にとりはその場で着地して話しかけてくる。

「こいつ、酒は飲まねえなんて言っただけで最初は聞かなかったんだぜ」
「宴会なのに酒は飲まないんですか？」

皆は不思議そうな顔をして俺を見る。

確かに水着を着ているのに海で泳がない様な事と変わりはない。

「酒を注ぐぐらいはするけどそれだけだ」

「何だ、私が注いでやろうと思ったのに」

後ろを振り向くと慧音さんと妹紅が立っていた。

「あの一件の礼をと思ったんだが残念だ」

「話は聞いたぞ、凄かったらしいな」

妹紅に背中を叩かれる。

「いや、別に凄いつてもものじゃ」

「今日は阿求はパスだから私が酌をしてやろうと思ったんだがな」

「まあ、良いんじゃないか一歳ぐらい、今日ぐらいは羽目を外せ
て」

「もこたんの言うとおりですよ、良いじゃないですか一日ぐらい」

「よし、今日は鴉の焼き鳥だな」

「妹紅、手伝うぜ」

「駄目だつてば三人とも、あと文はいい加減にしないともこたんの
バーナー喰らうぞ」

「晴輝、お前は殺したくない。だからその呼び方は止める」

妹紅は手から炎を出して威嚇している。

「もこた.....妹紅、そこまでしておけ」

「慧音、お前も今『もこたん』って言いかけただろ」

そんな会話をしつつも石段を登る。

「て言うか皆飛んで行った方が早くないか？」

「晴輝さんは飛べないでしょう？」

桜は何故かそう言っただけで俺の腕に自分の腕を絡める。

「俺に気にせず行ってくれば良いのに」

「偶には石段を登りたいときだってあるんだよ」

にとりも何故かそう言っただけで腕を絡めてくる。

「と言うか、何で二人は俺に腕を絡めて来るんだ？」

「気にしないでください」

「気にしないでください」

二人はそのまま絡めた腕に抱きつく。

「何だろう、背後からとんでもない量の殺気を感じる。特濃なやつを」

後ろを振り向いたら死ぬ。そう暗示をかけて石段を登る。

「マスター……………」

「フジヤマ……………」

「何故だろう、まるで見たかのように後ろの状況が見える。魔理沙と妹紅がスペカ持って構えてるのが見える」

何故だろうか背中がじりじりと熱い。

「二人とも落ち着いてください」

おお、助け船が来たかと思えば文の方を向く。

「ここは私が解決しよう」

あれ、助け舟が撃沈しちゃったよ、オイ。

「灸にはやっぱり」

そう言っただけで慧音は髪の色を緑に染めて角を生やす。

慧音の頭と晴輝の頭がぶつかりゴツンと言う鈍い音が脳に直接響く。

「……………！」

晴輝はあまりの痛さに言葉を忘れ頭を抱える。

激痛に負けずと必死に堪えて口を開く。

「お、俺、何か悪いことしたかな？」

「複雑な乙女心は晴輝さんには分からなかったんですね」

「自分の胸に聞いてみな」

文は呆れた顔で首を横に振る。

白沢状態の慧音さんは通常時の慧音さんに比べて攻撃的である。

「大丈夫ですか？」

椀が俺の頭部を優しく撫でる。

「白沢もやり過ぎだよ」

にとりも頭部を撫でる。

「まだ足りないみたいだな」

「俺は何もしてないから！」

そう言っただけで石段を上って行く。

俺の積み上げた物は多くそしてどれもが素晴らしいものだった。

俺は幻想郷こゝろに来て良かったと心の底から思っている。

何時までも平和にここで暮らしたいがそれも出来ない。

だって俺は。

今日死ぬかもしれないのだから。

42 - 彼が積み上げてきたものは石段の様に（後書き）

主「めっさ久しぶりの」

「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」

」

主「久しぶりっすね美鈴さん」

美「原作では二十数話から出てませんからね」

主「もうちょっとだけ辛抱してください」

美「どのくらいでしょうか？」

主「地霊殿編もいれて十数話ぐらいっすかねえ」

美「長いから寝て待つとしますか」

主「あれ、あそこにいるの咲夜さんじゃね？」

「美鈴終了のお知らせ」

「感想よろしくお願いします」

43 - 宴会前のひと騒ぎ

石段を登り終える頃には俺の頭部は慧音さんの頭突き地獄で瀕死状態だった。

情けなくも途中で妹紅に運ばれて上つてきたのだ。

「もう下ろしてくれてもいいぞ。って何か妹紅、嬉しそうだな」

「気にするな、もう少し甘えたらどうだ」

「男はもう甘える歳じゃあないんだよ」

妹紅から下ろしてもらいそのまま地面へと立つ。

「おっと」

だがその場で目眩がして倒れかける。

「大丈夫か晴輝」

魔理沙が俺の体重を支えてくれたおかげで助かったが未だに足が機能してくれない。

「慧音、すこしやり過ぎたんじゃないか？」

「まあ少しやり過ぎたように思えるが黒焦げにされるよりはマシだろう」

妹紅と慧音さんの会話が聞こえてくるが脳にちゃんと伝わってこないため何と言っているのか分からない。

「魔理沙、悪いけど運んでくれるかな？」

「いいぜ」

魔理沙に肩を貸してもらい先へと進む。

多少の頭の痛みを我慢しつつも

「おっ、助手と他の奴ら」

室内で小町さんが正座していた。

「如何したんですか小町さん」

「ちょっと天気良かったから昼寝してたら怒られた」

「子供ですか」

アハハハハと笑う小町さんは手招きをする。

「後ろのアイツらは何だい？もしかしてお前さんの嫁かい？」

真剣そうな顔でこっちを睨む。流石は死神、睨みには迫力がある。

「違う、友人だよ友人」

「なら安心したよ」

何が安心なんだろうと心に思いつつも隣に座る。

「アンタは酒はイケる口かい？」

「残念だけど俺は今日は酒は飲まない事を前提に来てるんだ」

「なんだい、宴会まで来て飲んで帰らないとはまた無粋だねえ」

「酌ぐらいはするけど、良かったら酌でもしようか？」

「お、良いねえ。お願いするよ」

そう言つて二人で会話を進めていると。

「小町、ずいぶん楽しそうですねえ」

「え、四季様？」

「どうも、映姫さん」

「晴輝さん、そこで正座」

「何で？」

「いいから正座」

可愛く微笑む閻魔様だが何か怒っている様な感じがする。

「手紙の事、忘れたんですか？」

ハツと思ひ素早く崩した態勢から正座になる。

「まったく、貴方と言う人は死を待つ人間に対して生かしてやろう等と人間がそんな大業を行つてはいけませんよ。名のある神でもしてはいけない事を貴方は平然とやってのけたのですからね。その所を深く反省し、まあ私も別に阿求を生かしてはいけないとは言つていません。ですがそう言う行為は自分の為にも阿求の為にもなりません。膨らんだ期待がそのまま形にならず割れてしまったらどうするつもりだったんですか？」

「すげえ、大抵二行程度のセリフしか思いつかない作者のボンクラ

脳がここまで長いセリフを書くとは」

悪かったなボンクラ脳で（作者の声）

「でもこのままだと二日はかかりますぞ旦那」

隣で共に正座をしている正座仲間の小町が小声で話しかけてくる。

「如何すれば良い？」

「四季様がこうなると誰にも止められないからねえ、放っておくしかないよ」

「ああ、説教さえしてなければ可愛いのに」

口から漏れた言葉が辺りの空気を変えた。

映姫はピタリと止まりワナワナと震えていた。

「ほほう、説教している私は無愛想だと言いたいんですか？」

もう駄目だたと決心を決めた小町は眼を瞑る。

「ちよつと、アンタ達、説教してる暇あつたら手伝いなさいよ」

腰に手を当てる博霊の巫女の霊夢がやってきた。

「博霊霊夢。説教はその者の自分の罪を思わせる大事な……………」

……………」

「まったく、仕事さつさと終わらせて朝早くからここで待ってたのは何処のどいつよ」

「四季様つたら今日の為に仕事の大半終わらせたんだ、何が楽しみなのかねえ？」

「ちよつと小町、私が宴会の為に仕事を終わらせて何か悪い事が？」

こつちに向けた映姫の笑顔には般若を思わせる威圧感があった。

「四季様の場合は宴会じゃなくてこの助手の事が……………」

……………」

「小町」

見える、見えるぞ。般若がどんどん鬼神へと変わるのが、背後にゴゴゴゴゴゴと言う擬音が付いて行くのが見える。て言うか怖い。

「いえ、何でもないです」

小町はどんどん小さくなって行った。

「とりあえず、手伝ってくれない？」

包丁を持ってそう問いかけてくる霊夢にも映姫さんと同じものを
感じた。

「とりあえずは料理なんだけど」

「それじゃあ俺がやるよ」

晴輝が真っ先に手を上げる。

「とりあえず酒の肴になりそうなものとかを沢山お願いね」

そう言って霊夢は映姫と小町を連れて宴会場の製作に行った。

「宴会は九時から現在時刻は五時」

四時間と言う時間で数十人分の物を作る。

「やっぱ揚げ物が定番だけど、ってか冷蔵庫あるし」

冷蔵庫を開けるが入っている物など殆どない。

「霊夢、冷蔵庫の中が空に近いんだけど」

「ああ、買い物もよろしく」

「人使いの荒い巫女だ」

「何か言った？」

小声で呟いた言葉が霊夢の耳に入った。

地獄耳か。

「悪かったわね地獄耳で」

心読まれた！

「バイクなかったらヤバかったな」

バイクのサイドカーに荷物を置き人里を歩く。

「あ、晴輝さん」

不意に誰かに呼び止められる。

「阿求、体の具合は大丈夫か？」

「ええ、すっかり元気になりましたよ」

酒瓶を三つ抱えた阿求が立っていた。

前回の一件で阿求は元気になった。

体の事も言えるが精神面も何か重荷を外した様だそうだ。

寿命が延びて人生の一日一日を満喫しているみたいだ。

「そうだ、これ」

阿求は持っている酒瓶を俺に手渡した。

「実は助かったお祝いにいろんな人からお酒を頂いて処理に困って
たんです。良ければどうぞ」

「あ、ああ、ありがと」

彼女の笑顔を見たら酒は飲まないからいらないとは断れなかった。

「飲ませて貰うよ」

「ごめん、俺今日は飲まないんだと心の中で謝罪の言葉を放って阿
求と離れた。

「とりあえずは唐揚げと天ぷら、月が綺麗に出るらしいからお団子
も」

そう言って材料を取り出す。

「こんな量は久々だから腕が鳴るな」

袖を捲って包丁を握る。

「じゃあ始めますか」

43・宴会前のひと騒ぎ(後書き)

感想よろしくお願いします。

44 - 四十四は不吉を招く

「出来た」

現在の時刻は九時の数十分前、料理を皿に綺麗に盛り付けて机の上に置く。

「ちょっと作り過ぎたか」

「いえ、このぐらいあれば事足りるわ
後ろから霊夢がやってくる。」

「上出来ね、でもこの唐揚げは辛くないかしら？」

霊夢は皿の唐揚げを一つ取って口に放り込む。

「酒の肴には持って来いだろ」

「確かにね」

「あ、外れくじで三つほど激辛あるから気をつけてな」

「それならさつき妹紅が一つ当たってたわよ」

あ、やべえ殺されるかも。

「大丈夫よ私が命令した事にしておいたから」

「助かった」

「でも次は無いわよ」

とりあえずはあとで回収するか。

「ねえ、一つだけ聞いていいかしら？」

「何だ？」

「貴方から霊力が漏れているのだけれど如何いう事？」

「……………」

晴輝は黙り込む。

「凶星ね」

「流石は幻想郷の結界を守る博霊の巫女さんと褒めておけばいいか？」

「褒められても嬉しくないわ、魔理沙が気付かない様に魔力と類似した物に変えたり誰かと会うたびに力の性質を変えている。それだ

「けの事なんですよ？」

「正解」

もうすべてお見通しと思いきい全てを話す

「今夜、俺の中に眠ってる黒って奴が目覚めんだ」

「それを今日あなたが倒すって事？」

「ああ」

俺と霊夢は腰を下ろして話を続ける。

「俺の先祖は『龍の化身』」

「龍の化身？」

「『四龍』って言うて紅龍、蒼龍、白龍、黒龍の四つの龍が神田家の先祖だ。変化や操作は龍の基礎能力でね、魔理沙の八卦炉の模造品を作ったり皮膚を妖怪の物にしたり出来る」

「便利そうね」

「そうでもないさ、龍の血は時を重ねる毎にどんどん薄まって行って奇跡的に残ってる状態なんだ」

腕を捲り腕の包帯を取る。

腕には無数の切り傷がある。

「そんな状態で力を使うと俺の体は力に耐えられなくなって体がポロポロになるんだ」

「それで、アンタは黒って奴と戦って勝てるの？」

痛い所を突いて来るなあ。

「力は五分五分って所、まあこっちは蒼と紅と俺の三人だから大丈夫だ」

「もしも負けたらどうなるの？」

「.....」

晴輝は黙り込む。

「俺の人格が消えて俺の体は黒の物になる。アイツは人間が嫌いだからな幻想郷の全ての人間を殺すだろう」

「その時は容赦なく消すわよ」

「ああ、よろしく頼む」

立ち上がり時計を見る。
「四十四分、不吉だな」

44 - 四十四は不吉を招く(後書き)

主「次回はついに宴会編」

魔「皆、どんどん突っ込んでいーぜ」

「感想よろしくお願いします」

45 - 宴会では適度な羽目の外し方を

「霊夢、来て上げたわよ」

「霊夢さん来ましたよ」

「霊夢 酒飲みに来たぞお」

紅魔館の面々に山の神社の面々、もうすでに酔っている萃香がやつてきた。

「あら、黒白の助手」

「久しぶり」

「まあ、今日は宴会、楽しみましょ」

「お久しぶり」

「パチュリーさん」

「さんはいいわ、それより魔理沙は？」

「あつちでアリスさんって人と酒飲んでる」

パチュリーはそのまま魔理沙の方目掛けて飛んで行った。

「ああ言う時だけパチュリー様は早いんだから」

「美鈴さん、久しぶりです」

「美鈴、あまり羽目外さないでね」

「咲夜さんもお久しぶりです」

「ええ、久しぶり」

「今日は一つ大きめのパッドを着けてきたのぉ
何かが耳を掠める。」

「蒼、またお前か」

「いいわ、今日こそ決着を付けてやる！」

「酒の前の運動は酒を美味しくするからのお」

「そう言っつて二人が外へ出て行った。」

「咲夜、私も戦うー」

フランちゃんが変な形状の武器を持ち出して外へ出ていく。

「ねえ、私と戦わない？」

次は紅が俺から離れる。

「お姉ちゃん、強くないと壊れちゃうよ」

「私、相当強いから手加減とか要らないよ?」

「フラン、やるならここから離れてやって、咲夜もね」

レミリアにそう言われるとハーイと元気に手を上げてフランちゃん
んが外へと出ていく。

「ちよつと遊んでくるわ」

「ほどほどにな」

「最後に戦いたいじゃない、遊びでね」

「あの一件は本当にすみませんでした」

早苗さんが頭を下げる。

「いや、別に気にしてないから」

「いえ、こう言うのはハツキリさせた方がいいですから」

「それじゃあ、神奈子の事を何とかして、さつきから何故か睨ま
れ
て困ってるんだ」

(早苗の事をヤラシイ眼で見てんじゃねえよ)

「何か凄い殺気を感じるぜ」

魔理沙風に言ってみたが特に変わりは無かった。

「萃香、すでに酔ってんじゃん大丈夫か?」

「大丈夫、大丈夫」

足元が覚束ない。

「大丈夫、大丈夫」

「気のせいかな何かでかくなってないか?」

「気のせい、気のせい」

「ちよつ、デカイ!もう三倍ぐらいになってるからってぎゃあああ
ああああ!」

大きくなつた萃香に押しつぶされる。

「助けてええええ！」

宴会が始まりもう一時間が経過した。

「もこたああああん！」

白沢になった慧音が妹紅を押し倒す。

「慧音さんは盛るな！」

「もちろん、ベットのうえでだぞおおお」

「何言ってるんですか慧音さん！」

「もちろん、晴輝と慧音と妹紅の三人だぞおおお」

「夢の样だけど酔った勢いはダメだぞ慧音！」

「もこたんも酔ってるし！」

さらに一時間経過。

「もみもみ脱ぎまゝす、晴輝しゃんはみれれくらはい見ててください」

次は椀が徐に服を脱ぎ始めた。

「待て、脱ぐな！」

「いいねえ、もみもみ、次はスカート行ってみようか」

文はカメラのシャッターを連続で切る。

「お前は何処の写真集のカメラマンだ！」

「にとりんも脱ぐぞおおお！」

「誰か止めるの手伝ってくれえええ！」

さらに三十分経過。

「霊夢、どっちが先に晴輝に酒を飲ますか勝負しようぜ」

「いいけど勝ったら彼を頂戴」

「いいぜ」

魔理沙と霊夢が何かしら怪しい話をしている。

「待て、俺は了解してないぞ」

「何か面白そうね、私も混ぜてくれないかしら？」
そこにレミリアも加わる。

「人の話を聞けよ」

「それじゃあ、私から」

霊夢が手を上げる。

何もかもを諦めて頭を抱える。

トントンと肩を叩かれる

「んむっ！」

頭を上げた瞬間に何か口を塞ぐ。

霊夢の唇である。

口に何かしらの液体が流れ込み、相手の舌が自分の舌を舐める。

「んーんー！」

霊夢を離そうとするがガッチリと肩を掴まれて離れられない。

「んーんー！」

魔理沙とレミリアに助けを求めて見た。

「……………」

「……………」

「んーんんんーんんんんーんんんー！」

晴輝の今のセリフを日本語訳すると『お前等は何で口に酒含んでスタンばってんだよ！』である。

何とか逃げ出そうとするが舌を舐められる気持ち良さを体が覚えて力が出ない。

「んん、んーんんんんんー、んーんんんんー！」

日本語訳は（オイ、早く退かないと変なタグ付くから、子供には見せられなくなっちゃうから！）である。

パリン、と言う音が聞こえて霊夢の頭からガラス片が落ちてくる。
ダラーンとなった霊夢を退かすと割れた酒瓶を持った映姫さんがいた。

「映姫……………さん？」

割れた酒瓶を放り投げ、晴輝の体に倒れる。

「如何したん……………ですか？」

「……………いてください」

「へっ？」

何やら息を荒らげ、苦しそうにしている映姫さんがこっちを向いた。

「私の事を抱いてください」

駄目だ、これ以上やるとゲームで言う年齢指定Dのもう一段階上の指定になってしまう。

「小町さあああん、発情したアンタの上司を貰いに来てえええええ！」

数秒で小町さんを見つけてSOSを出す。

「でね、映姫様は少し寝てると私を丸一日説教すんだよ、如何思っ？」

「私も門番をしている時にうたた寝してたらナイフ投げってくるんですよ、私の方も酷いですってば！」

死神が門番と愚痴ってた。

「如何でもいいし、て言うか自分が悪いだけなんじゃ！」

しっかりと抱きついていている映姫さんを退かそうともがくが全然離れない。

「くそっ早くしなければこの作品に子供は見ちゃいけないタグがあ

ああああ！」

ムクリと背後で誰かが立ちあがる。

「うっさい！」

何やら黒白の球体とスペルカードを持っている。

「宝符『陰陽鬼神玉』」

「霊符『夢想封印』」

爆音と共に神社が一部大破した。

俺は満月の夜を舞ってそのまま地面に叩きつけられた。

この時、『この人たちの宴会に参加して良かった』と言う満足感と『二度とこの人たちの宴会に参加しないでおこつ』という決心が心を埋め尽くした。

45・宴会では適度な羽目の外し方を（後書き）

感想よろしくお願いします。

46 - 満月は男に自信をつけさせる

「これでよし」

宴会に参加した面々を大破してない茶の間に寝かせた。

「お前等は大丈夫か？」

蒼と紅は決戦前にボロボロになって帰ってきた。

「あのメイドマジで強い」

「あの子見た目以上に強かった」

「でも勝ったからいいや」

勝ったんかい、と言うツツコミを顔で表現する。

「とりあえず大破した部分は俺の能力で少しは治せたけど」

と言つても骨組みだけである。

「アンタ、行くの？」

背後に霊夢が立ってた。

「私達の助けは？」

晴輝はその場で首を振る。

アイツはたぶんここの住人を皆殺ししても止まらない。

死人は一人でいい。

「この事は他言無用って事で」

「駄目よ」

フラフラと立ちあが霊夢は即答した。

「そんな危険な奴はアンタ一人に任してらんない。それにアンタに

もしもの事があつたら何人悲しむと思つてるの？」

「霊夢は俺が死んだら泣いてくれるか？」

「別に、でも魔理沙はたぶん泣くかもね」

「それじゃあ、一つ皆に伝言を」

刀を右手に、槍を左手に持つ。

「『楽しかった、ありがとう』って、後、霊夢は酔った勢いでキスをしない事だ」

「酔ってないわよ、真剣にしたわよ」

「そうか」

何でそんな事をしたのか、何て野暮な事は聞かないでおこう。

霊夢にまた肩を掴まれた。

「死なないでよ」

そう言っただけで彼女は晴輝の唇に自分の唇を押しつけた。

「ったく、また建っちまっただろ」

晴輝は外に出て背中から白い翼を生やす。

「死亡フラグが」

晴輝はそのまま飛んで行った。

「幻想郷の住人ならそのくらい切り抜けて来なさい」

霊夢は酒瓶の酒を一気に飲み干した。

46・満月は男に自信をつけさせる(後書き)

感想よろしくお願いします。

43・5 - 彼女達の恋物語

話は宴会が始まる前の話だ。

「ねえ、あんたたちは彼の何処が気に行ったわけ？」

事の発端は霊夢にあった。

「な、何のことだぜ」

「魔理沙も文も椀、にとり、妹紅、慧音、ついでにここに居ないルーミアも」

「ルーミアはみすちーと今日は飲んでるらしい」

「んで、魔理沙、何処が気に行ったの？」

魔理沙に指を刺すと皆が面白そうに魔理沙に近づく。

「気に入ったというかアイツと遭ったのは私の家の前だったんだがな何と云うか倒れてて」

「魔理沙、隠蔽か」

そこに慧音が釘を刺した。

「慧音、如何いう事？」

「妹紅、実は魔理沙はな彼に大怪我させて自分が犯人だと言ってないんだ」

「魔理沙、アンタ……………」

呆れた顔が魔理沙の眼に映る。

「な、何で知ってんだよ慧音」

「悪いがルーミアから聞いた」

「んで、話に戻るけど何処で惚れたの？」

「まあ、何と云うか私と同じ所を感じたって言うか」

「ああ、アンタも彼も努力家だったわね」

「努力家って言うな。それで普通に三人で暮らしてたらいつの間にか眼が晴輝を追ってて……………」

「なるほど一目惚れですか」

「ちがっ、文！変な事言うな！」

「次は文、何で好きなの？」

「え、私なんかより椀や慧音さん、もこたんとかの方が」

「じっくり聞かせてもらいたいな、それとも丸焦げになりたいか？
片手から炎を出した妹紅はすごい剣幕で文を睨んでいた。

「どうせ私達も聞かれるんだ、一人でも多く道連れって事で」

慧音は白銀の髪を掻きあげる。

「文様、観念した方がいいですよ」

「くっ、まさかこの私が質問される側になるなんて」

観念したらしくため息を吐いて口を開いた。

「晴輝さんと会ったのは彼が二回目に山に来た時です。スクープの
ネタを椀が持つて来たんですが」

「そこで文様可愛いって言われて顔真っ赤にして飛んで行きました
もんね」

「椀、余計な事は言わなくていいですよこのヤロー」

文の瞳が椀を捉える。

「それから時間が経って彼の顔とか頻繁に思い出しちゃうし、何か
白黒と一緒に居るのを見ると少し胸が痛みます」

「何だ、文だつて一目惚れじゃん」

「魔理沙さんに言われたくありません！」

「それより椀はどうして？」

文のウインクの意味を理解したにとりが話を逸らす。

「私も文様と同じです、頼れる兄妹（おきょうだい）と言うか、頭を撫でてもらうと
凄く心地が良いんです」

「犬だな」

「犬ですね」

「犬ね」

「犬じゃないです狼です！」

魔理沙、文、霊夢の発言に必死になる。

「私は好意と言うより興味だね、顔は良いし、将棋も強いし、私は
椀と晴輝と三人で暮らしても構わないけど？」

にとりもアハハと笑って軽く流すが顔がほんのりと赤くなっていた。

「もこたんはどうしてですか？」

「皆、喜べ、今日は鴉の素焼きだぞ」

妹紅は両手から炎を出して構える。

文の軽い挑発に息を荒くする。

もこたんは「もこたん」と言う相性が嫌いらしい。

「ちよつと待ってる、主を消してくる」

「まあ待て、妹紅の話が先だ」

そう言って慧音が妹紅の片足を掴む。

「一人だけ逃げようたってそうはいかないぜ」

魔理沙がもう片方の足を掴む。

「別に好きってわけじゃない、ただ、興味があるんだだけだ」

魔理沙と慧音が妹紅の足を放す。

皆も何やら残念そうな顔をしている。

「次は慧音だぜ」

「いいネタを期待してますよ」

魔理沙と文が慧音をはやし立てる。

「私は彼が好きだが？」

慧音の一言に誰もが息を飲んだ。

「興味ではなく好意でだ、彼を見ていると頭の中が彼の事で一杯になる。こういう気持ちか恋なんだろ」

「さらつと恥ずかしい事言つたわね」

霊夢は呆れた顔をしていた。

「そこまでハッキリ言つと恥ずかしいを超えて清々しいね」

にとりも苦笑しつつも返答する。

「自分で言つて何何だが確かに恥ずかしいな。あーヤバい。顔真っ赤になつてきた」

顔を隠して慧音が笑つ。

皆は互いに互いと眼を会わせない様にそれぞれ違う方向を向いて

いた。

「まあ、様は男らしい所に惚れたのね」

霊夢がそう言つと皆は黙り込む。

「そういう霊夢はどうなんだ？」

「私？私は彼じゃないと思う」

「思う？」

皆が霊夢の一言に疑問を持った。

「思うと言つ事はそうでもあると言つ事ですか？」

「それが分かれば手っ取り早いんだけどね」

霊夢は立ち上がり、台所へと足を運ぶ。

「キスすれば分かるかも知れない」

その一言に皆の顔付きが変わる。

さつきまで穏やかに色恋話をしていた面々だがいきなり真面目な顔をする。

「おい、それは如何いう事……………」

「妹紅、口開けて」

ひょいっと霊夢が投げた物体が妹紅の口へと入った。

「……………っ！」

最初は警戒しつつも口の中へとダイブした物を中で転がして噛んだ。

だが直ぐに顔を真っ赤にして口を押さえて苦しみ始めた。

「むぐー！ー！」

何かの痛みに堪えている様な表情を見せて眼から涙を流す。

「か、辛い」

ズキーンと何かを射抜いた、もとい射抜かれた音が慧音からする。

「もこたーん！」

そのまま某怪盗三世並みのダイブを決めて妹紅を押し倒す慧音。それを聞かぬふりして他の面々が出ていく。

「彼が本当に彼だったのか………
意味深な顔をしている霊夢からは悲しみを顔に出していた。」

43・5 - 彼女達の恋物語（後書き）

番外編です。感想よろしくお願いします。

次回は44・5話です。何で宴会があんな事になったのかそれがわかります。

44・5 紅魔の屋敷に誰もいない

赤い屋敷が月夜に照らされ異様な雰囲気を出していた。

「フラン、準備は出来た？」

「出来た！」

紅魔館の主のレミア、いくら吸血鬼と言えど実の妹の前では笑顔を見せる。

「咲夜、行く準備を」

PA……………メイド長の咲夜はありったけのナイフを仕込んでいた。

「如何なされましたか、お嬢様」

主に笑顔を見せる咲夜だが背後には赤、紫、黒のオーラを出している。

「咲夜、別に戦闘に行くわけじゃないのだからもう少し装備を軽く……………」

「如何なされましたか、お嬢様？」

さつきと変わらぬセリフだが背後のオーラはすでに邪神と化している。

黒い上半身に背中から特大の剣が背中から出ていて瞳はまるで充血したかのように赤い光りを出している。

「咲夜、戦争に行くわけではないからその装備は置いて行きなさい」

「如何なされましたか、お嬢様？」

咲夜は足に小型マシンガンを装備している。
マシンガンはボタンを押すと弾が発射するようになっていて『にとり』と書かれている。

「咲夜、出来るだけ外でやりなさい」

「はい、お嬢様」

邪神PADの怒りは最高潮、それも全ての原因は、
「楽しみですね、晴輝さんたちも来るから……………」

神田晴輝である。

「咲夜、その怒りを静めて、美鈴までも怯えてるわ」
無数のナイフが美鈴にあたるギリギリ一ミリの所で壁へと刺さっている。

美鈴はナイフをギリギリで避ける為に非常口の絵の人みたいなポーズをとっている。

「今夜は楽しくなりますね」

「一つだけ言っておくけど彼ではなく彼のもう一つの人格が咲夜を挑発したほうよ」

ドアを開けてパチュリーは美鈴とナイフと壁の線り出すアートの「何これ」と一言感想を言っただけ入ってきた。

「あら、パチュリー様も行くのですか？」

「ええ、このセキュリティはちゃんと発動するように仕込んでいるから大丈夫よ」

歩いて来るパチュリーから何かが落ちる。

「えっと、パチュリー様？この怪しげな眼に優しい緑色の液体は？」

「美鈴、見なかつた事にしなさい」

美鈴から薬品を奪い取る。

「くっ、まさかこれが永遠亭の主と共同開発した相手の欲望を開放させる（魔法使いに抜群の効き目の媚薬成分入り）薬とは気付かれただか！？これを魔理沙に飲ませてあの男とアリスより先に既成事実を作ると言う私の野望が！！」

「ゼーんぶ言ってるわよ、パチエ」

「何……………だと！」

「最近のパチュリー様はボケに目覚めてますから」

「咲夜さん、このナイフ外してくれませんか？」

こんな会話があり紅魔館の面々は博霊神社へと行ったのだがこの後フランちゃんが悪戯に全てのお酒にこの薬を入れてパチュリーさんが皆の居ない所で（主の規制、媚薬という点で察してください）していた事など今のパチュリーには気が付かなかった。

後日談だがこの薬を飲んだ魔理沙だが薬より先に自分の持っていた酒が回っていたから効果は出なかった。

44・5 紅魔の屋敷に誰もいない(後書き)

次回は本篇です。

感想よろしくお願ひします。

ち向かう、何故諦めない、何故武器を放さない！」

幻想郷の日々が頭の中を過る。

幻想郷に迷い込んでもう二カ月近く。

春の四月から夏の六月へと変わり、俺の人生も変わった。

「男が武器を持つ理由？簡単だよ」

「譲れない事情があるんだよ、男の意地は決意の印。命懸ける価値がない？強敵が倒せない？そんな事で武器を手放したら終わりだつてんだよ！」

弾幕はさらに激しくなり体に数弾が被弾する。

赤いPと書かれたブロックやらが俺から出ていく。

「男なら武器持つて誰かの為に戦いたい、そんな英雄になりたいんだよ！」

「英雄になりたい？それはただの自己満足だよ！」

確かにそうかもしれない。

自己満足、自己中心的等の言葉がお似合いかもしれない。

「俺はこの幻想郷で英雄になりたいわけじゃない！英雄つてのは人助けたらなるものじゃない。誰かに必要とされてなるもんだ！今はお呼びでなくても、いつか誰かに呼ばれる。なら少し早めに英雄になつてやるよ！」

白い翼を大きく広げて自身の素早さを加速する。

「この一枚に全てを賭ける！」

「面白い、なら僕も！」

「龍符！」

二人は大きく息を吸って腹に力を貯める。

「『バーストボイス』！」

晴輝は白い光柱が黒からはその名の通り黒い黒柱が放たれる。

（もしも、生まれ変われたら、その時はまた魔理沙の助手として生まれたいな）

両者の攻撃は相殺されずにそのまま勢いを強めていく。

（和菓子屋開くのも悪く、ないかもな）

そして……………。

「『文々。新聞』、夏の特別号ですよー！」

朝早くから文が空を飛んでいた。

記事には大きくこう書かれていた。

『今日も平和な幻想郷、博霊霊夢のお悩み相談（有料）、今日もばくせつ霧雨魔理沙』。

晴輝の記事などは大きく書かれてはいなかった。

今日も皆は明るい。

一部を除いて。

よく見ると新聞の端にはこう書かれていた。

小さいが目立つように写真付きで『探し人、神田晴輝』と。

47・男の意地は覚悟の印（後書き）

主「そうだ、鬼巫女霊夢、フランちゃん&レミリアおせつ様の戦いの中に晴輝を放り込もう」

晴「確実に死ぬからやめい」

主「実はその後が地霊殿です」

晴「確実に死亡 入ったよ」

「感想よろしくお願いします」

48 - 過去は常に変わらずそこにある(前書き)

投稿が遅れてしまってますいません。

過去編、改めてスタートです。

ちょっとグロイです。

48 - 過去は常に変わらずそこにある

霧が濃い。

周囲を見渡しても何も無い。

少しうす暗く、何故か来た様な気がする。

「三途の河か？小町さん居るかな？」

だがまだ酔い潰れているだろうと思いい歩一歩と周囲を確認しながら辺りを歩行する。

「でも、三途の河じゃなさそうだな」

水の匂いと朝の匂い、平らな地面、霧が濃いというヒントから霧の湖付近だと気付く。

あの戦いで俺と黒は相討ちになった。

何とか気力だけでアイツの斧に魂は封じてそこで力尽きたんだが何故霧の湖に居るのだろうか。

またも周りを見渡すがやはり辺り一面が霧だけである。

と言ってもここまで霧が濃いと頭がどうにかなくなってしまいそうだ。

「とりあえずは、飛んでみるか」

少し足に力を入れて直にでも飛び立つ準備をして空を見上げる

翼を広げようとすると頭の上から何か落ちてくるのが分かった。

「何だこれ？」

包みが一つ落ちてきて拾い上げる。

「なにになに？」その仮面を被って魔法の森まで行け、正体は明かすな』って何だよ？」

怪しげな内容だがまあ信じてみよう。

他にやることもないのだから。

白い仮面の真ん中に龍と書かれている。

仮面を被りその場所を飛び去ったろうとしたが

翼は生えず、何も起こらない。

可笑しいと思いつつも一度試してみるが何も起こらない。

「俺のコマンドは『飛ぶ』で『はねる』じゃないぞ」
しかし何も起こらなかった。

あまり遠くなかったので歩いて魔法の森に入ったが良いが何処を
目指せばいいのかわからない。

ただ闇雲に歩いておけば何とかかなると思ったが何も起こらない。
刀も槍もなく何故か財布と壊れた携帯電話を持っていた。
「ヒントが少ないっての」

何も考えずに歩いていると金髪の赤リボンの頭が見えた。
ルーミアだと思って近づく。

「ルーミ……………」

だが鼻を刺す微かな臭いに足が止まってしまふ。

「死んだ生き物の臭い」
よく見るとそこらへんに骨やら肉塊が転がっている。

「……………ルーミア」

恐る恐るルーミアに声をかける。

「……………」

少女は確かにルーミアだった。

口元に血を付け、服の白い部分にも血を付け人の手に似た物に嘔
り付いている。

眼は赤く光り幽鬼のように体を左右に揺らしながら近づいて来る。

「貴方は」

スツとルーミアは姿を消す。

「食べても良い」

再び現れるとルーミアは目の前にいた。

そしてまたも姿を消してしまふ。

「人類？」

背後からルーミアの声が聞こえたので瞬時に後ろを向く。

ルーミアだいつもと変わらない姿だが性格が何故か変貌している。

「ルーミア、如何したんだ、人喰い妖怪の悪名は一年ほど前に無くなっただんじゃ」

ハツと晴輝は思いだした。

ルーミアが人喰い妖怪として恐れられていたのは一年ほど前の話。以前ルーミアと話をしていてる際に少しだけ聞いた。

『俺がお前を救った？』

『覚えてないのか？』

『身に覚えがねえよ、一年前って言ったら俺まだ来てないもからな』

そんな会話をしていたような気がする。

この会話から導き出せるのは仮説だがここは一年前で俺はここでルーミアを救ったと言う事だ。

「クソッ！」

そのまま全力疾走で逃げるが今回のルーミアは最初に会った時とは違う。

木を蹴ってすごい勢いで追い駆けてくる。

「如何したらいい」

翼は生えない状態で妖怪相手に体力勝負なんて出来やしない。

「何かないか」

そう言っつてポケットに手を突っ込む。

「ん、これつて」

手につかんだ物こそこの窮地を抜け出す切り札。

足を掴まれた晴輝はそのまま態勢を崩してこける。

「くそっ」

そう言っつて仰向けになると両手をガッチリとルーミアが掴み、そのまま顔を近づける。

「いただきま……………」

「待て！」

頭に噛みつきこうとするルーミアの動きが止まる。

「命乞いなら間に合ってるぞ」

「俺なんかよりもっと美味しい物食わしてやるから」

そう言って手の平を広げる。

「これは何だ？」

「飴玉って言って甘いんだ」

ルーミアは俺から離れ飴玉を掴む。

飴玉の袋を破いて飴玉を口に放り込む。

「噛み碎くなよ」

そう言つと飴玉を口内で転がし始める。

「甘いな」

ルーミアは晴輝から気を逸らしたので今のうちに逃げようと後ろを振り返った。

「逃げるな」

そう言われてルーミアの方を向く。

「もう一個」

そう言われてまたも飴玉を出す。

「ない」

そう言つとルーミアは涎を垂らしてこっちを見る。

「待て待て、美味しい物を食った後に不味い物を食うのはおかしいだろ」

「ならもう一個」

ため息を吐き頭を掻く。

「人里ならあるかもしれないからちよつと行つてくるわ」

「逃げるから駄目だ」

「なら近くまで一緒について来い」

とは言ったもののルーミアが人里に行くと確実に慧音さんに退治される。

そう思いルーミアを妖怪の森の近くに待機させて人里まで駆けて

行
っ
た。

48・過去は常にならならずそこにある（後書き）

主「何でこんな事になったのかはまだ不明。さあ鬼巫女霊夢登場はもうすぐだ！」

「感想よろしくお願いします」

49 - 時は狂うが未来に害なし

徒歩なので二十分ほど経ったが人里には何とかこれだが、皆の視線が痛い。

まあこんな仮面なのだから仕方ないだろう。

「すみません、ここの飴を全部」

財布から金を出そうとすると鍋と野菜が視界に入る。

「出来ればそれとそれとそれも」

いろんなものに指を刺す。そうめん、麺つゆに夏野菜と鍋。そう言つて風呂敷に包んでもらつて荷物を手に入れる。

「あ、慧音さんだ」

途中、慧音さんを見かけるが声はかけない。

ここでは正体を明かしてはいけない様な気がしたからだ。

「ちよつと待てくれ、その……… 仮面君」

仮面君とは多分……… 絶対に俺の事だろう。

「はい」

少し声を高めて喋る。

「君から妖怪の匂いがあるが何者だ？名を名乗れ」

警戒しているのだろう。

見知らぬ妖怪が里に下りていたら誰でも警戒するだろう。

「マ、マスク・ザ・ドラゴン、俺は妖怪じゃない、人間だ」

咄嗟に思いついたのがどこぞのプロレスラーみたいな名前だ。

キン クマンとかタ ガーマスク辺りの。

「ドラゴン君、ではなぜ君は妖怪の匂いがあるのかな？」

さっきまでルーミアと居ました、と言えばた絶対にやられるだろう。

そんな事を考えていると頭にあの言葉が響く。

『俺がルーミアを助けた』と言つ言葉を実行したいと思つた。

「実は、人喰い妖怪に襲われたんだ」

「何、ルーミアにか！」

喰いつきはOKだな。

「ああ、でも偶々持ち合せてた飴玉を渡して交渉したら普通に帰してくれたよ、アンタも森に行く時は飴を沢山持って行くと良い」

「ああ、分かった。他の皆にもそう伝えておくよ」

計画通り事は進んだ。

飴さえ持つていれば助かると言うこの教えが皆に広まれば大抵の奴らは森に行く時に飴を持つはず。

後はルーミアにこの事を教えてやれば良い。

「それじゃあ気を付けるんだぞ」

慧音さんはそのまま寺子屋へと行ってしまった。

魔法の森へと戻り火を起こす。

能力は完全には消えていなかったらしく指を鳴らすと指先から炎、氷、電、水の属性の小さな球体が出た。

火の球体をかき集めた枝に近づけると火が燃え移り調理が出来るようになった。

「とりあえずはそうめんを茹でてっ」と

ルーミアが何をしているのかと興味を持って近づいてきた。

とりあえずルーミアの血塗れの服を何とかしたい。

「ルーミア、その服何とかしたいから一旦脱いでくれ」

ルーミアに風呂敷を手渡して晴輝は反対方向を向く。

「分かった」

そう言っつて服を脱ぎだす。

「ほら、脱いだぞ」

脱いだ服を受け取り近くの川で洗濯を始める。

「血がすげえ染みついている。血の臭いも、こりや悪臭だな」
力を込めて服を洗う。

その現場をルーミアはただ見ているだけだった。

「とりあえずはよし」

食後にゆっくりと片付けを始める。

ルーミアの洗った服を焚火で乾かしていた。

「ルーミア、人間なんか食って美味しいか？」

ルーミアは首を横に振る。

「なら何で食べる」

「お腹が空くから」

分かり易い回答だ。

腹が空けば何かを食べる。その食べ物が人間だっただけなのだから。

「人間は食べちゃダメだ」

「人喰い妖怪に人を食うなって変わってるな」

確かにそうかもしれない。

肉食動物に肉を食うなど言ってるのも同然。

「なら人間に近づいてお腹空いたって言いな、そうすれば何かくれるか逃げるから、人間は喰ったらダメだ」

ルーミアの服を触り乾いたか如何か確かめる。

「ほら乾いたぞ」

ルーミアに服を渡し再度後ろを向く。

「着たぞー」

振り返るとルーミアが鍋を木の棒で突いていた。

「もう少し女の子らしさを付けるよ」

何故、こんな事になったんだろうか、そう思ってしまう。

本来あの決戦で俺は死んだはず、なのに何故か一年前の世界に来ている。

「如何いう事だろうな」

上を見上げる。

「ほらっ」

ルーミアは何かを投げてきた。

投げた物を受け取ると何かの手紙だ。

ルーミアと会う前にもこんな手紙を貰った事を思い出す。

「なになに？ 第一関門クリア、第二関門へ博霊神社へ正体はばらすな」

関門と言う言葉に引っかかる。

これは何かの試練なのかと思ひ手紙を調べる。

その裏に小さく何か書かれていた。

『PS・飛行能力は戻ったぞ』

「PS？」

明らかに幻想郷の人間じゃない。

俺と同じ外来人かと疑問を思いつつも手紙をポケットに入れる、

「もう行くのか？」

「ああ、他にやる事が出来たんだ」

翼を広げて飛べるか確認する。

「また、会えるか？」

「そうだな、十ヶ月後にこの森でマスクを被ってない俺がいる。格好は同じ、記憶は無いと思う。もしも見つけてやったら怖い顔で追い駆けてやりな」

荷物を包み翼を羽ばたかせる。

「じゃあな、また十ヶ月後この森で」

そう言つて手を振るとルーミアも手を振って返す。

「まったく、自分で自分の恐怖の鬼ごっここの約束するなんてあの時は分かんなかっただろうな」

可笑しく笑い徐々に加速を始める。

「さあ、次は腋巫女だ」

49・時は狂つが未来に書なし(後書き)

感想よろしくお願いします。

50 - 鬼巫女ガチギ霊夢（前書き）

修羅場とかはまだ少し先です。
面白くなってごめんなさい。

50 - 鬼巫女ガチギ霊夢

さっきまで晴れてたとは思えない曇り空の下、羽を纏う冷気で体を冷やしながら博霊神社上空に辿り着いた。

いつもの様に参拝客の姿は見えない。

だが何故か箒で掃除している巫女の姿もない。

「如何したんだろ」

そのまま下に降りて見ると神社は変わり果てた姿になっていた。

賽銭箱は破壊され、部屋の中もぐちゃぐちゃ、その上地面が抉られている。

「何かが暴れたとしか考えられないな」

神社の奥を進むと巫女服の女性を見つける。

姿、格好からして霊夢だが何か様子がおかしい。

「あら、参拝客かしら？」

眼が赤く染まり、殺気のような物を放っていた。

「あの、これは如何したんですか？」

「これ、これねえ、別に何でもないわ」

何でもないって事は無い。

明らか何か事件が起こった後だ、今にもコン君がダイブしてきてもおかしくないくらいだ。

「貴方、人間じゃないわね、妖怪？」

「まあ、半人間妖怪って所かな」

「妖怪、なら退治しないと」

目の前に居た霊夢が何の前触れもなく消えた。

だが殺気は凄く身近から感じる。

その瞬間視界がぐらりと揺らぐ。

強い衝撃が脊髄を命中しそのまま前に倒れ込む。

「如何したの？こんなあっさりと」

背中に命中したのは弾幕でも鈍器でもない。

片足で何かを蹴り上げた様に
『足』。

霊夢の蹴りが晴輝の背中を抉ったのだ。

その一撃は岩より重く刀より鋭い、まるで足自体が一つの武器の様だ。

「流石は博霊の巫女様とでも言ったら許してくれるか？」

「今、とつても虫の居所が悪いのよ」

そう言つて陰陽玉を八つほど霊夢の周りに出現させる。

三十？ほど宙に浮きお札を天に翳す。

「夢想天……………」

「魔符『スターダストレヴァリエ』！」

カラフルな星の形の弾幕が降り注ぐ。

「霊夢、神社を破壊した人物が分かったぜ！」

この弾幕を出した張本人が空から降りてくる。

箒から降りて霊夢の耳に何か呟いている。

「……………魔理沙」

「魔理沙、ならコイツの相手をして、私はその犯人とやらをグチャグチャにしてくるから」

霊夢は陰陽玉を片付けてそのまま飛んで行ってしまった。

「アンタが相手が魔法使いさん」

「残念だが今は構つてられないぜ」

そう言つて魔理沙も箒に跨り飛び立とうとする。

「乗りかかった船だ、俺も行こう」

白い翼を広げて飛行の準備をする。

「お前、普通の人間か？」

「アンタには言われなくなかった」

魔法を使っている時点ですでに魔理沙もこっちの世界の住人なのだから。

50 - 鬼巫女ガチギ霊夢（後書き）

感想よろしくお願いします。

5 1 - 紅魔館の危機（前書き）

過去編の最終回

51 - 紅魔館の危機

紅魔館、真紅の館。

館の色はこれまで紅魔館の主、レミリアに食べられた物の血や、侵入者の血が壁に滲んでいると言う噂を聞いた事がある。

だがそんな館も今はボロボロである。

その原因が……………。

「姉妹喧嘩？」

「フランってというのがここ最近まで閉じ込められていてな、館の中なら許してたレミリアに外に出たと言って言ったらこのザマだぜ」

ボロボロになってしまった館の上で武器を持った二人が戦っていた。

「なら紅魔館の他の住人が止めればいいじゃないか」

「ああ、そうなんだが止めに入った門番とメイドはレミリアに一喝、もう二人は図書館を守っていて他の妖精メイドは無力ってわけだぜ」

「でも、あの巫女さんとこの件は如何いう関係が？」

「ああ、飛んでいた二人の弾幕の流れ弾が博霊神社に被弾、霊夢はブチギレ」

「分かり易いな」

紅魔館の上で戦っている二人に鬼巫女も参上して大乱闘へと発展する。

「ヤバい逃げるぞ！」

魔理沙が急に逃げ出した。

魔理沙が指さす方を見ると無数のお札がこっちに向かって飛んできている。

「何だよアレ！」

「夢想天生、霊夢の最強の大技でホーミング付きのお札が敵向かって飛んで行くぜ」

「俺らも敵ってことか!？」

「そう言う事だ！」

二人で力を合わせてもこれは無理がある。

「とりあえずあの2人をどうにかしないとな」

「私が何とかするからアンタは早く逃げな」

八卦炉を持つて魔理沙が弾幕の嵐の中を飛んで行く。

「くそつ、スペカも武器もない俺に何が出来るんだよ！」

魔理沙が一人で紅魔館の危機（ここで恩を売っておけば後々本を借り（パクリ）易くなると思ったから）に自ら向かって言ったが晴輝には四つの武器もスペカも持っていない。

ふとあの謎の手紙が思い浮かぶ。

「この関門つてのをクリアしたら飛べるようになった、って事は」
大急ぎで博霊神社へと飛んで行く。

「とりあえずは手当たり次第に探すか」

ボロボロの博霊神社に入り部屋の中を物色する。

別に金品を盗むわけではない。二つ目の封筒の答え、憶測だが過去がこの状況を何とかしてもらいと死んだ俺に助けを求めてきたのではないかと思うのだ。

神も住む幻想郷、時を操る神がいてもおかしくは無い。

「封筒を見つけてさっさと閻魔様に裁かれに行きますか」

そう言つて博霊神社に乗り込んだ。

「うお、同じ服が何着も」

タンスを開けると同じ服がたくさん入ってる。

「これは？萃香だ」

眼を回した萃香を発掘した。

「これは……………家計簿、ワーオ、赤字だらけ」
見なかった事にしよう。

「まったく、無い！」

まさか、読みが外れたと言うのか。

賽銭箱の残骸に腰を下ろしてため息を吐く。

「クソ、一時間は経ったか」

こうしてる間にも今あの2人が戦っていると思うと自分はどうだ
け無力なのかを思い知らされる。

「こうなったらスペカなしで」

バキツと言う音が尻の下から聞こえてくる。

「ヤベっ何か折れたか？」

賽銭箱の残骸から降りて座っていた場所を見してみる。

何かの小包がある。

「何だこれ？」

魔理沙は三人の戦いを止めようと乱戦の中一人で戦っていたが願
い届かず、惜しくも早々とリタイヤしてしまった。

「お姉さま、如何したら分かってくれるの!？」

「フラン、少し調子に乗り過ぎよ!私は館内は許したけど外何てま
だ早いわ!」

「まずアンタ達は私の神社の弁償をしなさい!」

「禁忌『レーヴァテイン』!」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!」

「最大出力夢想天生!」

三人がスペカを取り出して一斉に叫ぶ。

三つの攻撃が互いに相殺して消える。

三人とも限界が近く、息を切らしている。

「そこまでにしときな」

晴輝の声に全員が振り向いた。

「なあ、皆少し頭を冷やそうな」

新たに一人加わって大乱闘となるはずが何と新参者が他の三人を蹴散らせたのだ。

紅魔館のほとんどが半壊したこの件は幻想郷でとても有名になった。

そして仮面の男も幻想郷で一時期だけ噂になった。

51 - 紅魔館の危機（後書き）

すいませんですが原作ストック切れのため一旦休暇をもらいます。
今週の金曜日からまた再開させていただきます。

急ですいません。

次回は地霊殿編です。

感想よろしくお願いします。

52・地霊殿は下へそのまま真っ直ぐ(前書き)

EXボスがでてくるよ。

52・地霊殿は下へそのまま真っ直ぐ

皆さん、お久しぶり神田晴輝です。

作者のストック切れ事情や過去編があまりにも力オスっぽかったので今から一発芸をします。

「助けてくださあああああああああああああああーい！」

如何でしょうか笑って貰えたでしょうか？

「笑えねえよ！オイ作者、何で俺になつて勝手に謝罪してんの！？助けるよ！」

現在、俺、神田晴輝は如何いう事情か奈落の底へと落とされた。

一年後の世界、まあ元の世界、現在に戻った俺は現在、下へと落ちていた。

幻想郷にはここまで深い所があったのかと言うぐらい深くそこがまだ見えない。

「くそ、力が使えたら羽生やして飛べるってのに」

龍の力の一つ、まあ羽を生やすだけだが武器も能力も全てスペルカードになり体には宿っていない。

だがスペカに能力全てを移植した途端に能力の反動は無くなったが常時使えなくなつたので便利とも不便ともコメントできない。

「とりあえず体を横にして落ちる速度を和らげないとな」
体を横にしてみるが風が半端ない。

「そつだ伝説の配管工の様に壁キックとかで上に行けるのでは！」
そつ言つてとりあえず壁に足を近づける。

「どりゃああああー！！」

足が壁に触れるが足を壁に持つて行かれそうになつたので中止。

「どつすりや良いんだよ」

ただ必死に空中でもがくだけで何も出来ない。

もう底なのか明かりの様な物が視界に入る。

「クソッ！」

『死』と言う言葉がやまびこの様に耳元で聞こえてくる。腹を括って眼を瞑る。

「お兄さん助けてあげようか？」

絶望に満ちた心を浄化してくれたのは女性の一言。

救いの女神、そう思い辺りを見渡すが誰もいない。

死に向かう俺に性格の悪い死神の吐いた幻聴だったのだろうと、諦めかける。

「ここだよお兄さん」

声の主は身近にいた。

そう背中にくっ付いていたのだ。

背中に体が触れている時点で気付くはずなのだがしかし彼女は背中にくっ付いていた。

フリルの沢山ある服に白銀の髪を風に靡かせ無邪気な笑顔でこっちを見ていた。

だが彼女の外見にもう一つ気になる所があった。

胸のあたりにある青い球体、まるで閉じた瞳を思わせるそれが気になって仕方がない。

「ああ、助けてほしい」

「お兄さん名前は？」

「神田、神田晴輝」

「私は変わらずお兄さんって呼ぶけど構わないよね」

「OK、だから早くヘルプミー！」

彼女は俺の前に出てきてそのまま抱き付く様に腕をまわす。

彼女の浮遊の能力の御蔭で落下速度は弱まっていきそのままゆっくりと降りて行った。

「懐かしい大地が見える」

あれから抱き合ったまま下に行くとうとう地面が見えるようになった。

ほんの数分の事がまるで数年も前の様に感じられる。

臨死体験をした人間は生きてる素晴らしさを実感すると言つのは本当だったらしい。

「お兄さん、感動してる？」

「してるしてる」

ガッツポーズを決めて眼から涙が零れる姿を少女は面白そうに笑う。

「君もありがとう、助けてくれて」

「自己紹介がまだだったね私は古明地こいし」

「こいしちゃんありがとう」

改めてお礼お言い頭を撫でる。

「そう言えばここは何処なんだ？」

「ここはね、旧都」

「旧都？」

「地上で忘れ去られた者、自らの力を恐れた者、嫌った者が集まる地下世界。旧都、前の名は……………」

こいしと俺が地面に立つとこいしがタッタッタと前に出てこつちを振り返り口を開いた。

「旧地獄」

その言葉は俺の大地への感動を全て消し去り悪寒を残した。

「よろしくね、お兄さん」

52・地霊殿は下へそのまま真っ直ぐ（後書き）

どうでもいいぜ 雑談コーナー

主「どうも久しぶりです、作者兼up主の辻虎です、暑中お見舞いもうしあげやす」

主「雑談コーナーではヒマつぶしの雑談を語るだけですなので飛ばしてもらっても構いません」

雑談開始

主「それなんですがね、この作品をやる前に実はこの作品の兄貴的な作品があるんですよ、『自重しろ俺！紅魔館編』と言って

・微エロ・これマジでシちゃってるんじゃないやね？・マジやばいって！等のエロヤバイタグがたくさん入ってくる紅魔館のある執事のお話なんです」

主「若気の至りってやつですかねえ。まあ別に自分的には連載しちゃっても良いかなテへっ程度に思ってるんですけど、まあまだ東方に目覚めて浅い時の作品何でちょっと不備な面もあるんですけどもね、まあ色々と悩んでいるわけですよ」

主「感想よろしくお願いします」

53・頭上注意、危険人物注意（前書き）

?caution? ?caution?

今回出てくるヤマメ、キスメさんは

たぶん皆さんの予想している性格と違われるかもしれません。

ご注意ください。

どうしてこうなったと思った人は作品の下の雑談コーナーをご覧ください。

53 - 頭上注意、危険人物注意

こいしちゃんはそのままだっかへ行ってしまった。

こいしちゃんの書いたらしきメモがポケットに入っていたのでそのメモに従って進もうと思う。

スペカが無い現在、落ちてきたあの穴を登るなんてしたくはないから。

まったく抜け目のない子だ。

メモにはとある場所への行き方が記されている。

「前に進みますか」

当ても何もない晴輝は渡されたメモを見ながら歩き始めた。

「でも妖怪だらけだな」

四方八方何処を見ても妖怪だらけ。

目玉が体中にある奴や完全に人に化けている者までいる。

もしかすると妖怪横丁なのかもしれない。

「まあ、とりあえずはこの地図の場所に行くしかないか」

メモの指示に従って数分歩いて目的地に着いたが誰もいないし何かある様な様子もない。

「危ない」

突然の叫びに驚き辺りを見渡す。

後方から桶の様な物が飛んでくる。

少し腰を曲げて桶をかわす。

完璧だと思いき態勢を直した晴輝に

「危ない」

頭上から桶が降ってきた。

頭部に強打した晴輝は不意の一撃のあまりの痛さに悶絶する事を忘れてその場に倒れ込んだ。

「何が……………」

眼を覚ました時に視界には二人の女性が入っていた。

桶に半身を入れた緑髪の少女と金髪に黒いリボンの少女だ。

「大丈夫ですか？」

緑髪の子が心配そうな顔をして言った。

「あゝ、『確か7時ダヨ、全員集合！』でしたっけ？」

「違います、8時です。でもその様子だと大丈夫そうですね」

「まだ少しクラクラするけど大丈夫」

眼を押さえて。

「まさか、追加攻撃があるなんて……………」

と言うか横から来た桶をかわしてなぜ頭上から降ってくるのだから？

「ほんとに災難だったね」

人事の様に流す金髪の少女はそつと頭を撫でてくれる。

そしてもう一つの問題に気付く。

「これは……………膝枕？」

「そうだよ、如何？」

「寝袋で寝るよりぐっすり出来そう」

「ならぐっすり寝ても良いよ」

ああ、頭部を撫でられ、柔らかい膝の上、何かだんだん眠くなつて……………。

「じつくりと犯してあげる」

「いえ、初対面の人の膝で寝るとかそんな事はしませんよ」

今、何て言ったの？何を言ったの？明らか俺が（いろんな意味で）食べられるな事を口走って無かった？

気のせいだ、心の迷いだ、何も無い、そうだ聞かなかった事にしよう。

「じつくりねっぷり可愛がってあげようと思ったのに」

「ねえ、ねっぷりって何？何の擬音？何の効果音？」

「いつもの事なので気にしないでください」

緑髪の少女はキスメちゃんで、

この18タグを付けてもいい金髪の人が黒谷ヤマメ。

とりあえずヤマメに（いろんな意味で）食べられそうになったが、まあこの子がこいしちゃんの流れなのかもしれないと話をしてみようと、

「とりあえず地霊殿だったらこっちだよ
ビンゴ。」

そう言つてヤマメに腕を引つ張られる。

「人気のない所に行きたい何て分かつてるね〜」

「別にやましい事を考えてるわけじゃない」

「ヤマメ自重してよ」

「はい」

どちらかと言うとキスメが妹で姉がヤマメの様な気がするのだが、全く持つて立場が逆の様だ。

「ここが地霊殿です」

大きな建物の前に見知っている人物が立っている。

「お兄さん、早かったね。お姉ちゃんに叱られるから先に来てたんだ」

こいしが手を振つてやってきた。

「こいしちゃんこいしちゃん」

近づいてきたこいしにヤマメが話しかける。

「彼を頂戴」

肩をがっしりと掴み言った。

「ダメ」

そう言つてこいしはするりと軽く体を捻つてホールドを解除する。そして晴輝と腕を組みそのまま館内へと入つて行った。

「ああ、アレ欲しい、外見も可愛いし何か虐めがいがあると言うか私の蜘蛛の糸で拘束プレイってのも乙よね」

じゅるりと涎を垂らすヤマメに対して、

「もうちょい自重してよヤマメ」

と落ち着いた突っ込みで返すキスメであった。

53 - 頭上注意、危険人物注意（後書き）

主の雑談コーナーキャラ紹介編

主「どうも辻虎です、何故キスメ、ヤマメがあんな性格かと言うと」

一週間近く前、友人とお洒落なバー（レストランのドリンクバー）でノンアルコールカクテル（この年にして色んなジュースを混ぜ合わせている）を飲みあっていた時の話である。

友「何か過去編がカオスになりそうだな」

主「あ、バレた？テヘっ」

的な会話をしていて咄嗟に友が口を開いた。

友「キスメをクーデレ、ヤマメを微エロキャラにするってどう？」

主「それやあああああああああ！」

主「的な会話をして出来上がったのが『（微）エロいぜヤマメさん』である、実際はそんな経験値など全然ないので攻めると弱い感じしてす。

感想お待ちしております」

54 - 地霊殿の主(前書き)

ちよつと両親の実家に帰省、感想の返答は明日になります。

54 - 地霊殿の主

こいしちゃんに案内されてそのまま奥へと進むと机に突っ伏して寝ている少女が居た。

薄い紫色の髪、こいしちゃんの衣装に後れを取らない不思議な格好に体格、まあ姉妹なのだから姿や服装が同じでも分かる気がする。だが彼女もあの目玉の様に物を持っていた。色は赤、目玉と体を繋ぐ配線？は直流のこいしちゃんと違い複数に枝分かれしていて絡まったら大変だろうな等の事を思ってしまう。

「別に絡まっても大丈夫です、慣れたましたから」
ムクリと体を起こして眼を擦る。

「こいし、彼は？」
さとりちゃんは俺を一度見て視線をこいしちゃんへと移す。

この姉妹、何処となくあの吸血鬼姉妹に似ているのは気のせいなのだろうか。

妹に手を焼く姉、そして姉の苦勞を知らない妹、と言う所だ。

そして推測だが両者ともに妹を愛しているのだろう。

「前半は正解です。後半は不正解ですが」

「っ！」

「お姉ちゃんは人の心を読む事が出来るんだよ」

「ただ一人、妹の事は理解できませんが」

「それでね、お姉ちゃんこの人はお晴はるって言うんだけど飼っている？」

「良いわよ」

「ちよつと待て、何だつて、お晴？飼う？俺は捨てられた子犬か？
機嫌を損ねたと思いきいしちゃんが俺の耳元で囁く。

「ごめんね、今人手が足りないから悪いけど仕事手伝ってくれないかな？」

「そう言うのはもう少し早く言ってくれよ、て言うかアレか、ここ

では従者はペット扱いなのか？」

こいしちゃんはこくりと頷く。

「お兄さんなら適任だと思うんだ」

まあスペカが無い今の現状では飛んで帰ることも不可能、ここもそこそこ広いし、まあ一週間、二週間は大丈夫だろう。

「まあ仕方ない、手伝おう」

仕方ない、ここは了承しておこう。

「全て聞こえてるわよ？」

さとりちゃんが遠くから見つめる。

「そう言えば貴方は何の動物なのかしら？」

さとりちゃんは徐に質問を投げた。

龍と言えば簡単だ、だがあくまで化身、龍とは少し違う存在と思うのでこつ答えておこつ。

「とかげ 蜥蜴」

「蜥蜴……………また一段と賑やかになりそうね、それと主従の関係を忘れないでね、お晴」

55・地霊殿での奮闘 前編

地霊殿に来て早五日、仕事を任せられ四日になる。

地霊温泉郷、そこが職場である。

文字どおり『銭湯』の事だ。

週五日、休日は土日です。特に不満などは無い。

地霊温泉郷の番頭に任命された俺の仕事は管理と清掃、その他にお客を喜ばせるサービス提供等も仕事の一つだが二つ問題がある。

まず一つこの銭湯……………男風呂が無いのだ。

もう一つの表現がある。

「女風呂しか無いんだよなここ」

男風呂建設の費用、土地を大半を女風呂に注ぎ込み施設等の設備費に全額投資、あと男性客より女性客の方が来ると思われるからである。

まあ、別にここまでは特に問題は無い。

俺の仕事は管理、清掃であってポイラー室を調整したり店を閉めた後に掃除をするだけだ。

ここからが二つ目の問題。

二日前、客足はそこそこだったのでこいし様がこんなチラシを旧都全域にばら撒いたのだ。

『カッコいいお兄さんがお風呂上りにマッサージしてくれるよ』

「こいし様……………」

これのお蔭で俺は女体を間近で御観覧出来ると言う特権を手に入れたのだが、もしもお客に浴場で欲情してみる俺はこいし様のお仕置きを喰らう事になる。

余談だがさとり様のペットの猫が仕事中に同僚の鴉に発情してお仕置きを喰らったとか如何とか、亀甲縛りでトラウマを暴露されて精神が死滅しかけたと聞いたことがある。

「絶対に失敗してはいけない」

もしもこの事が地上の連中に知れたら俺は消炭になるだろう。

「その歳で尻に敷かれていると大変ね」

背後からの声に反応して振り向くとさとり様が立っていた。

「さとり様、如何したんですか？」

「ええ、少し顔を出しに来ただけよ、頑張っているわね」

自由翻弄としているこいし様とは別にさとり様は本当に優しい。

「まあ、許してあげてこいしの行動は気紛れだから」

「理解してますよ」

申し訳ない様な顔をするさとり様に笑顔で返す。

「それじゃあ、貴方の事は出来るだけ広めないわ、上に戻った時に大変でしょ」

「まあ、別に嫁や恋人が居る訳じゃないんですけどね」

ただこの事がバレると何故か俺を処刑しようとする魔法使いやら不老不死やら先生やらが居るだけだから、アレ視界がぼやけてきたぞ。

「……………貴方も苦勞人なのね」

「……………はい」

涙をハンカチで拭ってくれるさとり様の親切が心に沁みる。

「それとあと一つ、明日にでも新聞記者がここへ来るのだけれど」

「よし、さとり様。こいし様には俺が死んだ事を黙っててくださいね」

「止めなさい、何を唐突に、ちょ、ロープで首を絞めようとしなさい！」

「放してください！これは罠です！」

もうあの人しか思い浮かばない。脳内で「あややややや」って言うてる。シャッター切ってるのが見えてくる！

「文にバレたら俺は頭突かれ、燃やされ、マスパされる！ああ、霊夢にあの時の事をキス聞く前に死ぬのはゴメンだ！」

「落ち着きなさい！ああ、いろんな感情が私の中に、落ち着きなさい！」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イゴメンナサイ……………」

「くっ、一気に感情が黒く染まって行く」

そんなこんなで今日の仕事は捗らなかつた。

取材当日、遠足の前日にはしゃぎ過ぎて眠れなかつた子供の如く、
まあウキウキと言うよりはガクガクブルブルだが、色々あって眠れ
なかつた。

「あやや、ここの新しいサービスのイケメンのマッサージですがそ
れほどカッコいいのですか？」

「まあ、こいしが勝手にしたサービスだから見て判断して頂かない
と……………」

そんなこんなで文が直ぐそこまで来ているのが分かる。

「ええ、それで彼がここの番頭のお晴……………」

「よ
さとりは硬直して動かない。まあそれも当然だろう。バレない為
には顔を隠す必要がある。」

「友の為ならこの身を捨てて盾となり、主の為なら自分の命にやあ
惜しが無く使う、地獄の業火をその身に浴びて、今日も旧都の地を
這う蜥蜴。どうもマスク・ザ・ドラゴンです」

龍と描かれた仮面を被り真っ白の学ランを赤く染めて後ろに温泉
魂と直筆、さらにズボンをズタズタに引き裂いてボロボロのダメー
ジジーンズ風。

セリフは必死に徹夜で考えた。

「え、えっと、これはこれで……………」面白いですね」

（すいません、さとり様、ここでバレたら俺死んじゃうんでこの格
好です。お願いだから許して）

（まあ、致し方ありませんですがお客様に失礼な事だけは止めてく
ださいね）

第三の目とアイコンタクトをして説明を終わらせる。

「とりあえず、まあ温泉の方を先に調査しましょう」

助かったと心撫で下ろす晴輝をさとりは耳打ちをする。

「あくまでその場ののぎだから気を付けてね」

55 - 地霊殿での奮闘 前編（後書き）

雑談

主「以外に連続していくとネタが尽きてくる、夏休みの最後を宿題にまわしたい」

56 - 地靈殿での奮闘 後篇(前書き)

主の真面目な話が最後にあります。

56 - 地霊殿での奮闘 後篇

女風呂、男子禁制の世界。汗臭い青春のたった一度のオアシス樂園。
高校生の頃、クラスメイトがバカやって退学した話があった。

何でも数人の罪を自分一人で背負い一人自首した男。

その男が生活指導の教師に説教されている時、彼はこう答えた。

『目の前に女風呂オアシスがあったからさ』

隊長の最後の言葉を聞いた副隊長はその言葉を全校集会で話した。
俺はそこで流したのだ。

涙を……………そんな馬鹿げた理由で人生を棒に振った男の勇姿に俺
は、全校生徒の男子全員が涙を流した。

その後、彼は忽然と姿を消したのだ。

だが忘れてはいけない。

立派な英雄の名前を……………彼の名は

「何、現実逃避しているのかしら？」

はっと気が付くとドアの前で涙を流していた。

スタッフ専用の入り口を目の前にドアノブを握りしめた晴輝は過
去の英雄の事を思い出していた。

「ああ、英雄の伝説を少し見ていたよ」

「ただの覗きじゃない」

まあ確かに言われてみればそうだ。

「とりあえず、そこで文さんが待ってるわよ」

ドアを開けようとするがバレた時の恐怖が体を硬直させる。

「行ってきます」

ガチャリとドアを開けた。

視界に入ってきたのは一人一人がギリギリ寝れる小さなベットに俯
けで寝ている文である。

体をタオルで隠しているが汗の所為でボディラインがハッキリと
分かる。

「如何でした湯加減は？」

とりあえず場を濁す為に日常的な会話を持ちだす。

「最高でしたよ、えっと……………」

「龍で良いですよ」

「龍さん、ここの管理は大変じゃないんですか？」

「ええ、でも出来ない事は無いですね」

順調に話が載ってきた所でマッサージを始める。

「如何ですか？」

まずは腰、親指でツボを刺激して行く。

「あゝ効きますねえ」

徐々に指を上へ持っていく。

「如何ですか？」

「あー、気持ち良い」

気に入ってくれたみたいだ。

「文さんは仕事は楽しいですか？」

「楽しいですよ、他人のプライベートほど楽しい物はありませんからね」

考えてる事黒いな。

「そう言えば好きな人とか居るんですか？」

「……………」

「あ、すいません何か嫌な事思い出させちゃいましたか？」

「いえ、良いんですよ。もう終わった事ですから」

何やら少し暗い顔で話を進める文。

「少しだけで良いから吐いてみませんか？楽になりますよ」

「……………」実はですね、もう一週間ほど前何ですけど突然友人が消えてしまいましたね、搜索は打ち切られて彼の消息も不明、他の皆は死んだと噂してますが何処かで生きていると思うんですよ」

「好きだったんですか？」

「ええ、大好きでした」

「もしも、そんな人を見かけたら教えますよ、外見は？」

「身長は龍さんぐらいで体格も同じぐらい、黒いズボンに白いシャツを着た魔法使いの助手がフリースの………」

「……………ん？」

何だろっ何処かで聞いた事のある特徴だ。

「もしかして、名前は神田春輝って言っんじゃ……………」

「見たんですか！」

「あ、いえ、風の噂で地上でそんな人が行方不明になったって聞いただけです、ちょっと失礼しますね」

出口のドアを開けて少し歩いて行く。

そしてスタッフ専用のトイレに入る。

「俺かアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

大声で叫ぶ。

「まさかの俺！えっ、ちょ、ハズイ、めっさハズイ！」

目の前で告白されたら誰もが驚くであろう。

「マジか、如何なるんだ俺、如何なるんだよ！」

十分ほどトイレの中で自分と口論を交わすが答えにたどり着かなかった。

56 - 地霊殿での奮闘 後篇（後書き）

主「えつと、つもりに積もった夏休みの宿題をやったり、栄喜を養うために夏休み終わりまで休載とします。夏休みの終わった皆さんも終わってない皆さんも残りの夏休み存分にお使いください。あと夏休みが終わると週6で投稿できなくなります。ごめんなさい。次回は九月の初めです」

57・旧都の愉快で異常な仲間達（前書き）

お久しぶりです、夏休みいかがお過ごしになりましたか？
自分も今日から学校です。

でも……………夏休みの宿題が終わってないZE
ヤバッ、どうしよう。

最後に大事なお話がありますのでよろしくお願いします。

57・旧都の愉快で異常な仲間達

休日はすることが決まっている。

何処かに行つてしまったスperlカードの回収である。

スperlカードは使用すれば何も書かれてない一枚の紙切れとなり戦闘終了後に色が戻る。

だが無くしてしまつた物は探さないといけない。

「成果はゼロ」

旧都もそこそこ広い為はまだ見ていない所がある。

「はあ〜」

ため息を吐けば何とかなるとは思つてない、それでもため息は口から零れるのだ。

前日の文の告白に精神は掻き乱されてしまい次に会つた時ギクシヤクしちやいそうだからだ。

「如何したんだ、ため息何か吐いちゃつて」

背後からの声に振り向くと杯を片手に立っている金髪の女性が居る。

身長は晴輝よりも数？ほど高く、頭には赤い角を生やし、体操着と紅白カラーのロングスカート、大きめの胸をぶら下げ、半分酔つている様な仕草をしている。

「勇儀さん」

星熊勇儀、旧都に住む鬼と一緒に飲み合う仲まで発展し、偶に腕相撲を申し込まれるただ一人の心を許せる友人である。

「ちよつと、複雑な心の心境と言いますか、あまりにも酷な真実と言いますか……………」

「ふうん　　なら少し付き合いな」

強引に引つ張られていく晴輝、強力な鬼の力を振りほどく事など出来ないので、諦めて連れ去られる事を決心した。

「こいし、ちょっとここに来なさい」

「何？ お姉ちゃん」

地霊殿のとある一室で古明地姉妹は正座をして話していた。

「あなたの部屋の本から出てきた、コレは何？」

コレと言つてさとりが取りだしたのはスペルカード、だが、それはこいしの物ではない。

ヒラヒラとスペルカードを揺らすさとりだが別に怒りを持っていないわけではない。

「これはお晴のスペルカードね」

地霊殿の主、ペットの持っているスペルカードの種類など殆どは知っているが見た事のないカードがここに在れば、それは第三者、地霊殿外部の人間の物だと該当する事など容易いのだ。

「うん、そうだよ」

無邪気に笑うこいし、もしも彼女の心を読む事が可能であれば何を企んでいるか、筒抜けにする事は赤子の手を捻るも同然、だがこいしの活動は無意識での事、何を考えているかなど見当もつかない。

「叶えば良いね」

能力を使ったこいしがさとの背後を取る。

「一週間だけ待ってあげる。思いだけでも伝えたら？」

「こ、こいし！」

こいしの言っていた事、本当は分かっていたのだ。

清掃と管理をしている彼に何故、マッサージの仕事を追加させたのか、それは誰かさんを囁し立て、告白の時を早める為、地上の存在である彼と一日でも長く、深い濃密な時間を過ごしたい為。

「まったく！ こいしは………自分が恋のキューピットとでも、幻想でも見ているのかしら」

だが彼女も悟っていた。

自分の妹が最初に彼の事を好きになったのだと、能力で心を読み

ずとも、日々の行動が理解できなくても彼女にはこいしが晴輝の事を好きなのが理解できる。

たった一人の姉なのだから。

「ハックション！」

盛大なくしゃみを出した晴輝、体を摩り、風邪かなと自分の事を思う姉妹の意志を簡単に否定してしまう。

「風邪か？ 每晚走り回ってたら、そりゃあ風邪にもなるよ」

杯に零れるほど入った酒を一気に飲み干した勇儀は新しい酒を杯に入れる。

「飲みな、飲みな！ 今日は楽しい宴会だ！」

別に今日は宴会ではない、だが、『酒を飲んで騒いだらそれは宴会だ』とか、『毎日が楽しい宴会だ』とか名言チツクな言葉を並べた、勇儀の家で数人だけの、小さな飲み会である。

キスメ、ヤマメに尖ったエルフ耳の金髪少女が酒を飲んで、騒いで、踊って、歌ってのどんちゃん騒ぎ、何故だか頬が緩み次第には飲み比べをしてしまう始末。

「よし、ならばあ、我輩はこの杯一杯丸々を飲み乾しやあす！
ベロンベロンに酔っぱらった晴輝は勇儀さんの杯を奪い、酒を一気に飲み干してしまう。

飲み乾した晴輝を皆がさらに囃し立てる。

「もう一杯行けえええ！」

「良いれすよ、もう一杯ぐらい行っちゃって！」

「そんなに酒を飲めて………妬ましいわ！」

「あー！ 私の酒を飲みやがって！」

顔を真っ赤にした勇儀さんもすっかりと出来上がり、もう收拾がつかなくなってしまった。

「こんの ヤロー」

勇儀に抱きつかれ身動きが取れなくなる。

「勇儀さん、やらかーい」

体操着の上から伝わってくる何と言えない柔らかさ、それに顔を埋めて如何にかなりそんな晴輝。

「よっしゃあああ！ こうなったらキスしまくってやる！」

もう理性も吹っ飛び晴輝の言った言葉に反応する蜘蛛女が一名。

「ふっふっふっ、その言葉を待っていたのだよ、さあ、始めよう乱交だ！」

いきなり脱ぎだすヤマメ、それを止めようとせずに自分も桶から出て来るツツコミ担当キスメ。

「ふはは、かかって来い、俺は逃げるぜ！」

酔っていた晴輝、精神の奥底で眠っていた危機感知能力を掘りだし、千鳥足でその場から逃げ足して行った。

57・旧都の愉快で異常な仲間達（後書き）

次週からの投稿日は月曜、木曜、日曜となっています。
今週は後日曜です。

そしてタグ追加は雑談コーナーにて発表、まあ、日曜日になればわかりますので

今月もよろしくお願いします。

雑談コーナー

主「お久ーです、夏休みの宿題の終わっていない辻虎と申します、今回は追加されたタグの話ですが、

今後、ベットの下に本を隠している人なら誰でもわかる展開をするために

R-15とR-17・99を付けましたが、

その瞬間にドンと愛読者が増えたのです（驚き）。

そんなによっきゅーふまんかこのヤロー、
では次回も頑張って、行きたいと思えます」

58 - 暴走鬼ごっこに行く末

「クソツ、如何してこうなった!」

晴輝は誰よりも早く酔いから醒めて飲み過ぎで暴走した皆から逃がっている。

咄嗟の事で理解できなかったので、無造作に置かれていたダンボールの中に入った晴輝、某ゲームの蛇の様な名前の主人公の顔が脳裏を過る。

「とりあえずはここで皆の酔いが醒めるのを待つか」

安心した晴輝に近づく一人の女性。

ダンボールを取り上げて彼女は笑い、こう言った。

「みいつけたあ」

ヤマメである。

もっとも見つかってはいけない人物ランキング、第一位に最初に遭遇したのだ。

ルーミアと鬼ごっこをしていた時みたいになごだましをしようと素早く立ち上がり両手をヤマメの目の前で叩こうとするが、手と手を合わせる前に体が動かなくなる。

「ふふつ、私が 蜘蛛だって 忘れたのぉ?」

手足に引っ付く粘着性の強い細い糸、無理に外そうとすると辺りに張り巡らされた糸が絡んでしまう。

「力を抜いて 朝まで楽しも、ね?」

耳元で咳かれた淫靡な声はまだ思春期の十九歳男子の心を揺さぶり、頬を紅潮させる。

「(そうだ、誘われているんだ。俺が喰う訳じゃないし、ここで俺が了承すれば、それは合意の事、なら、良いんじゃない? ヤマメ可愛いし、少し貪欲そうに見えるけど良いんじゃないね)」

少年の心は彼女の一言に魅了されキャラさえも崩壊させる。

「もちろん、三〇ゲーム」

「（前言撤回させてくれ）」

たぶん枯れ果てるだろうとと覚悟した。

「ふふふ、じっくりしっぽり、楽しもうじゃないか」

Yシャツのボタンを一つ一つ外し、舌で彼の頬を舐めるヤマメ、そんな彼女に晴輝は色々な卒業を手伝ってくれる事の覚悟と、この事がバレたら魔理沙辺りに消されると浮気のバレた夫の様な事を考えていた。

だが、ボタンを外す動作は最後の一つを残して、止まってしまった。

体を捕縛していた数本の蜘蛛の糸も取れて、行動が可能となる。

倒れてくるヤマメを支えると視界の先に犯人はいた。

キスメが桶を使ってヤマメの後頭部を殴りつけて彼女を停止させたのだ。

「キスメ、ありがとう」

「らいひょうふれふか？」

呂律の回っていない謎の口調、熟れたトマトの様に赤い顔、右手に持った酒瓶、一つだけでは真実には辿り着かないがこの三品が晴輝の頭に一つの真実を導き出す。

「お前も酔ってるのか」

「酔ってまへんよ」

酔っているほど酔っていないと言言葉は本当なのだと確信した晴輝はキスメの背後に回り、首に手刀を入れ、気絶させる。

「まさか、本当にこの技が出来るとは……………」

テレビでよく見る相手を無力化するチョップ、本当に出来た晴輝も驚きを隠せない。

倒れた二人を放置して新しい隠れ場所を求め歩き続ける。

「ああ、妬ましい」

耳元に囁きかける様な声に驚く。

後ろを振り返ると一緒に飲んでいた金髪のエルフ耳少女が立っていた。

「えっと、パルスイさん？」

「ええ、覚えていてくれたの？」

飲み会が始まる少し前にこの女性と対面した、パルシイさん、勇儀さんと仲が良く、一緒に飲み合ってる事が多いらしい。

「ホント、妬ましいわ。貴方の回りはいつも賑やかで退屈しない」

パルスイさんは一步一步近づいて来る、彼女も酒を飲んでいたので、あの二人の様な謎の行動をするかもしれないので一応構えておく。

「私はそんなに美人じゃないかしら？」

「はい？」

あの2人と比べて様子がおかしい。

「いや、美人ですよ、特にその眼、何か宝石みたいですし」

「本当？」

「本当です」

パルスイは下を向く、だが、顔が赤くなったのを知らない鈍感な十九歳は、追い打ちをかける。

「美人ですよ、金髪とかその碧眼とか、耳とかも可愛らしいですし、それに……………」

「も、もう良いわ、ありがとう」

鈍感男に撃ち抜かれた心は鼓動を強く、早くして今も絶賛稼働中、褒め殺した張本人は何が起こったのかを理解出来ない御様子。

「大丈夫？」

「ちよつと、休んでくる」

パルスイはそのまま隣の部屋へと入って行った。

最終的には飲んでいた宴会場に戻り、何で皆あんな風になったのかを調査しに酒瓶を調べていた。

「手掛かりは無しか」

酒で酔ってたと言えば一言で解決できるが明らかに酔った勢い以上

の勢いだ。あのクールツツコミ役のキスめさえあの淫れっぷり、何かあるとしたら酒にあると思っただが変わった所は無い。

だが一つだけだが気になった事があった。

酒瓶の色が二色、片方は普通の茶色、だがもう一色は緑、明らかに違う酒だと思い調べてみるがラベルは剥がされて何もわからない。

「確か、これヤマメが持つてきたっけ」

眼を瞑るとこの酒瓶を大量に担いで持つてきたヤマメが見えてくる。

「そうだ　確かこの酒瓶のラベルをヤマメが座布団の下に隠した様な……………」

不確かな情報だが他に当てもなくとりあえずヤマメの座っていた座布団の下を調べてみると案の定、酒瓶から剥がされたラベルが出てきた。

「えつと　これであなとも一心同体、既成事実を作る媚薬入り、

「夜犯よこしまつちやつてしゅうせつ」

明らかに原因となる物質はヤマメの持つてきた、不審の酒瓶を片手に

「あのバカの所為かあああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！」

最大ボリウムで叫び、ぜえぜえと息を切らす。

「クソッ、さつきアイツの事を可愛いと思った俺がバカじゃねえか！　あと少しで発禁が付きそうだったわ！　もう、何か、どうにもなれ」

その場で大の字になって畳の上に寝転がる。

多分、この酒よりも他の酒を大量に飲んでいたから媚薬の効果も長続きせずに酔いも早く醒めた。

「アレ　でもおかしいな」

飲んだ量はキスめとヤマメが同量（ヤマメは性格が元からアレだったので多分）だったはず、パルスィは俺と同じくらい、なら後の酒は誰が……………とここまで来て全てが繋がる。

他の全ての酒は俺をこの宴会に呼んだ張本人が平らげた、と言う事は数本の媚薬入りの酒がまだ発散されずに体の中で暴れている人が約一名。

ガシイと誰かの手が晴輝の肩を掴む。

見当はついていて、ただ一人酒を水のように飲み、体に蓄積された欲求不満が解消されていない一体の鬼。

「晴輝いいいい、探したぞ」

旧地獄に住む鬼、その怪力はそんじょ、そこらの妖怪では手も足も出ない。

ましてや現在、ただの人間の俺と彼女では猫と熊ほどの戦力差が出来てしまう。

「勇儀さん、落ち着いて話し合おう、酒に酔った勢いは真実の愛とは言わないのだよ！」

もう自分のキャラ崩壊などどうでも良くなってきた。

押し倒され、腰の上に乗られて身動きが取れなくなる。

体操着を脱ぎ、胸を抑えつけているブラ代わりのサラシが姿を現す。

「夜って意外と長いんだぞ」

「いえ、長くなくてもいい様な気がします」

「じつくりと私が可愛がってやるわ」

もうすでに袋の鼠、その場にキスメとヤマメ、素面っぽいパルスイまで来て事態は最悪になって行った。

59・まるで浮気のパレた夫の様な主人公（前書き）

先に言っておこう。

事後です！

影月さん、たくさんの感想ありがとうございます。

59 - まるで浮気のパレた夫の様な主人公

早朝、朝早く起きる習慣が体に身につき、眠くても起きてしまう晴輝、生活リズムは崩さない様にしていた彼だが今日ばかりは無理である。

「夢 だったら良かったのに」

目の前の光景に眼を瞑りたくなる。

何故か全裸の勇儀と向かい合って寝ていたり、ペットの上でヤマメとキスメとパルスイが裸で寝ていたり、何故か腰に激痛が来たり、した事の記憶を全て丸々と消えていたりする今日この頃、予想では多分、事後である。

「魔理沙に殺される程度で済めばいいけどな」

遠い眼で何かを悟った様な事を呟く晴輝、その彼からは、まるで地球最後を迎えようとしている海外の映画に出てくる脇役の様な深刻な顔、絶対に魂まで塵になる事を覚悟していた。

ベットから出て服を着る。

裸の彼女等の服をかき集め、折りたたみ、風邪をひかない様に毛布をかける。

「さあ、今日も働きましょう」

死んだ魚の様な眼からは雫が流れる。これはただの雫ではない、どんな困難をも乗り越えてきた男の人生が崩れた破片、絶望の欠片、明日を見る事の出来ない者の叫びである。

ドアノブを開けようとすると一枚の手紙が落ちていている事に気付く。手紙の内容は『明るく前見てな、道がある。それに進めばいい』と書かれ、最後に星熊勇儀と書かれていた。

「勇儀さん」

たぶん、この事を俺に伝えようとしていたのだ。

そう思う彼の眼は元の綺麗な眼に戻り、再び涙が溢れ出した。

「そつだ、酒の勢いなんだ、俺が襲ったわけじゃないんだ、なら魔

理沙だって許してくれる。そうだ、きつとそうだよ」

自己暗示をかけて前向きになる晴輝、零れ落ちて行く涙を拭き取り今日も元気に職場へ向かう。

「大丈夫よ、今日は私のペットが出るから」

聞き覚えのある声に決心と勇気は全て破壊された。

「さとり……………様？」

ドアの先にこいし様、さとり様の古明地姉妹が立っていた。

ニッコリと笑うさとり、眼をカッと開いてまるで威嚇する様なさサードアイのりの第三の眼。

「お兄さん、ここで何してたのカナ？」

眼を閉じて微笑むこいし、眼を閉じたままのこいしの第三の眼。サードアイ

急いで着替えたのかクタクタになって皺まみれの服、俺の後ろでは全裸の四人組、さつさと寝室から退去する晴輝、この三つのアイテムは、いつの間にか名探偵っぽい服装に着替えて虫眼鏡で俺を凝視するこいしが答えた。

「事後だね」

彼女の推理に無駄は無く、的を射抜く矢の如く鋭い、そして彼女の推理は俺を撃ち抜いたのだ。

「ああ、神よ、貴方は何故そんなに無慈悲なのだ」

ギリシャ神話の様なセリフは彼女達の心には届かず、ただアーメンと心で祈っている。

場所が変わり地上の守矢神社。

「諏訪？」

「どうした？ 諏訪子」

「何か今、彼の声が聞こえた様な」

「彼って、神田晴輝の事か？ アイツは死んだはずたる」

「たぶん、まあ良いか。諏訪諏訪諏訪諏訪諏訪」

「と言うか、何だそれ？」

「共鳴？」

59・まるで浮気のパレた夫の様な主人公（後書き）

雑談コーナー

主「え？ 何でこんな事をしたかって？

そっちの方がドロドロした修羅場が生まれるかなーって」

60 - お仕置き 拷問 (前書き)

自重？ えっ、何それ食べれるの？

60 - お仕置き II 拷問

「（親父へ、前略、もうすぐそちらへ行きます。その時は色々話し合いますよ）」

「残念だけどお仕置きでは殺さないわ、もう少し苦しみなさい」

「お兄さん、顔が真っ青だけど大丈夫？」

現在、例の一件で晴輝はお仕置きを受けている。

磔、獄門ならまだ軽い方だ、さとの能力で封印してきた数々のトラウマを呼び覚まされ、手足を拘束、目隠しをされて質問攻め、それを三日間、不眠不休である。

「ねえ、気持ち良かった？ 何プレイ？ 子供は何人欲しい？」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

主のこいしの質問に全く答えず、ただひたすら同じ言葉を喋るゲームに出てくるモブキャラの様だ。

「少し休憩させましょう、壊れたら大変だわ」

さとの言葉に慈悲など無い、ただ壊れない様にギリギリの境界線で休憩を入れて、ある程度治ったら再度拷問を開始する。

「光を拝めないと思いなさい」

「それ、ただの拷問じゃね？」

ツツコミは精神が壊れ、ズタボロでも、今も健在である。

仕置きを受けるペット達が入られる牢獄のような場所、かつてここが灼熱地獄であった頃に罪人を閉じ込めておく部屋である。

「じゃ、また後でね、お兄さん」

視界も見えない、身動きも取れないそんな状態で牢獄の中に入れられる。

元はここも灼熱地獄、その名の通り辺りは真夏以上の暑さ、熱を帯びた地面は異常なほど熱く、肉を焦がす勢いだった。

「俺は……………無罪だ」

そんな悲痛の叫びは牢獄のもう一人の住人の耳へと入って行った。

「ニヤーン」

「……………猫？」

猫の鳴き声、明らか誰かが声真似をしているのが分かったが、視界も未来も混沌の闇の中、そんな少年には相手の顔どころか明日の道すら分からない。

「お兄さんはこいし様のペットのお晴だっけ？」

「アンタはさとり様のペットの火焰描……………お燐？」

親友の鴉とかに発情して襲い掛かり、敢え無く御用され、さとの『貴方のトラウマと黒歴史を呼び覚ましちゃうぞ（はあと）』教室で数百年分のトラウマを呼び起こされたと言う、凝り性のない猫である。

「火焰描燐、お兄さんは色欲魔……………お晴？」

「クソツ、語呂が良いから何となくそれで良い、と思った自分を呪い殺したい」

色欲魔なのは仕方がない、あんな事件を起こしたのだ、色欲魔と言われようが、ド変態と呼ばれようが、アニキと呼ばれようが仕方がない。

「せめて、記憶ぐらい残してくれよおおおおおおおおおお
おおー！」

「仕方がない色欲魔だね」

「お前だけには言われたくねえ！」

牢獄に幽閉されてもう一時間が経つ、滝の様に流れ続ける汗は体ヒットポイントの水分を持って行きHPもMPも限界値を突破していた。

「如何するお兄さん、こうなったらお互いの汗を舐め合って、水分補給を……………」

「何そのマニアックな光景！ 自重しようぜ、そんな事バレたら次

は如何なる事やら」

だが水分を欲する舌が潤いを求めて口から出る。

四肢を拘束しているロープを切る事すら面倒になり、次第には生気がどんどん失われていく二人、思考力も低下し、お互いの考えて行くことがおかしくなる。

「そうだ、汗を舐めあえば水分は確保できるよ、お兄さんの汗を舐めさせて」

「じゃあ首な、舌でも良いぜ」

「聞いたことがある、暑い時は裸になってベットの上でラジオ体操を……」

「違う違う、ラジオ体操じゃなくてプロレスだぞ」

「如何かしてたと思う」

「あたいもそう思う」

あの後、両者喉やら舌やら舐め合い、気がついた時には水を持ってきたこいしに発見されて、拘束の仕方が亀甲縛りへとランクアップしていた。

60 - お仕置き 拷問 (後書き)

主「誰か、誰か！ 絵師の方あああああ！

黒ゴスのさとりと

白ゴスのこいしっちのイラストをおおおおおおおお！」

61 - 真実は仮面へ(前書き)

時間軸 晴輝失踪から十日目

61 - 真実は仮面へ

翌日、晴輝とこいし、さとり、さらにあの時一緒に寝ていたキスメ、ヤマメ、パルシイ、勇儀の面々が集まり旧都で有名な居酒屋で一杯飲んでいた。

飲み会と言う気楽なものではない、あの夜の真相を確かめるため、さとりの開いた言わば取り調べの様な物だ。

だが会場は予想以上の緊迫した空気に包まれ、真相を語る状況な
のではなかったのだ。

席に座り誰も喋らない。

まるで合コン初心者達が残された時みたいな、何を喋れば良いのか分からない空気。

そんな空気がたつた一人を残して彼女達を包んでいた。

「私はお酒、とびつきり美味しいの」

こいしは笑顔で店の人間に注文をしている。

そんな彼女の事を放置してさとりがこの空気を蹴り飛ばした。

「ほ、本題なのだけど」

この重々しい空気の中、話を切り出せたさとり様の勇氣に俺は敬礼をした。

「したの？」

直球ど真ん中、優しく包む事もなく、遠回りでもない真剣勝負、この最終局面、はいと言われたら 俺が死ぬ打たれたら負け、そんな時にとんでもないボールを投げた。

「あの時変だったのは覚えてますけど　その後は全然覚えてないです」

「キスメに同じく、私も記憶がない」

二人はどちらかと言うと酒には強くない、他の二人に聞こう。

「ちょっとだけなら　キス……………位かしら？」

そのパルシイの一言で俺のライフポイントはすでにレッドゾーン、

さとり様爆弾が爆発寸前である。

だがこれで済めば俺の容疑も晴れ、自由の身、明日から娑婆に出ても何ら問題がない。

「……………」
たった一人、酒の席でなくても何時も豪快な勇儀さんが黙ったままである。

「どうしたんですか？ 何か具合でも」

「あ、いや、ちょっとさっきまで飲んでたから少し頭が」

勇儀はどちらかと言うと飲めるタイプ、なら何か隠し事をしていると踏んださとりが誰よりも先に行動を示す。

「こいし！」

「アイアイサー」

こいしがりだしたのは何かしらの薬品、それを能力で勇儀に悟られず、中身の錠剤を口に入れ水で流す。

「か、体が！」

「私の所にある鬼をも痺れさせる、毒薬、生死には関わらないから安心して」

薬品の入れ物に『永』と大きく書かれている。明らか何処のメーカーかは見当がつく。

「サードアイ
第三の眼！」

さとりは第三の眼を使い相手の心を読む事が出来る。

意識すればするほど明細に、ハッキリと具体的に。

「はっ！」

幻想郷での激しい戦闘、そんな中で培われた第六感である危険危機能力が眼を覚まし、俺の脳に『逃げろ、今なら間に合う』と指令を出しただのだ。

席を立ち上がり、出口を目指すがヤマメの蜘蛛の糸に足を取られて地面に頭を強打する。

さとりの投げたボールは勇儀によって打たれた、そのボールは予想の斜め上を行き、場外ホームランとなった。

61 - 真実は仮面へ（後書き）

主「さあ、自重しない作家の最大ハーレム人数三〇超えの物語の始まりだ！」

番外編 キスメの誘惑（前書き）

61 話後

番外編 キスメの誘惑

「んー！」

朝、旧都の宿で一夜を明かした、実はあの反省会の後、晴輝は地霊殿を追い出された、さとりが口走って『ち、地霊殿から出て行きなさい！』と言われたのだ、フラれたみたいでかなり心の奥底へ刺さった。

「ああ、体痛い」

あまり高い宿には泊まれなかつたので畳の上で雑魚寝したのだ、布団も無く、天風が防げる程度の超ボロ宿だった。

「さあて、如何しますかねえ」

宿を出て体を伸ばす、両腕、首、腰からバキッボキッと良い音が鳴る。

「とりあえず、歩いて考えるか」

「あ、あの！」

暗い今から一歩でも進もうと晴輝は足を動かし始めたその時、不意に声を掛けられ足を止める。

「ん？ キスメ、如何した？ ヤマメの所にカチコミでも行くか？ ちよつと殴りこみに行くか？」

キスメはブンブンと首を振って否定し、瞳に涙を溜めていた。

「冗談だ、悪かったなこの前の事」

「そ、その件なんだけど」

キスメは急に頬を赤らめて体を小刻みに震わせる。

「もう一回してくれない」

「.....」

晴輝の瞳から光が消え、まるでパソコンを再起動したように再び瞳に光が戻る。

「ん？ キスメ、如何した？ ヤマメの所にカチコミでも行くか？
ちよつと殴りこみに行くか？」

「ちよつと、同じ事さつき言つたよ……………」

「ん？ キスメ、如何した？ ヤマメの所にカチコミでも行くか？
ちよつと殴りこみに行くか？」

「あのね、私にもう一度性交を……………」

「なるほど、キスメになりましたヤマメか！ ここで会つたが百
秒と八六三〇〇秒ぶり、さあ、神妙にお縄で亀甲縛り！」

「ああもう！」

キスメは桶の中から酒瓶を取り出し、栓を外し、晴輝の口へ突っ
込んだ。

「んむ！」

酒瓶の液体を飲み乾した晴輝はその場へ腰を下ろす。

そんな晴輝をキスメはズルズルと路地裏へ運んだ。

「キスメ……………」

「ごめん、体が疼くんだ、特にここが……………」

キスメは晴輝の手を取り、豊満とは言えぬ薄い胸へ押し当てた。

胸から伝わる鼓動を右手で感じ晴輝は息を荒くする。

荒くなつていく息には理由があつた。

キスメの飲ませた謎の液体、酒瓶でカモフラージュしていたそれは

媚薬であつた。

ヤマメの懐から拝借して来たのは内緒である。

「あ、熱い……………」

「す、すぐ済ませるから……………」

キスメは晴輝の唇を奪い、舌を丹念に絡み合わせる。

両者の息は荒くなり、キスメもまるで貪るように淫靡な舌使いで舐
める。

「ん、ちゆ、はあ……………もう良い……………よね」

キスメは自分の白装束を脱ぎだし始める。

「声抑えればバレないから……………だから……………」

全裸に近い状態で今度は晴輝のズボンへと手を出す。
「だから……………ね」

番外編 キスメの誘惑（後書き）

主「自重何それ食えるの？」

次回はちょっとおかしなヤマメさんのお話。

番外編 ヤマメの異変

旧都の外れ、ヤマメの住む巣がある、実際は巣を張っているだけで他で衣食住をしているらしいが、ヤマメがそこに居る事に確信的な物を抱いていたのかもしれない。

「ヤマメだ、絶対ヤマメが吹きこんだな！」

色々と激しい運動をして失神状態のキスメを担いで晴輝は走る。

足取りは重く、だが素早く、一步一步確実に進んでいるが歩き方にぎこちなさを感じる。

腰が砕けるほどの快感にでも襲われたのだろうか？

「ここか……………」

着いた時には既に昼時、朝から昼まで何をしていたのかは皆さんのご想像にお任せします。

蜘蛛の巣の様な大きな網、何も釣れていないのを見ると漁は不調の様である。

「背後からアルゼンチンバックブリーカーの刑だな」

指をパキポキと鳴らし、辺りに眼を光らせる。

まるで得物を探す鷹の様な鋭い眼光。

その時晴輝の耳が声を捉えた。

「三時の方向に声……………」

息を殺し、身を潜めて近づくと、声が段々と明確に聞こえ始めて来る。

「はあ……………イクウ……………イツちゃうううう」

クチュクチュと響く水の音、ヤマメの淫靡な喘ぎ声、晴輝は背後からそつと近づく。

「（実はアイス舐めてましたとかそういうオチだろ、俺は引つかからないぜ！）」

ヤマメはなにやらソファーの様な物に座っていた。

背後から息を殺し、そつと近づき深呼吸する。

「ヤマ……………」

「ふあああああああああああ！」

その瞬間、不意にのけ反ったヤマメと眼が合った、ヤマメは一時停止し、再び思考を働かせる。

その顔はどんと赤く染まり、真似をする様に晴輝も顔を紅潮させる。

何故か濡れているヤマメのスカート、口から垂れる涎、何故か自分の股へと右手を当てている。

名探偵でも無い普通の十九歳の思考がフルに回転し、一つの結論へと達した。

「ああ、その……………」

自慰と呼ばれる性的行動、妖怪だって何百年も生きていればお年頃にはなる、だがこんな展開になるとは誰が思っただろうか。

「いやあああああああああああ！」

キスメは自慰をしていた右手で晴輝の顔を渾身の力で殴りつけた。

晴輝は顔を押しさえ、その場で数分もがき続けた。

「……………」

「本当に悪かった」

晴輝とヤマメ、ソファーにお互いの背を合わせて座る。

気まずい空気と罪悪感で心が折れそうな晴輝、さして気まずい空気が羞恥心が混ざり、今にも死にたい鬱な気を出すヤマメ、二人を包む空間があまりにも重すぎる。

「てか、お前の性格上、見られたら恥ずかしがるのはおかしくないか!?」

「なっ、何言ってるんのよ、私も女なんだから、その、恥ずかしいに……………」

体育座りの態勢でどんと自分の膝へ顔を埋めていくヤマメ、

晴輝はそんな彼女を不意に可愛いと思ってしまう。

「（クソッ、これがギャップって奴か!? 兵器レベルだぞこれ、可愛いは大罪だよ!）」

「あのさあ、私の巢に何の様？」

「あ、その……………そう！ キスメの様子がおかしかったんだ、だからお前が何か吹き込んだものかと……………」

「どんな風に？」

正直エロかったと言えば事は片付くねだが今そんな事を言っしまえば自分がヤマメを誘っている様に聞こえてしまう。

そう判断した晴輝の脳内会議室は何と云うかを考え、ある一つの結論へ達した。

「何か、熱がある様なボーっとした感じですかあ」

「何されたの？」

晴輝は弱点を突かれた。

キスメの様子を遠まわしに言っても結果は同じ、『さっきまでお楽しみでしたね』等言われたらもう立ち直れない。

「じ、実は……………私……………晴輝の事を思ってたんだ」

「……………は？」

「実はだんだん思い出して来てさ、なんかこう、ムラムラしちゃって……………気が付いたら晴輝としてるみたいな錯覚がね、何か止まらなくなってる」

「待て待て待て、え、何？ 自然と俺が悪い様に思えて来たんだが、てか何？ お前どうしたの？ キャラを保ってくれ！」

「だってさあ、一生一度の初体験を捧げたんだよ、ちょっとぐらい恋愛感情を持ってても……………」

「いいじゃない、妖怪だって恋の一つぐらいしたいもの」

「俺ですよ！ 和菓子とバイク弄りが好きで色恋沙汰なんか無縁な人間ですよ！」

「恋に……………神も妖怪も人間も関係ないよ」

不意に唇を奪うヤマメ、無理に舌を絡めようと晴輝の閉じた唇に無理に押し込む。

晴輝の唇は何故か開き、舌を入念に絡ませた。

一度離れる二人の唇、唾液の糸が二人を繋ぐが儼くも切れる。

晴輝は唇を右手の甲で押さえるが手を退け、口を開く。

「もしも、お前の好きな男が女だったらしだったら如何する？」

ヤマメは気の抜けた表情を浮かべるが、クスツと笑い答えた。

「……………色々あるけど大丈夫。だって私が

女ったらしにするんだから」

二人は再び唇を重ね濃厚な口づけをした。

これが後の『女ったらし』の完成であった。

番外編 ヤマメの異変（後書き）

主「俺は自重する事を辞めるとおおおおおおおおおお！」

番外編 嫉妬に燃えるパルスィ

地霊殿追放から二日目、昨晩はヤマメと共に夜を明かした。

ベットの上でお互いの手を絡み合わせ二人で寝ていた。

ついでに両者共に裸で、腰の激痛に最初はベットから出る事が出来なかった。

暴走キスメの事も一応は解決する為、二人の扱いは同じ恋人である。

「ま、まあ、本当は『友達以上で恋人未満』だからな」

「面倒だから『家族』ってのはどう？」

「ちよつと飛び過ぎだね」

旧都をキスメ、ヤマメ、晴輝で三人仲良く歩く、橋姫でもないのに旧都の皆さまから妬ましい様な声が聞こえるのは幻聴にしたい。

「……………妬ましい」

「のうわっ！」

耳元からの不意の一声、晴輝はリアクションを見事に決め、平常心を取り繕う。

「パルスィか」

「貴方達、幸せそうね」

腕を組み地面を見つめるパルスィ、だが悲しげな表情で顔を曇らせていた。

「ああ……………その、ヤマメ、キスメ、今日はパルスィと話あるから、悪い！」

手を合わせ、軽く頭を下げ謝罪の意を見せる晴輝、それを理解出来たヤマメはキスメを持ち、そのまま去って行った。

「良いの？」

「ああ、悪いけど俺の話に付き合ってくれないか？」

旧都にあるパルスイの家。

「それで何で私の家？」

「ちよつと外じゃ話難いからな……………」

晴輝とパルスイ、机を挟み話し合う。

パルスイが気前良く出した湯飲みのお茶を飲み乾し、真剣な表情でパルスイを見つめる。

「な、何よ……………」

「この前の事は本当に悪かった！」

晴輝はその場で土下座をした。

パルスイは何の事が解らず、数秒間放心していた。

「えっ？ 何を誤っているのか理解できなんだけど」

「あの、引きずってるよな、あの宴会の件、謝って済む問題じゃない、許してくれなんて言わない、でも本当に悪かった！」

「あの件は貴方だけが悪人ではないわよ」

「えっ？」

「媚薬酒を飲んでいた皆、持って来たヤマメ、貴方を襲った私達、つまり今回の件は全員が加害者であり、被害者……………」

「で、でも！」

「媚薬酒を持って来たヤマメに罪を擦り付けたいのなら別だけどね」「そんなこと思ってない」

晴輝はパルスイを睨んだ、だが自分の行動に気付き、軽く詫びを入れパルスイの眼から視線を逸らす。

「……………妬ましい」

「ん？ 如何した？」

「貴方にそこまで思われているヤマメが妬ましくてしょうがないわ。ああ、妬ましい妬ましい」

パルスイは親指の爪を噛み始める。

「私には何かないの？」

「えっと……………何か願いとかが無いか？」

「……………晴輝は如何なの？」

「俺は……………パルスィも勇儀さんも迎え入れたい」

「そう」

パルスィはその場で親指を噛み続けた。

「そうね……………」

パルスィはまるで獲物に近づく女豹の様に鋭い眼光で睨みつけ、ゆっくりと近づいて来る。

「あの、性的な願いは遠慮して……………」

「そうね、別に性的な願はしないわ、ただ『今日一日私の事を満足させる』と言う条件の中に性的欲求の解消が含まれていても構わないわよね？」

パルスィは晴輝のズボンのチャックを下ろし、自分の服を脱ぎ始めた。

「ちよっ！」

健康的なスポーツブラ、スパッツが晴輝の目の前と現れる。

「別に貴方の事が好きではないわ、ただ、一度抱かれてしまっているのに他の相手にされるのは嫌なだけ、たったそれだけだから……………」

……………」

頬を赤く染め、下着すらも脱ぎ始めるパルスィ、右手は晴輝のズボンのチャックから侵入し、何かを掴んだ。

白く輝く肉丘、大きいとも小さいとも言えぬそれを鷲掴み、揉みしだけ。

「はあっ……………て、手馴れてるわね」

「まあ既に六回目ですから……………」

鋭く睨むパルスィ、地雷を踏んだ事も知らずに快樂の海へと沈もうとする晴輝。

「そうね、本気で逝っても良いのよね」

背後から漂わせる黒いオーラ、何に対しての嫉妬なのかはさて置き、パルスィの眼に炎が宿る。

「（そうね、私が多少独占しても良いわよね……………偶には甘い蜜ぐらい吸っても大丈夫よね）」

「パルスィ？ 顔がマジなんだけど、ちよっ、いきなり舐めるな、
うおおおおお！」

番外編 嫉妬に燃えるパルスィ（後書き）

辻虎脳内会議室から出て数分歩いたところにある

ミステリア・ローレライの八目鰻屋。

主「今日呼び出したのは以下省略……………今回は真剣な悩みなんだ」
晴「何ですか？」

主「神霊廟の新しいキャラの皆様方の出演についてのアンケートを取りたい」

晴「わお！ 以外に真面目……………」

主「今日から一週間、神霊廟の新キャラクターを出しても良か否かのアンケートを取りたいと思っています。一通もない場合はネタバレ厳禁と言う事でもう少し後になります、皆さんよろしくお願いします」

酒が満ちた杯を左手に持ち、残りの右手には酒の入っている瓢箪を二、三個ほど着けていた。
「ど、どうも」

勇儀に連れられ、勇儀の家の奥へと進む。

勇儀は真剣な表情をし、何も言わずに付いて行く。

勇儀の立ち止まったのは部屋の一室だった、寝室でも客間でもない、ただの一室、勇儀は襖を勢い良く開け、待っていると小声で言うと晴輝を置いて部屋へ入って行った。

一分もせずに出て来るが真剣な表情は変わらず、またも部屋を移動した。

着いた客間で晴輝は正座をした。

別に自分の意志ではない、ただ勇儀の真剣な表情が晴輝を暗示にかける様に作用した。

「……………」
「……………」
「……………」
両者黙り込む、気まずいのか、相手の出方を探っているのかは分からないが邪魔者の居ない現状では晴輝と勇儀の二人以外、この沈黙を破る事は出来ない。

「あ、あの本当に……………」

「本当にすまなかつた!」

晴輝よりも前に頭を下げたのは勇儀だった。

姿勢よく頭を下げ、綺麗な土下座を見せる。

鬼が人間に謝ると言う行動、晴輝はそれだけが理解出来ず、心を放り投げていた。

「あ、いや、何で勇儀さんが頭を下げるんですか?」

「私が宴会なんか開かなかつたら晴輝を襲う事は無かつた。私が酒に飲まれてなかつたら晴輝が苦しむ事が無かつた。私がああ時の事

を覚えていなかったらお前は地霊殿から追放される事は無かった」

一人深々と謝り続ける勇儀、別に今回の一件に加害者を作る事は無い。この件は媚薬が悪いと言う事にして丸く収めたかったのだが、勇儀は自分が加害者だと思っているのだ。

「いや、勇儀さん。今回の件は加害者は誰も居ないんだ、もしも誰かが加害者になるなら男の俺に責任が在る。だから俺も本当にすいませんでした」

「い、いや私も腹を括ってるしそれに」

勇儀は懐から何か取り出す。

スペルカード、だがそれは勇儀の物ではなく、何処か見た事のあるイラストが描かれている。

「俺のスペルカード！」

晴輝の紛失したスペルカード、一枚だけではなく、全てのスペルカードが揃っていた。

「今回の件の詫びに見つけたんだが揃っているか？」

「ああ、全部揃ってる、これで何時でも地上に帰れる、ありがとう
「ございますー！」

晴輝はスペルカードを貰い受け、大喜びで両腕を振った。

「でも名残惜しいな」

勇儀は口を開く。

「折角仲良くなったのにもうお別れか、別れなんて何度も経験したのに……………こればかりは慣れないね」

「また会いに来ますから、家族ですもの」

「家族、まあ超える一線は越えてるし、家族つても悪くないかな」

「また地底にも遊びに来ますし、その時は美味しい酒を」

「ん、本当か？ なら楽しみにしてるよ」

酒と言う大好物の単語を聞いたのにまだ気分の晴れていない勇儀、晴輝の頭が全力で回り、ある一つの行動に出る。

「は、晴輝？」

不意に抱き付く晴輝、その手は優しく、包み込むようにゆっくり

とだった。

「重荷は捨ててください、勇儀さんならこう言う湿っぽいのは嫌じゃないですか」

「あ、ああ確かに……………」

「捨てる事が出来ないなら一つ約束してくれませんか？」

「約束？ 鬼と約束する時は腕の一本は覚悟しな」

鬼は嘘が嫌いだ。

それがどんな些細な物でも破れば悲しむし怒りもする。

晴輝はその意味を知ってて約束をしようとした。

「約束は二つ、俺を家族になる事、いやなっってください」

「約束と言うよりはお願いだな」

晴輝は顔を赤くし始める。

いくら自分から抱きついてても時間が経つに連れ、自分の行動に恥じなくなってくる。

「そして二つ目、どんな重い荷物も俺等家族で支え合い、頑張っ
て行く事」

「ああ、分かった、と言う一つ良いか？」

「ん？ 如何しました？」

「家族ならもう少し家族らしい喋り方をすればいいじゃないか」

「うえ！ いやその皆十九歳の俺より年上だし……………」

「他の三人にはため口なのか？」

「……………」

晴輝は勇儀の視線から逃げる様に眼を逸らす。

「と言うか私は家族の何だ？ 姉か？ 妹か？」

「勇儀姉さん…………… 良い響きだ」

「なるほど、嫁とか妻とかそういう選択肢には入ってないのか……………」

…………… お姉さん悲しいなあ

「ああいやその、嫁や妻が四人もいると色々面倒事が勃発しそ
うな気がして……………」

「同じ男を好きになっただ、喧嘩の一つはするだろう？」

勇儀の正論に完膚なきまでに看破された晴輝、もう何も言う事が無く、俯いていた。

「なあに、今さら古明地の姉妹が追加しようとお空やお燐が追加しても、私達を見てくれるアンタが本命なんか作らない限りなあ」

勇儀も晴輝を抱き締めるが徐々に力が強くなり、晴輝のアバラ辺りが折れる音が響く。

「冗談は良し子さん……………イタタタタタタタ！」

「嘘や冗談は嫌いだって言っただろ？」

「は、ハイ！ 言った、だから勇儀さん！」

「勇儀だ」

「ゆ、勇儀、俺は皆を嫁にする！ 四人位の養う甲斐性があったて本物の男なのですよ、後々何人増えても大丈夫な位稼いでみせる！」

「さっそく浮気宣言か、アツハツハツ本当に面白いな！」

「浮気とかではなく子供とかの……………ガクッ」

「おーい、如何した？」

返事は無い、まるで屍の様に動かなくなってしまう。

「まったく、良い顔で寝やがって」

晴輝を膝で寝かせ、自分は杯の酒を一気に飲み干す。

一杯が軽く一リットルほどあるのに一気飲みしても倒れない、これが酒豪の強さなのか、それとも鬼の凄さかは分からない。

「いいさ、姉で私も弟が出来ただけで嬉しいさ」

何よりも今回の一件で関係が崩れなかった事が一番の喜びだった。

「明日にでも帰るかな……………」

そう思うとこれまで飲んで来た事を思い出す。

「楽しかったけど、たっく、コイツが妖怪ならどれだけ良かった事か……………」

そつと頭を撫で、笑って見せる勇儀、優しい微笑みを見せ最後に

は酒を飲む。

「す、少しくらいなら襲つても……いやいや、それじゃあ約束を破る、嘘は嫌いだからな……でも」

「俺が了解したら良いわけだな」

「うえっ！ 起きてたのか？」

「いや、まったく、良い顔で寝やがったの所ですかね」

「ほ、殆ど最初だよ！」

「んで？ 鬼の星熊勇儀さんは人間の俺に何か？」

何か悪戯をする悪ガキの様な表情を見せる晴輝、勇儀は平常心を取り戻し、何でもないと言い返した。

「何でも無い事は無いでしょう、姉弟なのですからね？」

逆にその関係だともっと言いにくい。

「ああそうか、私をそこまで辱めたいなら良いぞ」

勇儀は服を脱ぎ、胸に巻いたサラシが見える。

「その気と言う訳ですか……」

晴輝も服を脱ごうと立ちあがる、だが腰の方からゴキツと嫌な音が響く。

「あがつ」

「ん？ 如何した？」

「骨が昇天しますた」

腰を押さえ、前屈みになる晴輝、だが勇儀は悪戯な笑みを浮かべ、手をワキワキとさせ血数居て行く。

「え、何？」

「いやあ、痛い時は他の痛みや快楽で忘れると言う療法が……」

「ちよっ、オチが読めた、助けてええええええええ」

番外編 ご乱心の勇儀姉さん（後書き）

主「感想お願いします」

62 - 普通の魔法使いは今日も騒がしい(前書き)

時間軸 晴輝失踪から三週間

62 - 普通の魔法使いは今日も騒がしい

晴輝が消失して三週間、未だに消息を掴めない、極普通の魔法使いは今日も箒に乗って彼を探していた。

「つたく、何処に居るんだぜ？」

魔理沙は上空から晴輝を探していた。

地上に居るとは限らない、ただ、死んでいない事だけは彼女も知っていた。

四季映姫・ヤマザナドウからの情報だと彼はまだ輪廻の輪も潜つては無い、地獄にも居ないと告げられた。

つまり地上の何処かにいると彼女はそう思ったのだ。

「それにしても暑い」

幻想郷は夏真っ盛り、七月の後半である。

「そう言えば新聞に美味しい和菓子屋が紹介されてたっけ」

そう言って前日の文々。新聞を取りだす、甘味屋『龍神堂』りゅうかんとく。た

った数日で有名な店となり売り上げも上々、店主が面白く、サービスも良いと有名で妖怪もバツチこいな店である。

「行ってみるか」

数分ほど並んで店に入った魔理沙、外との温度差が激しく、寒い位の冷気で満たされていた。

だが魔理沙にはそれよりも衝撃的な物に驚いた。

「ドラアアアアア！」

子供相手に謎の叫びを上げる変仮面を付けた男、仮面には龍と書かれ背中にも龍と書かれたマント、そして見覚えのある学生服、一年前、スカーレット姉妹と鬼巫女相手に圧倒的な実力差を見せた伝説の男、マスク・ザ・ドラゴンである。

「仮面男！」

「ああ、魔法使いさん、一年ぶりだねえ」

右手を上げてドラアアと変な挨拶で返す。

「魔理沙、アンタも来たのね」

声の主は霊夢だ、他にも見覚えのあるメンツが顔を揃えていた。

「如何なってるんだぜ？」

メンツは紅魔館の門番、メイド長と妹紅、慧音、四季映姫、小野塚小町、霊夢と変わった組み合わせで座っていた。

「変な組み合わせだな、如何した？」

「魔理沙、大変な事になりました」

深刻な顔をして映姫は話を始める、手に持った手鏡を魔理沙に見せるが魔理沙は何が何なのか理解できていない。

「この鏡は魔理沙の知っての通り、プライベートも人権をも無効とする覗き専用の鏡」

霊夢が手にとって見せた鏡は、閻魔の持つアイテムの一つでもあり、映姫の所持品でもある。

失礼な！ と声を上げる映姫を小町が落ち着かせ、ふたたび元の話へと戻る。

「この鏡で彼、晴輝の事を見てみると面白い事になるのよ」

そう言って魔理沙も鏡を覗く、そこに映ったのは晴輝ではなく、今となりで何故か美鈴と腕相撲をしているドラゴンの姿であった。

「如何いう……………事だ」

怒りを抑える魔理沙、三週間も姿をくらし、さらに変な仮面で帰って来たと思ったら店を開いてのんびりしてました、と彼女が怒りに身を任せて辺り一面を焼け野原にする要素が沢山あるのだから「でもまだ確信は無い、だからまだ動かないでおくわよ」

「アイツが晴輝だって証拠がない、もしここで動いたら確実に逃げられる」

今すぐにも真相を暴きたい、魔法使いがその事を誰よりも思っている。

だが今は待つしかないのだ、真相は逃げないが晴輝は逃げる。

両方を確かめ、確実に仕留める為に、獲物が隙を見せる一瞬を狙った。

62・普通の魔法使いは今日も騒がしい(後書き)

主「マスク・ザ・オウガ？ 知らないな、

誰の事を言ってるんだい？」

63 - 紅魔の従者達は今日も騒がしい(前書き)

時間軸 魔理沙が店に入る前

謎の雄叫び、店から飛び出す謎の仮面男、その仮面男にダブルリアクトをされている二人組の男、美鈴と咲夜は茫然と眺めているだけだった。

「当店での不埒な行為、そして自分に酔ってるお前等みたいな、バカな男は入店できません」

「クソツ、何しやがる！ 俺達は客だぞ」

「そうだ！ 客は神様なんだぞ」

「俺の知ってる神様はもう凄く凶暴な女だ、テメエらみたいな三下じゃねえ、それとも、今のセリフ、本物の神に言ってこようか？」

仮面を少しずらし、眼で相手を威嚇する、殺意に満ちた目に男達は怯えて退散して行った。

「その腐った性根を直してからまたのご来店を」

仮面を戻し、殺気のない陽気な笑い声で二人に手を振る。

店からは声援等の黄色い声上がり拍手をしている。

「美鈴、見た？」

「見ましたよ」

そう彼女達も見ただ事はあった、龍のマント、変な叫びは置いといて、龍の仮面、学生服が何より印象的だった仮面の男、自分たちの主の姉妹喧嘩を止めた伝説の様な存在。

「あのマント、何処で売ってるんですかねえ？」

「そっちじゃないわよ！」

「あはは、見られてたか」

陽気に笑う男、まるで恥ずかしい一面を見られた様な、愉快な口調だった。

先に居た霊夢、慧音、妹紅と合流する。

「いやね、さっきまで居たお嬢さんが変な男に絡まれてたから追出しただけさ、それよりお客さん、ご注文は？」

ドラゴンは何処から取り出したメニューを咲夜へと渡す。

「じゃあ……………水饅頭」

メニューを開いた咲夜は適当に選び、注文をする。

「私は宇治金時」

さっきまで店に居る子供たちと遊んでいた美鈴がメニューに素早く眼を通し、さつと答える。

「水饅頭と宇治金時、ちょっと待ってくれよ、すぐ作るから」

そう言っただ店の奥に行ってしまうドラゴン、彼を不審な目で見つめる霊夢達を無視して。

63 - 紅魔の従者達は今日も騒がしい(後書き)

主「……………」

返事がないただの屍の様だ。

64 - 楽園の巫女は今日も騒がしくない(前書き)

咲夜たちの来る少し前

64 - 楽園の巫女は今日も騒がしくない

博霊神社、一年での参拝客はギリギリ二桁だった。

現在、博霊霊夢は参拝者増やしに『龍の爪』を公開している、ついでに有料、御利益は商売繁盛、金運上昇など根も葉もない言葉を並べているだけだ。

だがしかし、一向に参拝客は増えない。

「如何したものかしらね？」

お茶を飲みながらゆっくりと考える。

「分からない！」

そう言っただけで四肢を投げだし畳の上で大の字になる、もう如何でも良さそうな顔をして天井を見上げる。

「茶菓子でも買いに行きますか？」

人間の里は活気に満ちて辺りはとても幸せそうだ。

「あーあ、商売繁盛してる店は全て滅びれば良い、ついでに守矢神社も」

明らか巫女の言う言動ではない、それほど彼女の頭は末期寸前だと言っ事だ。

「霊夢、良い所に来た」

「あん？」

まるで不良の様な返答、そんな返答を軽く無視するのは慧音であった、愛しの妹紅と歩き幸せそうな慧音、その幸せを『リア充爆破してやるうか？』みたいな鋭い眼で睨む霊夢。

「これから新しく出来た和菓子屋に行くんだが来るか？ 奢ってやるぞ」

「すぐ行くわ」

顔色を変えて慧音に飛び付く巫女、この巫女は何処まで金銭欲に

溢れているのだろうか。

「……………」
霊夢は茫然と立ち尽くしていた、変な仮面男と平然と喋る男、スカーレット姉妹の喧嘩に灯油を注いで火を炎にした霊夢達をボロボロにした男。

「ああ、霊夢、彼はマスク・ザ・ドラゴンと言ってルーミアと人間との仲を良くした」

「アンタ、ここで何してんの？」

霊夢はドラゴンの胸ぐらを掴んで仮面を外そうとする。

「ノウ！ マスクが、我が命、マスクがあああああああああ！ マスクを死守しようとするドラゴン、だが霊夢の握力はマスクを軽く破壊し、こめかみに食い込む。」

「アイアンクローが頭にイイイイイイイイ！」

「待て！ それ以上するとソイツが死ぬ！」

「妹紅、そう言ってマスクを外す手伝いをするな！」

「中々の握力、まさか！ あの時の博霊の巫女か？」

ボロボロのマスクを取り換えたドラゴン、霊夢は未だにマスクを狙っている。

「いやあ、あの時はすまない、少し私も気が動転しててな、一品ぐらい奢るから許してくれないか？」

振り返って奥へと戻ろうとするドラゴン、だが霊夢はさらに追い打ちをかける。

「晴輝、魔理沙の所へ帰らなくて良いの？」

「……………」
「晴輝なのか！」

妹紅が大声で叫ぶ、叫び声は他の客の耳に入り、注目の的となる

がドラゴンがその場を落ち着かせる。

「晴輝……はて誰の事やら」

「もしもそれが本当なら私達はそれを追求しなければならぬ、そうだろ妹紅」

「慧音の言うとおり、キッチリと落とし前付けてもらおうか」

何も喋らず、ただ立ち尽くすドラゴン、だが無言のプレッシャーが彼の仮面から漏れる。

「もしも、私が晴輝と言う人物だとしたら、正体を隠す理由があるのかも……知れませんか」

「否定か？」

「否定などしませんよ、一年前貴方を止めたのが私なら、つい数ヶ月前に来たのは誰でしょうね」

そう答えてドラゴンは注文の品を取りに行く。

真実を悟られない様に。

64 - 楽園の巫女は今日も騒がしくない(後書き)

主「番外編…………… ゆうかりんとのイチヤイチャ生活でも書きま

すか、ゆうかりんファンのためにも」

晴輝「そこそこ期待してますよ」

65 - 地獄鴉と不良天人は今日も騒がしい(前書き)

時間軸 開店数日前

皆さまのおかげでアクセス数が総計三十万！
ありがとうございます。

65 - 地獄鴉と不良天人は今日も騒がしい

マスク・ザ・ドラゴン、地獄から這い出てきた龍の化身、だがその正体は神田晴輝だった。

彼は謎の秘密組織、地霊殿に捕まり、改造人間にされたのだ、だが彼の心に正義と言う心が芽生え特殊なカードを使う事でマスク・ザ・ドラゴンへと変身するのだ。

「何か、某特撮ヒーローみたいな匂いがするんだが、てんこ、もう少しマシな説明ない？」

「てんこ違う！ 天子！ 私は天子！」

「天子さん必死ですね〜」

龍神堂から響く数人の声、天界、地上、地底の三人が今、太陽の沈んだ人間の里の小さな家から響く。

マスク・ザ・ドラゴンにして、龍神堂の主、神田晴輝。

天界で有名な不良天人、ひななめてんこ比那名居天子

旧地獄の太陽、地獄鴉、れいじゅうほ靈鳥路空、通称『お空』。

「まあ、良いか」

「良くない！ もう一週間近く経つのに何時になったら名前で呼んでくれるの！」

てんこが愛称としている晴輝、だがすでに半泣きの天子を見ると良心が痛む。

「ごめん、ごめん、でもなんか、天子って慣れないんだよな『天使』みたいで」

「てんこさん天使と言うよりは小悪魔っぽいですし」

「小悪魔いる！ 紅魔館に居るから！」

そんな日常的な会話、生まれも暮らし、種族も違うがたった一つだけ共通する言葉があった。

『家出』である。

日々のつまらない日常に飽きた天子は地上へと逃げてきた。

だが所持金はゼロに近く、当てもなかったので路頭で餓死寸前だった所を保護した。

そして俺に会いたいが為にさとりに黙って飛び出してきたお空、偶々俺が外で遊覧飛行をしていたから何とかだったが、俺が居なかったら確実に天子と同じ運命を辿っていた。

「それじゃあもう寝るぞ、明日からまた材料集めだ」

龍神堂を開く為に有り金の大半を使って材料調達をする。

この家は妖怪の集まる家、として競りに出されていた物を格安で買ったのだ。

風呂、トイレ、キッチン設備、さらに家具がいくつか放置され妖怪など一匹もない、まあ、今では三人の隠れ家として使用させてもらっている。

「それじゃ、また明日」

「おやすみ、晴輝」

「おやすみ、お晴」

いくら仲が良くても一緒に寝ると言うのには抵抗がある、それには前科があるのでこれ以上罪を重ねれば……考えただけでも涙が出る。

家の屋根に上り月を見ながらあの仮面を見て笑う。

「この仮面とは絶対離れられないと思う」

仮面の龍の字を指でなぞりながらそう呟く、晴輝の覚悟は決まっていた、この仮面と一生付き合う覚悟、彼にはもう神田晴輝として生きる、そんな選択肢はすでに無いのだ。

「まだ起きてたの？」

そこに天子が来る、俺の替えのYシャツをパジャマ代わりにしている、決して作者が裸Yシャツが好きだとかそんな事は無い。そんな事は無い！

ついでにお空も裸Yシャツだがして作者が裸Yシャツが好きだと

かそんな事は無い！

「隣、座るわよ」

天子の青い髪は月夜に照らされ、普段以上に綺麗に見える。

「まったく、一人で色々抱えて、ノイローゼでも抱える気？」

「何をすればいいか分からないんだ、俺の明日は闇に包まれてる」

ネガティブな晴輝に天子は両手を使って視界を遮る。

「てんこ？」

「先が見えないのなら私が隠してると思いなさい、貴方の道が暗闇でも足元は見えるでしょ、ゆっくり、ちよつとずつでも進んで行きましよ、ね？」

彼女の手から温もりを感じて、心を落ち着かせる。

「ありがたいよ、天子」

「やつと名前で呼んだわね」

「てんこやお空となら、俺もまた羽ばたける、俺が蜥蜴から龍に戻る間で良い、少しだけ手伝ってくれ」

「天子、そう呼んだら手伝ってあげる」

「てんこ」

「天子！」

「てんこ」

「天子！」

「天子」

「てんこ……ってアレ？」

笑いを堪えて膝を叩く晴輝、だが天子は涙目である。

「これで手伝ってくれるな、てんこ」

必死になって笑いを堪える晴輝に天子の悪魔の様な悪戯が晴輝を襲う。

唇に触れる柔らかい感触と鼻を摘む細い指、天子は晴輝を驚かせようとキスをして呼吸できない様に鼻を摘んだ。

「んーんー！」

鬼二は劣るが天人の力も強く、人の力では抜け出せない、さらに

舌を絡め合わせて来るので心身共に痺れて行く。

絡まる舌から唾液が注がれて、もう、色々と限界である。

酸素とか長いとかそんな理由ではない、体が火照って熱くなり、理性も吹き飛び、紳士から野獣へと変貌する晴輝、もうあの時の二の舞とか、同じ罪を重ねるとかそんな事は頭がない。

ただ、求めてくる相手に答える為に、溢れる欲望を出す為だけに動く。

野獣モードの晴輝の頭にはある言葉しかない。

「据え膳食わぬは男の恥！」

「やーん、ケダモノ〜」

この男、本当に死んだら次の主人公を誰にしようか。

リア充は全て爆発すれば良いと思う作者からの切ない願いである。

65 - 地獄鴉と不良天人は今日も騒がしい(後書き)

主「ニコニコ動画を日々見続け、すーぱー廃人化」

66・颯との出会い（前書き）

失踪から十六日目

前はすみませんでした。

改めて月曜、木曜、日曜に投稿します、すみませんでした。

66 - 鼠との出会い

八月の初め、晴輝消失から一月近くたった。

今日も龍神堂は大忙し、どこぞの神社とは違って金の流れも良く、大繁盛と言うにはほど遠いが、若い娘や子供に人気が多く、信仰も多いのでどこぞの神様にも眼を付けられてしまう。

昼時、客足も増えていたこの時間帯に一休みに外へ出た。

「何だこれ？」

そこで店前の落とし物を拾い、砂埃を掃う。

置き物っぱいが何となく違う様な、塔を思わせる形である。

「置いとくと壊れそうだし、店に飾っとけば情報も来るかもな」

店に戻るうとするとドラゴン、だが目眩を起こし壁へと凭れかかる。

「くっ！ 流石に七ゲームはキツイぜ」

この男、昨日の晩も三人でお楽しみでしたねコンチクショーですよ、三人ですよ、この節操無しが！

「絶倫と言ってくれ」

だかドラゴンもいよいよ取り返しが着かない所まで来てしまったのかもしれないと反省している。

「これで子供でも出来たら………」

「あなたー、出来たわよ」

天子の和菓子追加が出来た事を違う意味でとらえたドラゴン、

「あばばばば」的な事を言い放って倒れてしまう。

「魔理沙、ごめん、俺、やっちゃった」

真実を聞かず自分で解決してしまったドラゴン、仮面から零れ出てくる雫は誰にも分からない。

日は落ち、丑三つ時、何故か槌で釘の様な物を打っている様な音

が響く、人間の里。

その人間の里の外れに位置する命蓮寺、妖怪と人間の共存を目指している。

「ナズーリン！」

「如何したんだ、ご主人、まあ、どうせ『宝塔を失くしたから探し
てくれ』とかだろう？」

「くっ！ 何故分かったんですか？」

「長い付き合いだからね、と言うか、日が落ちる前に行って欲しか
ったな」

「うっ、今まで仕事とかお茶菓子を食べていて遅くなってしまい……」

千葉にある某遊園地のマスコットの様な少女、鼠の少女、ナズー
リン、灰色の髪、鼠の耳、尾が特徴である。

そして彼女の主人、寅丸星^{とらまるしやう}、ドジっ虎、ひんぬー、 いや、違う
巨乳だ！

「何か、私の紹介適当じゃないですか！」

余談だか作者は脳内で彼女をDだと思っている。

「作者さーん！」

「ここかな」

ダウジングロッドを使い、辿り着いたのは最近噂の和菓子専門店、
『龍神堂』である。

失くした本人、星曰く、出来るだけ静かに、家に入り、宝塔を回
収する事が望ましいらしい。

「まったく、泥棒白黒じゃあるまいし、まあ……偶には悪くないか」
針金を口を含み、形を変形させて鍵穴に入れる、鍵は開き、計画
通りとドヤ顔で潜入するナズーリン、探し物は店に飾られていたの
で回収はあっさりと出来た、だが……

「ん？ 何だ、起きているのか？」

奥から聞こえてくる声、まるで喜んでいる様な、気持ちの良い様な声。

「な、何だろか、聞いてるだけで顔が紅潮するこの声は……」

声の元へと息を殺して近づく、何か、これ以上踏み込むとイケナイ様な気がするナズーリン、だが興味心とは知らぬ間に体を動かす。

一室の前、声を殺そうとするが何故か呼吸が乱れる、まるで緊張している様な、その姿、初めてエロ本を買った男子高校生の様な……

「その話、前にも聞いたことがあるぞ」

生唾を飲み、覚悟して襖を開ける。

「あつ、らめえ、そこ、強くし……ちや！」

「……………」

ゆっくりと襖を閉めて現実から逃げる。

「（今のはアレだよな……性交と言うやつか？ いや違う、たぶん

マツサージの延長線だ、ならあの地獄鴉の体の白いのは？ ケファイ

アか！ そうだケファイアだ、そうだよ、そうに違いない、ならなぜ

二人は裸？ 分かった、ケファイアが……ケファイアの……）」

「お客さんにしてはまるで泥棒みたいね」

「…………ツ！」

背後からナズーリンの口を塞ぎ、首に手刀を入れる、意識を失くしたナズーリンはそのまま床に倒れる。

作者の俺が言うのが少しおかしいが、この出会いは最低であると内心、思った。

66・鼠との出会い（後書き）

主「現在新作製作中、まあゆっくり読み直して言ってね！」

晴「凄い事ここで言ってますね」

主「主人公は喧嘩好きって言っ奴」

晴「え、ちよ、やるよやるよ詐欺じゃないんですか！」

主「どこに驚いてんだテメエ」

67 - みよんな噂

「ハッ！」

視界に入ってきたのは三人の顔だ、地獄鴉、天人、見知らぬ男、それぞれ心配そうな顔で私の顔を見ていた。

「いやぁー、大事に至らなくてよかった」

「てんこさん、少し力入れ過ぎだよ」

「お空、天子だってば」

三人は心配そうな表情から一変、温かい表情で迎えてくれた。

「家に来た理由を聞かせてもらいたいが、何か食べるか？」

「ああ、少し君の家に用があつてね」

懐の宝塔を取り出し、男に見せる。

「つまり、自分の物を取りに来たって所？」

「私の物ではなく、主のだが……まあ、同じだ。龍神堂（りゅうじんどう）の店主は気の良い事で有名だ、出来れば明日取りに来たかったのだが、ご主人が……な」

経緯、行動、目的を言い、解放されると思っていた。

「それじゃあ、俺の探し物も引き受けてくれないか？」

「はい？」

「なるほど、君は一月前に居なくなった神田晴輝と言う事が、知ってるよ、魔法使いが泣きながら探していた時期があつたからな」

「もう確実に死んだ、十三回位殺される、転生しても殺される」

「ま、まあ、女を本気にさせた罪だ、優柔不断は身を滅ぼすぞ、つ、ついでに、私は……何時でも……」

鼠に励まされる人間、最後のセリフは小さくて聞き取れなかったが「さつさと殺されないかなあ……」まったくもって情けない話だ。「何か、今作者の声がしたんだか？ てんこ、お空、聞こえなかつ

たか？」

二人とも首を横に振り、否定をする。

「何処までメタな話をしてるんだ……」

「とりあえず、噂では君の武器は四人が所持しているらしいが、その人物の場所を示す、それでいいんだな？」

「よろしく頼む」

ナズーリンは外へ出てダウジングの道具を持って飛んで行った。

「私達も手伝うわよ！」

「うにゅ！」

お互いに武器を持つ二人、天子はひそこのつるぎ、お空は制御棒である。

「悪いけど、今回は一人で戦いたい、俺のご先祖の世話は、子孫である俺がするのが当然」

「そつ」

「うにゅ……」

「……協力してくれるなら、二人に頼みがあるんだけど」

「龍符『竜に翼を得たる如し』！」

スペルカードは、晴輝の翼となり、光となり、消えて行った。

「それじゃあ、行ってくる、明日の仕込み、よろしく」

学ランにマントの衣装、仮面はずらし、顔の半分が見えるようにしている。

腰には風呂敷に姿を隠した刀の様な物を差し、小包を着けている。翼で空気を掻き、足が地面から離れる。

「それじゃあ、行ってくるわ」

手をひらひらと振り、ナズーリン、お空、天子に合図を送る、これは『離れる』と言う意味を持つ。

「では、また会おう、諸君！」

マスクを着けている時と同じ、掴めないキャラを使う。

地面を二、三度蹴って一気に上昇すると風が三人を襲う。

「立つ鳥跡を濁さずと言う言葉を知らないのか彼は？」

「お晴は渡り鳥じゃない、だから、また帰ってくる」

「さて、仕込みでも始めますか」

67 - みよんな噂 (後書き)

主「久々にモンハンをプレイ、だがジンオウガに秒殺、俺弱いぜ」
晴「執筆してください」

番外編・鼠と鴉と天人

厨房、残された三人は下ごしらえまで済ませて、さっきの話をする。

「それにしても、今回は一段と声大きかったね」

話を振ったのは天子であった、退屈な時間を談話で過ごすように計画した天子はつい最近の話で場を盛り上げようとする。

「うにゅ？」

「夜伽だよ、よ・と・ぎ」

お空は数分考えた後、言葉の意味を理解し、顔を真っ赤にする。

「君達は何の話をしているんだ？」

「何って、自分の眼でみた本人が何を仰って……」

「アレは事故だ！ きよ、興味もあつたが、だが！」

「はいはい、誤魔化さなくてもバレバレだっちゆうに、お空も見られて興奮してたみたいだし、でも……まあ、興味を持つのは分かるよ」

「んにゅ、確かに、満足するまでやってくれるし、何しろ……」

「逝き地獄と言うか、快樂の絶頂のオンパレード……と言うか」

分からない皆さんは次の話へ、分かる人は……ケフィアだと思っ
てね。

「いい加減にしないか、その、何だか私まで変態じゃないか！」

「え？ 変態じゃないの？」

「違う！ 断じて違う！」

そんな楽しい会話の中、不安が彼女達の思考を狂わせる。

「お晴は……帰ってくるかな？」

「信じるしかない、彼が私達を信じたように」

この会話にイマイチ馴染めないナズーリン、だが不安なのは同じである。

「心配だ」

「おや？ ナズーリンさん、彼の事が心配ですか？」

天子は何かを悟った、相手を茶化す様な口調で言う。

「ああ、そうだな、心配だよ、彼が他の女性を襲うと思うと」

「それは無いよ」

お空は微笑んだ。

「お晴は確かに貪欲だよ、まるで一滴も残さない様に、でもお晴から襲う何て無いよ、絶対に」

「確かに、私達が喰われた事なんて無いな」

「二人も抱いて、彼は……………」

「それ以上いるよ」

「!？」

「キスメ、ヤマメ、パルスィ、ゆうぎ……………私達を入れて六人」

元気に明るく答えるお空に対し、天子は憤怒、ナズーリンは羞恥の感情を抱いた。

「ほほう、初耳、帰ってきたらお仕置き……………お空、拘束具」

「ハイよ」

何処から取り出したロープを、カウボーイの投げ縄のようにくると回す天子、だがそのスピードはどんどん落ちて行き、仕舞いには地面へと垂れる。

「帰って……………来るわよね」

「天子さん、それまで待つとこ……………ね？」

テンションが下がって行く二人に彼女は呆れる、だが対象はお空でも、天子でもない。

「（帰ってこなかったら如何しようか、君は……………何を望んでい
るのかな）」

番外編・鼠と鴉と天人（後書き）

主「最近、ニートがやめられない」

晴「働いてください」

主・輝「はたらかないでござる！」

69 - 弾幕ごっこ【魂魄妖夢】前編

「スperlカードルールは無し、相手が降参または死んだら勝ち……
……………それで良いわね？」

「ありがたい、まあ、遊び気分で来てくださいな妖夢さん」
「手加減はしませんよ」

幽々子の合図で始まる弾幕ごっこではない、真剣な命の駆け引き、晴輝はマントを脱ぎ捨て腰の武器を構えずに立っていた。

「何で構えないんですか？」

「好物は最後まで取っておくタイプでね、残念だけど俺は君を舐めてる」

「いい度胸、良いでしょう、この楼観剣に斬れぬ物などあまりない！」

彼女の口調が変わり武器を構える。主人の手前、負ける事は恥を晒す、負けたら死を決意しているのだろう。

「この世に生まれて一九年、その人生に意味は無く、足掻いて生きた一族の恥曝し、龍神堂店主、神田晴輝、互いに魅せよう生き様を、綺麗に散りゆくその日まで、いざ……………参る！」

「それじゃあ、始め！」

合図と共に仕掛けてきたのは妖夢の方である、刀を握り横腹から斬ろうとする彼女、いや、彼女達の刀を素手で受け止めた。

「ッ！」

「何で分かった！ みたいな顔してるけど、俺はお前の事を良く見てる、たった数分だけお前の半霊居ないの最初から気付いてたぜ」
妖夢は距離を取り後ろへ下がる。

半霊も後ろへと下がり警戒をする。

「中々ですね、ですが、まだ完全には見切れていないようですね」

Yシャツは切れていた、あの時、完全には見切れず数発良いのを貰っている。

「たつく、刀つかんだら血が出……………ありやいや？ 血が出てないわ」

刀など素手で掴んだら確実に血が出る、なのに血が出ていない、この状態を妖夢は理解出来なかった。

「如何いった仕掛けか知りませんが、素手の貴方に後れを取る様な私ではありません！」

再び二人で攻撃を仕掛ける妖夢、避ける事も受ける事もなく、鋭利な牙は晴輝の首と胴体を引き裂いた、と思っただが。

「ゴメン、痛くないわ」

「なっ！」

刀は肉に入る前に皮膚でその刀身を受けていた、切れた皮膚からは血が垂れるが、当の本人は全く痛がってない。

「確かにね刀の修行は行ってきたみたいだけど……………何？ 刀に頼り過ぎて力が出てくない？」

「（凄い、妖夢の弱点を見抜いた、流星は紫の連れてきた外来人、でも……………痛そう）」

「それじゃあ、俺も本気だそうかな」

二人の妖夢の頭部へ軽くチョップを入れる。

「なっ！ ふざけてるんすか！」

今、確実に晴輝は相手の首を落とす事が出来ていただろう、だがそれはしなかった。

「ふざけてないよ、ただ、同じ刀を使う物として、修行ぐらいは手伝ってあげようかなと」

「余計なお世話です、次行きますよ」

次の攻撃を教えてくださいました優しい少女、その少女へ腰に付けている袋から竹筒を投げる。

「ふざけないでください！」

彼女が竹筒に攻撃した時、晴輝はすごい勢いでその場を離れた。

「妖夢！ 危ない」

「えっ？」

竹は謎の警告音を放ち、爆発した。

規模が大きく半径5mは爆発しただろう。

「お空特製の爆弾だ、竹筒でカモフラージュしてるから分からなかつたろ」

幸いにも相手は死んではない、辛うじて避けている。

「おお、清く正しい白、アンタは如何思う？」

「そうね、もう少し大人っぽい下着でもいいんじゃない？」

「え、でもストライプとか如何すか？」

「それよりも黒か紫ね、下着で魅せなきゃ損よ、損」

自分の従者の敵だと言うのにパンツの話で意気投合、何故かパンツ談義へと発展していく。

「ちなみに幽々子さんは何色で？」

「私？ ん……………今日は赤ね」

「貴方達は……………何盛り上がってるんですかあああああああああああああ！」

地に伏せていた妖夢も自分の醜態に気付きね怒りながら立ちあがる。

「白い天使をありがとう」

親指を立てた両手で晴輝は無邪気に笑う。

「こんの！」

刀を力任せに振る妖夢に二つ目の竹筒を投げる。

「同じ手は！」

後ろへと下がる妖夢に対し、爆破予想地から逃げない晴輝。

「ゴメン、これさっきのじゃない」

そう言つて眼を腕で隠すと竹筒は眩い光が放たれる、閃光玉ならぬ閃光竹である。

「くっ、眼が」

「まだまだ俺のターン」

一瞬で背後へと立った晴輝は妖夢のカチューシャを取り違うカチューシャへと付け変える。

「あら、可愛い」

幽々子が見たのは猫耳カチューシャで招き猫のポーズをさせられてる妖夢であった。

「……………？ ハッ！」

自分の頭への視線に気付いた妖夢はカチューシャを取り外し折った。

「オウマイガー！」

晴輝は頭を押さえてその場へと伏せる。

「こんの！」

刀を構える妖夢、だが。

「アレ？」

刀は刀でも木刀、それもヒビの入った折れかけである。

「刀ならこつち、後、足元見てみ」

「？」

足元に転がっている無数の竹筒。

何故か屋敷の上へと非難している晴輝、彼女はこの二つの事柄を繋げる。

「にやあああああ！」

そのまま横へと飛ぶが竹は爆発しない。

「あ、ゴメン、それ偽物」

散々コケにされた妖夢の怒りは頂点へと達し、顔を赤くする。

「アハハ、可愛い所見せてもらったし、じゃあそろそろ」

愉快そうに笑う晴輝の顔は一変鋭い目つきへと変わった。

「本気で行くか」

69 - 弾幕ごっこ【魂魄妖夢】前編（後書き）

主「最近何だか頭が冴えない、とりあえず皆、サークル『アールグレイ』の添い寝CD聞いてこい！」

70 - 弾幕ごっこ【魂魄妖夢】後編

「人符『現世斬』！」

「ドラアアアアア！」

刀と手刀がぶつかり合う、屋敷の庭の所々は抉られ、削られ、壊れている、手刀で刀を持っている相手と戦う人間は、晴輝が幻想郷で初めてだろう。

「あ、でも霊夢とかデコピンで紅魔館を半壊させたからなあ」

「何を！ 無駄口叩いていないで刀を持って！」

まあ、素手で戦って押されていると思うと、誰でも腹が立つだろう。

「ハアアアアアアアアアアアア！」

力押しで負け、そのまま弾き飛ばされる。

壁に当たり、瓦礫が雪崩の様に晴輝を飲み込む。

「龍符『竜に翼を得たる如し』」

瓦礫を自慢の白い翼で掃い、上空へと飛ぶ。

「よし、合格」

「何を言ってるんですか？」

「力、速さ、技量共に全部バツチリ、そろそろ本気出すわ」

腰に差している刀の様な物を取り、構える、だがその武器の殺傷能力は低く、戦闘向きではない。

「木刀？」

「木刀ですが何か？」

「ふざけてるんですか？」

「こんな武器しか持って無いんだ、まあ、次で決める」

スペカを取り出し、投げる。木刀を構えてそのまま呼吸を止め、

「刀符『伝家の宝刀』」

スペカが燃え、晴輝の体を炎が包む。

「ドラアアアアアアアアアアア！」

妖夢目掛けて斬りかかる、妖夢は刀で防御するが力負けし、そのまま後ろへ下がる。

「まだまたああああああ！」

燃える木刀、炭になる前に決着を付ける為に剣先を妖夢へ向け、業火が妖夢を包む。

「くっ！」

木刀と刀、どちらが強いと誰もが後者を答える、だがその木刀一本で本物相手と互角、それ以上で戦っているとしたらそんな事言えるだろうか。

「ラスト！ 龍撃『諸刃の剣』」

木刀が燃え尽き、晴輝は燃える翼から無数のレーザーを放つ。

その数軽く一千を越え、降り続く雨の様に、燃えおがる炎の様な勢いで、彼女の元へと一直線へと向かう。

「決着が着いたか？」

最後の一撃が終わり、能力も解き、妖夢が飛ばされた所へと歩いて行く。

「大丈夫？」

「遠慮は無用、さあ、トドメを」

「幽々子さーん、カウントお願いしませんか？」

晴輝はその場に座り、幽々子へ合図を送る。

「如何いう事？」

幽々子は理解しているのだろう、だが理由を理解できていない、そんな顔をしている。

「もしも十数えてどちらかが立たなかつたら、『引き分け』って事で」

「……………優しいのね」

「自分勝手ってってください」

幽々子はカウントを始める、だが両者立ちあがる気配は無い。

「何故、立たないのですか？」

「疲れた、案外あのスペル、体力使うんだ、それにトドメを指す武器は無い」

「まだ立てるほどの気力は残ってますよね？ それに私の武器を使えば……………」

「……………真剣に向き合った女に、恥かかすのは男として如何かと、ああ、女だったらしのつまないセリフだから、流しても良いですよ」

「そうですね、覚えておきます」

「十つと、さあ決着は着いたわ、私は寝るから、お探しの物は倉庫にあるけど取って帰っちゃダメよ」

取って帰っても良いとでも言いたそうな顔で、部屋に戻って行く。「よいしょつと、おろろ？」

立ちあがるが足が震え、上手く足が地面に垂直にならない。

「私もまだまだ未熟者ですね」

そう言い終わると目蓋を閉じる。

「寝てる」

安心したように落ち着いた寝息をたてる妖夢、外で寝かすのも鬼畜なので屋敷の中へ運んだ。

「さっきまで真剣だった少女は何処へやら、まったく可愛らしい顔して。誰だって未熟者だよ、そこから強くなるんだよ」

彼女の顔が赤くなつた様な気もしたが気の所為にしておこう。

早朝、

「あれ？ 今……………幽々子様の朝ご飯！」

服を着直し、台所へ駆ける妖夢だが、既に十人前近くの料理と、それを食べている幽々子がいた。

「おはよう妖夢、昼まで寝てて良いわよ、突然の来客で疲れてるでしょっ？」

「あの……………この料理は？」

「彼が作って行ったわ、食べたなら寝なさい、無理は良くないわよ」

「でも、庭の手入れが……………」

「それも彼がやって行ったわ、お詫びの印って言って」

「……………」

二人の戦いが終わったのは午前の三時辺り、現在時刻が六時としたり、晴輝は三時間で全てやってのけたと言う事になる。

「ついでに伝言」

「……………？」

「寝顔可愛かったって」

妖夢は顔を真っ赤に染める、幽々子は何かを悟った様遠い眼で、

「若いつて良いわね」等と愚痴を溢していた。

「変わってるわよね、彼」

「そうですね、いきなり乗り込んできて、剣の指導を勝手に始めたり、変な能力使ったり、台風みたいな人でしたね」

桜の花びらが綺麗に舞う、まるで彼が風の子の様だった、強くなったり、弱くなったり、背中を押ししたり、支えたり。

「幽々子様、午後はお団子でも食べに行きませんか？」

「やっていると良いわね……………龍神堂」

70・弾幕ごっこ【魂魄妖夢】後編（後書き）

主「てめえら、ニコニコ動画見てこい！

『無気力が幻想入り』シリーズ見てこい！

以上、宣伝でした」

71 - 苦勞人達の集会（前書き）

失踪から十七日

読んでくれる皆さんへ、読み終わった後に活動報告をチェックしてください。

71 - 苦勞人達の集会

八月の最初、夏の暑さと蒸される様な熱気に体は悲鳴を超え、絶叫していた。

「テラ寝不足なう、睡魔に襲われヤバス」

仮面を付けて今日も仕事に勤しむ、だが疲労、睡眠不足、その後の説教等で身も心もボロボロである。

「誰かあ、助けてくれええええええ」

そう呟くと足が纏れ、バランスを失った体が倒れそうになる。

だが誰かに支えられ地面とキスする事もなく、態勢を立て直す。

「大丈夫ですか？」

「昨日の友は今日の敵と言うやつですか？ 妖夢さん」

仮面がずれ、顔が半分出てしまう、だが妖夢に抱きつかれているので他の人には見えてない。

「逆ですよ、重症ですね」

「最近ほとんど寝てなかったから、パネエ」

「ワロスじゃありません、少し休んだら如何ですか？」

「だけど、他の皆が働いてるのに自分だけが寝てるのは……………」

……

「店のから心配そうに見てる人が見えるんですが、お客さんも心配してますよ」

大丈夫？ 無理しないでと、励ましの言葉を貰い少しだけ眠気を吹き飛ばすドラゴン。

「そうだね、今日は五時までの営業にするか、看板出しとこう」

フラフラと覚束ない足に無理やり力を入れて前へと進む。

「お晴、お空は居るかしら？」

「店主さん、昨晚は宝塔、ありがとうございました、ナスーリンの主人の……………」

「すいません、ここに総領娘様が……………」

「ああ、さとり様、それに……………」
虫の息、体は命令を受け付けず、精神も臨界点を軽く突破する、そのまま地面へと倒れ込む。

龍神堂の客間、布団の上で目が覚めた、倒れた原因は過度の疲労、睡眠不足から来る軽い発熱、時刻は閉店から三十分ほど後、喉を潤す為に台所へ向かうが……………」

「お空、いい加減戻って来なさい、アナタが彼と居るおかげで私……………」
こいしのストレスが大変なの、それに仕事とかそういう面も……………」

「ですから、総領娘様にはもう礼儀を付けてもらいたくて……………」

「まったく、ご主人、いい加減に物を失くさないでほしいな、そのお蔭で……………」
ま、まあ！ とりあえずご主人、普段から気を配っておけば日々の弛んだ生活も……………」

アレ何この状況、お空はさとりに叱られ、てんこは綺麗な美人に生活指導され、何故にナズーリンは自分の主人に説教してんの？
どっちが偉いの？

「お晴〜」

「晴輝〜」

「店主さ〜ん」

お空、てんこ、ナズーリのご主人が俺にダイブする、それを何故か色んな怒りをぶつけるさとり、綺麗な女性、ナズーリン、三人をとりあえず宥め、自己紹介へとこじつけた。

「私は地霊殿の主、古明地さとりです、お晴の元主人で、今も旧都地霊殿との交流関係は途切れていませんので」

何か、さとり様の第三の眼から対抗意識が溢れ出ている。

「私は永江衣玖です、総領娘様の」

「てん……………」
天子から聞いています、優しくて美人だっ

て」

「きよ……………恐縮です」

衣玖さん、顔を合わせるのは初めてだが、てんこの言ってた通りの優しい人だ。

てんこ事態は悪く言っていたが、その時の顔は明るく輝いていた物が多い。

「うう、私はナズーリンの主人、寅丸星です」

ナズーリンに絞られ、軽く涙目でこちらを見る星さん、だが、だんだんとその眼は闘志に燃えてくる、何故だかこちらも、この人と戦いたい衝動に襲われ……………違うからね！ 性的な意味じゃあ無いからね！ 決闘的なアレだから！

「何故でしょうか、貴方を倒したい！」

「ドララララ、こちらも本気になるうか」

龍と虎、双方が交える事は数千年も前から決まっている、なぜならば最強は一人で良いから！

お互いに構える、それをナズーリンとさとりが止めに入る。

「はあああああああああ！」

「ドラアアアアアアアア！」

「アレから小一時間、病人だったのにタフね」

天子が衣玖の説教を聞き流しながら晴輝と星との対決を見ていた。

「皆さ〜ん、ご飯の準備が出来ました」

台所から大皿に大量の料理を乗せた妖夢がナズーリンと共にやって来た。

「わ〜い」

「と言うか何故、貴方達は当たり前前の様な顔で、この家の台所で料理を？」

「あの……………先日は色々あったし、晴輝さんに手料理食べてもらいたくて」

「私もご主人の借りがあるからね、恩返しをしても良いだろう？」
二人の言動を怪しいと睨むさとり、当の本人は星と勝負をしている、と言ってもだんだんとランクが下がって行き、今は指相撲で落ち着いた。

「お晴！」

「はいっ！」

さとりの言葉で眼が覚め、背筋を伸ばして振り返る。

「貴方、熱は？」

「星さんの御蔭でかなり落ち着きました、全力で運動するって良い事ですね」

妖夢から渡されたタオルで汗を拭き、その場へと座る。

「ちよつと汗臭いんで風呂に入ってきます」

「いや、気にしてないわ、だから入ってこなくても」

「こんな美人たちの前で汗臭かったら失礼なので、それでは」

その場で軽く頭を下げて風呂場へと向かって行った、残されたメンバーは顔を紅潮して場を盛り上げようと、無理に笑いを作る。

「ま、まったく、お晴は……………最近天然の女殺しへと進化して……………」

地霊殿時代から良く接してきたさとり、色々と成長した晴輝に心を奪われてる。

「私、あんな良い笑顔で美人って言われたの初めてです」

「衣玖、大丈夫？」

初対面の衣玖までも頬を赤くする。

「女つたらしなのが残念だけどね、まあカッコいいし、大事にする分にはマシなほうか」

「ナズーリン、人を外見で判断してはいけません、それにとってもいい人じゃありませんか」

「いやご主人、本当に彼は女つたらしなのだが……………」

「それは……………如何いう事ですか？」

空気が変わる、辺りに漂うみよんな殺気、今にもポルターガイス

トでも起こりそうに物体が振動を始める。

何かしらの殺気に気付いた天子とさとり、そつとその場から離れようとするが、

「詳しく話を聞かせテ貰イマシヨウカ」

妖夢の姿へと変化した半霊と、妖夢が二人を捕まえる。

「ちょ、妖夢さん、怖い、別に良い話じゃないわよ」

「そうそう、この空気が変わっちゃうからそれは……………」

……………」

風呂を上がり、火照った体を覚まそうと牛乳を飲みに来たのだが、机の上でお空がのびていた。

「お空、大丈夫か？」

今回の売り上げの計算を終わらせたお空、今回は異常なほどの売り上げだったので、計算に頭を使ったお空は頭から煙を出していた。幽々子の御蔭で一週間分の材料は底を尽き、臨時休業と言う事で一週間の休みである。

さらに代金が不足していたので妖夢が一時的にこつちへ働きに来ている。

「お空、起きろ」

「うにゅ……………もう無理」

とりあえず頑張ったご褒美でも買ってやろう、そう思ってお空を抱きあげる。

「さてと、飯の時間だ」

「それで晴輝はいつちゃったんだけど、私には記憶がないんだけど、その後はまるで獣みたいに……………」

「今日はハードプレイにしてやるっか？」

天子達の怪しげな会談にお空を連れて入ってくる。

「そんな生々しい話、誰が聞きたいんだって……皆興味津々ですか」

「お晴……キスメやヤマメ、パルスィさん、勇儀さんでは飽き足らず、天子さんにまで手を出して……」

「お空も食べてえ」

「！」

お空のタイミングの良い寝言に皆驚く。

「あー、ご想像にお任せします」

もう面倒になって来た晴輝、お空を皆の居る居間で横にしてやる。

「何か、もう手遅れみたいな雰囲気なんだけど、え、何？ 全部聞いた？」

皆はコクリと頷く。

「そ、そう言えばお晴、貴方は魔理沙の所へ帰るって言ってませんでしたっけ？」

今さらだな、そう言って頬を搔く。

「てんこ、風呂入ってきたら？」

「そうね、それじゃあ入ってくるわ」

そう言っつて風呂場へと行ってしまふ天子、まあ、あそこまで恥ずかしい話をしたのだ、この場からの脱出は誰よりも天子が望んでいた。

「それじゃあ暇だし、俺とてんことお空の出会い話でもしますか？」

71 - 苦勞人達の集会 (後書き)

主「現在、アニメ、漫画、ラノベから離れて休憩をとります、絶対に直して帰ってきますので！」

番外編 天と地との狭間

「暇ねえ」

相変わらず天界は暇、毎日が平凡、争い事は無いこの世界にもう飽き飽きとしていた。

「衣玖、ちよつと飲み物取って来て」

「分かりました、でも天界から抜け出さないでくださいね」

「分かっているって」

衣玖は何度も私に言っつてその場を離れて行つた。

「計画通り」

全力でその場から逃げだし、天界から落ちる。

「適当にぶらぶら歩きますか！」

灰色の雲を抜け、そのまま地上へと真つ逆さまに落ちる。

全ては退屈な日常から抜け出す為、刺激を求め地上へと降り立つ。だが、何の因果か分からないが上空をゆっくり飛んでいる少女と激突する。

ゴツンと鈍い音を響かせた、天子は頑丈な体の為にダメージはゼロ、だが相手は頭を抱えて空中で悶絶していた。

「痛ああああい！」

「ちよつと、ゆっくり飛んできると邪魔よ」

「うにゅ……………確か？」

少女は頭を押さえながらも必死に脳を働かせる。

「天人の……………衣玖さん？ でも胸が……………」

ブチツと言う音が天子の頭から響く、絶壁、まな板、刑事ドラマの定番の崖等のコメントは死亡フラグを建てたと思え、彼女にとつて胸の話は禁忌である。

「ちよつと胸がFあるからって、何か？ 挑発か、安い挑発ね、でも嫌いじゃないわ！ 地獄鴉、霊鳥路空！」

天子は緋想の剣を握りしめ、お空に斬りかかる。

「ッ！ 光熱『ハイテンションブレード』」

相手の攻撃に素早く対応し、スペルカードで応戦する。

「今度はこつちから、爆符『プチフレア』」

「何の！ 非想『非想非非想の剣』」

妖怪の森から一人の男が出てくる。

晴輝だ、まだ龍神堂を開く少し前、彼は苦しんでいた。

「あんなこと言われたら……………」

森に入る前、アリス・マーガトロイドと言う人形使いに出会い、

彼女にこう言われたのだ。

『貴方は私達の邪魔なのよ、出来れば魔理沙に会ってほしくない、神田晴輝はすでに死んだのよ』

巨大な人形に囲まれ、武器を突き付けられた晴輝には、彼女の言う事を聞くしかなかった。

元々、俺が幻想郷に来なければ、彼女の恋は成就していたらしい、何か『お前がいなければ作戦は成功していた！』的な事をほざく、雑魚キャラみたいだったが。

今さら旧都に帰れない、帰ったら帰ったで気まずい。

「店でも開くか……………和菓子屋でもすれば儲かるだろ」

一応は菓子職人を目指していたのだ、頑張れば出来ない事は無い。何時までも魔理沙の家に居候しては居られないと思ったので、ほ

ろい家も買った、改装すれば店として使えるだろう。

「魔理沙に会いたいな」

まあ、会ったら殺されることは確実だがな。

「てか、誰だよ、こんな嵐の中、弾幕ごっこしてるのは」

鉛色の空、いつ落雷が落ちても可笑しくない、豪雨が二人を包みこむ。

嵐の中、二人の戦いはすでに激戦へと変わっていた、服は無残にも破け、服と言うよりは布に近い。

「博霊の巫女も如何したのかしらね、ここまで派手に暴れたら来そうなのだけど」

「どうせ、バカみたいに寝てるんだよ」

仲が良いのか悪いのか、互いに息を切らしている、だがお空は今にも倒れそうだ、天人の無尽蔵とも言えるタフさには、勝てない。

「次で決めるわ」

「こっちのセリフ！」

スペルカードを互いに構え、最後の一撃を放そうとする。

「『全人類の緋想天』」

「鴉符『八咫烏ダイブ』」

天子は緋想の剣を投げ、お空はその場で一回転する。

「うりややややややややややややややや！」

「はあああああああああああああ！」

天子の攻撃に押されつつも、前進するお空、だが羽根はちりぢりに焦げ、仕舞いには髪も燃える。

「大丈夫か？」

お空の元へ晴輝が飛んで行く。

「アレ？ お晴？」

「ああ、お晴だ、霊鳥路空、お空で良いんだよな」

「う、うん」

「ちょっと休んでろ、後は俺がする」

お空を抱き、手を前に出す。

「龍撃『諸刃の剣』」

背中から発射される追尾型レーザー、全方向に発射されたソレは天子のレーザーを相殺しようと突撃を始めた。

光線はぶつかり、相殺され消えて行った。

「ちよつと、人の喧嘩に手、出さないでよ」

「悪いが俺はコイツの知り合いだ、コイツがピンチだったんだ、助

けるのが義理だろ」

お空は力を使い果たし、ぐったりとしている、脈と呼吸が安定している、無駄な心配はしなくて良いみたいだ。

「コケにされて、大人しく出来るタイプじゃないのよ」

「そうかい、ならまた日を改めて、それとも俺とするか？」

白銀の翼を広げ、次のスベルを構えるのを見た天子は武器を下ろした。

「そうね、骨の一本ぐらいは、折ってやろうと思ったけど、興が醒めたわ、たつく、地上の観光に来たのに、何なのよこの大雨は！」

「天気的神にでも聞いてくれ、とりあえず、俺はコイツを自分の家に持って帰る」

「で？」

「で、て何よ」

我が家、購入して数日、『妖怪の集う家』と言う曰く付きの家を安値を値切り倒し、博霊神社の十年間分のお賽銭並みの金額は、太りに太った財布の紐を緩める事など無かった。

お蔭で改装して、店まで開けてしまいそうな勢いだ。

そんな我が家に何故か同僚の対戦相手であった天子までもご来店である。

出来れば今すぐに『閉店』の札を外へ出してやりたい、コイツと共に。

「仕方ないじゃない、コイツのお蔭で私は泊まる家は無く、野宿しかけたんだから、アンタが責任取りなさい」

「天界へ帰れば？」

「拒否、拒絶、残念ながらその提案は却下デース」

家出して来た不良、とでも言えば良いのだろうか、家出してくる何て、頭大丈夫か。

「アレ？ 何だろっ心が痛い」

「如何したの？ 頭痛？」

「そんなもんだ、んで、天人のてん『こ』さん」

「天子やっちゅーに！」

簀巻きにして今、ここから放り投げてやりたい、等と思う晴輝と裏腹に天子は徐に服を脱ぎだす。

「お風呂かして貸してくれない？ 体冷えたし、それに服がずぶ濡れ」

「あー、廊下を曲がってすぐだ、出来れば脱衣はそこでして貰いたい」

「アラ？ 天人の脱衣シーンが見れて嬉しくないの？」

「刑事ドラマで良くありげな『飛び降り自殺』をしそうな崖を見ても……………グバァ！」

何処からか出した自分の顔より大きい石で晴輝の後頭部を叩きつけた。

「誰が崖よ、絶壁とは言われたけど、崖って、崖って」

「待て、話し合おう、てんこ」

「私は！ 天子だああああああー！」

番外編 天と地との狭間（後書き）

療養中。

72 - 天子ご乱心

「と言ったわけで、俺は魔理沙の家には帰れず、てんこやお空と出会ったわけよ」

出会い話を済ませると皆、それぞれの感想を言う、だが一人だけ可笑しな事を言う輩が居た。

「あの総領娘様とした時の話とか聞かせてくれませんか？」

空気を読む程度の能力エを持つ衣玖さん、『それは空気呼んだの？』と思いつつ、あの時の事を思い出す。

「あの時……………確か？」

「でも、さっき天子さんから聞きましたよ」

妖夢が半霊を抱きながら言う、一度した話を再びするとはどういう事なのだろうかと皆が視線が衣玖の方を向く。

「私はずっと総領娘様を見てきました、嘘を吐いている事など丸わかりです」

「それでは改め……………四日ぐらい前の話だけど、俺がお空としての所を見たてんこが夜伽に来て、『不束ですが、お願います』だなんて柄にもない事……………ゴブウ」

何者かが晴輝の頭に鈍器で攻撃した、それも何度も何度も。

血塗れの鈍器を持った犯人が頬に付いた帰り血を手で拭い、とてもいい笑顔で言った。

「わ・す・れ・ろ」

憤怒、羞恥、殺意が混じった、低いトーンの恐ろしい声で。

鼠や庭師だけではなく毘沙門天の虎、地霊殿の主、話を振った本人ですら怯え、首を縦に振る。

「ご飯にしましょ」

「ハッ、小町ちゃん、俺はマスク・ザ・ドラゴンだって！」

三途の河近くから何とか帰って来た晴輝は巻かれている包帯を撫でる。

「寅丸さんがやって行ったわよ」

「後でお礼言っとかないと」

「それで、明日は店、如何するの？」

「とりあえずは閉める」

「あたし達も着いて行くわよ、今回は敵が強すぎる、それに相手は多数、それならパーティは一人でも多く、賑やかに」

「でも館壊すなよ」

「分かってる、お空とも打ち合せはした」

「そうか、なら、明日は紅魔攻めだ」

72・天子ご乱心（後書き）

主「久々です皆さん、持病を治して帰ってきました。

実は木曜の朝辺りには治って、新作を連続徹夜で執筆しました。そしてついに、新作『妖怪の山とバイト男』が連載します！

この作品はアルバイトである主人公がボーダー障子の正社員になるまで妖怪の山で修行する物語です。

クロスオーバーはしません（てか出来ません）
違う幻想の物語です。

出来れば読んでください。

自重はするかしらないか迷っている」

73 - 紅魔の館リベンジ

その日、珍しく龍神堂は臨時休業の看板を出した、何でも、夜の営みが忙しいとか言って、店主は流していたが、そんな事は無い。

お嬢様曰く、今日が運命の日らしい。

美鈴には不眠薬を投与、栄養ドリンク等も食事に取りさせた、あの紅魔異変以来の嚴重な警戒態勢である。

原因は一つ、レミリアお嬢様と妹様の持つ、神田晴輝の武器、『槍』と『斧』である、今日、仮面を着けた晴輝が来るらしい。

「主人であるレミリアお嬢様の名に懸けて、十六夜咲夜、全力で行きます」

三日月の夜、何時もより、静かだが、空気が違う、気の抜けない緊張感と何処から攻めてくるか分からない今、紅魔館は何時も異常に真剣であった。

外には美鈴の他、氷妖精が警護している、本人は遊びのつもりらしい。

だが不安だ、この中に敵が居るかもしれない、そう思うと誰もが敵に見えてしまう。

「安心しなさい咲夜」

「お嬢様」

「あの男は正体を隠している、どんな事情であり、それは顔見知りである魔理沙、霊夢が敵になっていない事が言えるわ、そうね、地底の連中、天界と船の奴ら、そして新しく出てきた奴等が敵だと思えば良い、身内は仲間だと思っていなさい」

「……………はい」

「不安なら全て敵だと思いなさい、そうすれば楽よ。もちろん私も」
「お嬢様はお嬢様です、敵になる事などあり得ません」

「そう、なら戻りなさい、あの男とは私がケリを着ける」

「良いかお空、俺の合図で俺を撃て、良いな」

「うん！」

「てんこは出来るだけ咲夜を挑発、良いか？」

「フフフツ、今、EXを超えた最終鬼畜モードの天子さんだから大丈夫」

不気味なほど笑う天子、紅魔館正門を前で、作戦を建て終わると皆とハイタッチをする。

「行くぞ！」

「寝れねー」

バツチリと開眼した表情で正門を守る美鈴とチルノ。

「美鈴、だいじょーぶ？」

「まあ、そこそこ。チルノは？」

「アタイは大丈夫だって」

「最強だからな」

「さいきょーだもん」

「……………ん？」

チルノの声が二つ、聞こえたのは幻聴か、そう思い横をゆっくりと振り向く美鈴。

「どーしたの？」

「如何したんだ？」

一匹だけ、何故か、大きい男物の服を着て、顔の横に面を着けていた。

籠と書かれた面を着けて。

「本当に俺ってば、最強だから」

紅魔館内、静寂を保っていたが、崩れ、轟音の様な爆発音が外から響く。

「咲夜さん応援お願いします。正門から突撃してきました！」

「美鈴、持ちこたえなさい、今行くから」

雑音の中、扉の前で響く美鈴の声を聞き取り、ナイフを構えて外へ出る。

正門ではすでに激戦が繰り広げられ、砂埃が仲間も味方も包んでいた。

「しゃがみなさい美鈴、チルノ！ 奇術『ミスディレクション』」

大量のナイフが砂埃目掛けて飛んで行く、金属と金属がぶつかり合う音が聞こえてくるだけで悲鳴などは一つも無かった。

「残念でした」

鉄の板で防御したお空が板から顔を出し、舌を出して咲夜を挑発する。

「倒せたと思ったの？」

鉄の板から天子も顔を出す

「チツ、美鈴、貴方は鴉を、私はあの天人と………って聞いている美鈴？」

砂埃が消えると美鈴とチルノが姿を現す、だが。

「なっ！」

二人ともロープで手足を拘束されていた、声が出せない様にロープを口にも巻きつけて。

「な、何が」

二人の拘束を外し、美鈴に話を聞く咲夜を見て、天地コンビが笑いを漏らす。

「咲夜さん！ さつきの私を追ってください」

「（さつきの………？ もしかして応援を読んだ美鈴は、あの男の変装！ でも声帯を真似る事なんて出来たのかしら、いえ、それよりお嬢様を！）」

門へ向かう咲夜にお空が回り込む。

「館へ行かせない気？ 悪いけど貴方達の相手は美鈴がするわ、それに私の能力忘れたのかしら？」

懐中時計を取り出した咲夜、だがお空はそんな事に動じてない。

「アレを見る！」

お空は指を指す方向、咲夜は警戒しながらも振り向く。

そこには鉄板を持ったまま立っている天子がいた。

「あの自分の胸の様な板を持っている、天人が如何したのかしら？」

「絶壁？ それは過去の話、今は違うはよ」

天子は鉄板から手を放す、明らか異和感の様な物を感じた、咲夜はまるで『絶対に有り得ない』物を見た様な顔をする。

「ほ、ほ、ほ、豊乳だとおおおおおおおおおおおおおお！」

『揺れる事のない絶壁』の二つ名を持つ天子、それはまな板同然の平らな胸から来たのだが、今の彼女は違う、服のボタンがはち切れるほどの豊かな胸を持っていた。

「バカな！ 奴は私と同格だったのにEほどに成長してるだど！」

驚きを隠せない咲夜が下唇を噛み締め、ついには血涙し始めた。

「メイド、一つ言っておくわ」

「な、何？」

「胸があると肩が凝るわ」

ブチッ。

「何か動き辛いし」

ブチッ。

「彼には毎日こう言ってるわ『当ててるのよ』って」

ブチャ。

堪忍袋の緒が切れる所か、堪忍袋自体が潰れた様な音が咲夜から響く。

「あら、そう言えば、凝るほどの胸を持っていないのが一人……」

……

「ざ、残念ですが、チルノも入れればふた……」

「……………」小町

「はい、何ですか映姫様」

「後で説教です」

「何で！」

73 - 紅魔の館リベンジ(後書き)

主「ダイハードはやっぱり1と2だな」
晴「執筆してください」

74 - 紅魔の館リベンジ ?

作戦名『PADボム』。

まず、正門の門番を捕獲、次に一人が美鈴を演じ、咲夜を外へおびき寄せる。

咲夜を挑発し、咲夜を暴走させ、敵味方関係のないバーサーカーへと変貌させる。

だがこれは時間稼ぎ、美鈴を演じた奴は紅魔館へと侵入する。

この作戦は予想通り成功、次の作戦は中から外壁を崩す『ダム決壊作戦』。

「小悪魔、パチュリー、レミリア、フランを倒し、ブツを回収する」
「でも、作戦もそこまでよ」

小悪魔さんには手刀でダウンさせ、現在パチュリーと戦っている。
「強い、魔法使いの強さは異常だな」

「魔理沙のパワーには負けるは、まあ、ゴリ押しだから、バテるのが早いけど」

「喘息持ちのアンタに言われたら魔理沙も終わりだよ」

お互いに構え、一歩も動かない。

「撃つと動くとかはしないのか？」

「魔理沙ほど単純じゃないわよ、貴方が動く時^{撃つ}を待ってるの」

両者、睨みつけるだけで進展は無い、だが晴輝には勝機があった。

「さつきから魔理沙、魔理沙って魔理沙の事が好きなんだ」

「ちよ、ちがつ……………ええそうよ、悪い？」

一瞬だけ取り乱したがポーカーフェイスを保とうと首を横に振り、平常心を取り戻す。

「貴方、魔法使いに似てるわね、私の所で魔法でも習ってみる？」

「残念だけど俺は魔法使いじゃないんだわ、俺は……………」

「錬金術、石を金に変えたり、土から生物を作る、魔法使いの超上級者が使える、言わば『神』に似た存在、貴方は錬金術を使い、あ

の天人と、チルノに細工を施した、自分にもその能力が使えるんですよ、だから美鈴の声を真似た」

「おっと、そこまでだ、確かに俺は錬金術師に似ているかもしれない、でも親父が龍の化身だぜ、A型とB型の夫婦に 型の子供は生まれない、だから……………」

「母親」

「……………」

晴輝は口を閉ざした、ここまで調べられているとは思わず、顔を抑え、笑い出す。

「そうだ、母親が錬金術師だった、それに気付いたのは阿求を救った時だ、あの時、俺は眠るご先祖様に聞いたんだ。性質変化、『あらゆる物を変化する程度の能力』について」

「でも彼女達は知らなかった」

「そう、母の能力、俺は母は俺から救おうと、この刀を売ろうとした、それに気付かず、俺は……………」

「後悔した？」

「してはない、でも少し罪悪感はある」

「そう」

「おしゃべりは終わりだ、かかって来い、魔法使い！」

「そうね、火符『アグニシャイン』」

パチュリーの指先から放たれる炎、だが刀を振るい、炎を消し飛ばす。

「ドリアアアアアア！」

刀から放つ通常弾幕、無数の赤い球体がパチュリーを捉える。

「ホーミング！」

だが弾幕を紙一重に避け、どんどんと晴輝に迫る。

「喰らえっ！」

刀の峰を振るうが、パチュリーは刀身を足場の上へと飛ばす。

「上への警戒が薄い」

斬劇を飛んで避けたパチュリー、晴輝の頭の上で本を広げ、何か

を詠唱し始める。

「火符『アグニシャイン上級』」

頭の上から勢いよく放射される炎を回避するため、前へ転がる。

炎は俺の居た場所を燃やす、回避してなければ炭になっていた事は間違いない。

「次は外さない」

「OK、かわしてやるよ」

紅魔館の地下、分厚い扉を押し開け、中へと入る。

「あ、お兄ちゃん！」

ドアを開けた途端、フランが飛び込んでくる。

仮面はボロボロになり、後頭部、腕の流血が酷い、栓を失った

「一年ぶり、三カ月ぶり、どっちかな？」

フランを抱きとめ、頭を撫でる。

「約束通り、遊びに来たよフランちゃん」

一年前、何故か一年前の幻想郷に戻された晴輝、三対一では分が悪かった為、フランにある約束をしたのだ。

『また今度遊びに来る』、そう言ったのだ、今日、約束は果たされる、だがまず先にしなければならぬ事がある。

「遊ぶのは少し待って、皆を寝かせてから遊ば」

「分かった、でも早くしてね」

そう言って地下を後にした、目的の場所はここより上の場所、そこに二つの武器があるのだ。

74 - 紅魔の館リベンジ ? (後書き)

主「もっとバトルがうまく書きたい」
晴「自分で自分を磨いてください」

75・弾幕ごっこ【レミリア・スカーレット】

紅魔館の廊下、外には必死に戦っている天子とお空が見えた、一刻も早く、斧と槍の回収をしなければならぬ。

「たつく、あの時より殺気を出して……………反抗期ですか？ レミリア」

「我が館によろこそ仮面の男、招待状何か出してないけど……………貴方と菓子屋から泥棒へと転職したのかしら？ 魔理沙も馬鹿なのかしらね、こんなのが助手だなんて」

「ようやく、最初に会った時に俺を殺そうとしたのが分かった、負けて僻んでるんだろ？」

「別に……………ただ妖怪としての威厳が保てないのよ、貴方みたいな人間風情に私は倒された、フランと共に、幻想郷の妖怪の頂点に立つ吸血鬼の姉妹が、こんな男に倒されたなんて、冗談でも言えないわ」

「実際に起こった事だけだな」

「あの時、殺しておけばよかったわ」

「そうかい、俺はあの二つの武器さえ返してくればそれで良い、そうしたら特別に言わないでやる。紅魔の吸血鬼は俺ごとき人間に倒される低種族だ」って

「武器を……………持ちなさい、死と言う運命に抗いたければ」

「俺の運命はレミリア、お前には決められない、悪いけどさつさと不様に負けてくれ」

「泣いて命乞いしても助けられないわよ」

右手に血の様な真つ赤な槍を握り、狂ったように笑いだす。

「フランちゃん、お姉ちゃんと俺と三人で遊ぼうか」

「えっ、ホント！ 何して遊ぶ？ フランはねえ……………」

「……………弾幕ごっこ……………」

三人は武器を構え、館の壁を破壊し、外へと飛び出す。

「狂ったように踊りましょう、フラン！」

「壊れない限り遊びましょう、お姉さま！」

神槍と似て対する武器、魔剣、禁忌『レーヴァテイン』、今回は二人の息が合っており、それに本気、確実に潰される事を覚悟した晴輝、だが何故か頬は緩まり、言葉を漏らす。

「仲直りして良かったよ、本当に」

フランは取りだしたスペルカードを無惨に破き、紙くずを散布させる。

「禁忌『クランベリートラップ』」

星が描かれた四つの陣が出現し、晴輝目掛けて弾幕を放つ。

通常弾幕のホーミング弾は全て陣に向かい、晴輝は弾幕を避ける防戦に徹していた。

「悪いけど、弾幕ごっこに『卑怯』何て言葉は無いわよ、先に被弾殺されるかそれとも、被弾殺すかさせるか」

レミリアはスペルカードを取り出し、体を十字にし、唱えた。

「紅符『不滅城レッド』！」

レミリアから放たれる十字の光、前門の虎、後門の狼はこの事だ。

「避けられないなら壊すだけだ、お空！」

その瞬間、晴輝に向かって一線の光が飛ぶ。

「必殺のチヨン避け！」

光線は軽く避けられるが、晴輝の回りの弾幕を飲み込んで言った。「うにゅ！」

所々から血を流すお空、戦っている相手がバーサーカーソウル発動しているのだ、無理もない、でも今のメイド長とは死んでも戦いたくない、そう思った、だって。

「ヒヤッハー！ テメエら全員血祭りあげるわ！」

「咲夜さん！ 私達味方だから、ナイフ投げないで！」

「アタイの氷壁も軽く破られるなんて！」

乱れているを通り越して壊れているメイド長、作戦の効果は絶大の様だ。

「卑怯何て言わないよな、元から二体一なんだから」

「そうね、でもこれで避けられたなんて思わない方が身の為よ」

不意に一年前の事を思い出す、クランベリートラップ、弾幕自体には追尾機能は無い、だが弾幕を発射する陣は常に相手に弾幕を放つ。

「カハッ！」

弾幕が数発被弾する、四肢に、頭部、腹部にも一発。

「弾幕ごっこでは一瞬の気の緩みが勝敗を分ける、覚えておきなさい」

口から零れ出る血を手の甲で拭い、スペルカードを握る。

「刀符『伝家の宝刀』」

刀から漏れだす炎、周囲の温度を高め、晴輝を燃やす。

炎は刀の刀身に、とぐるを巻く蛇の様に伸びて刀身を巨大化させる。

「禁忌『レーヴァテイン』」

フランは武器を握り、笑う、彼女はただ純粹に戦いを楽しんでいく、その心は生水の様に澄みきっていた。

妖刀と魔剣、似て非なる武器は炎を出し、ぶつかり合う、刃が重なるごとに斬撃は早く、重くなっていく、だが体力の消耗して行く晴輝に対し、フランは余裕の表情、フランより早く一撃を入れないと確実に上半身と下半身で半分になってしまう。

『死にたくない』、そう念じている晴輝に背後から槍を構えてレミアが構える。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

背後からの攻撃、晴輝に防ぐ武器も術もない、死を覚悟した。

ガキン、と言う金属がぶつかり合う音、その音に晴輝は救われたのだ。

漆黒の翼、金髪の少女、幼い体にふくよかな胸、頭の上に赤い天使の輪をつけ、右手には黒い刀身の大剣、見覚えの姿だが何か、懐かしさを感じる、そう妹の様に思っていた晴輝の友人。

「ルー……………ミア？」

ルーミアらしき存在はコクリと頷き、グングニルを弾き飛ばす。

「今宵の晚餐は吸血鬼なり、さあ食事を始めよう！ 晴輝、仕置きは後だ」

75・弾幕ごっこ【レミリア・スカーレット】（後書き）

主「ちょっと厨二臭いるーみあだな……………そうだ、エロくしよう」
晴「自重してください」

76 - 人喰い妖怪の晩餐

ルーミアらしき存在と晴輝は共闘していた、性格が変わり、明らかルーミアとは異なる人物だ、だが晴輝はあのマイペースだったルーミアと今のルーミアが同じに見える。

「ストームブリンガー！」

大剣を軽々と片手で振り回し、レミリアを蹴散らす、ルーミアは確かに強い、だがここまでの実力は無い。

「EX化……………そう考えるべきか」

存在の強化、例えば地上で戦っている咲夜、自我も理性も失い、本能のままにナイフを投げる。アレも一種のEX化と言える、と言うかあの人の場合リミッターがオフされたただけだが。

「ルーミア、レミリアを頼む、俺はフランと戦う」

「了解した」

「人を喰う事にしか脳に無い妖怪が私と対等に戦えるかしら？」

「私は救われた、晴輝は私の人間の友達」

「何言ってるの？」

「あの時から晴輝の事を思っていたのかもしれない」

「妖怪が人間に恋い焦がれた！ 面白いわね、文にでも売ってあげようかしら」

「本当はお前もだろ？ 自分を負かした時の事より、自分の事を忘れられていた事の恨みが強いんだろ？」

「人喰い妖怪風情が何を言うと思ったら……………」

「自分を倒し、妹との仲を再び結んでくれた晴輝を自分は好きなんだろ？ でも忘れていたから腹が建った、そうでしょ？」

「戯言に付き合うのは飽きたわ、ねえ、貴方は自分が食べてきた人間の数を覚えているの？」

「……………物心付く前から食べてたでも、今はそれより美味しい物がある、満たしてくれる人が居るわ」

「馬鹿馬鹿しい、良いわよ、遊んであげる」

黒い刀身突き付け、書かれている赤い字を指でなぞる。

「それはこつちのセリフだ、吸血鬼！」

「お兄ちゃん、中々壊れないね」

「いや、アバラ、腕、足、色々とボロボロですよ」

「でも壊れてないよね」

「ああ、壊れない限りは遊んであげるからな」

晴輝は既に虫の息、フランは無傷、弾幕が数発は当たっている、だがそれはレーヴァテインにである。

弾幕も全てレーヴァテインで弾かれている。

「お晴、応援に来たよ！」

「たつく、こんな子供相手に手を焼いてんじゃないわよ」

「咲夜は？」

天子とお空は揃って指を指す、その先には何故か大乱闘を繰り広げている、チルノ美鈴ペアと咲夜が居た。

「仲間割れ？」

「どちらかと言うとあの絶壁女の暴走よ、それにしても肩が凝……………」

サクツとスナツク菓子をかじった様な音が天子の頭部から響く、体が頑丈で有名な天人の額にナイフが刺さる。

「いい加減にしないと殺されるぞ、てんこ」

「……………うん」

刺さったナイフを抜き、止血する。

「お空は俺と、てんこはルーミアと一緒に戦ってくれ、レミアは気絶させて、フランちゃんは……………満足するまで遊んでやるぞ、各自の判断で限界だと思ったら離脱してくれ」

「分かったわ」

「うにゅ」

天子は激戦をしているレミリアとルーミアの元へ、お空は俺と一緒にスペルカードをひらひらとさせているフランを相手にする。

「沢山、遊ビマシヨ？」

「一撃で倒す技はダメだ、必殺は相手の気分が紅潮した時だけ、スペルカードは俺は後一枚、そっちは？」

「まだ沢山あるよ」

「俺も増やしたいけど、無理かな、お空は援護射撃、俺は前線で刀振って来るから」

「うん、けんとうを祈る！」

再び刀を強く握り、フランの前へ飛び出す。

「才兄チャン、モット、もっと遊ボ」

「人喰い妖怪が！ 私と対等と戦うなんて」

「ここで登場、天子さんスラッシュ！」

緋想の剣をレミリアに振りかざす天子、その顔は自信と勇氣に満ち溢れていた。

「天人……………初めまして、晴輝の女です」

「初めまして人喰い妖怪、晴輝の物です」

「……………」
睨みあう両者、目の前の強敵よりも隣の恋敵が気になり、両者とも仲間の顔をマジマジと見て動かなかった。

「ここまで侮辱されたのは初めてだわ、そうね、串刺しにして頂くかしら！」

手に持つ紅い光の槍グングニル、共に持つのは晴輝の探し求めている槍、二つの槍を構え、突撃するレミリア。
戦いは激戦と化した。

76 - 人喰い妖怪の晩餐（後書き）

主「皆さん『裸Yシャツ真理教』か『裸タンクトップ正義教』に入
りませんか？」

晴「どんな教団ですか」

主「どちらも物を愛す教団」

77 - 紅魔の館最終章 鬼畜

分厚い壁の向こうには私の知らない世界がある、私はそんな物に興味は無かった。

新しい人間オモチャが欲しい、こんな動かない死体オモチャはもう要らない。

ねえ、門番さん相手してくれる？

そう、壊れないでね！

如何したの、何を怖がってるの？

包帯にグルグルにされて何の遊び？

今日も遊びましょ、昨日みたいに。

ねえねえ、その紫の人、赤い人も一緒に遊ばない？

そう、遊ばないの……………。

ねえ、新しいメイドの人、ナイフ投げとか見せてくれない？
危ないから出来ないの？

……………。

お、お姉さま、お話しよ

しないの……………そう。

フランね、遊びたいだけなんだよ、それだけなんだよ。

「禁忌『カゴメカゴメ』」

「禁忌『レーヴァテイン』」

「禁忌『禁じられた遊び』」

「禁断『カタディオツプトリック』」

連続スperl、この絶体絶命の危機に晴輝は笑っていた、ここで苦しい顔を見せてはならない、笑顔を見せ、弾幕を避ける、被弾した場所から大量の血が流れようと、骨に罅が入る音が耳に入ろうと、筋肉が千切れた感覚が分からなくても、ただひたすらに攻撃を避ける事と、楽しんで避ける事を忘れない。

ここで晴輝が苦しめばそれは虐め、晴輝が狂気すればそれは戦いとなる。

子供との約束も守れないのなら死んだ方がマシ、とさえも考えていた。

「（あの子は笑えてる、笑えない環境があの子を捕らえてただけなんだ、なら不肖マスク・ザ・ドラゴンは、フランちゃんと全力で遊ぶ！ 筋肉が千切れようと、脊髄に亀裂が入ろうと、頭蓋骨が砕け、灰が潰れ、体中の血管が切れても、フランちゃんと遊んでみせる！）」

「お空とアイコンタクトを交わすと晴輝はスperlカードを取り出し、お空は体を丸くしていく。」

「龍撃『諸刃の剣』」

「『アビスノヴァ』」

晴輝の翼から飛んで行く追尾機能付きのレーザー、それは辺りの弾幕を蹴散らし、二人のフランに命中した。

お空の広範囲の攻撃は弾幕を喰らう様に飲み込み、一人のフランをも光の中へと消し飛んだ。

だが本体はまだ残っていた。

「流石にお空はダウン、てか元人間がここまでやれるって凄くね？」
お空はゆっくりと下へ降りて行き、気に凭れていた。

手足の至る所から血が出て、眼は既に瞳孔が開きかけていた。

「もう止めよ」

「何で？」

「お兄ちゃん死にそうだよ、それにわたしもう満足だよ」

「大丈夫、まだいける」

「本当？」

「ああ、嘔吐かない」

「なら、最後の一枚、私満足だから」

「分かった」

フランちゃんの取りだした最後の一枚、だが晴輝にはもうスペルカードなど残っていないかった。

「（ああ……………痛え。そう言えば、まだアレ試してなかったな）」

ボロボロの右腕を出し、構える。

「秘弾『そして誰もいなくなるか？』」

フランは身を消し、無数の弾幕が放たれる、晴輝は朦朧とする意識を何とか留めさせ、右手を構え、左手で出血する脇腹を押さえる。微笑む様に頬を緩ませ、右手を開く、血が流れる事を、筋肉が干切れている事も、骨に罅が入っている事も忘れ、右手に薄れ行く意識を集中する。

「マス……………」

晴輝の右腕の骨が砕けた、折れたのではなく、『粉碎』。腕が変な方向へ曲がり、肩から腕が脱臼し、晴輝本体も吹っ飛んだ。

だが本人の断末魔も、お空の叫び声も、天子とルーミアとレミリアの激戦の爆轟音も、全て掻き消された、たった一本の光線に、黄色く輝く一本の柱に。

77 - 紅魔の館最終章 鬼畜（後書き）

主「『裸Yシャツ真理教』か『裸タンクトップ正義教』……………」
つちを立ち上げればいいと思う？」

晴「違う作品でも言っていましたね……………」
どっちでもいいです」

『花果子念報』、妖怪の山で『文々。新聞』と共に発行されている新聞だが、購読者は少なく、姫海棠はたても特大ネタを求め、幻想郷を飛び回っていた。

「『紅魔館の半壊、紅魔の姉妹喧嘩が再度勃発』、何か引つかかるわね」

手帳を眺めずから空を飛ぶ、時たま頭を掻き、思いつめた様な顔をする。

今回の一件は明らかにスカーレット姉妹の仕業ではないとはたては考えている、館全体に突き刺さった無数のナイフ、溶けた様な館の一部、ナイフまみれの門番、なのに主であるレミリアは「ちよつとフランと喧嘩しただけよ」と一点張り、妹のフランは悲しい顔で「楽しかった」と言っていた。

「今回の一件は文にも聞いてみましょう」

「文、何時まで引き籠ってんの？」

文の家、返事も待たずズカズカと部屋へ入って行くはたてを誰も止める者は居ない為、恐ろしく重い空気に満ちた一室の前へと着いた。

「ちよつと、暗いわよ」

部屋の中は暗く、何故か部屋の隅で何かが蹲っていた。

「あやや？ はたて如何しました？ アウトドアになりませんよ、インドアで良いんです、あやややややややややや」

地霊殿のイケメンマツサージの男が地上で和菓子屋を始め出した頃、文は部屋に籠ってしまっていた。

持ち前の幻想郷最速で瞬時にネタを探し、今の今まで新聞を作ってきたのだ。

「ふふふ、私の初恋は終わったのですよ、あんなムードも考えないで告白して……………半裸で告白だなんて」

「良いんじゃない？ もっかい脱げばその男もイチコロだって」
半裸どころか全裸で性交を行っている晴輝からすればどんな誘惑さえも軽く見えてしまう現状況を二人は知る筈は無かった。

「だ、ダメ！ 私は『清く正しく美しく』の射命丸文だから！」

「何か付け加えられてない？ まあ良いわ、私だけで今回の一件調べるから、ダブルスポイラ でやりたかったんだけどね」

「あやや？ はたてが私と組みたいだなんて……………明日は白狼の太刀でも振るのかしら？」

「弾幕の雨なら紅魔館に降ったけどね」

はたては文に自分のメモ帳を渡した。

「今回の一件、あなたの思い人の仕業かもって、霧雨魔理沙元祖泥棒と博霊金欲の塊が調べてるわ。次狙われるとしたら博霊神社の『龍の爪』、まあ鉤爪だけ……………それで私は早期解決の為にあの二人に力を添えてるのよ」

文はメモ帳のページをどんどんと捲って行く、時には表情を強くしたりしながら。

読み終わったメモ帳を閉じ、はたてへと投げ返し、立ちあがった。「力を貸しましょう、しかしネタは供給しあう事、何かあったらはたてのが全面的に責任を取ってください、これが吞めるのであれば手伝います」

「良いわよ、その代わり別々に探すわよ、互いに情報を交換しながら行きましょ」

「ええ、では行きましょか。私達、ダブルスポイラ から逃げられると思わないでくださいね、晴輝さん」

迷いの竹林の奥深くの永遠亭。

「ん？ 晴輝、どうかした？」

優曇華の前に車椅子を動かしながら近づいて来るドラゴンが居た。両足と右腕に太く巻かれた包帯、頭にも包帯を巻き、

「いやね、何か嫌な気がするんだ。何かヤバいのが近付いている様な」

「大丈夫、何かあつたら全力で助けるから」

「ありがとう」

二人の会話に横から輝夜が乱入してくる、某携帯ゲーム機を持ち、画面には凄く硬そうな武装をした女性が映っていた。

「ちよつと、こんな所に居ないで手伝つてよ、砕けた天角が手に入らないのよ、私は太刀、てゐはガンナーで行くから」

「分かりました、じゃあ自分はスラッシュアックスで行きますね」

「中々良いチョイスね、でも巻き込まないですよ？」

「大丈夫です、太刀もランスも双剣もスラッシュアックスも使いなれているので」

「心強いわね、それじゃあ行きましょ」

永遠亭は日に沈んでいく、そこでてゐが晴輝の持っている携帯電話を握っていた。

「ありや？ 光つた」

神の気紛れか、はたまた幸せ兎の力なのか、形態の電源が息を吹き返した。

勝手に携帯電話を触っているうちに、カシャと言う音が携帯電話からする。

画面には晴輝の顔が映っていた、どうやら偶発的にカメラ機能をとゐが選択し、晴輝の横顔を撮つたのだ。

そのまま携帯電話をしまい、てゐは携帯ゲーム片手に晴輝や輝夜の元へ走って行った。

辻虎脳内会議室から出て三分の焼き肉や『おりんりんランド』。

主「今日ここ来てもらったのは他でもない」C V若本さん風

晴「いや、知らないんですが……………何ですか？ てか何でそんなボイス……………」

主「エロスが足りないいいいいいいいいいいいい！！」

晴「何口走ってんだああああああ！！」

主「この小説は作者の自己満足であり、文章力強化の作品でもある、そしてR-17.99が売りなんだよお、でも最近はニヤンニヤンできていない、10月24日は俺の誕生日、ならイベントの一つでも開かなきゃとオジちゃん思ったのよお」

晴「オイお前まだ中学生だろうが！」

主「なめるなあ、机の引き出しの一番下にはエロゲタワー（建設予定）があるのだあ」

晴「何そのカミングアウト！」

主「黙れえい！ 『俺の妹がこんなに可愛いはずが』的なシリーズも妹はエロゲやってるだろうが、何だよあれ、妹系のラノベかと思つて買つたらタイトル詐欺だったぶるああああああ！ 手が最近エロゲ関係なくねえ？」

晴「まあ、言い分はわかりますが……………」

主「あ、お譲ちゃん、カルビと生よろしく」

晴「オイ、話聞け！」

ゴスツ、バタ。

主「寝たか……………俺は10月25日から修学旅行に行つてきやう、感想とかバンバンよろしくね、エロいお話はもう少し後、心配するなあ、ちゃんと自重は『しない』から安心してくれえ、これからも俺の作品をよろしくお願いしますう！」

10月24日楽しみにしててください。

79 - 永遠亭入院録 三日目（前書き）

今回は豪華二本立てです、十五歳になりました。

79 - 永遠亭入院録 三日目

どれだけ寝ていたのだろうか、体を動かす感覚が懐かしい、そう思った。

布団の隣ではルーミアが寝ていた、可愛らしい落ち着いた寝息を聞くと晴輝は安心してルーミアの頭を撫でる。

晴輝は手足、頭を包帯で巻かれ、布団で寝かされていた、今回ほど生命の危機を感じた事は幻想郷に来て初めてだった。

もしも魔理沙とかが本気になったら俺は消炭になっているかもしれない。

「気が付いたかしら？」

戸を開けて入ってきたのは救急箱を持って来たうどんげだった。

眼の下に隈が溜まっており、いかにも睡眠不足みたいな顔をしていた。

「大丈夫？ 丸三日も寝てたのよ」

「丸三日も寝たつきりで徐々に体を動かした時の感想は一つ、疲れが取れた気がする」

「それだけ言えれば退院しても良いじゃない？ まあ、師匠が言うには後四日は安静にする事が一番の特効薬らしいけど」

と言う事は店を一週間ほど閉める事になる、そうになったら里の皆が心配するかもしれない。

「そう言えば、お空と天子は？」

「あの地獄鴉と天人なら別室で寝てるわよ、その子と共に三日三晩泣き通しだったんだから謝っておいた方が良いわよ」

それを聞くと晴輝は立ちあがる、一瞬倒れそうになったがうどんげが体を支えてくれたので倒れる事は無かったが、病み上がりの体に鞭を打って足を動かす。

その前にルーミアを横へ退かす。

だが三日の間動かさなかつた脚は鉛の様に重く感じてしまえるほ

どに鈍っている、危なっかしい歩きをしている晴輝にうごんげは車椅子を用意した。

「使う？」

「有り難く使わせてもらおうよ」

車椅子に腰を下ろし、うごんげに押しして貰い部屋を移動する。

月明かりが晴輝を優しく照らす、この光も眩しいと感じてしま
う。

着いたのはお空と天子の寝ている部屋、一つの布団に二人で入っ
ている。

「この二人の怪我は完治したのか？」

「治ったわ、でも見るのが痛々しかったわ」

「……………そうか」

思いつめた顔で二人の顔を見る、今は閉じているあの目蓋の下は
瞳が真っ赤になっていると思うと罪悪感が心を埋める、それどころ
か怪我までさせた、これなら一人で乗り込んだ方がマシだったのか
もしれない。

「ねえ、月でも見て愚痴らない？」

「え？」

「まだ満月じゃないけど綺麗だな」

「そうね」

永遠亭から見る月は綺麗だった、だが二人とも月を見て顔を暗く
するばかりだった。

「私はね、月の兎なの」

「月の？」

「ええ、これでも戦場に立ってたわ、でも怖くなって逃げ出した。
自分の弱さが悔しかった、自分の無力が憎たらしかった、今でも仲
間が私の事を恨んでないかがすごく怖い」

「恨んでるだろうな」

「そうね」

「俺も同じだよ」

「え？」

「目の前の事しか考えてなかった、誰かを守るうとしたら誰かに批判される、そんな選択肢を前に俺は逃げ出した、だから神田晴輝は死んだ、今は『お晴』『晴輝』『マスク・ザ・ドラゴン』のどれかだ。」

キスメ、ヤマメ、パルスィ、勇儀の四人の顔が浮かぶ。

俺はあの時迫られていた、男としての責任、如何いう理由であれ抱いた女を捨てる事が出来なかった。そうすれば彼女達の純潔を奪った悪人だ、だが堂々と四股をかけているのに今さら魔理沙の元に帰れなかった。

だから俺は魔理沙達、過去を捨てた。だが本当は会いたかったのかもしれない、如何すれば良いのか魔理沙に相談したかったのかもしれない。

でも、その思いはたった一人の魔理沙を愛す女性に砕かれた。

「いや俺はここに来る前から死んでるよ、他人の気持ちを理解せず、家を捨てて武器を持って逃げ出した家出男だよ、それがまた家出したんだ、魔理沙の家から」

ひっそりと暮らせればいいそう思いねあの家も買ったのかもしれない。

そして天子やお空と出会い、共に寝食を共にし、天子に言い寄られた俺は抱いてしまったのだ。お空もそんな感じだった。

「あはは、よく考えれば俺、既に男でもねえ」

大量の涙が晴輝の頬に流れ、落ちて行く。

自分の不甲斐無さ、精神の弱さ、馬鹿がこの状況を生んだのだ、死にたくてしようがなかった。

そんな晴輝にうどんげは感情移入した。

自分と似ている、まるで過去を見ている様な気がしたのだ。

「今なら間に合うわよ」

「……………」
「私には勇気が無いから出来なかった、でも貴方には勇気はあるでしょ、自分の事なんだから自分で決めて自分で動けばいい、時間はあるのだから」

「そうだな、そうだ、自分の意志で動けばいい」

今はただ自分の体を直せば良い、そう思えば良い、未来の事など今の自分に知る予知も無く、賭け事の様に予測すればいいのだ。

投げたコインが表になるのか、それとも裏になるのかを。

80 - 永遠亭入院録 四日目

日が沈む寸前の迷いの竹林。

「てゐ、本当にここにあるの？」

「うん、確かにここにあると思うよ」

二人の兎が地を警戒深く見渡す。

永遠亭の生計は里で振り払った薬によって成り立っている。

だがてゐが誤って、お金を落としてしまったらしく、無関係のうどんげと何故か怪我人である晴輝、てゐを巻き込んで捜索中で会った。

「ここにも無いな」

軽く一時間ほど経つが何処にもそれらしき物は見つからない。

見つかるはずもない、何故なら既にもうてゐが回収している、てゐの懐にある物を竹林で探しても見つかりはしない。

「（ふっふっふっ、今回はローションたっぷりヌルヌル落とし穴ウサ、これをししょーに売って小遣いを儲けるウサ）」

等とあくどい事を考えてるが誰も気づいていなかった。

「あ、そう言えばそこ等辺で落とした様な、うどんちゃん、そこ行つて」

てゐの指さす方にローション落とし穴がある、わざとそこへ誘導し、ローションの未知なるパワーで、厭らしい写真を撮り、売りつけるてゐの完璧の作戦。

だがそれはある男によって打ち壊された。

「おりゃ！」

晴輝が紅魔館の一件で取り返した槍をうどんげの向かうポイントへと投げつけた。

「あ、危なっ！ 何するんですか！」

槍はうどんげの足元に深く刺さり、驚いたうどんげは腰を抜かしていた。

「ゴメンゴメン、でも……………」

車椅子を自分で操作し、刺さった槍を抜き、今度は大斧をその場所に降り下ろした。

バキイと音がすると地面は深く抉られるが、まるで誰かが掘った様な穴が姿を現す。

「落とし穴、下は……………とりもちとローションがあるな」

「てゝゐ！」

「（さ、作戦失敗！ 如何する！）」

てゐは少し考えた後、手をポンと叩いた。どうやら打開策を考えたらしく、まるで自分が無関係の様な、被害者を演じ始めた。

「ち、違うウサ、それは……………そこのお兄さんがやれつて……………動けなくなつたうどんちゃんを獣の様に貪り、挙げ句の果てには自分のペットの様に……………」

「悪いが俺は既にペットだ、地霊殿で一週間近くペットやってたし、それに俺が犯人だったとして、態々作った落とし穴を知らせなきやいけないんだ？」

「それは『ここは助けて俺のポイントを上げとくか』とか思ったウサよ！」

「そうか、まあ良いや、うどんげ、とりあえず『てゐ』がお金落とした事でたつぷりと叱って貰おう」

「え？」

「そうですね、師匠にも『てゐ』を厳しく叱って貰えるように私も口添えます」

晴輝にはてゐの考えが分かっていた。

幸せ兎と言われる半面、てゐには悪戯好きな性格がある、ならば金を回収し、何かよからぬ事を考えていたのではと思ったのだ。

「まあ、落としたお金が在れば別だけどな」

「そうですね、お金が在れば……………」

てゐは降参した、ポケットからピンクの財布を取り出し、降参の白旗を示してるのか、両手を挙げていた。

「これで一件落着つと」
財布を渡し、晴輝は車椅子をうどんげと共に帰って行った。
「これで勝ったと思うなウサ……………」

「助かりました、それとごめんなさい、てゐは昔つからあんな子で
竹林を二人並んで帰る、悪戯の犯人にされかけたと言うのに、て
ゐの行動に憎めない晴輝は笑う。

「元気で良いじゃん、無邪気で純粹」

「純粹ですかね？」

「構ってほしいんだよ、兎って寂しいと死ぬらしいし」

「私も、少しは構ってほしい……………かな？」

「それは好きな男にでも良いな、俺は確かにフリーだが、家族が沢
山いるし」

「そ、そうですね」

「こんな女つたらして良いのなら抱いてあげましょうか？」

不意の一言、夕日に照らされている効果もあるのか晴輝の笑顔は
うどんげの心を射抜いた。

「抱……………く？ え！ そ、その、いきなりと言うのは、まず
は手を繋ぐとかそういう所から……………」

「それじゃあ」

そう言つて強引に手を引っ張り、車椅子に座つた状態でお姫様だ
っこをして見せた。

「こつ言つのはいかがでしょうか？」
「……………はい」

うどんげの頬が赤くなっていたのは何故か、それは本人ですら分
からなかった。

「……………」
永琳はフラスコの中で光る赤色の液体を見ながら、研究を一枚の紙へとまとめていた。

だが、ボキッと何故か手に力が入り握っていたペンが粉々になった。

「うどんげを盗られる、少し灸を据えるのも良いわね、でも私は手を汚したくない」

実験中の薬品の入ったフラスコを持ち、ビーカーに入った青色の薬品と調合する。

調合は成功、フラスコは気味の悪い紫色の液体で満ちていた。

「てめ、良い作戦は無いかしら？」

「あるウサよ、私達は手を汚さず、尚且つ、確実に仕留められる物が」

今日も一日が終わりかけていた。

輝夜とゲームをして数時間、すでに日付が変わりそうな時間なので晴輝は離脱したが、輝夜は『GEの続編が出るから徐々にプレイするわ』とか言ってる現在もゲーム中である。

「まったく、敵わないな」

少し呆れて言うが、自分も久々のゲームにハマっていたりもするので、深くは言えなかった。

「晴輝君、入るわよ」

「あ、はい」

ドアを二、三度ノックし、永琳が薬と水を持って入って来た。

「これが今日の分の薬よ」

そう言っただけ渡される薬が三錠、一錠目は骨を治す効果、二錠目は肉を治す効果があると永琳本人から聞いたので間違いは無いが、三錠目のこのやたらと紫な要人不明の錠剤が紛れ込んでいた。

「これは何ですか？」

「これはね、まあ精神的な治癒の薬、ハーブとか色々調合してるから多少不気味な色があるけど、心配しないで」

「ああ、そうですかお気遣いありがとうございます」

三つの錠剤を一つずつ飲み、布団へと入る。

「おやすみなさいね」

「はい、ありがとうございます……………くかー」

寝付きの早さ、まるで一服盛った様な……………。

「……………計画通り」

盛った様です。

「後は明日を待つだけね、ふふふ、楽しみだわ」

不気味に笑う永琳、怒りと嫉妬が混ざった様なオーラ、正確にはどこぞの橋姫が背後に居る様に感じられた。

何も知らず薬品でぐっすりな晴輝、自然に髪が伸びている事は寝ている本人には分からなかった。

80 - 永遠亭入院録 四日目（後書き）

晴「俺が逃亡してもう一ヶ月近く経ちますね」
主「こつちの世界じゃ既に三カ月近くだがな」

「いやあ、何か昨日の記憶ないな」

気のせいかな声が変わった、まるで女性の様な高い声、不思議と体も軽い。

「うどんげ、今日のご飯は………ありや？ 輝夜さん早いです

ね、如何したんですか？」

「いや、何かいい具合に起きたから朝飯でも食べてまたゲームでもつて………てかあんた誰よ」

まるで初めて見る様な反応、うどんげも赤い瞳を細めてまじまじと見る。

「誰って晴輝ですが………」

「いやいや、冗談は本当に容姿だけにしてほしいわ」

輝夜は箸を加えて懐から手鏡を取り出しうどんげに渡す。

うどんげから手鏡を受け取った晴輝は自分の顔を鏡に映した。

「……………」

晴輝は言葉を失った。

本当は言葉はあるがどれを言えばいいのか解らない。

伸びた黒髪、膨らんだ胸、明らかに昨日とは違う顔の骨格、うどんげや輝夜とアイコンタクトを取るが三人とも如何いう事かは理解できていない。

「はっ！」

晴輝は咄嗟に股を押さえ、男性器の有無を確認した。

「なん……………だと！」

本来なら生えているそれは無くなっていた。

「如何した事でしょう、まさかそこまで在ったそれは丸々と消えゆりのあるスペースが……………」

「何劇的ビフォーアフター的な解説入れてんの！ 確かに無いけどでもあんまりだ！」

「でも、何やら可愛い様な気がしてきました」

うどんげは手をワキワキとさせ、一步一步近づいて来る。

「私の服でも着させてみようかしら？」

輝夜もお椀と箸を置き、立ちあがり手をワキワキとさせて近づいて来る。

「ちよっ！ 待て俺は男だ、女物の服に興味なんて……………」

……………」

だが咄嗟に考えてしまう、こういう滅多にない経験は逆に楽しまなければ損なのでは、そう思い一度は踏みとどまるが、

「そうね、うどんげ、貴方の下着そうね、緑と白の縞柄の奴が良いわ」

「姫様、出来ればこの服お借りしたいのですか」

時すでに遅し、輝夜はうどんげのタンスを漁り、うどんげは女性である俺に最適な服を選んでいた。

「サイズのうどんげよね、胸も大きいし……………ならこの白い純白のレースを……………」

「わああああ！ それ私の勝負下着！ ダメです！ これはダメです！」

「ああそれ！ 五百年前永琳が買ってくれた私のドレス！ でも結局サイズが合う事は無かった」

「ちよっ！ 待て、自重しろ！」

「残念だけどそれは無理な相談です」

「私達の近くに自重しない変態が居るのだから」

「い、嫌あああああああ！」

「我ながら」

「やり過ぎたと思いました」

うどんげと輝夜、二人は頭を下げる。

学生服を剥がされ、素っ裸になった晴輝を女物の衣類やら髪飾り

でコーディネートし、里の人間百人に聞いたら全員が女性だと言う
であろう姿がそこにあった。

「騒がしいわね、少しは静か……………に……………」

艶やかな長髪をポニーテールにし、白い女物の和服を着こなし、
着物の帯から溢れるほどの大きな胸、さらに顔は少し紅潮し、服の
袖で隠していた。

「どう永琳？ 綺麗でしょ」

輝夜は女である晴輝の頬に自分の頬を擦り付ける。

晴輝は恥ずかしいのか、顔を赤らめ細い腕で離そうとしていた。

その時、ブハツと永琳の鼻から血が噴き出す。

「ちよつ、永琳さん！ 大丈夫ですか？」

「え、ええ……………不覚にも可愛いと思っちゃった、このカップ
リングも……………」

晴輝は懐から取り出したハンカチで永琳の鼻を拭く。

「本当に大丈夫ですか？」

その仕草が不意に輝夜と重なり、永琳は縁側の方を向いた。

「（私の求めた幻想郷はここに在ったのね……………我
が人生に一遍の悔い無し）」

永琳は多量の鼻血を噴出し、そのまま良い笑顔で倒れた。

「ぎゃあああああ！ 医者が鼻血を出して倒れるとか無茶苦茶で
すよ！」「

「師匠！」

「え、永琳！？」

この三人の行動は道徳的には合っていた、だが相手は忠誠心を鼻
から噴き出す猛者、猫に鯉節を与えればすかさず飛びかかるである
う。

この状況で三人に囲まれた永琳は鼻血の量が増し、他の三人とは
早くに小町へと会いに行った。

「いやあ、危うく死ぬところだったわ」

鼻に丸めたティッシュを詰め込み止血をする永琳、本当にこの人は医者なのかと戸惑ってしまう。

「この姿は明らかに永琳さんの所為ですよね」

「間違つて違つてお薬渡しちゃったわ、テヘ」

「お空に頼んで竹林を消炭にして貰うか……………」

「じよ、冗談よ、まあ半日経てば元に戻るわ」

「まあ、それまでリハビリついでで歩きますか」

「あ、一緒に行きます」

うどんげが率先して申し出る、永琳は行つてらっしゃいと言ひ、晴輝達が見えなくなるまで歩いた後、指をパチンと鳴らす。

「てゐ、準備は出来てるわよね」

てゐはコウモリのように逆さで現れた。

「あの姿なら焼鳥屋も騙されるウサ」

そのまま足から着地し、てゐも指を鳴らす。

その瞬間無数の白兔が永遠亭を囲む様に現れた。

「計画実行、さあ、叩きのめすウサ」

81 - 永遠亭入院録 五日目前編（後書き）

最近、パソコンばかり触っていて親に「受験大丈夫か？」と言われしました。

心にぐさりと刺さる物がありました。

自分は得意科目『妄想』『計算』の二つしかないので心配です。

今週の金曜にテスト（明日だけ）がありますので必死に勉強しようと思います。

とりあえず目標の点数を目指すために（ストックがないので）土曜日は休日になりたいと思います。

皆さんも勉強頑張りください、努力すればいつか神はほほ笑むと信じて。

82 - 永遠亭入院録 五日目後篇

静かな早朝の竹林、うどんげと女の晴輝の二人しかその場に居らず、二人を隔てる壁は薄く、声を掛ければ崩れるほどだった。

「気持ちが良いですね」

「まったくだ、こう言う所に店を構えるのも良いかも……………」

……

「晴輝さんは和菓子屋を営んでるんですね」

「ああ、商売繁盛で今が稼ぎ時なんだけど、休業続きで稼げてないな……………」

「確か紅魔館と白玉楼に一人で乗り込んだとか……………」

「一応は天子とお空も連れてね、まあ二人は一旦実家に帰ったけどな、明日には退院出来るんだろ？ 流石は永遠亭」

「いや普通ならもう少しかかりますよ、全身打撲に右手の粉碎骨折…………… 筋肉も千切れていて、師匠いたら『久々の重症患者……………』とか言っただけでましたから」

晴輝の顔がどんと青ざめて行く、メスの入れられた場所を探す為、和服の帯を緩め脱ぎだした。

「ちょ！ 落ち着いてください、何もされてませんよ、私が立ちあつてましたし」

「怖いわ！ 誰でもこういう反応したくなるわ！」

晴輝を羽交い絞めで押さえつけるうどんげ、その二人の騒ぎ声は迷いの竹林上空に居る二人の鴉を呼び寄せた。

二人の前に現れる二人、二人はカメラと携帯電話で口元を隠し、何やら喋り始めた。

「清く正しく射命丸文と二番煎じの姫海堂ほたての……………」

「二番煎じじゃない！ 私の名前は、た、て！」

「ダブルスポイラ 参上！」

文とはたては互いの商売道具を前に突き出し、ポーズを決めた。

だが晴輝とうどんげは温かい目線を送り、背を向けた。

「とりあえずリハビリを続けるか……………肩貸してくれ」

「あ、はい」

「無視すんじゃないよ、鈴仙・優曇華院・因幡、そして神田晴輝！
はたては一枚の写真突き出した。

何故か晴輝や輝夜とのツーショット写真がある。

「ここには仮面男が貴方であると裏付ける写真があるの、言い逃れは……………誰？」

面識のないはたてはともかく、文まで首を傾げてしまう。

今の晴輝は男ではなく女、それも女物の和服やら髪留めやらで完全に別人である。

「私は晴、足を折って永遠亭でリハビリ中なの、その神田晴輝つてのが誰だか知らないけど、そのブサイクな男の写真閉まってくれないかしら？」

晴輝も役に熱が入り、自分の顔を卑下にする、それに誰よりも敏感だったのが文だった。

「おや？ 貴方の眼は節穴ですか……………それともブサイクを見ると惚れてしまう様な単純な思考なのですか？」

「いえ、ただ男に興味は無いので……………フフ、フフフフフフフ」

本当の事だが、何故か役に熱が入り過ぎて周りが見えなくなっている、うどんげも多少引いていた。

「同性愛者は何時でも頭が逝ってますね……………」

「同性愛ってわけじゃないけど……………まあ、良……………ぐほあ！」

話の最中、突然晴輝は吹き飛び、何故か落とし穴にホールインワンし、晴輝の立っていた場所に違う女性が立っていた。

鼻息を荒らげ、人を殴りつけたと言うのに不気味なほどに笑顔、晴輝を殴ったらしい右拳は赤い炎に包まれていた。

白銀の髪を炎に包み、煙草を自分の炎で燃やした。

「もこたん！」

「藤原妹紅だ！」

妹紅は何時も異常に愉快そうな顔を見せる。

「不様な輝夜！ てゐ達に聞いたぞ、私みたいな屑はどうせ不意打ち一発でダウンするバカだってなあ、お前が弱いんじゃないか！」

「アハハハハハハハ」

うどんげは既に非難して隠れている。

文やはたても既に上空に逃げ、その場所には晴輝と妹紅しか居なかった。

晴輝は落とし穴から這い上がり、恐ろしく怖い表情を浮かべて立ちあがった。

「あ、あれ？ 輝夜じゃない……………」

「たつく、朝起きたら女になってたり、うどんげと輝夜さんには着替えさせられるし、厄介な鴉天狗は来るし、拳げ句の果てには何もしてないのに殴られる始末……………てゐって事は永琳さんも絡んでやがるな畜生……………」

晴輝の不自由だった脚は何故か完治しており、女物の和服をお手前の錬金術で変えて行く。

普段通りの学ランだが、龍の刺繍が入っており、背後に『家出は浪漫』と書かれていた。

「半日？ 待つてらんねえよ、能力使えば元に戻る」

晴輝は自分の能力を使い、元の男の体へと戻り、懐から取り出した『龍』の仮面を付ける。

「は、晴輝！」

「晴輝……………知らないな、俺はさっき突き飛ばされた人ですが？」

「お前……………いい加減に帰ってこい！」

「俺の家出はまだ決着は着いてない、俺は家出男だ！ 帰る家は自分で用意してるさ」

「イエスかノーで答えろ、お前は晴輝か？」

妹紅は右手の平に小さな炎を作る。

脅しのつもりなのか、ここでノーと言えばあの炎は攻撃する槍になるだろう。

だがそんな脅しなど修羅場を潜り抜けて来た晴輝には関係など無く、答えは一つだった。

「ノー」

その瞬間、火の玉が晴輝の顔面へ命中した、仮面は一部が弾き飛び、周囲に破片が飛び散った。

「荒療治だな、俺はお前等の思っているほどお人好しじゃないし、頑固で自分勝手にカツコつけて変態で女つたらしだし……………俺は二度と表舞台に立つ気は無い、ひっそりと生きて行くって決めたんだよ、魔理沙には悪いが助手なんて肩書きは捨てさせてもらった。俺は龍神堂の主、マスク・ザ・ドラゴン、それだけだ」

頭部から噴き出す血は仮面を伝い、地面へと落ちて行く。

「龍符『龍に翼を得たる如し』」

「不滅『フェニックスの尾』」

互いに翼を広げ上空を舞い、二人はぶつかり合う。

拳と拳が語る、足と足が轟音を鳴らす、互いの頭突きで互いを傷つけ、妹紅の傷は癒え、晴輝の傷は癒える事は無かった。

相手は死を恐れぬ不老不死、自信の力を十分に発揮できているが、晴輝は人間、相手が死ねないとは言え殺すわけには行かない。

「毎回毎回詮索しやがって、男にだって一人で泣きたい時もある、一人で酒を飲みたいときだってある！ 人知れずただ朽果てるまで正体隠そうと思ってたのに……………」

「そう言うお節介が好きなんだよ！ 私には死ぬ事が出来ないんだ、好きな人が居なくなる気持ちは良く分かる」

二人の拳が交じり合う、晴輝は血塗れになり、妹紅は相変わらずピンピンしていたが何故か動きが鈍っていた。

息を切らしているわけではなく、まるで体全体に鉛でも着けているかのよう。

「何だよ、たかが復讐の為に覚悟も無く薬飲んで、今までダラダラ

生きて来たのか？」

「何の覚悟の無い人間がそんな重荷に耐えられると思ってるのか？
確かに辛い事も悲しい事もあった何度も挫けた、でも私の一生は
無駄とは言わせない！」

「その意気だ、もつと本気で掛かって来いよ、この髪だけ白髪の合
法ババア！」

「テメエだけには言われたくない、このヘタレがああああああ！」
二人の拳が互いの頬を殴り付けた、だがこれだけでは終わらず、
空いた片方の手で互いの腹を殴り付けた。

二人ともよろめき、後ろへ数歩下がる、だが妹紅は一瞬のチャン
スを逃さない。

態勢を無理に立てなおし、渾身の蹴りを放った。

「ぐっ……………」

蹴りは晴輝にガードされ、足を掴まれるが、反対の空いた足を使
い、晴輝の右肩へ踵を落とした。

晴輝は態勢を崩し、妹紅は解放された足を使い、晴輝の顔面を踏
みつけ、宙返りを決めた。

晴輝も崩れゆく足を堪え、握り拳を構えた。

宙返り、ガードの出来ない不安定な状態の妹紅の腹へ拳を打つ。

「かはっ！」

その後両者は地面へ伏した、晴輝は息を荒らげ血塗れ、妹紅は腹
を押さえて空を見上げていた。

「ああ…………… 久々に満足できたよ」

「俺一応は加害者なんだけど、謝罪とかされてないんだけど」

「そりゃあ悪かった」

「…………… 俺も悪かった」

その場で軽く握手を交わし、手を話す。

「おい、その見学者」

「は、はい！」

晴輝ははたてを指さし、手招きをした。

「紙とペン貸してくれない？」

数時間の時が経ち博霊神社、居間。

「『博霊神社の我が友の武器、龍の爪を返して貰う為、明後日の日暮れ、神社に顔を出すだろう マスク・ザ・ドラゴン』だって、如何する魔理沙？」

「これまでの落とし前キッチリと着けて貰わないとな……………」

居間に集まる五人、これまで数々の異変を解決した博霊霊夢、霧雨魔理沙、十六夜咲夜、魂魄妖夢、東風谷早苗が集まり、晴輝からの挑戦状と思われし物を見ていた。

「妖夢、そう言えばお前の所に預けてた刀は如何なつたんだ？」

「えっ！ そ、その…………… ゆ、幽々子様が食べちゃいました」

「バレバレだぜ…………… 咲夜の方は？」

「先日に盗まれました、彼は大切な物を盗んで行きました」

咲夜は何か深刻そうな顔をして、思いつめていた。

「なんだ？」

「お嬢様と妹様の心です」

「と言うか、晴輝さんには晴輝さんの事情があると思います、例えば…………… 魔理沙さんの家のキノコを勝手に食べたとか」

「早苗、そんな理由でアイツは出て行かないぜ……………」

……………」

「まあ、魔理沙、咲夜、妖夢、早苗、各自であのバカを捕まえる様に援軍とか連れて来て、落とし前は本人にして貰いませよ」

そう言い、不吉な笑みを浮かべ喜んでいる霊夢、他の四人は碌でもない事を企んでいると気付いた。

82 - 永遠亭入院録 五日目後篇（後書き）

主「しばらく自重しない事を禁止しよう」

晴「明日は槍が降りますね」

主「いや、真面目な話、いやあ、何というかね、自重しない事は良い事だとは思うよ」

晴「いや、俺の腰の事を考えてください」

主「実はねえ、友人に金を握らされ……………相談されてね」

晴「オイ！ 何か今凄い事言っただよな！」

主「バトルも書いてくれて、あと秋姉妹の胸のボリュームは巨乳クラスでって」

（農）「我が秋姉妹に栄光あれ！」

（罪）「雛様の回はまだかあああああああ！」

晴「なんか関係ない奴らも乱入したぞ！」

83 - 永遠亭入院録 最終日

永遠亭での入院生活は六日目を迎え、最後のリハビリをしていた。足は前日に完治している、晴輝の能力の『あらゆる物を変化させる程度の能力』簡潔にまとめるのであれば『変化』を利用し、細胞を弄り活性化させ、傷を完治させた。

実際はもっと色々と難しい工程があるのだが以下省略。

お供のうどんげを連れて竹林を歩いてた。

「聞きましたよ、博霊神社に喧嘩売ってただで済むはずありませんよ」

「その時はもう一回お世話になります」

「そ、そうですか」

竹林を歩く二人、まるでデートでもしているのかと思うぐらいにうどんげが晴輝に密着していた。

何時態勢を崩すか分からないかららしい、実際は足は不自由なく動き、歩行する為の機能を取り戻しているのだが面白いので黙っている。

「六日間、早かったですね」

「俺には三日の記憶しかないからもっと早いな」

「あと少し長かったらな……………」

うどんげは少し寂しそうな顔をして空を見上げる。

「……………時の流れなんて一瞬だ、一秒は一瞬、一分も一時間も一年も一瞬、気が付けば日付が変わってたり、歳をとっていたり、まあ様々だよ。でもそんな一瞬が在るから明日と言う一瞬が楽しいんだ、その逆も然り、悲しみも在る」

「私より生きてないのに深い事を言いますね」

「経った時ではなく、重ねた経験が物を言うのですよ」

「それじゃあまるで私は何も苦労してないみたいじゃないですか」

「俺ほどは苦労してないと思うけど……………」

んで来たのだ。

「俺が言つのも何だが……………自重しろ」

「まったくお前って奴は……………」

空の頭に拳骨を入れる。

気が付いた時も盛りっぱなしでうどんげも耐えられず伸びていた。

「うにゅ……………」

「うどんげ運ぶついでに薬でも貰っとくか？」

「うん……………」

「如何した？ 何かあったのか？」

「さとり様から手紙……………」

お空は懐からクシャクシャになった手紙を貰う、その手紙の内容を見終わると晴輝はお空の頭を撫で、手紙の裏に返事を書き、元へ戻しお空に渡す。

「お空、うどんげ運ぶぞ、今日は好きな物を食べさせてやる、何食いたい？」

「えっと……………ゆで卵」

「好きだな……………まあ良いか、今日は天子も帰って来るし盛大にやるか」

「うん……………」

お空の悲しい顔が明るくなる事は無かった、ただ背中を丸めて歩く背中に悲しみと失意が感じられた。

「誰も悪くない、悪いのは俺だからな」

そして晴輝も背負った重荷を誰かに分ける事が出来ず、重荷の重さと誰も居ない空しさが晴輝を孤独へと落としていた。

83 - 永遠亭入院録 最終日（後書き）

感想よろしくお願いします。

84 - 明日に備えよ

天子は退院当日ではなく、博霊神社と龍神堂の全面戦争前日の朝に帰って来た、何か申し訳なさそうな顔をして、「ただいま」と言う。晴輝は笑顔で「おかえり」と返事をした。

その晩、酒を飲みかわすだけの小さな宴会を開いた、だが晴輝以外は暗い顔で酒もあまり飲む事は出来なかった。

「それじゃあ作戦会議だ」

「うん……………」

「そうね……………」

お空も天子もイマイチ乗り気ではない、博霊神社へ乗り込むのが策なしでは無謀、晴輝は丸めた紙を広げ、机の上に出す。

「これは博霊神社の大まかな図だ、適当だけどこれで会議するぞ」
紙とペンを持った晴輝は地図に書き足していく。

「お空は上空から襲撃、天子は地上で応戦、そして俺がこっそりと鉤爪を回収する」

お空と天子は互いに眼を合わせる、そして天子が口を開く。

「ごめんなさい！」

晴輝の活気にあふれた顔は徐々に明るみを失くして行った。

「悪いけど私はダメ、無謀すぎるし、これ以上私がこの件に関わったら地上には遊びに来れないわ」

「私も、さとり様がダメだって、地霊殿は巻き込むなって……………」

「……………」

晴輝自身も無謀だと理解していた、相手は博霊神社、宣戦布告もしてしまい、警備、戦力も圧倒的に不利である。

言わば城となった博霊神社を三人で攻略するのは難しい、もしも相手が援軍として『紅魔館』『妖怪の山』『冥界』『地獄』『人間』の里』を呼んでいれば下手すれば命を落としかねない。

「大丈夫、その為の作戦が一つある」

そう言つて晴輝は立ちあがり、豊を返した。

そこには大きな葛籠が現れた、葛籠を開け中の物を取り出す。

刀、槍、斧の武器が三つ、大きなリュックが一つ、大量の瓢箪。

まるで旅人の様な大量の荷物を取り出し、仮面とマントを取り出した。

「俺だけでも行く」

「ちよつ、自殺行為だわ！ 大体、何人いるか解らない相手にどう立ち向かうのよ！」

「大丈夫だ、白玉楼時みたいに元気に帰つて来るから」

「大丈夫じゃないよ！ 私さとり様にもう一回頼んでくるから、んなら旧都の皆だけでも……」

「確かに勇儀姉さんあたりなら来るかもな、でももうあの人達を俺の身勝手に振り回したくない、家族だからな。お前等も頑張つてくれたよ」

二人の頭をそつと撫で、晴輝は荷造りを始める、天子やお空がどれだけ言つても聞かず、数分程度で荷物が出来上がった。

晴輝は店の裏口のドアの前へ立ち、靴ひもを結ぶ、天子やお空は必至は鞆を引つ張るがビクともしない。

「お前等は天界と地霊殿に帰りな、楽しかったぜこの三週間」

天子とお空を振りはらい、そのまま外へと飛び出し、すかさず木陰へと身を隠す。

「お晴！」

「晴輝！」

晴輝の後を追い二人も飛び出すがそこには誰も居ない、晴輝は息を殺し、二人が立ち去るのを見守った。

「君は本当にバカなのか？」

ゴツンと鈍い音が頭に響く、後ろにはダウジングロッドを持ったナズーリンがいた、まるで「何も解ってないな」と言いたげな、人をバカにした顔でため息を吐く。

「バカで結構、それとも命蓮寺の皆が手伝ってくれるのか？」

「聖はノリノリだったけど、他の皆が止めたさ、無謀だった」

命蓮寺の聖白蓮とは友人である、『妖怪と人間の共存』と言う議題で話し合い、気があったのだ。

その際、村沙、一輪、雲山、鵜、響子とも仲良くなり、今では龍神堂の常連であった。

「そうかい、まあケジメは一人で付けるさ」

「君が良いなら良いさ、でも君が再び居なくなれば誰が悲しむか、解ってるんだろうね」

「ああ、何も負ける気で行きはしない、勝てる見込みがあるから行くんだ」

晴輝は神社を目指して歩き出した、重荷を一人で持って。

84 - 明日に備えよ (後書き)

主「もう少しバトルモード続きます」

85 - 敵陣営

夕暮れの博霊神社は城と言うよりは要塞に近かった。

決戦当日、少し遠い場所から博霊神社を双眼鏡で覗くが解り易いシルエットの為、確認しやすかった。

階段前に椋率いる白狼天狗達、さらには鬼の萃香と門番の美鈴、河童のにとり、何故かすでに懐かしく感じてしまう自分。

階段を上げれば、咲夜と妖夢、鳥居の上に文とはたてが居り、決めに手に奥に魔理沙と霊夢が待ち受けていると思えば震えが止まらない。

「これなんてムリゲ？」

こっちは一人、こんな相手レーザー兵器を持たされても行きたくない、神田晴輝はダンボールで潜入するプロフェッショナルではないので確実に無理である。

「まあ、頑張りますか……………」

晴輝は土を掴み、唱え始める。

「土塊は銃、弾は弾幕、大きさは三尺程度」

土は鉄の塊となり、一つの武器となった、晴輝の錬金術、初歩の初歩の為にスペルカードを使わずに錬金を可能とさせた武器はスナイパーライフル、歪な赤と黒の交じり合ったカラーで龍が描かれている。

「吐息は弾幕、弾倉の数は十、弾は全部で五十発」

銃のマガジンが現れ、全部に弾が装填済みである。

ライフルにゴムで双眼鏡を取り付け、準備が出来た。

「土塊は小鳩、伝書を持ち、誇り高き白狼天狗の肩へと止まれ」

まるで手品のように晴輝の手から白い鳩が現れ、伝書を持ち飛んで行った。

「警備を怠らない様に！」

「そう硬い事言わない、お酒でも飲んでゆっくり待とうよ」

神社の前に鬼、河童、白狼天狗、美鈴が座っている、全員晴輝達を待っているのだ。

「ですが！ 萃香さん、私不安なんです、晴輝さんは何か敵になつてるし、萃香さんはお酒を飲み始めてますし、にとりは機械ばつか弄ってるし、紅魔館の門番は寝てるし……………」

皆が皆真剣ではなく、一部気の抜けたのが多かった。

美鈴は素で寝ているがにとりと萃香は晴輝がまだ『人間』だと思つているからであった。

「どんなに強くてもこの鉄壁は崩せないよ、鬼の萃香さんが居るし、白狼天狗の部隊も連れてきたし、私も新兵器を使いたいし、それに相手は盟友、話し合えばわかってくれるよ」

「にとり…………… 本音が漏れてる」

そんな雑談の中、小鳩が椀の肩へと止まり鳴き声を響かせる。

「伝書鳩？」

椀は鳩からそつと手紙を取ると鳩は砂になり風で飛ばされていった。

「『戦いの意が在るなら構えよ、無ければ去れ ドラゴン』……………」

……………晴輝さん？」

「ッ！」

その名前を聞いた美鈴が眼を覚まし、構える。

「気を付けてください、彼はもう人間を辞めています、視界が真っ暗と言う事は夜！」

「門番さん、アイマスク着けたままです」

ツツコミを入れる椀を剣を構える。

萃香は瓢箪の中の酒を一気に飲み、口元を手で拭う。

にとりは工具を片付け、鞆から機械で出来た巨腕を出す、河童の技術の一つである『のヒールアーム河童の腕』である。

不意に銃声が響いた。

威嚇の為の弾丸は椀の足元に弾痕を残していた。

二回目の銃声が鳴り響くと白狼天狗の一人がその場に倒れ込んだ。
「大丈夫ですか！」

三回目にも美鈴の頬を何かが掠る。

「襲撃です！ 皆さん避けてください！」
「避けると言っても！」

連続してなり響く銃声、十数人居た白狼天狗の群は椀を残し、無力化された。

椀は舌を打ち、耳で捉えた音の発生場所を見つめる、椀の能力は『千里先まで見通す程度の能力』言わば千里眼である。

その眼にはしっかりと仮面を被った晴輝の姿を確認していた。

「甘く見てました……………私の同僚達の仇、取らせて貰います！」

スナイパーライフルを砂へと還した晴輝は双眼鏡で神社を見る。

「第一作戦成功つと、ターゲット動きだしたか」

晴輝は瓢箪の酒を飲み、ゆっくりと構えていた。

だが晴輝の背後には銀髪のメイドがナイフを構えて立っていた。

無慈悲で冷酷な表情でナイフを晴輝の背中へ突き刺そうと。

85・敵陣音(後書き)

主「赤と黒と言う色が好きです、
て言うかお空カラーが一番いいで
す」

86 - 防御網を破壊せよ

晴輝奇襲の同時刻、階段の上で待ち構える庭師とメイド、似て非なる戦い方から前衛へと回された。

二刀流である妖夢が接近戦、ナイフを武器とする咲夜が後方から援護攻撃、これが鳥居を守る二人の戦い方であった。

だが咲夜は階段の下で奇襲を受けている事を知り、持ち場を離れた。

「咲夜さん、彼はあそこです！」

椀の指す方には茂みが在った、そして再び銃声が鳴り響く。

「おっと」

萃香は右手で何かを捉えた、そっと手を開くとそれは丸い形の鉛玉だった。

「こんなんじや妖怪は殺せないよ、あくまで殺さず奪う気だね」

「本当に舐められた物ですね、私は彼の捕獲に行ってきます」

懐中時計を取り、スペルカードを発動する。

「幻世『ザ・ワールド』」

風が止む、鳥が静止する、呼吸する者は咲夜一人だけ、時が止まったのだ。

十六夜咲夜だけが動く事の許される世界、言わば『時を操る程度の能力』彼女だけの世界、この停止された時間の中を彼女は行動できる。

彼女は素早い動きで晴輝の元へ近づき背後へと立つ。

そしてナイフを構えた。

「第一作戦成功つと、ターゲット動きだしたか」

瓢箪の酒を飲み油断している晴輝の首元へナイフを当てた。

「降参しなさい」

晴輝は両手を上げる、咲夜は笑みを浮かべるが晴輝も同様、それ以上の笑みを浮かべていた。

「おっ、晴輝が来るね」

階段に向かつて移動する晴輝、仮面を着けたまま、ゆっくりと歩いて来る。

「咲夜さんは如何したんだろう？」

「……………晴輝さん！ お話があります、何でこんな事を……………」

……………貴方にも事情はあると思いますが私の仲間が全員……………」

……………」

椀は白狼天狗、立派な狼である、勿論天狗としての能力もあり、同時に狼の能力もある。

彼女の鼻が臭いを感じた。

「違う、これ、人間じゃない……………」

晴輝らしき物は刀を振り上げ、力を込める。

「やっぱり別人か！」

萃香が拳を作り、晴輝の顔面へと目掛けて放つ。

ドンと爆撃音にも似た音が響き、拳が土人形の仮面へとめり込む。

「効いて……………ない」

鬼の力は強い、幻想郷一とも言えるその怪力は山の一つは動かせるであろう、だがその鬼の一撃を顔面で受けながらも立っていた。

……………」

なにも喋らず静かに萃香の方を向くそれは刀を下ろし、ポケットから金色の球体三つを地面へ落とす。

球体は地面に溶ける様に入り、一つの形を成していた。

土塊の体の人間、それは服を着ている様な格好をし、仮面を着けていた。

肌の色が付き、マントの白や黒、学ランのボタンの金色の色を作っていた。

「増えた……………」

土塊の分身は四人、対して相手も四人、五分と五分、場は悪くな

いが相手は人の形をしている。

「なるほど、私達には分身で十分と言う訳か……………」

萃香は瓢箪に栓をして腕を回す、萃香の細い腕が風を切り轟音を生み出す。

「面白い、人形で鬼を騙そうなんて面白い」

眼球が不気味な赤色に染まり、鬼の形相が土人形を睨む。

「遠慮は要らない、さあ行くよ！」

萃香、椀、美鈴は一斉に飛びかかる、だが四人の人形は薙ぎ飛ばされた。

「河童の技術は世界一いいいいいい」

青い装飾の施された機械の巨腕、それが四つの人形を赤子の手を捻るが如く、鬼の力を使わずに使わず吹き飛ばした。

「改良したのびーるアームは良いね、どんなに相手が硬くても所詮は土塊、さてと如何いう原理で動いているのか……………知りたいたいね」

緑リユックを引き裂き出て来た四つの鉄腕、その中心に立つには鬼も驚きの表情を見せた。

興味津々の子供の様な無邪気な笑み、分身を短時間で低コストで作るそれは『技術』である。

エンジニアである河童にはまだ知らぬ技術は『解剖対象』である。

「ここは私に任せて、ちょっと面白いのがあるから！」

「あ、うん、よろしく」

呆気にとられた椀が先頭に立ち晴輝の居る場所へ急ぐ。

「お願いしますにとりさん！」

美鈴が と言いつつその後ろに続き、

「河童も強いね、如何だい私と戦わない？」

萃香が千鳥足で二人を追いかける。

「死にそうなので拒否します！」

それを拒否すると萃香は「残念だなあ」と愚痴を溢して行った。

「さてと、解剖でもするか……………」

にとりの腕や鉄腕がわきわきと手を卑猥に動かす、土人形は木刀を持ち、にとりへ掛かった。

「おいおい、敵は一人じゃないのか？」

魔理沙達に立ちふさがる三人の晴輝、これもまた土で出来た偽物である。

「そう言えば私の家から本が数本盗まれていったわ」

パチュリーは魔理沙とアリスに背中を任せ、三人の土人形と持病の喘息と戦っていた。

「何その本？」

アリスは自分の手を汚さず、人形で対処するが最小限の動きで避ける人形に躍起になっていた。

「ゴーレムの作り方の本と確か……………錬金術の本だったかしら……………」

「最悪ね、鬼に金棒じゃないの」

会話の通じるパチュリーとアリス、だが魔理沙だけは話に着いて行けてない。

魔理沙に恋する乙女は恋敵である晴輝の事を伝えてないだ、だから仕方がない。

「まあ水が弱点なんだけど、当たればの問題ね……………」

喘息のパチュリーは呪文の詠唱に十数回ほど吐血をしている、彼女の喘息は言わば爆弾と言う表現が正しい。

「さあ来い晴輝、こんなつまらない弾幕勝負を捨てて掛かって来いよー！」

「たっく、お気楽ね」

「アリス、マイペースと呼んでくれ」

「どっちも正解、まあ、私達もこんな土塊何かに興味は無いわ……………」

……………魔理沙のゴーレムでも作って貰おうかしら……………髪型とか変えて遊ぼつと」

「パチユリー、馬鹿とも言えるわよ）……………魔理沙のゴーレムでも作って貰おうかな……………色々と服着せて遊びましょ）」
「アリス、パチユリー、いい加減にしないと怒るぜ（さっさと来いよ晴輝、お前に聞きたい事もあるし……………まだ伝えてない事も）」

「……………うふふふふふふふふふふふふふふふ！」

三魔女が口を揃えて笑う、その内に秘めた思いは誰にも聞こえる事は無かった。

何故ならば。

「クソツどんだけ居るのよ！」

「分かりません、ですが百体は軽く超えるかと……………」

紅白の巫女と山の巫女、二人が弾幕を使い、土人形を吹き飛ばすが、どれだけ攻撃を加えても土で出来た体は直に再生し、きりが無い。

「個体全てが強い！ でも……………斬れぬ物などあまり……………ああちよっと、刀を握らないで……………」

白玉楼の庭師も苦戦をする中、たった一人だけ、戦場で大暴れする獣が居た。

「オラアアアアアアアアアア！」

真紅の炎を身に纏い、渾身の蹴りで敵を蹴散らす不死鳥、時に素手で人形の頭を潰し、時に蹴りで人形の腹を抉り、時に炎で周囲を焼く。

名を藤原妹紅、今日は腹いせと晴輝捕獲の為に大暴れをしていた。

「本物は何処だああああああああああああ！」

荒ぶる少女は夕暮れの空に吠えた。

「さてと、行きますか……………」

晴輝は立ちあがり、金色の球体を地面へ落とす。

その隣に血まみれで倒れる咲夜が居たが晴輝は真剣な顔で博霊神

社を見つめる。

86 - 防御網を破壊せよ(後書き)

主「さてさて問題、何故晴輝は必死に戦っているのでしょうか」

87 - 正面突破の龍

「晴輝さん！」

草木を刀で蹴散らし、どんどんと前へと進む椛、すると目の前には血塗れで倒れる咲夜が居た。

「さ、咲夜さん！」

形相を変え、顔を血で汚した咲夜へと近づき抱き付く。

「め、美鈴」

弱々しい声で美鈴の名前を呼ぶ咲夜、自信の懐中時計を手渡し、耳元で何かを伝える。

「.....門番は今日は休み、派手に暴れな.....さ.....

.....い」

「咲夜さん」

「お嬢様の事頼んだわよ」

懐中時計を渡した右手はそのまま垂れ、地面へと着く。

「晴輝さん」

「絶対に許さない！」

椛は気付いていた。

咲夜の出血は血塗れだとしても確認し難い場所である。

鼻、正確にはここ等一帯の土を赤く染めているのは鼻血であった。彼女の鼻から出る症状を知っている。

『忠誠心』、主レミリア・スカーレットの可愛らしい一面に自分の忠誠と言う壁が崩壊、鼻から血として出る謎の症状である。

顔も何故か「我が人生に一遍の悔い無し」と某敵役みたいな事を言っつてそんな満面の笑み、そして左手の親指を立て空に向けている。

「たとえ.....たとえ晴輝さんでも私の家族をこんな酷い目に遭わすなんて.....」

実際は満面の笑みです。

「許さない！」

この迫力ある美鈴の怒号で言葉は喉の奥へと戻って行った。

作戦名は『木は森に人は人混みに』。

内容は至って簡単、分身に紛れ、爪を奪還する事である。

この作戦はお空、天子が上空で攻撃、地上が混乱している間に武器を手に入れるだけである。

後は冥界でも旧都で見好きな所へ行き、顔を変え一生を終える。それが作戦でもあり、覚悟でもあった。

「でも映姫さんには会うか……………地獄行き決定だな」

博霊神社の階段、その前で分身四体と戦うにとりが居るはずだったのだが、そこには誰も居ない。

「おかしいな……………アイツらには誰も傷つけるなって最初にプログラミングしといたんだが……………」

「どつりで攻撃が甘いんだ……………」
背後からの声、振り返らず、晴輝は懐からスペルカードを取り出そうとするが、重く耳に響く金属音で体が硬直した。

ゆっくりと首を回し、背後の声の主を見る。

「久しぶり盟友」

鉄腕に付属する機械、六つの銃口、幾つも繋がった弾薬、機関銃に似たそれが晴輝の頭を狙っていた。

「大丈夫、全部ゴム弾、死にはしないよ」

「そうか、でも悪いな」

晴輝は握り拳でスペルカードを握りつぶし、拳を構える。

「俺盟友じゃないんだわ」

人間の拳と河童の鉄拳がぶつかり、晴輝は何も言わずにとりを見つめる。

「河童『のびーるアーム』、残念晴輝、河童にも人間に負けない技術と意地が在るんだ、大丈夫そんなに力入れてないか……………」

「…ら」

にとりはその澄んだ川の水の様に輝く瞳に自分の技術を見た。

罅が入り、今にも断末魔を上げ砕け散りそうな自分の鉄腕、そして仮面下からはみ出た晴輝の嘲笑う様な晴輝の口を。

「ッ！」

直に腕を離し、残り三本の腕で一斉に殴りかかるにとり、鈍い音がにとりの耳に入る。

「やった！」

と思つたのもつかの間、巨腕に隠されている為にとり本人には見えていないが両手と頭で自分の技術力が押し負けている。

全てに鉄拳に罅が入り、粉々に砕け散る。

「お休み、にとり」

晴輝は右手で狐を作り、にとりの額を弾く。

にとりは額の一撃を受け、眼を閉じ気を失つた。

体を支える力を失くしたにとりは晴輝の胸で眠る事になった。

「……………よしよし」

気を失つたにとりを晴輝は撫でる。

散らかった鉄屑にとりを隅に寄せ、石段を上る。

階段が残り数えるほどになると仮面の下から寂しげな表情をしていた。

「これで全部終わりか」

幻想郷に来てから三カ月近くになる、自分の家出はこれで幕を閉じる。

幻想郷に来て何もかもが珍しく、充実……………とは言えないが外の世界では出来ない体験をして楽しかった。

だが自分の我儘の為に何人も泣かせるとなると良心が痛む。

「良心なんてあつたっけな？」

彼の良心など既に真っ黒に染まり切っている、誰もが望まぬ結果になり、誰もが俺を罵るだろう。

「それでも良い、アイツらが傷つかないのなら……………」

……」

丁度階段を上り切り、博霊神社が視界へと入るが、信じられない光景が晴輝の計画を打ち壊した。

「全……………滅？」

分身の土人形は元の金色の物体へと戻っていた。

そして中心に傷どころか息も切らさずに立っている人物。

「よう、お前の弱つちい僕はこのザマだぜ」

魔理沙を中心に霊夢、妖夢、文、はたて、アリス、血塗れパチュリーって一人重傷者が並んでいた。

「ハツハツハツ、流石だここまでやるとは正直驚きだよ」

実際は発狂しそうな位驚いている、分身には防御魔法、攻撃魔法を搭載させ、自己回復の昨日も搭載させた、なのに全て全滅、俺は「白昼夢でも見てるのか？ とか言いたそうだな。だが残念、もう日は沈んだぜ」

魔理沙が指を鳴らす。

「さてと、霊夢準備は良いかしら？」

「ようむく、ご飯……………」

「たつく疲れたよ」

博霊神社から出て来たのは紅魔館の主、白玉楼の主、守矢神社の神だった。

「レミリア、幽々子さん、神奈子様……………なるほどあんた等は援軍か、まあ十人位相手に……………」

喉元をナイフが触れる、後頭部に気を感じ、鳩尾に指が触れる、隣に分厚い本を構えた少女が現れ、顔の目の前に槍が構えられる。

紅魔館のメンバーである鼻にティッシュを詰め込んで鋭い眼光で睨む咲夜、美鈴、パチュリー、小悪魔、レミリアに包囲し、晴輝は動けなくなった。

「残念、その三倍は居るわよ」

レミリアが上を指さす。

鳥居に立つ妹紅と角を生やした慧音、
「後ろにも」

背後には美鈴だけではなく、仲違いをしたルーミア、チルノ、緑髪可愛らしい少女やマイクを構え歌いだしそうな少女や楽器を持った三人、頭に触覚を生やした少女も居る。

「前にも」

巨大な人形の肩へ座るアリス、一本の柱へと集まる早苗、神奈子、諏訪子。

「左右にも」

右を向けば寝ている小町、左を向けば酔いが醒め、木陰で色々トリバースしている萃香。

「まだまだいるわ」

妖夢、幽々子にスキマから除く紫や側近らしき動物の少女。

そして最後にレミリアは神社の屋根を指す。

屋根には霊夢と魔理沙が立っていた。

「降参した方が身の為よ」

霊夢の発言は間違っていない、だがここまで揃えると逆にやり過ぎの様な気がする。

「大丈夫、フランはお留守番させてるわ」

「一年前も前日も負けたからって、さすが子供吸血鬼、考える事が単純だな」

「私達を怒らせようとしても無駄よ、貴方の戦い方は私達を怒らせ、判断力を鈍らせる。つまり同士討ちが狙い……………でももう騙されないわ、今日は特別に霊夢から「半殺しなら許す」って許可貰ってるのよ、こんなに月も紅いのだから楽しまなくちゃ」

「やってらんない、二十六対一かよ」

「馬鹿な鴉と不良天人は？ どうせ怖気ついたんでしょ、まあこれほどの大差なら仕方ないわよね。やっぱり自分達の保身が大切な屑妖怪ですものね」

「やっぱりあの馬鹿共が関連してたのね、たつく……………貴方も大変よね、あんな奴等の世話大変だったでしょ？ 同情するわ」

霊夢を合図に全員が一斉に喋り出す、だが明確に聞こえるのは二

人に対する侮辱。

晴輝は下唇を強く噛む、噛み過ぎで血が出るがそんな事は気にしない。

家族の侮辱ほど自分の精神を狂わせる物は無かった。

「いや、俺の我儘に付き合っただけ……………だから裏切られても俺は何も言えないんだ、アイツらも確かに自分の事を優先してたよ……………でもなあ」

晴輝は自分が今どういう状況なのかも知らずにスペルカードを懐から取り出す。

「アイツ等に対する侮辱は俺に言ったと思いやがれ！」

スペルカードを握り潰すと刀、槍、斧が姿を現す。

「帰って来い」

そう言うのと博霊神社から鉤爪が飛び出す。

雪の様に白く輝く三本の刃、それが晴輝の左手へと着く。

刀と斧は背中に、槍は左手に装備する。

「戦闘の意志の無い者は去れ、意思の在る者は全員龍の吐息で滅す」だが誰も去りはしない、それどころか全員が戦闘態勢へと入る。

中には小刻みに震える者、涙を流す者、冷徹な表情を変えぬ者、様々な者が居た。

「神様、俺は如何にでもなっただけ良い、自分で選んだ道だ、後悔なんてないさ。でも出来るならアイツ等を……………あの四人や同僚だけは助けてほしい」

「『四龍幻夢』」

そう呟いた途端、男の両足は真っ赤に燃えだした。

黒い羽が生え、赤い尻尾が生え、右腕は多量の水が覆い、左腕は大きな氷で凍てついた。

晴輝は人間に戻れないと覚悟した、そう言う技だから、難しい御託は無い。

この場を生き残る為に、自分の明日を掴みたいが為に、守りたい物の為に。

87 - 正面突破の籠（後書き）

主「三姉妹が出ないとか言ってたけどあれは嘘だっ！」

88 - 人間を辞める者

この事を聞いたのは永遠亭に入院し、まだ日の経たない昼型であった。

「人間を辞める？」

「ええ、貴方の体……………正確には血が混血し始めているわ」

永琳の話によると俺は現在進行形で人間を辞めかけていた。

理由は一つ、能力の過度な使用である。

晴輝は『龍の化身』と『錬金術師』のハーフである。

何故『人間』が流れているのか、それは親のどちらとも人間との混血、つまりハーフ&ハーフの様なまるでピザの様な子供である事が仮説と思われた。

「もしも貴方が本気になれば妖怪を殺める事だつて容易く出来るわ、なのにこれまで死者はゼロ。ここに運ばれて来たのは貴方一人……………まさか誰も殺さずに全てを終わらせるつもり？」

「そうしたいんですけどね」

次の目標は博霊神社、紅魔館でド派手にやったから間違いなく気付かれている。

「それなら本気は使わない事ね。人間を辞めれば貴方は妖怪……………」

……………いや化物にもなり得るわよ」

「ええ、大丈夫です。この一件を終わらせる手は三つありますから。まあ化物にはならないと思いますが……………」

その言葉を自分で破るとはあの時は知らなかった。

月光が人外と化した晴輝を照らす。

右腕は水が巨大な爪を作り、左腕も冷気を放つ氷が巨大な爪を作っていた。

胸から爪先までを獄炎の様な紅蓮の炎が包み、背に生えた翼は青

白い雷を溜め、発光していた。

眼は紅く、悪魔を思わせる様な不気味な笑みを止めない。

「アンタは何がしたいの？」

咄嗟に霊夢が呟く、蔑むような冷たい瞳、誰もしない事を平然と霊夢がやって見せる。

「ここまで人様を馬鹿にした妖怪は初めてだわ」

「妖怪？ 霊夢可笑しくなったのか？ アイツは晴輝だ、私はアイツを信じる」

「魔理沙、アンタそれでも魔法使い？」

「……………何？」

少し怒り気味の魔理沙の炎へ霊夢が可燃物を投げ入れた、もちろん、霊夢の一言には誰もが頷くだろう。人から外れればそれは人間ではない、ただの化物だ。

だが魔理沙は晴輝は何か隠しているのではないかとそう思っていた。

博霊の巫女は複数枚の御札を手に取り、髪留めを外す。

「妖怪退治は私の専門なの、紫」

「はいはい」

「オイ待てっ……………痛っ」

霊夢を止めようと魔理沙が割り込もうとするが見えない壁に鼻を打ちつけ、涙を溢していた。

スキマ妖怪の結界である、結界の中には人外と化した晴輝、そして眼を赤く光らせる霊夢が居た。

「アンタに負けた時、悔しかった。別に何も失ってないのに、悔しかった」

「……………」

晴輝は獣の様に喉を鳴らし、一步一步近づいて行く。

「一年……………それで私は強くなった」

晴輝は地面を抉る様に蹴り、晴輝の氷爪が霊夢を襲う。

誰もが眼を閉じ、悲惨な光景を目蓋で視界に入るのを防ぐが彼女

らが想像していた物と現実は違った。

霊夢の右腕には大量の御札が貼られていた。

身体強化をする為の御札である。

彼女の細い腕は晴輝全体を持ち上げた。

左腕で拳を作り、力を込め晴輝のお面を殴りつけた。

「なっ！」

全員が唾を飲んだ、確実に二mは超えている晴輝を拳一発で結界の端まで突き飛ばした。

「……………」

膝を付き、ゆっくりと立ち上がる。

晴輝は人外の姿を解き、元の人の子へと変わる。

だが腰から生える純銀の様な光沢を持った尻尾、頭に生える金色の角が晴輝が自我を失っている事を知らせた。

紫はそれを見て何を思ったのか結界を解く。

「行きなさい……………」

スキマから縦に回転し飛び出してくる二人の少女、八雲紫の式である八雲藍、そして式の式である橙であった。

「行くよ橙」

「はい藍しゃま！」

二人は弾幕を打ち放つが一発とも当たらない、晴輝はスペルカードを取り出し、呟き始めた。

「土塊は八卦、手で魔力に変換、魔力は熱と光に、恋色の魔法使い」

左手に握られるのは魔理沙と同じ得物である八卦炉、それを前方の狐と猫に向けて構える。

斧を地面へ刺し、右手を地面に着き、発射の態勢へ移行した。

「マスタースパーク」

青白い雷光と轟音、二人の式を掠る光柱は一瞬だが夜の幻想郷を照らした。

「手加減は無し……………だぜ」

まるで魔理沙を真似した口調、そして魔理沙と同じ技が全員の確信を本物へ変えた。

頭を使わない妖精や怯えている他の面々を外した誰もがコイツは遊んでいる、そう思ったのだ。

88 - 人間を辞める者（後書き）

主「ヤベえ、パソコン壊れた」

晴「ちよっ！ それかなりヤバいんじゃない？」

主「と言っても、液晶だけだし、修理は年明けに……………お年玉消えるな」

パソコンの液晶修理費ってどのくらいでしょうか？

89 - 勝敗のコイン

「夜符『ミッドナイトバード』!」

「冷体『スーパーアイスキック』!」

「えいつえい!」

「蝶符『バタフライストーム』!」

「鳥符『ミステリアスソング』!」

ルーミア、チルノ、大妖精、リグル、ミスティアの五人が弾幕、スペルカードを放つがダメージなど無い。

「行くよメルラン、リリカ」

「分かったわ」

「姉さん達、行くよ!」

次に現れたのは騒霊のプリズムリバー三姉妹。

「『大合葬』霊車コンチエルトグロツソ怪』!」

三人の演奏が弾幕の嵐となり、晴輝を襲うが八卦炉を構える。

「マスタースパーク」

そう言うつと三姉妹は方々へ散り、青白い雷光が轟く。

「おいおい、本物を忘れちゃ困るぜ!」

魔理沙が駆け、八卦炉を構える。

八卦炉を放り投げ、人差指を突き出した右手を魔理沙へと向ける。

「魔力は靈力に、楽園の素敵な巫女」

魔理沙の手に集中する魔力、大気を振るわせ、辺りに熱気を放つ。

「恋符『マスタースパーク』!」

八卦炉と晴輝の顔は十?ほどの間しか無く、黄色い光が晴輝を飲み込んだが、光柱の中から尻尾が出て魔理沙の足に絡む。

晴輝は無傷、と言うよりはダメージを受けていない。

ただ体全体を輝かせ、攻撃を弾いていた。

「私の『夢想天生』……………ますます化物ね」

魔理沙を投げ飛ばし、落ちて来た八卦炉を掴む。

「四肢は鬼、幻想郷最高の鬼」

鬼と呼んだ所為か、萃香が晴輝の眼の前へ現れた。

「呼んだかい？ まあ今日は祭と行こうじゃないか」

瓢箪を投げ、スペルカードを使う。

一步、両者が握り拳を作る。

二歩、拳を構え三步目を踏み入れる足に力を込める。

「四天王奥義『三步……………』」

二人のスペルが途中まで被り、

「壊廃！」

「必殺」

二人の拳がぶつかり合い、その衝撃で突風が生まれる。

「ほう、勇儀の技も使えるなんて……………いやもしかした

ら晴輝、お前……………」

「ッ！ 鬼符『ミツシングパワー』！」

晴輝は大量の水に覆われ、水で巨大な自分の形を作った。

晴輝は物体の性質を変えるだけで巨大化などの自分を盛大に弄る

事は出来ない。

萃香は瓢箪の酒を大量に摂取すると張りあう様に巨大化した。

全長は十m弱の水の巨神と鬼、二人の拳が再びぶつかり合うが晴

輝の水が負け、雨の様に降り注ぐ。

瀟洒メイドは素早く自身の主の元へ駆け寄り、傘を使い水飛沫を

弾く。

地面に叩きつけられた晴輝は呼吸も出来ない、実際は酸素が肺に

入らず、そのまま鼻から抜け出している。

「この一カ月間晴輝は旧都に居たんだ」

萃香が口から漏らした事は事実、だが誰にも悟られたくは無かつ

た。

「俺には……………守りたい人達が居る」

晴輝が狂って最初に口にした言葉は全員の理解に苦しむ物だった。

誰かを傷つけないから誰かを傷つける、あまりにも矛盾する

が晴輝本人は本気だった。

「そうかよ、私達じゃなく、その他の誰かっつてのを守りたいんだな！」

晴輝は魔理沙の頬を伝う涙の理由を知りながらも、顔を縦に振った。

「わかった……………なら消える！」

魔理沙本人も本気を出したらしく、はっけるわ構え、手に魔力を集中させる。

「恋符……………」

「魔砲ッ！」

二人が八卦炉の前に突き出し、詠唱する。

晴輝の仮面の中から漏れる無色透明の雫、そして魔理沙の頬から落ちる雫は同じ物だった。

「『マスタースパーク』！」

「『ファイナルマスタースパーク』！」

青白い雷光と黄色の熱、ただ一方が極端に太く、もう一方が極端に短かった為、短い雷光は熱に押し負け、男の体を飲み込んだ。

「何で……………何で！」

魔理沙は勝敗に納得などしていなかった。

答えは明確、一方が本気で放った熱が一方の手を抜いた雷光に勝ったからだ。

「何で手を抜いた……………」

晴輝の体は散り散りにはならず、地面に四肢を放り投げ、無造作に転がっていた。

魔理沙が涙を拭うが晴輝の右手がピクリと動く。

「いや……………俺だつてさあ」

今にも消されそうな擦れた弱い声、晴輝は必死に何かを訴えかける。

「ここに来るまで……………色々あったよ、でも俺はこんなに思われてるのかって自惚れたら自然と……………力がさあ……………」

血反吐を吐き出す力も残していない晴輝は口から多量の血を流す。「俺の事は深く検索しないでくれ……………マスク・ザ・ドラゴンからの……………神田晴輝からの最後の……………お願いだ」

段々と弱くなる呼吸、晴輝は口に溜まった血反吐を一気に吐き出すと左手を空高く突きあげる。

「ちよつと、映姫さんに会って来る、こまつちゃん、行きの船は宜しく……………」

誰もが皆、眼を丸くしていた。

「おいおい、幻覚かよ……………なあ皆、俺さあ今、鬼が見えるんだけどこれって萃香？」

晴輝の突き上げた手を掴み、握り締める女性、額には立派な角の様な物が生えている。

「鬼は嘘を嫌うんだ……………お前が言った嘘は軽く十を超えてる」

「……………俺はどれだけ旧都の皆の事好きだったんだ？ まあ他の皆も好きだけど」

徐々に眼が閉じて行く晴輝、女性は、優しく晴輝を抱き締め、神社の端の木に凭れさせた。

「誰が私達を守れて頼んだ、何が一人で背負い込むんだ、お前が十分背負ってるじゃないか」

女性は立ち上がり、黒いロープを脱ぎ捨てる。

黒い和服に紅い帯の鬼、萃香より背丈が在り、胸もある、眼を赤く光らせ、晴輝以上の殺気を体から放出する鬼。

星熊勇儀。

彼女を見た瞬間、鴉天狗と白狼天狗が逃げ出そうとしたのは言うまでも無い。

「地獄の鬼が一匹、別に怖くなんか……………」

「勇儀……………速い」

「まったく姐さんには敵わないね、キスメ」

「ヤマメの変態度は幻想郷一だけどね」

ぞろぞろと顔を出すのは旧都の忌嫌われる少女達、嫉妬姫のパールスイ、土蜘蛛のヤマメ、釣瓶落としのキスメだった。

「さあて、全員揃ったな」

五人と三十二人、両陣営には鬼がいて、吸血鬼や亡霊の姫、神も居ると言うのに彼女達に敗北の文字など感じ取れなかった。

「…………私達の男に手を出して、無事で済むと思うな！」「…………」

四人の声が被り、響く。

晴輝は意識の薄れゆく中、呟いた。

「俺の彼女達はやっぱり最高だわ……………」

89 - 勝敗のコイン（後書き）

主「紅魔郷は東方ロリコン祭、

妖々夢は妖怪と幽霊の祭、

永夜抄は不良と生徒と教師のまるで学校の様な関係図、

萃夢想は元祖つるぺったん、

花映塚はゆうかりん復活祭、

風神録はヒマを持って余した、神々の、遊び、

地霊殿はちよつ火力高すぎ（大げさ）祭、

星蓮船は驚きと衝撃の弾幕祭、

神霊廟は社会の教科書の人々……………さて次は誰が幻想入りするの
やら……………」

戦況は混沌としていた。

鬼である勇儀がほぼ全員の相手をしていた。

キスメとヤマメは妖精や小物の妖怪を相手し、何故かパルスィはアリスとパチュリーを戦わせていた。

そして何故か無数の弾幕を避けながらの四人で雑談。

「晴輝は本当に修羅場が好きだな」

勇儀が弾幕を軽くあしらいながらパルスィと話をする。

「そう言う女つたらしだし、嫌いじゃないけど」

そう言い返すパルスィの頭をヘッドロックし、軽くこめかみに拳を入れていた。

「私もどちらかと言うと最近寂しいんでね、そうだ久々に五人でやっつて貰うつてのは？」

「勇儀……………彼のモノが果てるわ」

「てか勇儀姐さんとパルスィの後に必ず晴輝が枯れてるんだけど、ねえキスメ」

「ヤマメの言うとおりだよ」

「戦い辛いわ！ 何ださっきから何の話をしているの！」

レミリアが声を上げる、大半の人、妖怪、神が顔を真っ赤にして話を聞いていた。

「ああ、キス程度で顔を赤くするお子ちゃまで恋する乙女感覚な奴らには分からないか」

と勇儀が笑う。

「そうね、経験値が無くてまだまだだ、ゴホア！」

キスメに桶で叩かれるヤマメも笑っていた。

「何か腹立つわね慧音」

「ああ、妹紅。意味が分かっているのか……………」

手をワキワキさせた慧音が妹紅を向いて厭らしい目つきをしてい

「無意識に懽り！」

地霊殿の古明地こいしの能力は『無意識を操る程度の能力』、何時結界の内部に居たのかは分からないが彼女が結界の妨害をしていた。

「あははははは！　だ、ダメです腋は弱っ、あはははははははははは！」

もう一人の巫女の早苗も笑っていた。

彼女の胸を揉みし抱き、腋を攻める少女達が居た。

「クッ、胸か！　やっぱり胸が大きい方が良いのか！」

「わちきはそこそこあって良かったよ……………　ってぬえちゃん私の胸見て手をワキワキさせないで！」

「小傘、アンタは良いよね！　お兄さんの顔を埋めさせるほどに胸があつて！」

「驚いて……………る？」

それは命蓮寺に住みつく妖怪、多々良小傘と封獣ぬえであった。ぬえの能力はこいしの能力と類似している。

それは『正体を判らなくする程度の能力』である。

両者は姿を消す事が出来る、潜入のプロのダンボール並みに迷彩率が高い。

「ちよつと妖夢！　何したるんだぜ！」

魔理沙は妖夢を羽交い絞めするが直に振りほどき、二つの刀で結界を斬っていた。

「私は彼の事を懂れています、彼は自分の守る物の為に戦い、傷つきました。私は今自分が恥ずかしいです、命の恩人を助けて何が悪いのですか！」

その言葉を聞いた諏訪子が鉄の輪を取り出し、結界に攻撃し始め

た。

「神奈子、早苗、私さあ恩が在るんだ、だからゴメンね」

晴輝に抱き付くキスメ、ヤマメ、パルスィの元へ一人の医者が着く。

「はいはい、退いてね。脈は弱くなってる、呼吸も……………うどんげ、注射出して」

「師匠、晴輝さんは大丈夫ですか？」

「危険な所ね。てゐ今日は派手に暴れなさい、うどんげも姫様も」

「ハイ師匠」

うどんげはそう言つて拳銃を取り出し、微笑んだ。

「うさ」

てゐも杵を取り、うどんげと共に結界に攻撃を始めた。

「私は別に助けに来たわけじゃないわ……………妹紅を殺しに来ただけよ」

「（この男、姫様までも……………血に硫酸でも流してあげましょうか？）」

「さとり様、如何しました？」

「お憐、彼と仲直り出来るか心配で……………」

「その時はあたかも頭を下げて頼みますよ」

「ナズー！ 私の宝塔と槍は何処ですかー！」

「ご主人、私が持って来たの忘れましたか？」

「いきなり行くよ！ 転覆『撃沈アンカー』！」

「雲山、姐さん。私と晴輝さんとの結婚考えといてくださいね。潰

滅『天上天下連続フック』」

「そんな寝言は死んでも言わせませんよ。南無さーん」

いつの間にか形勢は同じぐらいになって行った。

永遠亭、天界、旧都、地霊殿、命蓮寺と様々な人、妖怪が集まり、内部でも裏切りが出ている。

「お兄ちゃん！」

物凄い勢いで飛んで来たのはフランドールであった。

レーヴァテイン片手に急いで飛んで来たのだ。

晴輝は意識が無いと言うのに、何故か微笑みを見せた。

彼女の事を内心、溺愛しているのかもしれない。

「大丈夫、お兄ちゃんのお友達が来たから……………」

「まったく、女泣かせて言うか……………私の弟子もそんな感じだけ……………」

「アンタの責任でしょ、まったく一年前、あの親馬鹿があんな事言わなかったら……………」

博霊神社から数十m離れた上空、緑髪の女性二人が居た。

一人は日傘を持った胸のある女性、もう一人は足が無く、幽霊の様な感じの下半身を持った女性だった。

「とりあえず」

日傘の女性は傘を開き、傘の先を博霊神社へと向ける。

「そうね……………」

幽霊の様な女性は先端が三日月の型の杖を持ち、博霊神社へと向ける。

「『トリニティスパーク！』」

三つの光が神社を包む結界に衝突する。

粘っていた結界もついに粉々に砕け散った。

「げっ、師匠！」

「げっ、幽香……………」

魔理沙と霊夢、露骨に嫌な顔をのリアクションをし、後ずさる。

博霊神社は一つの大戦場となり、人、妖怪、神、霊が第一回幻想対戦を起こした。

90 - 援軍（後書き）

主「ゆうかりんが出ないと言ったがあれは嘘だ……………」

「最近みよんが可愛い。」

「だがお空は俺の嫁！」

「天空は俺の羽ばたける世界！」

91 - 一死乱れる戦場

午後十時、夏の夜は短いと言うが、彼女達の決戦が始まり、三時間が経過していた。

晴輝は今も治療中、担当の永琳は紫と交戦していた。

妖夢の抜けた主人公チームの霊夢、魔理沙、咲夜、早苗は幽香、魅魔、さとり、こいしが担当。

封印を解いたルーミア率いる、チルノ、リグル、ミスティアのバカルテットと大妖精は一輪、村沙がルーミアを、チルノはてると、リグルは暴走したヤマメが、ミスティアはキスメの桶に叩かれ、大妖精と小傘は小規模な争いをしていた。

「ぬえつちよの方が胸が小さいもん！」

「チ、チルノちゃんの方が……………！」

身内のフランを敵に回した美鈴、小悪魔、パチュリー、レミリアは聖、ナズーリン、星、涙ぐむぬえが相手をしていた。

橙、藍、紫の八雲一家と幽々子は地霊殿の灼熱コンビのお燐、お空と永琳、下剋上を試みる妖夢が戦っていた。

「私が負けたらうどんげを裸Yシャツで一週間生活させるわ！」

「妖夢、負けたら一週間は裸エプロンね、勿論彼の前に出て……………」

……………
「そうね……………じゃあ無期限で私は藍に裸で……………」

ここにも少女達が意地を張る理由が出来た。

一方地上は色んな意味でヤバかった。

「パル……………」

「そうよ、パチュリーさえ居なければ私は魔理沙を独占できた……………」

……………なのにあの紫モヤシときたら……………」

パルスイとアリスの二人を取り巻くどす黒い邪気、妖怪の山の厄神がセツトアップしたとか何とか。

「ちよっ！ 助けて姫！ 掘られる、掘られる！」

「妹紅のバーカ、アホ、胸無し、そんなんだから男の一人も逃げん
のよ魅力ゼロ女！」

「あああん！ テメエの何処に魅力が在んだよ！ 年中ジャージ来
てるくせに」

「残念でした、年中じゃありません、三三五日だけです」

うどんげと慧音、輝夜と妹紅、兎と狼、不良と不良の現代社会の
様な熾烈な戦いが繰り広げられていた。

「このペチャパイ、つるぺったん、ロリ鬼！」

「お前の方がツルペタだ！ 私は……………私は……………うわああ
あああん！ ツルペタって言うなあああああああ！」

小鬼と吸血鬼の妹、彼女達も争っていたが、まさに団栗の背比べ
である。

「当たんなさいよ！ 逃げてるばかりじゃ勝てないわよ死神！」

「今日は眠いから止めとくよ、それに……………ああやっぱ何でもな
い」

「衣玖！ 必殺技よ、叫びなさい！ 『ギガドリルブレ……………けほ
つけほっ』」

サボタージュ死神と不良天人、そして龍宮の使いの壮絶な戦い、
衣玖さんが巨大羽衣ドリルを振りまわしているのは別に特に何の意
味も無い。

「神奈子、久々の諏訪対戦……………派手に行くよ！」

全員が胸を撫で下ろし、ほっと息を吐く。

「まあ、私に弾幕で勝てただけだな」

その一言で彼女達の寿命が短くなったのは言うまでも無い事である。

91 - 一死乱れる戦場（後書き）

主「鬼無双（笑）」

視界に広がる霧と彼岸花の世界、そして深々と流れる川、辺り一面の霊体の数々、完全に理解出来た。

皆さんご存知の三途の川である。

もう既に五回ほど来ているので間違いは無い。

だが小町が居ない、これでは対岸へと渡る事は出来ない。

「おーい、誰か居ないか？」

「こほん……………」

居た、正確には現れたが正解だが彼女は立っていた。

綺麗な緑色の髪、まだ幼い容姿、手に持った板、閻魔の映姫である。

「おや、映姫様ご本人が私を裁いてくださると？」

「変な口調は止めなさい、ええそうですね。今は事態が急変しつつあるのでさっさと裁いて、止めに行きますよ」

とっさに「誰を止めにな？」と言いつつになった。

意識が遠くなっている際に見えた幻覚、それが本当なら誰が暴走しているのか見当がついた。

「とりあえず……………貴方は罪を作り過ぎた、貴方は見ず知らずに誰の心をも盗み、そして消えた。それが貴方の問題であろうと無かるうと、あの事態を回避できたはずです。それに貴方の能力は生物を作り過ぎている。貴方の土人形とやらは意思を持ち、感情を持つ事の出来る、それは一つの生命となります、それを山ほど作るとは如何いう事ですか！ 魂を作るのはこの世の理を曲げ、否定し、貴方と言う存在が龍神様になり得る事になりかねません！」

「いや……………一応は龍の化身ですから」

「お黙りなさい！ 貴方は自由すぎる！ とりあえずこの悔悟棒を使って一発で仕留めます」

と言って取り出したのは彼女が普段から持っている板、の数十倍

はある大きさの巨大な板であった。

「すいません、これは何ですか？」

「ん？ 悔悟棒プライベートバージョンです。ついでにこれで叩かれた小町は同僚に運ばれて行きました」

「それって処刑……………」

悔悟棒は人の罪の重さによって重さが変わる。

閻魔が大激怒するほどの罪、それはどれ程の重みなのか、それを身を持って経験した。

午後十一時、日付が変わろうとしている今現在、博霊神社で最終決戦が行われていた。

両者ボロボロで大将一人を選び戦わせる大将戦、博霊神社は今だマシに動ける魔理沙を繰り出したが、晴輝チームは未だに誰も出ない。

全員が深手を負い、永琳、輝夜、うどんげが総動員で治療をしていた。

「やっぱり私が……………」

そう言って手を上げるのは右肩を押さえて座り込む幽香であった。傘の骨が折れ、布だけが固まった血と共に手に着いていた。

「手負いなのに無理しない方が良くいわよ……………それより悪霊と貴方と彼との関係、聞かせて貰っていいかしら？」

だが幽香はなにも喋らない、隣で寝ている魅魔を見つめ、ため息を吐く。

「ただの下僕よ……………」

博霊神社側は早苗と咲夜が全員の手当てをしていた。

「魔理沙、負けたら承知しないわよ」

「ああ、それより折れた腕でもくっ付けときな」

怒りに身を任せ飛び出して来た勇儀と戦った霊夢は右肩を壊していた。

右腕でガードに成功するが鬼の一撃、肩を脱臼しつつも、残っていた左の腕で勇儀の顎に一撃お見舞いさせた。

「てか鬼倒すとか、お前が幻想郷一じゃね？」

「いいから、とりあえず行つて来なさい」

力の無い左手をひらひらと揺らす霊夢、彼女の手から力が抜け、七日目の蟬の様に地面へと落ちた。

「……………生きてる？」

三途の川から再び戻り、天子の声が真つ先に聞こえた。

重い目蓋を開けると視界に入るのは血塗れの皆の姿だった。

包帯で済んでいる軽傷者も居れば手術された傷跡が目立つ重傷者も居る。

俺はその両方だった。腹に縫い合わされた傷口、指に巻かれている包帯、天子が言うには突指四本、左足の骨折、内出血も沢山在つたらしい。

「とりあえず……………そこの酒瓶取つてくれ、俺の大事な活動力」

「小鬼みたいな事を言うわね、傷に障つても知らないわよ」

手渡された酒瓶、酒瓶の口を咥え、中の液体を一気に飲み干す。

「かああああああ！ 生き返る」

「アンタがそう言つと説得力あるわ」

酒瓶を放り投げ、手を着いて立ちあがる。

泥酔者の様に足はふらつき、二足歩行する事すらままならない。

咄嗟に何かが六七？の体重を支える。

尻尾だった。

白銀に輝く尾、それを見た途端に頭の違和感にも気付く。

硬く曲がった立派な角、まるで牛の様に曲がりくねった二本の角、それを触り晴輝は小言を漏らす。

「俺、人間辞めたんだっつたな」

それを言った瞬間、誰もが暗い顔をした。

人間を辞める、それは二十年近く人間として生きた証を汚し、自分で投げ捨てたのである。

だが晴輝の反応は違った。

角や尻尾を撫で、満足そうな顔をしていた。

「これで、皆と一日でも長く居れるな」

その言葉に誰もが自分の耳と目を疑った。

男の万年の笑み、それは彼女達が予想もしていない物だった。

「本当に馬鹿ね、何が私達と一緒に入れるよ。まあ、そこまで単純な頭だつたらこれから苦労はしないわね」

馬鹿にする様に笑う幽香、だがは本人は皮肉を皮肉とは受け取らず、笑って返す。

「ずっと考えてたんだ、人間と妖怪、その両方が相思相愛になった時、どちらが泣くのか。答えは明確、妖怪だよ」

誰もが全員何も喋らず、演説の様に語る晴輝を見つめていた。

「そんな悲しい恋が在っていいのか、相手は幸せになったのだろうか、そう思うと人間の立場に腹が立つよ。でも、もしも別れるって分かっていも一日も長く好きな人と居たいのが恋愛じゃないか？」

「貴方が恋愛を語るなんて……………面白いわね」

「語ってるわけじゃないよ幽香さん、ただ、相手に泣かれるぐらいだったら自分が泣くの堪えた方がマシだって、そう言ってるんですよ」

「……………人間のくせに言うねえ」

「残念だけど人間辞めたよ、魅魔さん」

晴輝は旧都のメンバーの元へと移動する。

全員が倒れ、ボロボロであった。

「キスメ、ヤマメ、パルスィ、勇儀姐さん」

キスメとヤマメの額に手を置き、優しく撫でる。

二人の傷が癒え、どんどんと回復して行く。

「外傷だけなら何とか出来る、皆可愛いのに傷なんか要らない……
……怪我人と傷の目立つ奴は来い、治して見せるよ」

全員の治療を終わらせた永琳が神社チームの負傷者の元へと行ってしまふ、最初は拒絶されたが紫が上手く話を纏めてくれた。

「魔理沙……」

「よお、色男、いや仮面男か？」

未だに取る事の出来ぬ仮面、だが晴輝は笑った。

「仮面の男？ 知らないな」

一カ月、仮面が取れるには時間が掛かってしまった、誰かに取って貰う事も出来たが、自分で取らなければ意味がなかった。

「俺は晴輝、ただの甘味屋の店長、神田晴輝だよ」

今日もここに一人の家出男の家出が終わった。

92 - 神田晴輝（後書き）

主「祝！ 百話記念ヒント！ 次は早苗さんと！」

93 - 混沌と色恋沙汰に巻き込まれる程度有能力（前書き）

時は実った。

一月近くの禁欲生活を解放し、

我が身に再び自重神と妄想神の力を与えくれたまえ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ.....

「私は自重する事をやめよう」

93 - 混沌と色恋沙汰に巻き込まれる程度の能力

日付が変わったが誰も変わらない、時間が過ぎても、顔を見合わせて居なくても変わらない。

「くかー」

彼は私の隣で座って寝ていた。

座禅を組み、刀を抱き、ボロボロの姿で隣に居た。

「ここは.....」

日差しが薄い襖の紙を突き抜け、部屋を明るくしていた。

昨日は日が沈む寸前で、吸血鬼が起きなかつた為、全員が博霊神社へと宿泊した。

私は倒れた彼を看病していたはずが、今は入れ替わっていた。

「たつく、どつちが怪我人何だか.....」

彼の能力には骨折や筋肉の千切れには意味がない。

どんなに人の皮を被れても、どんなに形を変化させようと限度がある。

「おーい、大丈夫？」

私は彼の頬を突いてやった、だが起きる事は無く、ただ鬱陶しそうな顔をしていた。

その表情が私の心を彼色に染め上げたのだろうか、私はつい頬を抓って見た。

苦しそうな顔をするが起きる気配など微塵も無かつた。

そんな彼に悪戯したくなかつた。

鼻を指で塞ぎ、口を自分の口で塞いでみた。

「.....くか？」

寝苦しい顔をしているが起きる気配は無かつた。

一年、一年も待たされたのだ、お預けと言われても止まる事は出来ない。

「はあ.....くちゅ、んむ、はあ、れる、ちゅうううううう」

絡ませようと口内を犯す霊夢の舌、だが本人はぐっすりと眠っている。舌を絡める事は無く、二人の唇は離れ、唾液の端を作った。「なんか、物足りないわね」

何を思いついたのか、霊夢は布団から出て、晴輝の耳に甘噛みをした。

だがこれと行って変化は無く、呑気に寝ている。

「ああ、寝てる時は寝てるわよ、絶対に起きる事は無いわ」

「ッ！……………何処から見てたの天人」

障子を開け入って来る天人、だが疲労困憊の少女の顔を見ると巫女は懐の御札を取り出さなくなった。

「提案が在るわ、この事を黙っておく代わりに私を匿って」

霊夢が頷くと天子は押し入れの中へ入った。

その直後。

「オラアアアアアアアアアアア、あの天人は何処だあああああああああああ！」

障子にシヨルダータツクルをして入って来たのは誇り高き吸血鬼のレミリアだった。

「霊夢、このドアの事は後にして……………何処行ったあああああああああ！」

そのまま血眼で走り去る少女、部屋のドアが一つ壊された事によって神社全体に響く声が巫女の耳に入って行く。

ある時は歓喜、ある時は怒声、ある時は悲哀な泣き声、樂觀な笑い声、喜怒哀楽の交じり合った声が神社をより一層、騒がしくしていた。

「何の騒ぎよ……………」

次に部屋の襖を破壊したのは魔理沙だった、だが二番目の訪問者とは違うまるで鬼にでも追われている様な顔をしていた。

「れ、霊夢、朝の挨拶は後にしてとりあえず匿ってくれ！」

霊夢は顎で襖を指す、「中に誰が入っても驚かないですよ」と釘を指すと魔理沙はお礼の言葉を言わずに入って行った。

「アリスちゃんを誑かす子は居ないか？」

可愛らしい声で部屋に入ってきて来るのは銀髪の少女だった。

背丈は彼女の言っていたアリスと言う人物より少し低く、それを補う為にハイヒールを履いていた。

魔界神の神綺である。

紅い服を突き破り生える紫の羽、これは彼女が既に本気と言う事である。

「久しいわね、霊夢」

彼女は微笑むが眼は全然笑って居なかった。

彼女はアリスの育ての親であり、幻想郷の恋泥棒霧雨魔理沙をとっ捕まえに参上したのだ。

「霊夢、白黒で、金髪で、魔法使いな女の子は何処か知ってる？」

魔理沙である、神綺事態も知っているのだが、彼女の脳は魔理沙を脳内と現実から消去したのである。

「とりあえず、二度とゲームを起動できないほどボロボロにしてあげるわ」

そう言っ飛んで行く少女、娘が後を追って行った。

「.....」

巫女は勘が鋭い、龍宮の使いが地震を知らせるほどの確である。

彼女は少ないヒントから一つの答えを導き出した。

「恋色沙汰か.....」

93 - 混沌と色恋沙汰に巻き込まれる程度の能力（後書き）

主「たくましいなWWW」

94 - 会合

博霊神社一室。

数十人もの人、神、妖怪、霊が集まっていた。

東には霊夢、魔理沙、ルーミア、美鈴、レミリア、フラン、萃香、衣玖、天子が座る。

西には妖夢、藍、慧音の帽子、うどんげ、輝夜、妹紅、小町、映姫が座る。

南にはにとり、椛、文、はたて、幽香、地霊殿の面々が座る。

東には聖蓮船の面々が座る。

別室では咲夜、小悪魔、パチュリー、アリス、橙、てゐ、永琳、神奈子、魅魔、神綺、諏訪子が座り、紫の隙間から戦場を除いていた。

「では第一回、彼は私の夫よ幻想郷談義の始まり始まり」
仕切るスキマ妖怪、だが誰も異論を述べず、ただじっと睨みあっていた。

特に幻想郷の最強の胸囲、ではなく脅威である鬼の勇儀とお花妖怪幽香が互いの胸をぶつけ合い、睨んでいた。

「だから私の玩具に手を出すのならそれなりの覚悟が在るのかって言ってるの、鬼の貴方ならこの言葉理解出来るわよね」

「上等、死神も居るんだ、さっさとお引き取り願おうか、この世から」

その姿に威圧されまくりの山の妖怪達、今にも尻尾を巻いて逃げたりしたいが、そう言う訳には行かないらしい。

「このお子様吸血鬼が、私の様な天人に敵うと思うの？ 天は私に味方している、天に見放され、弱点でもある貴方達姉妹に何が出来るの？」

「うっさいわよ天人！ 貴方達にスカーレット姉妹の本当の怖さを教えてあげるわ！ 行くわよフラン！」

「はいお姉様！」

美鈴と衣玖が仲裁に入るが彼女達は何故かジャンケンで勝負を着け始めた。

衣玖と美鈴は安心して胸を撫で下ろすが、その時、揺れる二つの物体の破壊力に三人は絶望に打ちひしがれる。

「貴方には事を穏便に解決される為に策を伝授したのに眠ったら忘れまして、如何いう事ですか！ 貴方には三十時間通しで策を授けた私が馬鹿みたいではありませんか！ いえ、そんな事は如何でも良いのです、私の彼とあんな場所で会わせて……………覚悟はありますか……………いえ、覚悟して貰わないと困りますね小町」

「ちよつ、映姫様！ 死にます、死神だけど天に召されます！」

部屋の隅でお置きされる小町、彼女の頭の上に巨大な悔悟棒が落ち、小町は意識を失くした。

「なあ妖夢……………」

「如何したんですか？ 藍さん」

「私帰っていいか？」

「はい、ライバルが減るのは私には嬉しい限りです」

何故か戦場に立たされた藍、彼女の九本の尻尾が心身共に小さい少女に揉みくちやにされたのは黙っておこう。

一方別室。

「ああ、お嬢様、あんな男の何処が……………」

「諦めなさい、私は魔理沙は諦めないけど」

「何をほざくか紫モヤシ」

「ああ、私の可愛いアリスちゃん帰って来て！」

「女つたらしは魔理沙もか……………久々にミマスパでも撃とつかな？」

「おい諏訪子、早苗を知らないか？」

「知らない」

彼女達も彼女達で混沌だった。

その頃一方人間の里。

「ああ、何だ通しちゃくれないか？」

女つたらしの神田晴輝は里の前で止まっていた。

仲良く早苗と腕を組み、龍神堂へと向かっていた。

帰れないと思い、店を閉めていたのだが、多少は金を稼ごうと店に向かっていたのだが。

「俺は五十嵐一哲、大ちゃ……………大妖精の彼氏だ。チルノ、リグルミステイア、ルーミアの御礼参りに来た」

薙刀を構え、『ロリ魂』と書かれた鉢巻を頭に着ける黒髪の

「自分はテツの友人の若田深雪、マスク・ザ・ドラゴン基、神田晴輝さん、貴方の事は新聞で知ったよ。悪いけど僕も彼女に攻撃加えられたから御機嫌斜めなんだ、知ってるかな騒霊楽団のメルラン・プリズムリバー、悪いけど仕返しに来たから」

「……………まあ、俺にも多少の非はあるし、それじゃあ掛かってこいやあああああああ！」

94 - 会合（後書き）

主「新キャラ登場で他のあまりの皆さんを解消、
近々バカルテットファンや騒霊ファン、仙人個別ルートも設定中」

龍神堂、客間。

着いた早々に早苗に怒鳴られたのは晴輝の行動の事だった。

里の男総勢二十人と素手で殴り合い、体はボロボロだった。

実際は前線に立っていた二人が一番の強者だった、一哲と名乗る男は何故か狂った様に暴れ、深雪と言う人物は霊体の様に体を浮遊させ、鳩尾に連発して攻撃を居れる。

だが最後は一哲と何故か出来てしまったクロスカウンターで和解、深雪の方も落ち着いてくれた。

「痛たたたたたたたた！ 早苗さん、もう少し優しく！」

「ダメです、いきなり殴り合って自業自得です」

口元の傷に消毒液の染みだ綿を力強く押し付ける、晴輝は眼の下に涙を溜めながらも必死に我慢していた。

「それにしても中々良いお部屋ですね」

「これでも一応は激安の物件、いやぁ本当に良い家だよ。築十二年の木造住宅で部屋が九部屋、家を改築し、店にして貰い、さらには地下に貯蔵庫も建設。これで某ファーストフードショップのハンバーガーが一万個ぐらいつて驚き……………いやぁ、ローンが後二年残ってるが今年中には俺の家になるな！」

「中々、荒い買い物ですね」

「時に男とは無謀な事をしたくなるのだよ」

腕を組み、誇らしげに二度頷く晴輝、一応は結構良い方の出なので金銭感覚に多少疎い。

「おっと、本来の目的を忘れてた、店を開けないと、早苗さんは如何する？」

「私も手伝わして頂きます」

「あつ、それなら悪いんだけど……………」

昼時になり、龍神堂は開店した。
客足は早く、今日も大勢の老若男女、色々な御客が甘味を求め暖簾を潜る。

「私は力キ氷を」

「私は冷や抹茶」

「私はお団子」

「私は運試し饅頭外れ激辛！」

店は何時になく大盛況だった、大抵は女性客が多いのだが今日は違う。

「俺は饅頭！」

「俺は水飴！」

「俺は宇治金時」

「俺は早苗さ…グハツ！」

「店内でのそういう行為は俺が許さないぜ、お客さん」
何故なら今日は和服姿の早苗が注文を受けている、甘味屋は男一人が入るにはキツイ、何故なら中は女性客ばかり、男性は子供か夫婦かカップルだ。

それに最終兵器も搭載している。

「わ、分かりました！」

普通の和服である、淡い緑色で帯は白、簪を付けている。

「接客業の基本は定員から、美人に釣られぬ男は居ない！」

グツと拳を握りしめ喜ぶ晴輝、ついでにお空と天子にも着せる予定である。

「おっと、俺も急がねば！」

「ありがとうございます」

最後の客を見送っても暖簾を取り、店を閉める。

閉店の時間、現時刻は六時、まだ夕日が沈もうとしている途中で

ある。

「早苗さん大丈夫？」

「大丈夫です、ちよつと足が痛いですけど」

休み無しで働き続けた早苗は既に満身創痍寸前だった、男性客の大半に迫られ、対応に困っていたからが大半の理由である。

「天子さんや空さんもこんな重労働してたんですか？」

「最初の頃は足が痛いって泣いてたな、でも必死になって頑張ってくれたよ」

「そうですか」

「あ、そつだ足が痛いならマッサージでも如何だ？ 何時ぞやお礼も兼ねて」

「お願いします」

マッサージを済まし、博霊神社へと戻る準備をしていた。

大量の酒を持ち、家の戸締りをし終わった頃、不意に変な事を口走った。

「なあ、早苗さんは恋愛についてどう考えてる？」

「何ですか急に？」

「あ、いや、口説いてるわけじゃないけど、もしも自分の好きな相手が他の人とキスをしていたら如何思う？ 怒るか？」

至つて簡単な質問だった、大抵の人間は怒りの感情を持つだろう。

だが早苗は「怒りません」と答えた。

「常識に囚われれば怒りますが、私は常識に囚われてません。それに簡単です」

「何が？」

「私その後キスをします、前の人がした以上のキスを」

「もしも相手がまたしたら？」

「またします」

「もしも、それで好きな人が違う相手の事を好きになったら？」

「奪います」

何と言つ略奪愛宣言、流石にこれは驚いた。

「ああ、何か俺の家族がそうならないでほしいな……………」

「家族……………ですか？」

「ああ、旧都の四人にお空、天子だ、俺が絶対に面倒見ると決めた奴らだよ。まあ家族内の問題は解決してないが」

「問題と言いますと？」

「誰が俺の正妻なのか、だそうだ。俺的には皆愛してるんだけど、それじゃあ満足できないみたいだ、特に勇儀姐さんは別格だ、キレると後が怖い」

「た、大変そうですね」

「でも、俺はアイツ等を守らなきゃいけない。弱音何か吐けないよ。絶対に幸せにして見せる！」

そう宣言した後、早苗はクスクス笑い出した。

「アレ？ やっぱ馬鹿げてたか？」

「いえ、良い事だと思いますよ。何があっても、守るんですよ」

「ああ、必ず」

「なら……………」

早苗は晴輝に近づき、右手で頬に触れ、唇を奪った。

「っん!？」

ほんの数秒唇同士が触れ、直に離れる。

「実は私も一年前の一件で貴方を好きになった一人何です。知ってますか？ 魔理沙さんや霊夢さんもレミリアさんもフランちゃんも貴方があの一件で好きになってるんですよ」

「え、うえい！ 霊夢と魔理沙とフランちゃんは分かってたけど、あのレミリアが!？」

「はい、多分今以上に大変な事になります、だから私は皆さんが争ってる間に一步リードさせて貰いました」

「く、黒い！ 友人や自分の神すらも騙してくる何て」

「常識に囚われてはいけませんよ、如何しますか？ 地底の鬼に今回の

件をばらされるか、それとも私を家族の一員として認めてくれるか」「ドス黒い！ めっさドス黒いよ、早苗さん！ そういう娘の口は」「んむ……………」

唇と唇が触れる、晴輝の舌が早苗の口へ侵入し、晴輝が早苗の口に自分の唾液を流し込んだ、早苗は一瞬何事かと眼を開かせた。

「んむ、んん、んー！」

だが激しさを増す唾液攻めでは晴輝本人が満足などしなかった。力強く早苗の小さな体を抱きしめ、舌の絡み合いを激しくする。

「はあ、待つて、もう意識が蕩けて……………んむっ！」

一瞬離された唇、多量の唾液が早苗から流れ落ちるがそんな事もお構い無しに再び唾液を注ぎ込む。

五分ほど続いた激しいキスは終わり、二人の唇が離れる。

早苗は頬を赤らめ、体の力を失くし、痙攣しながら畳に倒れた。

意識と共に眼も蕩け、息を荒くする。

「早苗さん、最初からこう言う事をするつもりで来たんでしょ？」

「い、いへ……………わらひいはこんらにはげひいのは……………」

「ではもう一回」

「へっ？ んむ！」

再び唇を奪われ、体を振るわせる早苗。

早苗を抱き締める腕は次第に弱くなり、早苗の二つの肉丘へと触れる。

「ひゃ……………」

口から漏れた甘美な声、早苗は静かり頷き、服を脱ぎ始めた。

「優しく……………お願いします」

「分かつてる、そこまで鬼畜じゃないからな」

日が沈み妖怪が活発になる午後九時、龍神堂の中は静かだった。

「あの……………早苗さん」

「はい、何ですかあ？」

「機嫌直してくれない？」

「初めての相手に目隠しして、胸を丹念に揉みしだき、私が止めてと言っても鳴かせた貴方の言う事を私が聞くとても？」

「調子に乗ってすみません……………」

「冗談です、怒ってませんよ、ただ」

「た、ただ？」

「立てそうにないので肩を貸してください」

95・黒（後書き）

主「妄想と自重が爆発しちったテへペロ」

を貰った子供の様な無邪気な顔をしているが、晴輝はサンタが親だったと言う現実を突き付けられた絶望に満ちた顔をしていた。

「え？　す、諏訪子様ナニヲイツテルカワカリマセン」

彼女も同様に隠しきれず、言語が半分片言になっていた。

「ミシヤクジ様を舐めちゃいけない、これでも一応は『安産祈願』の神様なんだから！」

「そして私は弟子の黒谷ヤマメ！　晴輝の言った言葉は私の『ゲーム攻略』と言う名の脳内フォルダに入れてあるから！」

「何処の工口画像隠した高校生だ！　家族の中にゲーマーがいたら終わりだぞ！」

「大丈夫、もうバラした！」

「……………」

晴輝の顔がどんと青ざめて行く、頭の角を掻き、両腕で頭を押さえた。

「ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

博霊神社から出て来たのは山の神、不良不死、お花の妖怪、普通の魔法使い、紅白の巫女、皆さん笑顔が素敵だが、全員が攻撃態勢に入っていた。

晴輝はただその彼女達に笑みを返すだけで何も出来ず、後に地霊殿、旧都総動員で助けられた。

「私がアリスちゃんの頼みを聞いて、魅魔に頼んで彼を過去に行かせました！」

そう大声で叫ぶ神綺、何故一年前の世界に晴輝が飛んだかと言うと、魅魔と神綺が悪魔の取引的な物を行い、魔界に時空を操る門を製作し、俺を未来から連れて来てそこ等辺に捨てたらしい、仮面やアイテムの類は魅魔が用意した物らしい。

「なるほど、だからあんなダサい仮面が……………」

「何か言ったかい？」

「素晴らしいデザインの仮面でした」

「まあ、良いわよね。暴走してた巫女や喧嘩してた吸血鬼が悪いんだし……」

急に笑顔で責任転換を始めた魔界神、全員が呆れ顔をしていた。

「そうだな、てか皆俺の顔を見て何か思わない？ ほら陰陽玉が顔にめり込んでるよ」

「まあ、何はともあれ宴会だな」

「魔理沙も偶には良い事言うね」

「あの……嫌な気しきません」

酒を飲み荒らす面々、またも始まってしまった悪夢。

「東風谷早苗、一気行きまーす！」

「霧雨魔理沙、同じく一気！」

「博霊霊夢、酒樽飲み行くわよー！」

溢れんばかりのビールを注ぎこんだジョッキを片手に魔理沙と早苗が休憩なしに酒を飲み干す。

その隣で有り得ない怪力で酒樽を持ち上げ、飲んでいる霊夢、真似が如何とかのレベルではない。

早苗はアルコールにやられダウン、だが魔理沙と霊夢はもう一回一気飲みの準備をしていた。

この取り返しのつかない状況で晴輝が壊れた

「神田晴輝、キスメ酒行きまーす！」

キスメの入った桶に酒を注ぎ、一気に飲み干した。

「もう一回行くぜええええええ！」

湧き上がる歓喜の声、一気一気と囃し立てる群衆、今日も馬鹿げた宴会が幻想郷に響いた。

96 - 大宴会（後書き）

主「次回は新章！」

97・新しい日々(前書き)

活動報告に大切な事が書いてあります。

97・新しい日々

新しい始まりの朝、晴輝は心を躍らせていた。

何故なら仮面も着けなくていい、馬鹿な役者も演じなくていいのだから。

「俺は……………自由だあああああああ！」

布団の傍で裸になっているお空と天子の事も気にせず大声を上げた。

「うっさい！」

「うにゅ……………」

天子の怒りの寝返りグーパンチと寝惚け制御棒チヨップが後頭部を叩き付けた。

「今日も一日張りきって頑張るぞおおおおおおお！」

「自棄にテンション高いわね」

「うにゅ、確かに……………」

「だってよ、皆が俺を許してくれたんだぜ、喜ばないと損だよ損！」

「現人神の件は全然怒ってるけどね」

「私はまた家族が増えて嬉しいな」

頬を膨らませ怒っている事をアピールする天子、何時ものマイペースぶりを発揮するお空、今日も何時も通りの服を着ているが晴輝がにっこりと笑い、和服を手渡す。

「なあ、天子、お空これ着て見ないか？絶対似合うと思うから」

天子には真っ白で清楚で桃の絵が所々にある生地、藍色の帯、お空には真っ黒な生地、袖に燃え盛る炎の様な絵の入った和服に緑の帯、そして簪を手渡した。

二人は手渡された和服を広げ、喜んでいるのを脇目に普段通りの学生服を整え、仮面を顔からずらして着け、マントを羽織る。

「では営業開始」

店を開けようと戸を開けたが、

「ハロー、晴輝」

スー……………パターンと戸を再び閉め、現状理解の為に脳を全力で回す。

「さてと、アレは超美人で幻想郷の男を全て惚れさせた伝説の妖怪八雲紫、何故？ 俺ナニカシタア？」

「実際には今日からして貰うのよ」

戸など彼女には何の意味を成さなかった、能力で距離の境界を弄り、目の前に巨大な亀裂、スキマ妖怪の所以である『スキマ』を使つて晴輝の前に顔を出す。

「ハロー、はる……………」

「神龍『触らぬ神に祟りなし』」

挨拶をする自称十七歳（サバ読み）の額に一枚の札を貼る。

「あら？ 何の玩具かしらつて……………イタタタタタタタ！
「大丈夫です、対妖怪用の御札で相手の力、行動を封じるだけの物なので」

「痛い！ 霊夢のより痛い！」

「さあ、用件だけ言つてさっさと帰つてください！ 俺の自由はこれからのだから！」

「なるほど、つまり全員の所へ罪滅ぼしに行く……………」と

開店し既に午後の一三時、前日殴り合った一哲が一人で来店、その後深雪やその友人と共に休憩がてら愚痴を溢していた。

五十風一哲は『幼女愛護の紳士たちの会』の会長であるらしい、読み方は『ペドフェリア同好会』で、小さな子供に迫る変態を片っ端から成敗するロリコンの一人である。

能力持ちで『心身の進化と退化を操る程度の能力』を持ち、「ふはは！ これで合法ロリータやら可愛い幼女を沢山作る事が出来る

！ 我は幻想郷の支配者、一完全な瀟洒な幼女主義者なり！」とか
言って幼女談義を小一時間耳に流された。

「ありがとう愚痴聞いてくれて」

「僕らも偶に愚痴を溢しに來ますから、その時にでもよろしくお願
いします」

そう言つて笑いを返す深雪。

「深雪も能力持ちだが『体と魂を分ける程度の能力』と言う言わば
幽体離脱が出来るほどの能力を持っている。」

「……………」

一人ただ静かに座禅を組み、眼を閉じる男。

名を鬼堂暁、妖怪の山で美人な仙人と共に修行をする男。

と言つのは建前で仙人の豊満な胸に一目惚れし、適当な理由を着け、
日夜彼女の胸を揉みし抱く『おっぱい星人』である。

「否っ！ 『おっぱい星人』だ！」

本人も自覚しており、『神通力を扱う程度の能力』と言つて『読
心術』『念力』と言つた事を厭らしい方面で使う事が多い。

「お前が言いたいのは紫さんが『罪滅ぼしに皆の家に泊まりに行け
つて言つてるんだろ？』」

「ああ、五日間だけその家の者には従う、それが条件だ」

「それつて簡単に言えば『一人限定王様ゲーム』じゃね？」

「あ……………」

紫は言つた、「迷惑をかけたのなら罪滅ぼしに彼女達の家に泊ま
つて來なさい。それで彼女達も許してくれるわ、その代わり彼女達
の言つ事は絶対聞く事」

そして俺は言つた「仕方ない、俺の出来る最低限なら聞いてあげ
ますか」と。

これが何を意味しているのかと言つと、この時点で契約が結ばれ
てしまつていたのだ。

例えば霊夢が俺に『有り金を賽銭箱にぶち込みなさい』と言おう、
なら俺は絶対的な力によつて財布を賽銭箱に投げ捨てなければいけ

ない。

何故ならこれは罪滅ぼしと言う俺の今出来る最低限の『善行』なのだ。

つまり何十人の王様が俺に何を言っても彼女達が「罪滅ぼしなら」「自分に非があると思うなら」等の言葉を使えば、例え「死ね」と言う命令にも聞かなければならない。

俺に拒否権も人権も生存権すら存在しないのかもしれない。

「俺は……………無力か」

そう言っただけ膝を着く俺の背中を他の三人がポンと叩いた。

俺の新しい始まりは一日で終わった。

再び茨の道より過酷な修羅の道が待ち受けていた。

「お空、てんこ、店の事は頼んだぞ。新作のアイデア考えとくから。あと、偶には地霊殿や天界に帰れよ」

「お晴も出来るだけ早くに帰って来てね」

「浮気しても良いけど後が怖いわよ」

「ごめん、二人の約束淒く守れなさそう……………不甲斐無くてごめん」

お空と天子、二人が晴輝の方に唇を触れさせ、笑った。

「行ってらっしゃい」

「ああ！」

そう言っただけドアを開けると朝早くからスキマ妖怪が現れた。

彼女は一辺が三十？ほど？の箱を持ち、笑っていた。

「『第一回罪滅ぼし旅行』！この箱に貴方の行き場所の書かれた紙が入っているわ、それで目的地を決めるわ」

「楽しそうですね……………」

「だって、人の不幸が最大の娯楽だもの！」

無駄に気分の高潮の紫、彼女に対し一発拳骨を入れてやりたいが我慢しよう。

箱に腕を突っ込み、中の紙切れをガサゴソと漁る。

手に掴んだ二つ折りの一枚の紙を手にとった。

「まあ、最初は命蓮寺辺りから……………」

中に書かれている四文字を見て晴輝は紙をボックスを戻そうとするが紫にあっさりを取られてしまった。

「それでは一カ所目へ行つてらっしゃい」

そう言うのと紙切れを残し、紫はスキマへと消えてしまった。

紙切れに書かれた四文字、それはババ抜きで手元に残されたジョーカーも同然の物だった。

紙切れに書かれた四文字は『太陽の畑』。

97・新しい日々(後書き)

主「主コメはしばらくありません、すいません」

98 - 太陽の花

綺麗な花には棘がある、これはつまり『薔薇』の事を指す、薔薇は情熱的な真紅の花を咲かせるが、手に取ると棘が刺さる。

見た目の綺麗な物は時に自分を傷つけると言う意味だ。

幻想郷のスポットにそんな場所がある。

名を『太陽の畑』。

一年中、向日葵の金色の絨毯が広がる素晴らしい花畑だが絶対に犯してはいけない禁忌^{タブー}が存在する。

花を傷つけてはいけない。

ここに住む住人は風見幽香は『フラワーマスター』と言う名前を持つており、花を愛でる分には良いが、歯を干切るだけで足を折られた人間も少なくはない。

だがこれは棘の一本である。

彼女は普段は温厚だがたった一つだけ問題、すなわち棘がある。

風見幽香は重度の『サディスト』なのだ。

別名を『超ドS』、気に入った者なら蹴る、踏む、潰すは勿論、罵倒の嵐や鞭、蠟燭、花火、縄、etc、そんな暴虐に快樂を得る、そう言う妖怪なのだ。

「彼女と絶対に二人つきりになってはいけない、そう思う時期もありました」

現在、午前七時、自分、神田晴輝は太陽の畑の前で硬直しています。

もしも見知っている男が女性の家に居たら、女性の皆さん方は悲鳴を上げるとか抵抗するとかそう言うことしかしないだろう。

だが風見幽香さんに寝起きドツキリ等したら自分の下半身が何故上半身と離れているのかを幽霊になって考えさせられるだろう。

「あちい……………」

真夏の朝とはいえ後頭部を熱する太陽光は容赦なく体力と水分を

体から筆り取って行く。

「ここらで緑茶で一杯やりたい、そう呟いた時、状況が変わった。あら、如何したのかしら？」

聴覚が捉えた女性の声、体中からあふれ出す汗は一斉に引き、まるで真冬の草原で裸で立たされた様に体が冷える。

視界の先には先ほどまで一面の向日葵が映っていたが、今は鮮やかな緑色の髪の女性が淡い桃色の日傘を差して立っていた。

その顔は不思議そうに晴輝を見つめる半面、目の前に毛玉を転がされた猫の様な笑顔をしていた。

「紫さんの『第一回罪滅ぼし旅行』の行き先が偶然にもここになって幽香さんの家に入りこむわけにも行かないので日照りの燦々と降り注ぐ真夏の下を小一時間ほど立っていました」

「あらそう」

晴輝は以外に呆けた顔をした、猫に鯉節の文字通り、玩具にされ、精神が死滅するほどの苦痛と屈辱を与えられる地獄の五日間だと思っていたが、彼女の反応からして今の所は大丈夫だと確信を持った。

「とりあえず、家へ招待するわ。お茶の一杯くらい出すから」

「きよ、恐縮です」

幽香の家はとても片付いていて綺麗であった。

ソファーやティーセット、紅魔館に負けず劣らずの素晴らしい家具の数々、拷問器具とか考えていた自分の思考を考え直さなければならぬ。

「良い家ですね、ハーブの匂いが落ち付きます」

「あら、ありがとう寛いでも良いわよ」

「いや、自分は一応は僕みたいな物だからそう言うのは……………」

……………」

「良いのよ別に、私も五日間楽しませて貰うのだから」

幽香は晴輝の座っているテーブルにティーカップを二つ置いた、

一方を自分の方へ、もう一方を晴輝の前に置き、自分も座る。

「それではありがたく……………」

ティーカップを持った瞬間、間違いに気付いた、出されたのは紅茶、だがアイステイーではない。

湯気がたっていた。

これはこの紅茶がとても温かい事を意味する。

季節は夏、なのにホット。

この間違いは明らかに不自然だと思い、幽香の持つティーカップへと眼を配つたる

湯気は出ていない、それが当り前なのだがその事に違和感を感じてしまう。

「やっぱり夏はアイステイーよね」

そう呟くと晴輝は理解した、俺の紅茶が温かく、幽香の飲んだお茶が冷たい、それだけだった。

「如何したの？ 全然飲んでないじゃない」

「あ、いや何でもありません」

そう思い湯気の立つ紅茶の入ったカップに口を着け、傾ける。

温かい紅茶を飲みほした。

「紅茶、美味しかったです」

「口に合って良かったわ」

味は合うのだけれど温度が季節と合わない事を指摘しようとする、彼女は懐から面白い物を取り出した。

明らかに道徳的じゃない犬の首輪とそれを繋ぐ鎖、ここには番犬など居ない、幽香は笑ってこっちを見るばかりで何も言わない。

全てを理解した、彼女は俺を虐めるつもりだ、精神的に虐め、玩具にする気だ。

だが耳元で響く一言。

「お前に拒否権は無い」

その一言で俺は自分で首輪を着け、皮肉にも自分で彼女に鎖を手渡してしまった。

99 - 崩れるは理性、建つはフラグ

彼女の家で俺が来て五時間が経った。

俺は昼食の食器を洗っていた。

昼食はスパゲッティだった為、皿に付く汚れは中々落ちない、洗剤とスポンジ何て物がこの幻想郷に流れ着いていないので全て手洗いであった。

「ほら犬、さつさと終わらせなさい」

鎖をグングンと引っ張るのは幽香だった、それも何故か犬呼ばわりされ、鎖で繋がれている。

この金色の角二本と銀色の尻尾一本で犬で無い事を証明したいが特に何も言えなかった。

逆らえば彼女の触れてはいけない所を刺激してこの虐めが酷くなるだけだからである。

「晴輝」

「は、はい!」

犬ではなく、自分自身の名前を呼ばれたのでうっかり返事をし、両手を拭いて幽香の元へ立つ。

「お座り」

「へっ?」

「お座り」

「いや、あの……………」

「お・す・わ・り」

満面の笑みで指示を出す幽香に俺は両膝を付いた。

「お手」

「……………」

「お代わり」

「……………」

「良く出来ました」

頭を撫でられる晴輝がダンツと音を立てて地面を両腕で叩いた、晴輝自身も何か大切な物を喪失した様な、悔しくて悲しい難しい顔をしていた。

「中々面白いわね」

「人権を返してください……………人としての誇りをつ…

……………！ あ、俺人じゃない」

悲痛な声も聞いてくれるのは幽香だけだった。

昼は特に大きな出来事も無く、事は夜になって起こった。

「えっと、如何いう意味ですか？」

晴輝は両手を鎖で拘束されていた。

現時刻は午後八時、ようやく日も沈み、夕食を食べ終わった頃だった。

「お風呂に入るのだけれど」

「ああ、覗かない為の防止策ね、大丈夫覗かな……………」

「一緒に入るわよ」

幽香の一言に時が止まる、正確には晴輝の呼吸だが晴輝は表情を硬直させ、動かなかった。

「ええっと、俺が幽香さんのお風呂を覗かない為の防止策……………」

「貴方が抵抗しても一緒に入れる様に」

「なん……………だと」

幽香は次に足を縛り、片手で晴輝の服を掴んで浴場へと持っていく。

「い、今起こった事をありのまま話すぜ、俺は手を拘束され、幽香に風呂に誘われた、自分で何を言っているのか分からないがUSCの片鱗を味わったくあwse drftgyふじこ1p」

「本当に何を言っているのか分からないわ」

「色即是空、色即是空、色即お空ううう！ 意味は分らんがとりあえず唱えろおおお！」

眼を閉じて拘束された手を合わせる。

「ああ神よ、俺は如何すれば良い、答えてくれ神よ！」

「あ、向日葵の畑から厄いオーラが……………」

「諏訪子、何を息を荒くしてるの？」

「神奈子！ 実はまた彼が……………あれ？ 如何したの早苗」

「何でもありません」

グシャアと早苗の手に取った蜜柑が一瞬にして木っ端微塵となる。

「穰子如何したの？」

「あ、お姉ちゃん。あの仮面の人が叫んだような……………」

「それより私達も信仰を集めない」と

「ハッ、晴輝が今日もニヤンニヤンしてる！」

「ヤマメ、馬鹿な事言っでないで温泉行こうよ」

「何か途中変なの混じったけど気にしない……………」

そう言っていると戸を開けて幽香が入って来た。

バスタオル一枚だけと言う何とも言えない夢の様なシチュエーション、バスタオルは二つの大きな果実を隠す為に、下半身の絶対領域のガードを緩めてしまっていた。

「如何したの？」

「いえ、ただ理性は鼻から漏れるらしいので」

鼻から漏れだす理性、もう俺は某メイド長と同じ運命を辿ってしまふのかとそう思っていた。

「何で拘束されて混浴などしなきゃいけないんですか？ 何のプレイですか？」

「好きな男を落とす方法よ」

「好きな相手にしてください、練習相手は出来るだけ鼻の血管が強い人限定で」

「気付かないの？ 今が実戦よ」

「……………オーケー、これは夢なのかドッキリなのか、答えは一つ」

拘束された両手の親指で眉間を強く押し、刺激する晴輝。

幽香はそんな男の事も気にせず、湯船に浸かって来る。

バスタオルを体に巻いたまま入るのはマナー違反だがここでバスタオルを取られると違う規約に違反するのでそんなこと言えなかつた。

「残念だけどどちらも不正解よ」

「なるほど、弁護士か裁判官を呼んで来てくれ」

「そんなに私と入るのは嫌？」

「いえっ！ 喜んで、と昔の俺なら理性を蹴り飛ばして入ってたかもしれないが、残念だが今は違……………」

何故か格好つけてフッフッフツツと笑っている晴輝だが余裕と言う壁が崩れ落ちるムニユと言う柔らかい物が顔を挟んだ

「あ、ごめんなさい」

まるで嘲笑うか様な声、顔面を埋め尽くす柔らかい物体、それは幽香のたわわに実る禁断の果実で私は一九歳には耐えられぬ衝撃でした。

「何か私のお尻に当たってるわよ？」

「あ、あははは。たぶん俺の関節じゃないかな」

「それにしても何か太くて、硬くてビクンビクンって脈打ってるけど」

顔を赤面させて湯気で視界の悪い天井を見上げる。

「触っても良い？」

「出来ればこのまま幽香さんが出て行ってもらえれば……………ンッ！？」

体全身に走る快樂の刺激、その晴輝の表情見て涎を垂らす幽香の攻撃は終わらなかつた。

「可愛い声を上げるのね」

「足が……………ちよつ、俺には帰りを待つ七人の可愛い家族が」

「浮気も男の甲斐性じゃない？」

正妻すら決まっていけない状況で正妻＋六人の妻と言う現状で新しい妻が出来ました等と他の皆様に知れたら如何なるか、そんな事を考える。

A 投手『鬼』、代打『嫉妬姫』、マネージャー『釣瓶落とし』、監督『土蜘蛛』、ボール『晴輝』

B 巫女巫女スパーク

C 天子とお空の『大天空！』

D 奇跡『ミラクルフルーツ（怒）』

E おお、晴輝死んでしまつとは情けない

「逃げ道が存在しない！」

「大丈夫、優しくしてあげるから」

「そのセリフはフラグ、あああああああああ！」

「ふふふ、彼如何してるかしら」

自室で大量のお酒と肴を持ちこみ、映画でも見に来た子供みたいにはしゃぐ紫、彼女は自身の式と共に自身の能力を使い、覗きを決行しようとしていた。

「紫様、流石に興味が悪いのでは……………」

「別に貴方は見なくていいわよ、どんな面白い物が映っていても知らないけど」

「……………」

無言で紫の隣へと座る藍、紫は少し笑つと目の前で幽香の家と現在地の境界を弄りスキマが開いた。

「何をしているのか……………」

「イクウウウウウ！ イツちゃうオよお！ 激しくしちやダメエエ
エエエエエエエ！」

女性の喘ぎ声、苦しんでいるがその割には気持ち良さそうな声を
八雲邸に響かせた。

「藍しゃま！ 如何したんで……………」

その瞬間、藍が物凄い形相で紫の後頭部にハイキックを喰らわせ、
橙に白い粉末状の物体を投げた。

「ふにゃーん」

橙は膝の上の猫の様に猫撫で声を発し、そのまま地面へと倒れた。

「危なかった、あと少して…………… 橙の明るい人生が」

チラッと失神している自分の主の開けたスキマを除く。

こうして無事に一日目が終わった。

99 - 崩れるは理性、建つはフラグ（後書き）

主「アンドー先生、クリスマスがしたいですっ！」

A「……………妄想しなさい」

主「えっ？」

A「……………君の活力は妄想なんだよ。この作品も、君が妄想を止めたらそこで物語終了だよ」

主「俺、間違ってた！ そうだ、自重何てクソ食らえ！」

晴「何この茶番」

100・向日薬は何時までも貴方を(前書き)

胸やけ注意

100・向日葵は何時までも貴方を

太陽の焔で暮らし、五日が経った。

五日間、充実した日々が遅れたがどうも納得できない妖怪が居た。

「やだやだ、まだ一緒に居たい！」

「いやでも、五日間だけの約束だし」

USC、それは最強のサディストに送られる最強のDSの名称である。

だがこの向日葵の庭にはそんな者は存在しない。

晴輝に抱き付き、眼から涙を溢すこの甘えん坊しか居ないのだ。

この五日間、色々としている内に彼女とは親密な関係が築けた。

それは友情より固い、家族としての絆と愛情だった。

それは彼女本体を包んでいた殻を砕き、本当の彼女を取り戻させた。

「ここで暮らせばいいわ！ 何処にも行かなくていいわ、私だけを見て、ずっと愛してるから」

「ゴメン、幽香。俺も愛してる、でも他に皆が居るんだ」

結果この究極甘えん坊もんすたあ、通称『UACゆうかりん』が誕生した。

「でもお……………」

「今はこれだけしか出来ないけど」

そう言っつて晴輝は幽香の唇を唇で塞いでしまう、軽い口づけを終わらせようとすると再び幽香が唇を付け、深いキスが。

それが終わると再び幽香が口づけをし、無限のループが完成してしまっつ。

それをまるで苦虫を大量に噛み潰した様な顔で見続ける紫が居た。彼女の胸は既に糖分の取り過ぎで胸焼けを起こしていた。

「ゴメンな、俺は皆に平等に輝く太陽みたいな存在だから。それじゃあ、行くよ」

「絶対帰って来てね、私は向日葵だから、貴方を永遠と見続ける太陽だから」

「ああ、絶対に、季節が変わるその前に」

そう言っただけでも甘味を覚えかけている紫の元へ行き、スキマに入った。

「ちゃんと帰って来なさいよ、バカ……………」

一人寂しく呟く彼女は遠くから状況を見ていた一人の新聞記者に向かい、特大のマスタースパークを放ったのは晴輝の居なくなった僅か六秒後であった。

「藍、大量に唐辛子と塩を……………」

「はい、紫様」

「そんなもの食べたなら死にますよ、大妖怪様」

「てか何？ 演技？ 砂糖と練乳を一トンプずつ飲み込んだこの気持ち……………」

紫は藍から手渡された真っ赤な唐辛子の束と塩を無造作に掴み口に放り込んだ。

「唐辛子が甘いわ……………」

「いやあ、すげえ楽しい五日間でしたわ、幽香も凄く可愛くて」

「何？ アレは演技だったの？」

「一割は演技、残りは全て素でしたね。元演劇部だったもので臭いセリフまで吐いちゃったし、でも俺は幽香達を愛しているのに変わりは無い」

ついに口から砂糖を吐く紫、彼女は五日前と同じ？ ボックスを持って来た。

「次の場所に行きなさい」

「…………… ああああああああああ！ 可愛い家族が増えただけで根本的な悪夢が存在している事を忘れてたあああああああああ！」

さつきまで男の顔をしていた晴輝が一変、隠してあったテストを見つけられた子供の様に鳴き喚く。

「糖分をくれてありがとう、今回の一件は『霊夢』とか『魔理沙』に話すから」

「嫌あああああああああああああああ！」

晴輝は叫び、自棄になって箱から紙切れを取り出した。

その紙には二文字の言葉が書かれていた。

『天界』

101 - 天界は快晴なりて

「富とか名誉とかこの背中に白い翼とか如何でも良いから平和をください」

「強く生きてください」

酔い潰れた晴輝の隣で微笑むのは永江衣玖だった。

幽香と別れた後、策士スキマ妖怪はこの一件をある少女だけに話した。

魔理沙でも霊夢でもないがそれはもう一人の天界の住人の天子だった。

この話を聞いて彼女に満ち溢れるのは怒りと嫉妬、それは鉄拳として放たれたが代償は己の顔面だった。

天子はその後、不抜けたゆうかりんハウスに殴りこみに言ったが、結果は見なくても解る。

スキマ妖怪に頼み、幽香に「寝取られだけは簡便な、嫌だし、何より作者は『触手』と『NTR』が嫌いだから」と釘を指しておいた。

「まあ、寝取り返すから大丈夫だろう」

「あはは、中々ハードな話をしますね……………」

少し引き気味の衣玖に晴輝は体に溜まった鬱憤を愚痴に混ぜ込んで放った。

「だって、天子は超が付くほどのMだし、幽香はその逆、SとMは引き合う磁石の如く。天子は手を縛られるだけで涎を流す変態ですよ」

「（そんな総領娘様見た事ないので）」

「眼隠しすれば体の至る所から涎出すし、この前なんか、頬を抓っただけでイキましたよ」

「あの、総領娘様はそういう特殊な性癖は持って居ませんでしたか

……………」

「開発しました。胸と共に」

この一言だけで衣玖の頭の中の晴輝のイメージは一八〇 変わるだろう、彼は今、『和菓子屋の気前良い店主』から『調教師』へと進化した事を知らなかった。

「ここだけの話、ハーレム目指してるって言うのは十中八九嘘じゃないんですよね」

「へっ？」

衣玖の口から漏れる、気の抜けた声、晴輝は既に酒に飲まれ、赤面した顔を天井に向けて続けた。

「ほら、ここの皆って外の世界の二〇〇〇倍は可愛いし、何より個性的、一緒に居るだけで幸せだよ。勿論衣玖さんもその一人」

「私が、ですか？」

「ああ。人柄も良いし、空気は読めるし、美人だし。何より、他の皆と比べてバイオレンスな香りが漂わない所が………神よ、如何すれば良いんだ」

何処かで机に伏している晴輝に「ハーレム王になれば良いよ」と言っている神が緑髪の巫女に退治されているのは知らぬ方が良い事実である。

「衣玖さあん、如何か俺を助けてくださあい」

「そんなに飲むと明日二日酔いで大変ですよ」

「良いんです！ 鬼と飲み比べて鍛えられた肝臓に飲めぬ酒は『スピリタス』しかない！」

そう愚痴を溢し、天界での一日が幕を閉じた。

光が差し込み、閉じた瞼を照らす。

「んあ？」

重い二つの目蓋を開ける、小さな一室の真ん中で寝かされ、毛布を掛けられていた。

「ああ、何故だろうか」

晴輝は自分の手で頭を叩き、昨日の事を記憶の海からサルベージしようとするが、昨日の記憶がマリアナ海溝より深い所へ沈んだ事を理解した。

「さてと、起きますか」

尻尾で毛布を掴み、退かず。

「……………」

「……………」

晴輝と衣玖の眼があった。

衣玖は肌蹴た服装で晴輝の体に抱き付き、晴輝もシャツとジーパンだけであった。

「お、およよ！」

何故か衣玖は顔を赤くし、体から蒸気を放って居た。

そして、ゆっくりと片手で天井に指を指し、もう片方の手を腰に当てる。

キヤークサンのポーズ。

「およよよよ!?」

彼女は青白い電気を見に纏い、荒ぶる羽衣で天井に指さした手に螺旋状の物体を作り上げた。

魚雷ドリル、それは衣玖のスペルカードの一つでもあり。

「衣玖さん落ち着いて！ 俺昨日の事覚えてないから！」

天を貫く、強靱な武器であった。

「およよよよよよよよ!!!」

ガードも何もしていない晴輝には強烈な一撃だった。

「うほあ！」

ドリルは鳩尾を抉り、体を吹き飛ばした。

頭が地面へと刺さり、晴輝は必死に頭を抜こうと戦っているが大変なのは晴輝だけではない。

「およよよよよよよよ!!!」

熱暴走した衣玖があちらこちらに雷球を投げ飛ばし、ドリルで部屋を破壊している。

「衣玖？ 私の亭主がここに来てると思っただけ……………ちょよ！
如何したの良く!?」

微かに聞こえるのは天子の声だった。

彼女は晴輝に気づき、地面から引き抜いた。

「死ぬかと思つた！ 天子、ありがと。さつそく何だけどバックア
ップよろしく！」

晴輝は尻尾を使い立ち上がり、暴れる衣玖の元へ飛び込んだ。

弾幕を頬に掠りながら、衣玖に近づき、回転するドリルを素手で
掴む。

「右腕だけ鉄化、ドリルつて言つても鉄までは砕けないな、でもか
なり痺れる！」

ドリルは回転が緩まり、動きを止めた。

その瞬間、天子が衣玖を羽交い絞めしにした。

「衣玖さん、何を誤解してるか分からないけど落ち着いて」

「衣玖、自分の家を自分で荒らして如何するの？ 私に何時も言っ
てたわよね、片付けも淑女の嗜みって」

二人の言葉を聞くと螺旋状の羽衣を解除し、その場に座り込み、
そして。

「ふええええええええええん！」

「うおっ!？」

「はあ……………」

泣きだした、子供の様に。

両腕で滝の様に流れる涙を拭うが、拭いきれず、晴輝がハンカチを
手渡す。

天子は肩を落とし、頭を掻いた。

「ちよっ、何？ 如何したんだよ天子、衣玖さんが何か子供みたい
に……………」

「薄々こうなると思つてたけど……………衣玖精神面が弱いだよ。

抑圧され過ぎると子供みたいに泣きじゃくるの。子供のあやし方を
しても、甘い物をあげても小一時間はこの通り。私は部屋片付けて

来るから宿めといてね」

「いやいやね子供のあやし方は知ってるけど衣玖さんのあやし方は知らないから無理！」

「衣玖さん落ち着いた？」

「……………大丈夫です、落ち着きました」

三十分ほどすると衣玖は借りて来た猫の様になつたる

茶の間に足の低い机を挟み、向かい合っている座っているが衣玖は視線は晴輝の方を見ず、自分の膝ばかりを見ていた。

「あの、昨日の事覚えてないんだ、衣玖さんは？」

「私は何も……………」

「とりあえず、昨日の経緯を辿ろうか」

「はい」

机の上に紙とペンを用意し、一つ一つ掻き綴っていた。

「たしか居酒屋で俺と衣玖さんが出て、もう一件飲もうとして」

「私が止めて、宿が無いので私の家へ来て」

「それで衣玖さんがいきなり呂律が回らなくなって、お姫様抱っこでこの家まで運んで」

「如何しましたっけ？」

「俺も記憶がないな」

沈黙したまま二人が喋らないでいると掃除を終えた天子が部屋へ入って来る。

「如何したの？」

「いや、互いに記憶がなくてナニをしたのかが思い出せない」

「私も帰り道に視界が揺らいたらその後が曖昧に」

「なるほどね、衣玖が晴輝を美味しく食べたと」

「そ、総領娘様！ 確信も無いのにその様な事は！」

「私は構わないわよ、衣玖とは長い付き合いだし」

「よっしゃー！ 一つ目の死亡フラグ回避！」

慌てる衣玖に落ち着きのある天子と立場が逆転した二人。そして何故か涙を流して生きる事に再び気力を取れ戻した晴輝が居た。

「その代わり、衣玖に一回触れる度に私とする回数増やしてよね」
「死亡フラグ帰って来るなああああああああ！」

天子がニパーと笑って返すが晴輝は頭を抱え、泣いていた。

そんなふざけた（晴輝にとっては死活問題）に衣玖が笑いを溢す。
「面白いですね晴輝さんは」

「俺にとつては本当に生命の危機ですが！？」

「御免なさい、でも本当に素晴らしい人ですね」

「ちよつと五月蠅いのが玉に瑕だけだね」

三人の会話に笑いが訪れる、先ほどまで漂っていた重い空気は全て何処か言ってしまった。

「そうよ！ 良い事考えたわ。晴輝、衣玖をもう一回抱きなさい」

「ふえっ!？」

「天子、ゴメンその案は却下。衣玖さんが再び熱暴走したら如何する」

「良いから良いから、私は出掛けて来るからお二人で」

天子が部屋から出て行き、静かな部屋に二人取り残された。

「まあ、そうだな。とりあえず……………衣玖さん」

「は、はい！」

「気晴らしに出かけましょう」

101 - 天界は快晴なりて（後書き）

晴「主にも嫌いな物あったんですね」

主「とくにNTRは吐き気がするほど嫌い」

龍神堂は店主が居ないと言うのに大盛況だった。

今回、龍神堂の暖簾を潜るのは客ではなく、主の晴輝と衣玖だった。

「お空、遊びに来たぜ」

「お晴、久しぶり！ 隣の人は？」

「永江衣玖さん、天子の知り合いだよ。忘れたか？」

「鳥頭『三步忘却』！」

「衣玖さんゴメンな、悪い奴じゃないんだ」

お空のこめかみに両手の中指の第二関節を入れ込む、お空は笑いながら「ギブ、ギブダウン」と叫んでいた。

店内は何時もの様に明るかったが一角だけ奥の隅から何か嫌な気配がしていた。

「おお、我が友の晴輝じゃないか」

ロリコンの一哲が緑髪のおどとした少女と一緒に座っていた。だがそれだけではなかった。

「晴輝、久しぶり。死んでない？」

この世界で何の意味も持たない靈感使いの深雪と笑顔のトランプをを持った少女。

「話を逸らすんじゃない！」

おっぱい聖人の暁と隣に胸の大きな桃色の髪の女性が居た。

「俺無しで『疲労を吹き飛ばす男達の会』か？ 誘ってくれよ」

「いや、今回はお前抜きで話し合いたいんだ」

そう言って一哲が他の三人の方を向く。

「それでは、女性は」

深雪がそう切り出すと三人が真面目な顔になった。

「守ってあげたい幼女体型」

「明るく輝く笑顔」

「豊富な胸」

「オイ、明らか自分の性癖マックスな奴が居たぞ！ オープンな奴が二人居たぞ！」

「いや、これは俺等のプライドの戦いだ、幼女こそ、大ちゃんこそ正義！」

「は、恥ずかしいです」

「いや、胸の大きな女性こそ、つまり俺の華仙が最高だ、お空ちゃんとりあえず胸の大きさを比べたいから胸を……………アタタタタタタタ！」

「貴方はそうやってすぐに浮気する……………次そんなことしたら絞り続けますよ」

「何か意外と幸せそうなのが紛れてるぜ、何かエロい電波を感知したぜ！」

「そう言えば深雪、この前ルナサとデートしてたって本当？」

「うえっ！？ ああ、でも浮気とかじゃなくて」

「でも……………キスしたんだよね。次はリリカかなあ？ それとも違う子に手を出すの？」

「いや、キスの件はルナサがして来た事で俺は責任がないと言うか……………」

「でも……………したんだよね」

深雪と騒霊のペアは何故か修羅場の様な雰囲気になっていた、そこへ店の入り口から金髪の少女が入って来る。

「メルラン、深雪迎えに来たよ。そろそろ本番……………如何したの？」

晴輝は直感で感じ取った、この少女がルナサと言う人物で深雪の愛人なのだ。

「ルナ姉、あのね、深雪とキス！ した事について家で話しましょう」

「うえっ！？ あ、ああああアレはじ、事故と言うか何と言うか……………」

「へえ……………事故なのに嬉しそうな顔してたんだ、あの日」
段々と悪化する修羅場、お客の視線はまるで昼ドラでも見ている主婦の様な熱い視線へと変貌する。

「一哲さん、もうそろそろ……………」

「おう、皆とまた遊ぶか。あ、晴輝、ルーミアはまだお前を諦めてないから」

「ヴェ、マジで？」

一哲が大ちゃんと言う少女をお姫様抱っこをして店内から出ようとする。相手は嫌がらず、ただされるがままになっていた。

「お代は前払い済みだから、じゃ」

そう言つて深雪は飛んで行ってしまった。

別に浮遊能力があるのか分からないが、少女主義者の本気と言う物だろう。

「暁？」

「深雪？」

「助けてマスク・ザ・ドラゴン！」

「助けて頭の中が春の人！」

「はあ……………当店では喧嘩等の暴力行為並び、厭らしい事は禁じております。ここはどうぞこれだけ持って帰って頂けませんか？」

晴輝はお空を呼びだして二本の酒瓶を持って来た。

銘柄は『キスメ印の媚薬酒EX』。

「はい」

「わかった、ルナサ帰るよ」

「ちよつ、何か液体がピンクに見えるんだか」

「可笑しいよね、何で手を拘束されるの？」

哀れ二人の男、昨晚はお楽しみのお楽しみ過ぎで死亡、犯人である少女は『ついヤツちった』みたいな事を言うだろう。

「グッドライフ」

二人に親指を突きたてた右手を見せると二人は連行されていった。

店を閉め、居間で四人仲良く食事の時間を過ごしていた。

「ちよつ、お空！ それは私のよ！」

「うにゆ！ 赤い麺は私のなもの」

「ゴメンね、うるさくて」

「中々賑やかですね」

天子とお空が取り合っているのは素麺の赤い一本のアレ、何故一本だけあるのだろうか疑問を抱くが今は素麺を取り合っているの好きに漁夫の利で突っ込む。

「獲ったどおおおおおおおおおおおお！」

「渡すか！」

「うにゆ！」

天子とお空が赤麺を取った事に素早く反応し、箸を伸ばす。

「頂きます」

素麺の汁に他の白い麺と共に浸け、啜った。

「ああ！」

「うにゆ……………」

「御馳走様」

二人が手を付き敗北の悔しさを噛み締めているが晴輝はそんな事も目に留めず、勝利と赤い麺の余韻に浸っていた。

「あら、また出てきましたが……………」

衣玖さんが箸を突くと出て来るのは赤い麺が二本、それを再び取りあつたのは言うまでも無い。

102・デート&デッド（後書き）

主「もうそろそろパソコンの画面が持たなくなってきました。

2011年最後の投稿になります。

パソコンにもあと二、三週間は頑張ってもらいたいところですが、もしもダメなときは一時投稿がストップするかも知れません。

この小説を書き始めてもうすぐ半年です、新作の萌えもんは2012年の春ぐらいになるかもしれません。

まあ、自分の春は一生来ず、氷河期のままですが、

来年は一人前のラノベ小説家になるために必死に語学の勉強をしていきたいです。

それではこちらへんで、良いお年を「

103 - 眠れない夜

「とりあえず、如何する？」

就寝間際、気になったのは就寝場所の取り決めであった。

本来なら晴輝の布団の中に天子、お空が入るのだが、今回は衣玖が居る。

「衣玖さんは如何したい？」

「そうですね、私は何でも構いませんが……………」

「それじゃあ衣玖と晴輝が同じ布団、私達は隣で一緒に寝る？」

「天子さんナイスアイデア！」

天子の発言に乗り気なお空は素早く布団を敷き、天子と共にダイブした。

「ええっ!？」

残された晴輝と戸惑う衣玖と一式の布団が残る。

「嫌だったら俺はお空達と寝るけど如何する？」

「し、仕方ありません。恥ずかしいですが、これも総領娘様の我儘であるのなら聞かなければ……………」

「それ何処かのフラワーマスターも同じような言ってたけど、二、三分で猫になつたな」

「クッション、風邪かしら……………」

「と言う訳で、とりあえず衣玖さんが布団に入る？」

「は、はい」

恥ずかしそうに頬を赤らめた衣玖が布団に入り、その次に晴輝が布団へ入る。

「人肌人肌つと……………暖かいなあ」

「ちよつと、何か楽しそうに見えるけど？」

「別に……………衣玖さんもうちよつと体くつつけない？」

「えっ、いや、その……………」

「晴輝、いい加減にしないと地底の鬼に言い付けるわよ」

晴輝の血が引く音が彼女達三人の耳へと入り、本人は小刻みに体を振るわせていた。

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イ……………」

「反省してれば良いわ、それよりも衣玖は襲わないの？」

「天子、俺を強姦魔か何かと思ってるのか？」

「……………うにゅ？」

え、違うの？ と言いたげな表情を浮かべるお空、晴輝は眼から流した液体は非常な現実に対する怒りと悲しみだった。

「お空、覚えとけよ……………」

確かに衣玖は柔らかい、男性と違い女性は筋肉より脂肪が多い、主に胸囲にそれは現れる。

衣玖の胸囲は幻想郷一だと思われる勇儀、お空、幽香、美鈴と並んで上位クラスの一角、胸囲のその四つを落としているとなると…

「ヤバい俺の生活が暁と化す」

「お空、打ちなさい」

「里が滅びるわ！」

夜は更け、鈴虫が美声を鳴り響かせる。

「眠れないよお……………」

鈴虫の合唱に水を指したのはお空の一声だった。

「今何時？」

「現在一時、俺とお空以外にも皆起きてるだろう」

「バレた？」

「衣玖さんも寝たふりせずに会話に入ったらどう？」

「うっ、普段は規則正しく生活しているのに眠れません……………」

全員が布団を投げ飛ばし、敷布団の上に座り込む。

晴輝が小さな蠟燭を取り出し、

「それでは夏と言う事で怪談話でもしますか」

晴輝の提案をお空と天子が顔を青くする、晴輝はニヤニヤと邪気溢れる笑みを浮かべた。

「衣玖さんは階段は苦手？」

「そ、それほどではありませんが……………」

衣玖は少し顔色を悪くしていた、周りから見れば何でも出来そうな人物でも精神面で弱かったりとギャップがたまらない。

「それでは、『赤い毛布』」

それはとある男のお話。

登山へ向かったある男、仮にAと呼ぼう。

Aは山で遭難した。

何日も山を迷い、食糧はなく、心身ともにボロボロ、今にも倒れそうな男は山の中で小屋を見つけた。

小屋は丈夫な作りで、中には多少の食糧があった。

その日の夜、冷え込む山の小屋でAは一枚の毛布を手を取った。

それは真っ赤な綺麗な毛布だった。

毛布は不思議な暖かさを持って居た、Aはそれを見に纏い、眠ろうとした。

そんな時だった、小屋の扉がギィィと音を立てて開いたのだ。

そうすると血色の悪い小さな子供が入って来た。

Aは崩れゆくその子供を抱き止め、赤い毛布で共に温まろうとした。

子供は眼を覚まし、Aに甘え出した。

Aは子供をあやすがある異変に気付いた。

子供は一向に体温が温かくなろうとはしなかった。

子供は無邪気に笑いAにじゃれる、だがAは段々と眠くなってきた。

体が急激に冷やされていたからだ。

Aは子供に訪ねた。

「如何して体は温かくならないの？」

子供は笑って答えた。

「当然だよ、だって僕の血はその毛布が全部吸っちゃったから！」

Aは咄嗟に子供と毛布を突き飛ばした。

Aは必死に小屋から離れた。

転げ、滑り、足に無数の傷を作りながら走ると山を降り、知り合いの家の前に辿り着いた。

知り合いのBは怯えるAを家に引き止めた。

Aは落ち付き、冷静になり今日の新聞を呼んだ。

Aの眼に止まったのは家出した子供の写真だった。

小屋で見かけた子供と同じ顔の。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああ

あ！」

「うにゃああああああああああああああああああああああああ

あ！」

天子とお空が一斉に叫んだ。

「え？ 怖かった」

「何気に怖いです…………… あわわわわ」

衣玖は晴輝に飛び付き離れない。

「ついでに、赤い毛布は遭難して傷ついた子供の血を吸って赤く染まっただって言うオチ。余談だがもしも毛布を纏って寝てたら毛布が

Aの血を吸い続けて……………」

「もういい！」

「うにゅ！」

「およよよよよよよ！」

「そんなに怖かったか？」

103・眠れない夜（後書き）

主「新年明けましてくあwせdrftgyふじこip」。
と言つても2012年開始から三時間経過しましたが、
今年心機一転しようと頑張ります！
今年の抱負は『自重しない事』です。
あれ去年と変わってない？ いいじゃないですか、新年だし。
今年もよろしく願います。
さてと、大阪に言つて薄い本を……………」

104 - 会議の末に山登り

お空と天子が寝付き、部屋は静寂に包まれていた。だが寝れずにいる少女が一人いた。

「眠れない……………」

衣玖だった。

晴輝と同じ布団に入り、丸くなっている。

「如何しましょう……………」

怪談が原因ではない、年頃の女性が異性と布団に入っている事に抵抗を持っているからだ。

だが晴輝も寝てなどいなかった。

「何があつたんだろうか」

「ほう……………起きてたんですか？」

「考え事。朝、正確には昨日の朝の事覚えてる？」

「ええ、覚えています」

「それで昨日俺が何をしたんだらうって、何か大変な事をしていなければ良いんだけどな」

晴輝は天井を見上げた。

「天井に答えは書いていない」

「はい？」

「親父が言つてたんだ、困った時、悩んでいる時に天井を見上げてる俺に『天井に答えは書いていない』って言つたんだ。だから言つて壁を見ても時計を見ても何の解決にはならないけどさ」

「たぶん、視界が捉える情報を捨てて考えろって事じゃないですか？」

「如何だろう？ 答えは聞けなかったしな。なあ衣玖さん、俺が貴方に何か……………例えば厭らしい事をしてたらどうする？」

「……………」
衣玖は黙り込んだ、別に不愉快になつたのではなく、真剣に考え

ていた。

「そうですね、分かりません」

「考えてそれですか……………」

「その時の事はその時の事です、私には分かりません」

空気を呼んだのか、それとも心の底からこう言う返答なのか、どちらかは分からない。

だがその一言に報われた男は居る。

「皆、俺みたいなダメ男の何処が良いんだか……………」

「自分を過小評価し過ぎです。貴方は素晴らしい人ですよ」

「だと良いんだけどね……………」

早朝、一つの卓袱台を晴輝、衣玖、天子、お空が囲み、話し合いをしていた。

「と言う訳で新作メニュー何だが夏も時期に終わると言う訳で秋のメニューだが『栗羊羹』と『芋羊羹』そして新しく『金平糖』だ」

「季節の栗と芋は理解できるけど、金平糖？」

「子供受けだ。子供は基本お金がない、だから高い物は買えない、だけど金平糖を安値で売れば子供をお客に取ったも同然だ、そして子供は宣伝に使う」

「うにゅ？」

「子供が金平糖を外や家で食べれば自然と情報が流れる、そうすれば年上の客を狙う事も出来る」

金平糖で子供を釣り、子供を餌に客を釣る。

古典的な客寄せだが、今の幻想郷ではこの位の方が良いのだ。

「と言う訳で、とりあえず秋に栗と芋を確保するために、あと金平糖の機材回収の為に山登るぞ」

天子とお空、衣玖を連れ、妖怪の山に来たのだが。

「すみません、通しちゃくれませんかねえ？」

「ダメだ、何ら様の無い人間が山に足を踏み入れて言いとでも？」

白狼天狗の男の群に足止めを喰らっていた、数十人程の団体様で通してはくれなさそうだった。

「前は軽く行けたんだけどな、如何しよう……………」

食材は豊穰の神である秋姉妹に頼むのが一番である、だが道が塞がれており、行く事が叶わない。

「さつさと帰るんだな、このクソ野郎」

「っ！」

「……………」

咄嗟に武器を構える天子とお空を止め、晴輝が一步一步と団体に近づく。

「何を気に立ってるか分からないけど、俺は前までは顔パスで通ってたんだがダメか？」

「ダメだ、さつさと帰れ愚図」

「中々な挨拶だな、俺お前等になんかした？」

苛立ちを隠しきれず口から漏らす白狼天狗に晴輝は笑顔で問い詰める。

「ああ、お前は俺等の敵だからな……………」

「何故？ 俺はあんた等に何をした」

その瞬間、白狼天狗達から大量の殺気が溢れ出した。

「……オメエ見たいなハーレム野郎が来る場所じゃねえんだよおおおおおおおおお！」

「……………」

晴輝の強張った両腕の筋肉が緩んだ。

「つまりは逆恨みか」

「何だと!？」

「モテないのを他人の所為にして、自分を磨かず、何を言うかこの白狼天狗……………いや私情でこんな馬鹿げた事をするんだ白狼天狗が逆に可哀想だわ」

「言わせておけば……………」

「俺は別に顔が良いわけでも、人柄が良いわけでもない。けど皆が付いて来る。仕方ないからハーレム作って訳じゃない、俺を慕い、好んでくれる皆の為に俺は俺自身を磨かなきゃいけないんだ。それをモテないのは俺の所為にしやがって……………白狼天狗が泣くぞ！」

白狼天狗が武器を構え、晴輝目掛け飛んで来た。

晴輝は懐からスペルカードを取り出し叫んだ。

「全員伏せろ！ 龍撃『諸刃の剣』」

白い羽を広げ、白狼天狗目掛け、細長い光線が放たれる、白狼天狗は怒りに身を任せているので防御出来ず、全員直撃した。

「儂く散るだけありがたく思えよ」

汚職天狗を叩きのめし、晴輝達は河童の工房、秋姉妹の元へ行き、材料の交渉を終え、山の一角で休息を取っていた。

「偶には外で喰う飯も上手いな」

重箱に詰められた無数の握り飯を食べながら皆で雑談をする。

「美味しいよお晴！」

「お空、頬にご飯粒付いてるぞ」

お空の頬の無数のご飯粒を手で取るとお空が指を食べた。

歯を立てず、舌だけでご飯粒を取り除いて行く。

「ごちそうさまー」

お空が指を舐め終わり、指が解放されるが唾液が多量に付いていた。

「お空、俺はこの指を如何すれば良い？」

「舐めれば？」

「俺はそこまでアブノーマルじゃないが……………」

「さてと、では食後の運動でもするか？」

「お晴、私は弾幕ごっこが良い」

「よし、なら天子と衣玖さんは観戦しててくれ、それとも俺と一戦交えるか？」

「私は良いわ、衣玖も止めときなさい」

そう言っただけで衣玖を引き止め後ろへ下がって行く二人、晴輝は腕を回し、スペルカードを取り出した。

「スペルカードルールに則り、スペカは五枚、三回被弾したら負け、これで良いか？」

「オーケー、全てフュージョンさせてあげる！」

お空は制御棒を構え、晴輝はスペルカードを手に取る。

二人の顔は笑っているが周囲に大量の殺気を撒いていた。

二人は地面を蹴り、自身の羽を広げ大空を舞う。

お空は制御棒を前に突き出し、叫ぶ。

「爆符『ギガフレア』！」

無数の炎球、晴輝はそれをギリギリの距離で避ける。

炎球は確かに大きいが大きいだけで他は普通の弾幕と変わりはない。

晴輝はスペルカードを手に取り、叫ぶ。

「『四龍幻夢』！」

羽がより大きくなり、尻尾と角が巨大になる。

足は燃え盛り、右腕は水を纏い、左腕は凍て、翼が放電する。

「三十秒で蹴りを着ける！」

右腕と左腕を天高く突きあげ、小さな氷を作る。

「お前の炎で溶かせるものなら溶かしてみろ！」

氷は水を纏っては凍て、纏っては凍てと成長して行く。

「お空、その技は見たから無駄だよ！」

お空もスペルカードを取り出し、荒々しく熱を放つ制御棒を晴輝に向けた。

「さあ、地獄を照らす太陽の光で氷と共にフュージョンするが良い

！
制御棒の先端へ集まる熱はどんどんその温度を上げ、真夏の山の温度を上昇させる。

「チルノの必殺！ 『グレートクラッシュャー』！」

「『地獄の人工太陽』！」

氷塊と炎球が衝突する、だが氷は溶け一瞬で炎に飲まれる。

「やっぱ季節が悪かったか……………」

晴輝が一言呟いた後、炎に飲みこまれ、炎球が爆ぜた。

「派手に逝ったわね」

「は、晴輝さん！？」

観戦していた天子は他人事の様になっているが腕が震えている、衣玖は炎球に飲まれた晴輝を見て腰を抜かしていた。

だが。

「あつつつつつ、熱い！」

空中に燃えている翼を必死に消火しようとしている影があった。

「いやあ、死ぬかと思った。一機減っちゃったな」

能天気な笑う晴輝がそこに居た、白い翼は焼け焦げているが他に以上は無かった。

「よし、潰す」

晴輝がニツコリ笑うと右腕を前に突き出す、無数の水の弾幕が現れ、笑い続けるお空に向かい一斉に飛ぶ。

弾幕はお空を取り囲み、静止した。

お空は動けずにその場で居たが晴輝が動く。

「その弾幕は不思議な作りでな、スペルカードルでは避けられない弾幕は使用しないって。だから頑張って避けるよ」

お空を取り囲む水の球が外側から凍てつき始めた。

「この弾幕は外側の弾幕が凍り始めて、徐々に内側が凍り対象と共に完全に凍る。それが当たり判定、残念だがこの弾幕は避けられない、水の状態の弾幕を避けなかったからだ。悪いがこの勝負一気に三本取らせて貰うぜ」

水の球が次々に凍り、お空に近づいて行く。

「それでは氷精の悪戯。『パーフェクトフリーズ』」

晴輝が指を鳴らした瞬間、妖怪の山に大きな氷塊が出来た、大きさは博霊神社の数倍はあるであろう歪な氷の花、後にお空救出の為に溶かしたのは言うまでも無い。

104・会議の末に山登り（後書き）

主「自分のスペカ使えよ……………」

105 - 龍宮の姫

深夜、龍神堂に出す新作メニューの製作、及び外装に付いて考えていた。

カステラや饅頭など、外の箱製作は妖怪の山の天狗と共に行っている、そのデザインも考えなければならぬ。

「帰って来たのに問題は山積み、さてと明後日までに出来上がるかな」と

本来なら天界で五日間過ごさなければ行けないのだが、衣玖さんと共に地上に降りてしまっている。

それに明後日になれば次の場所へ行かなければならない、何時までも自宅では過ごせないのだ。

「さてと、パッケージには秋をイメージした紅葉を入れて、栗羊羹はそうだな………栗みたいな口をした妖精でも捕まえて意見でも貰おうかな？」

誰も聞いてくれる者はいない、普段から天子、お空に店を切り盛りさせているので偶には自分が働かないといけないと思いつめていた。

「冗談はさて置き、まあ同じで良いだろ」

「あの、晴輝さん？」

「あれ、衣玖さん如何したんですか？」

襖を開け、衣玖が入って来る。

「台所を使わせて貰いました、お茶です」

そう言っ手渡された湯飲みのお茶を飲む、眠気が飛び、創作意欲が湧いて来る。

「ありがと、衣玖さんもう寝た方が良いでしょう。と言っかすっかり居着いたね、いつその事ここで働く？ 従業員少なくて困ってたんだよね」

「いえ、申し出はありますが、私には龍宮の使いとしての使

命がありますので……………隣良いですか？」

「ああ、立ち話だったね、良いよ」

衣玖は晴輝の隣に座り、紙に書かれた包装用の箱の絵を眺めていた。

「綺麗ですね」

「ありがと、そう言えば衣玖さん如何したの？」

「私は二日もここに置いて貰っている身、夜遅くまで頑張っているのですから何か貴方に報える事でもと」

「固くならないでよ衣玖さん、ここは皆の家みたいな物だからお客さんも知り合いも、この家では気軽に羽を伸ばせば良いよ」

「そうですか、そうさせていただきます。所で……………」
「ん？」

「先ほど総領娘様としていた行為なのですが……………」

「ちよつ、聞こえてたの！？ やっぱ駄目だったか……………」

「そ、その、総領娘様にどのような事を？」

「えっと、口では言い辛いです」

「そ、それでは実際にやってみてくださいませんか？」

「……………はい？」

「ですから、そのですね。晴輝さんが空さんや総領娘様と色々やっていた事は興味本位で知りました」

「えっ、まさか夜な夜な天子と抜け出して店の方でやったり、お空と山でやった事も？」

コクリと頷く衣玖、晴輝は頭を押さえた。

「それで自分もしたくなつたと？」

「私も一人の女性です、そ、それにもう我慢できなくて……………」

……………晴輝は衣玖を無意識に生殺しにしていた、年頃の女性がその様な物を見て疼かないはずはない。

「と、とりあえず、また今度って事で……………」

「生殺しにされていた私の気持ちは……………」

晴輝の心に矢が刺さる、それは深く理性と言う薄い壁を抉った。

「ちよつと待つて、それ以上言うて理性が……………」

「私なら準備できてます」

壁が崩壊し始め、晴輝は必死に自分の脇腹を抓り耐えていた。

「それとも、私とは不満が？」

「今直にしよう」

晴輝の理性撃沈。

「あの……………これは？」

私は四肢を拘束され、眼隠しをされて薄い布団の上に居た。

「天子のした事と同じ事、アイツ本当にこう言うの好きだからさ」
聴覚が捉えるのは晴輝の声、それと不思議に荒らぐ自分の息だった。

「アレ？ 衣玖さんってマゾっ気あるんだ……………」

「ち、違います！」

そう言うが何故か息が荒くなっているのが分かった。

「まあ、開発は俺が好きにするとして……………衣玖さんって体つき良いよね。胸も大きいし」

不意に胸を揉まれた、だが嫌な気はしない、と言うよりはもっと自分の事を意識して貰いたかった。

「それでまあ、最終確認だけど」

晴輝は衣玖の眼隠しを取り、真剣な表情で顔を見つめていた。

「軽率な解答は自分を傷つけるだけだ、本心から答える」

口調が変わり、普段の笑顔からは想像できない男の顔が衣玖の頬を赤く染めていた。

「これは皆にも聞いたんだが、本当に俺なんかで良いのか？ 皆美人だから貰い手なら山の様にある、それでも俺なんかが良いのか？ 興味とかお試しとかだったら俺は許さないぞ」

「私が好きでも無い相手にこんな淫らな格好が出来るとても？」

その回答を聞いた晴輝は不敵に笑った、その笑みは普段通りの優しい表情だった。

「衣玖、俺はお前も愛すぞ」

「『も』と言う部分に色々と反論をしたいですが、早くしてください。乙女に恥をかかせる気ですか？」

生意気に答える衣玖だが指の震えを晴輝は感じ取った、本人自体もこんな事は知らない。

自分の知らない事をされると言うのは抵抗があり、恐怖をさえも感じる事である。

「衣玖」

晴輝はそつと顔を近づけ、唇を奪った。

数秒だけの軽いキス、それだけで体は不抜けてしまう。

「俺、神田晴輝は永江衣玖を伴侶とし、家族とし愛します」

「ええ、ひっ!？」

衣玖の体に走る電流の様な物、それは痛みと苦しみだった。

槍で腹を刺された様な感じが走る。

ああ、自分は乙女を止めるのかと、懐かしむ様に眼を瞑る衣玖。

「くっ、痛いかもしれないけど、我慢できそうか？」

晴輝が衣玖の手足の拘束を解くと、力強く晴輝の腕を握りしめた。

「お願いします………ひと思いに………私を貴方の女にしてください」

その言葉が鍵となったのか、体に先ほどの倍はある痛みと苦しみの電流が迸る。

だが痛みが段々と無くなり、快楽に意識が溺れ始める。

「痛かったな、もう大丈夫だ」

そう良い頭を撫でる晴輝に衣玖は唇を奪う。

先ほどの簡単なキスとは違い、口内を貪る様な激しいキス。

二人はそのまま夢の様な時間に二人つきりだった。

105・龍宮の姫（後書き）

主「これは2011年に書いた旧作の一斉放出祭りです、
2012年からは心機一転、新しい自分を書くために大量に出させ
ていただきました
別に間違えたわけではないのであしからず」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7667t/>

幻想郷と家出男

2012年1月2日07時40分発行